第２節　弥生時代の集落・墓地出土遺物の総括

１．土器

本遺跡出土の弥生土器に関しては、これまで、田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0001 環壕出土の前期後半代の土器の層位的検討（中野 2005）、中期土器の編年と特徴的な土器の検討（石田 2008）、集落出土土器の時期的変遷（『207 集』）、甕棺の時期的変遷（『222 集』）などが提示されている。本来であれば、本項で周辺遺跡を含めた地域編年を示す必要があるが、未整理の資料が膨大であることなどから、現時点ではその段階に至っていない。従って、以下ではいくつかの特徴的な土器に絞ってまとめに代えることとする。なお、朝鮮系無文土器や外来系土器については『207 集』、及び本章第 1 節を参照されたい。

（１）祭祀遺構出土土器の時期的変遷

図 207 は墓地に伴う祭祀遺構から出土した土器の器種組成と変遷についてまとめたもので、これまでに報告している資料を対象としている。対象時期は弥生時代中期初頭から後期初頭までとし、5 段階に区分している。

①中期初頭

城ノ越式併行期とする。墓地の出現期であるが、祭祀遺構の数が少ないことから、出土土器の数量は限られている。形態的には同時期の集落出土土器と差異はない。甕は口縁断面が三角形または短い逆 L 字状で、底部は厚底である。壺は、前期の形態の名残を残し、頸部が直線的に延び、口縁端部は短く外反する。なお、図示していないが鋤先口縁の広口壺も出現しており、頸部外面には暗文が施されている。鉢は口縁断面三角形である。ほかに、図示していないが甕用蓋、高坏、短頸壺、器台、支脚なども存在する。

②中期前半古相

須玖Ⅰ式古段階併行期とする。甕は口縁断面逆 L 字状で、口縁上面は水平もしくは内傾する。また、底部が幅広の樽形甕がこの時期に出現する。広口壺は鋤先口縁（7）が主体で、素口縁（直口縁）（9）は少なく、また、口外径よりも胴部最大径の方が大きく、頸部の付け根は胴部中央よりもやや高い位置にある。なお、7,15 のように頸部外面に断面三角突帯が貼り付けられた広口壺は、佐賀平野東部地域の特徴である可能性がある[1)]。このほかの器種としては、甕用蓋、短頸壺、鉢、高坏、器台、支脚などがある。10 の高坏は口縁端部が短く外反するのが特徴で、脚部中実ではないが、朝鮮系無文土器の影響による可能性がある（石田 2011）。なお、この段階では丹塗りは出現していない。

③中期前半新相

須玖Ⅰ式新段階併行期とする。甕は口縁部が外側に長く延びる断面 L 字形で、内側にごく僅かに突出する。樽型甕は口縁部形態が甕と同様の傾向を示す。鋤先口縁広口壺は、頸部が長く延び、口外径は胴部最大径よりも大きくなるとともに、頸部の付け根の位置は前段階よりも低くなる。なお、壺や高坏などに丹塗りが施されるものが出現しているが、数は少ない。このほかの器種としては、甕用蓋、短頸壺、鉢、高坏、器台、支脚などがある。特徴的な器種として、透かし入りの筒形器台（19）がこの段階から出現する。なお、19 は明るい橙色を呈する精製の胎土が用いられているが、丹塗りは施されていない。

図 207　祭祀遺構出土土器の変遷（1/12, ●は 1/20）　網かけは丹塗り

④中期後半

須玖Ⅱ式古段階併行期とする。甕は口縁部がさらに外側に延びるとともに、内側への突出が明瞭になる。鋤先口縁広口壺は、頸部がより長く延び、口外径が胴部最大径よりも明らかに大きくなるとともに、頸部付け根の位置が前段階よりもさらに低くなる。高坏は口縁部が外側へより長く延びるとともに、脚部が長大化している。高坏は橙色を呈する精製の胎土が用いられたものが多いが、丹塗りが施されないものも多い。このほか、鉢、短頸壺、筒形器台、器台、支脚などがある。良好な個体がないため図示していないが、丹塗土器の割合が増加している。

⑤中期末～後期初頭

須玖Ⅱ式新段階～高三瀦式古段階併行期で、佐賀平野の弥生土器編年では村徳永 1 式期（蒲原 2003）に相当する。甕は口縁部が外側に長く延びて端部がやや下方に下がり、内側に明瞭に突出するものから、萌芽的な「く」の字形へと移行する。また、図示していないが樽形甕も中期末頃までは存在する。なお、26 のように丹塗りと暗文が施された甕もあるが、本遺跡では丹塗りの甕は壺に比べて極めて少ない。壺は、大型の鋤先口縁広口壺（28）や、鋤先口縁で頸部が短い広口壺（29）があり、胴部突帯は断面Ｍ字形から断面台形になるとみられる。特徴的な器種として、袋状口縁壺が中期末頃から出現する。しかし、佐賀平野では後期初頭～後期前半にも出土することから、袋状口縁壺の出現が弥生時代中期と後期とを区別する指標にはならないと考えられる（石田 2008）。高坏は、口縁端部がより外側に長く延び、脚部が短いものと（32）、長いもの（33）があるが、前者が多い。筒形器台は透かしが施されなくなるが、受部を持つ長大なものと（35）、受部が緩やかに外反し突帯を有するもの（34）があり、ともに丹塗りが施されている。

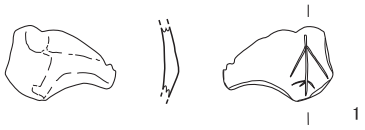
後期初頭には多条突帯無頸壺が出現する。丸みを帯びた胴部の中位に断面三角形の突帯を 4 ～ 5 条程度巡らせ、口縁が強く内傾する無頸の壺で、佐賀平野東部地域に特徴的な土器である（石田 2011, 蒲原 2003）。39 は甕棺であるが（吉野ヶ里地区Ⅱ区 SJ0515 下棺）、口縁打ち欠きで胴部上位に断面台形の突帯が 4 条巡り、外面には丹塗りが施されている（『214 集』）。このほか、小型の多条突帯無頸壺は吉野ヶ里地区Ⅴ区 SD0925 環壕跡からも出土している（『173 集』）。なお、丹塗土器は基本的に中期末で終焉しているが、後期初頭～後期前半古相頃までは一部残存する。

（２）特徴的な土器（前期～中期）

線刻土器（図 208）[2)]

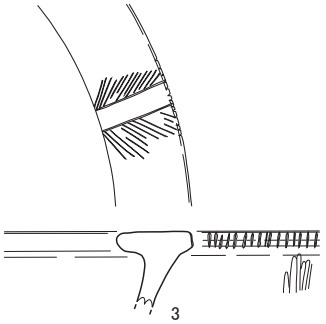
1 は遺跡南部の田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0001 環壕跡（前期後半～中期初頭）の上層から出土した壺胴部の小片で、胴部外面の屈曲部に線刻が施されている（『207 集』）。2 は遺跡北部の志波屋四の坪地区Ⅱ区 389 調査区 SH1971 竪穴建物跡から出土した壺胴部片で、外面に線刻が施されている（『211 集』）。遺構は古墳時代後期の竪穴建物跡であるが、混入した弥生土器とみられる。3,4 は吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 SD1801 壕跡から出土した。3 は鋤先口縁の広口壺で、口縁上面に 2 本の直線とその両脇に斜方向の明瞭な線刻が施されている。4 は壺の胴部とみられ、2 本の曲線の間に格子状の粗い線刻を有する。描かれているのは舟もしくはシカの可能性があるが、線刻は極めて細く不明瞭である。5 は田手二本黒木地区Ⅱ区の中期前半の貯蔵穴とみられる SK0129 土坑から出土した甕口縁部で、口縁上面に鋸刃状の明瞭な文様が線刻されている（『207 集』）。6 は墓地に伴う祭祀土坑とみられる吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区

TDN-Ⅱ SD0001上層

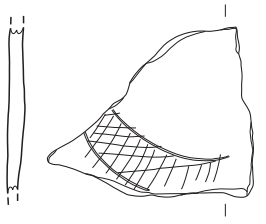


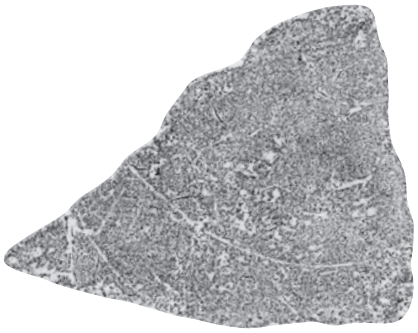
SYT-Ⅱ 389区SH1971

YGK-Ⅶ SD1801（サブトレA）

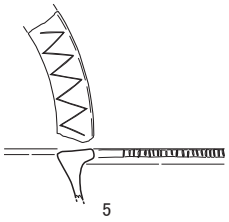


YGK-Ⅶ SD1801（8ウネ）

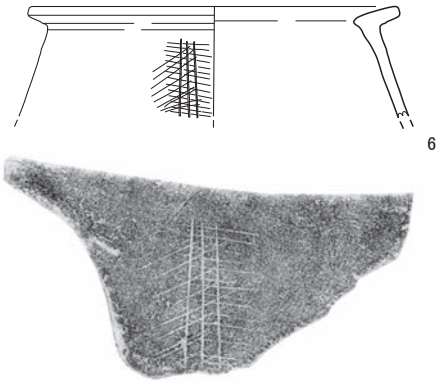




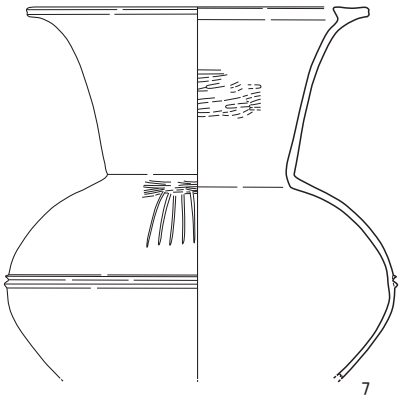
TDN-Ⅱ SK0129



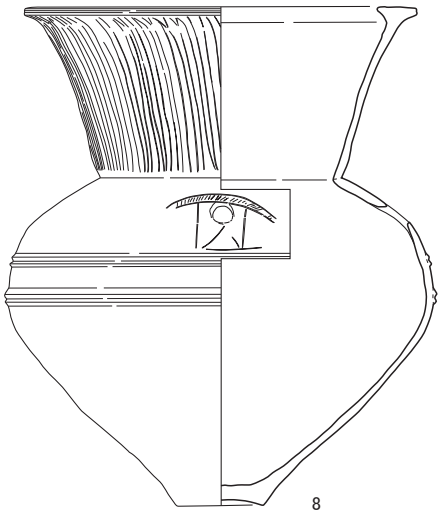
YGK-Ⅲ SK0609(C)



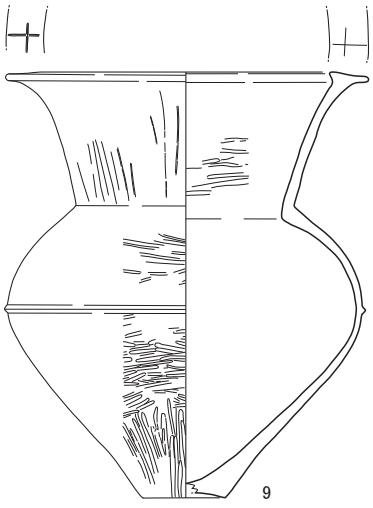
TDN-Ⅲ 318区 SK0721



SYT-Ⅰ SK1262



SYT-Ⅱ 377区 SX1762



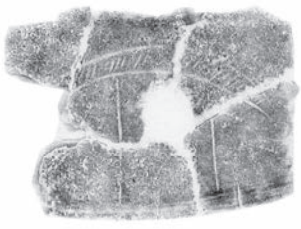


図 208　線刻のある弥生土器（1/3,1/6　拓本 1/3）

SK0609（C）から出土した小型の甕口縁部片で、外面の口縁下部に縦 3 条と横、斜めに多数の線刻が施されている。7 は田手二本黒木地区Ⅲ区 318 調査区 SK0721 土坑出土の広口壺で、胴部上位に縦方向の 5 本の線刻が施されている（『222 集』）。8 は墓地に伴う祭祀土坑とみられる志波屋四の坪地区Ⅰ区北西部の SK1262 から出土したほぼ完形の広口壺である。胴部上位に施された焼成後穿孔を取り囲むように 2 本の縦線の上を 2 本の弧状線が渡り、その間に細かい線刻が施されている。柱と屋根で建物を表している可能性がある（『113 集』、『214 集』）。9 は墓地に伴う祭祀土坑とみられる志波屋四の坪地区Ⅱ区 377 調査区 SX1762 出土の広口壺で、口縁部に 1 対の十字形の刻みが施されている（『211 集』）。

樽形甕（図 209）

口径に対して底径が大きい平底の甕を指す。弥生時代中期の佐賀平野東部地域に特徴的な土器で、神埼市詫田西分遺跡の報告では「中期前葉～中葉」（千代田町 1983）、みやき町天建寺南島遺跡の報告では「中期中葉」（三根町 1989）に位置づけられてきた。その後の研究で、樽形甕は神埼地域では中期前半古相（須玖Ⅰ式古段階）に出現し、みやき地域ではやや遅れて中期前半新相（須玖Ⅰ式新段階）に出現することなど、細かな地域性の存在が示されている（石田 2008,2011）。本遺跡では中期前半のものが多いが、中期後半～中期末まで継続する。底部以外は通常の甕と同様の形態変化をたどるとみられる。樽形甕の大きさは、器高 12 ～ 15cm の小型品、器高 17 ～ 24cm の中型品のほか、器高 35cm の大型品もある（15）。図示したのは全体の形状が判明する 16 点であるが、底部片も散見されるほか、口縁部片の場合は通常の甕との区別が困難な場合があることから、実際の数量はさらに多いと推測される。外面調整は、ハケメもしくはハケメ後ナデが多いが、ミガキが施されるものもある。9 は墓地に伴う祭祀土坑とみられる志波屋四の坪地区Ⅱ区 382 調査区 SK1975 土坑出土で、内外面に丁寧なミガキ調整が施されているほか、口縁上面に 2 孔 1 対の穿孔が施されている。10 は田手二本黒木地区Ⅲ区 346 調査区 SK0947 土坑出土で、内外面に丁寧なミガキ調整が施されているほか、口縁上面に等間隔の暗文が施された精製品である。なお、樽形甕は集落域だけでなく墓地の祭祀土坑からも出土しているが、本遺跡では甕棺の棺体（小型棺）には全く用いられていない。

柱状型土製支脚（図 210・211）

中実の土製支脚で、ススやコゲの付着がないことから用途は不明であるが、弥生時代前期末～中期初頭の脊振山地東側周辺部（早良地域～二日市地峡帯～筑紫地域～佐賀平野東部地域）に出土が限られる特徴的な土器である（石田 2008）。形態は断面円形（円柱形）と断面長方形（方柱形）に大別できる。調整はナデが基本だが、ハケメが残るものや、ミガキが施されたもの、指頭痕が明瞭に残るものもあり、精製と粗製に分けられる。

方柱形の形態は、頂部が狭く底部が幅広の平面長台形を呈するものが多い。各面は平坦に整形されるが、指オサエが残るものもある。上面は平坦なものが多いが、3 や 14 のように棒状に窪むものもある。

円柱形の形態は、上端に比べて下端部が広がるものが多い。また、上下端に明瞭な窪みが認められるものと、端部が平坦なものがある。また、方柱形と同様に上面に棒状の窪みを有するものもあり、使用法に関係すると思われるが機能は不明である。このほか、胴部中央付近に穿孔が施されたものが円柱形に 3 例、方柱形に 4 例あるが、機能は不明である。共伴土器から時期を整理すると、柱状型土製支脚

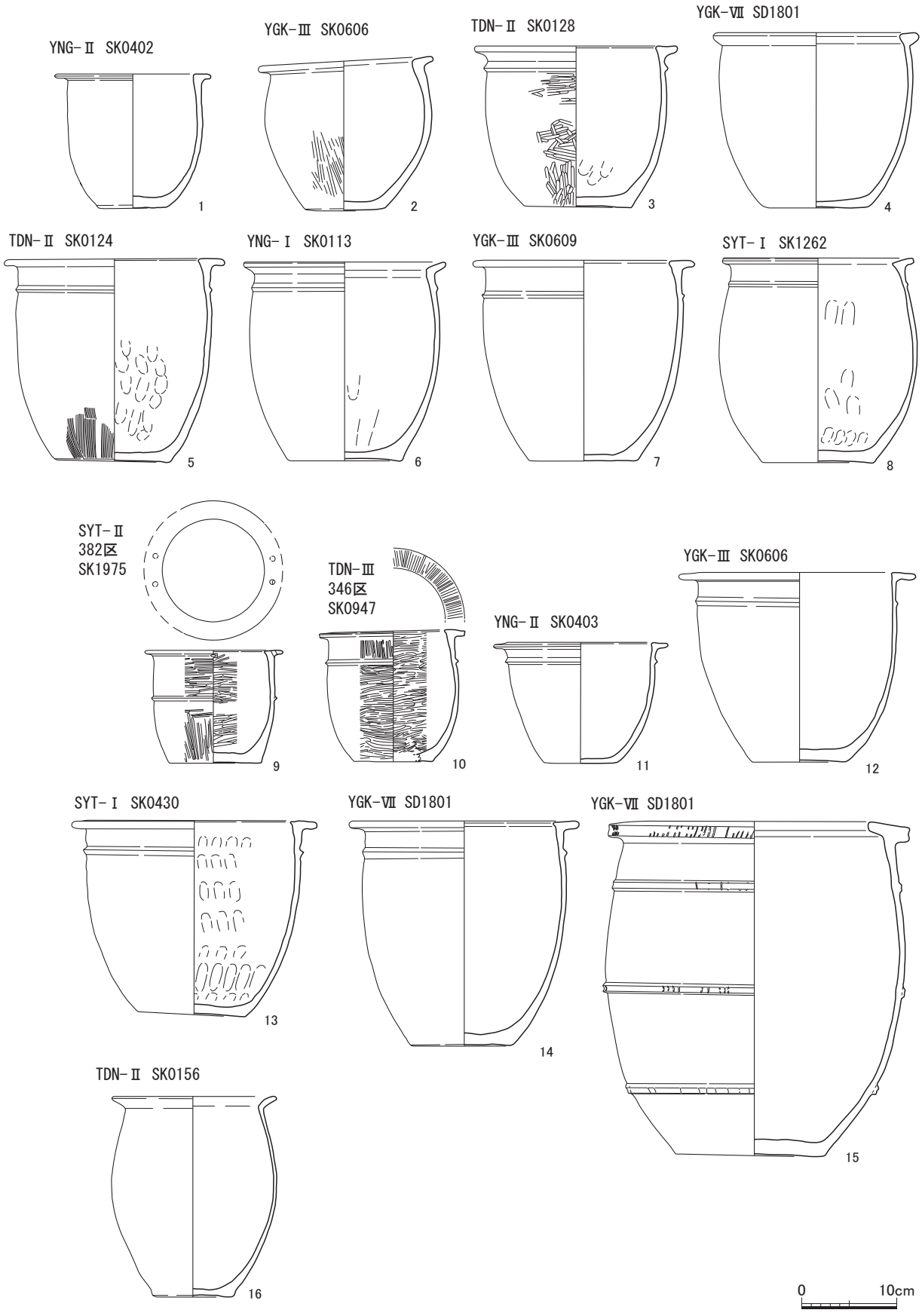

YNG-Ⅱ SK0402
1
YGK-Ⅲ SK0606
2
TDN-Ⅱ SK0128
3
YGK-Ⅶ SD1801
4
TDN-Ⅱ SK0124
5
YNG-Ⅰ SK0113
6
YGK-Ⅲ SK0609
7
SYT-Ⅰ SK1262
8
SYT-Ⅱ
382区
SK1975
9
TDN-Ⅲ
346区
SK0947
10
YNG-Ⅱ SK0403
11
YGK-Ⅲ SK0606
12
SYT-Ⅰ SK0430
13
YGK-Ⅶ SD1801
14
YGK-Ⅶ SD1801
15
TDN-Ⅱ SK0156
16
0
10cm

図 209　樽形甕（1/6）

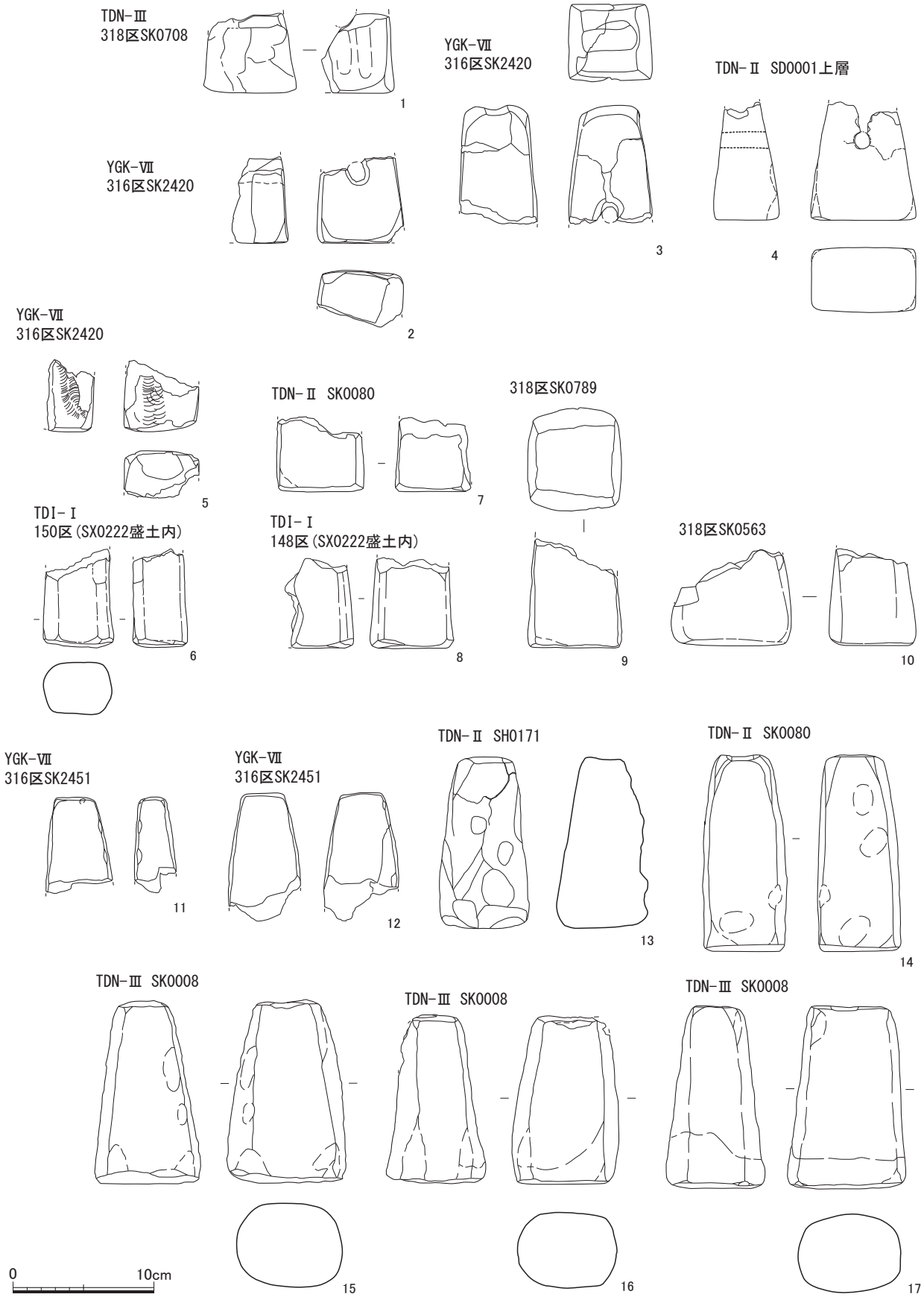


図 210　柱状土製支脚（方柱形）(1/4)

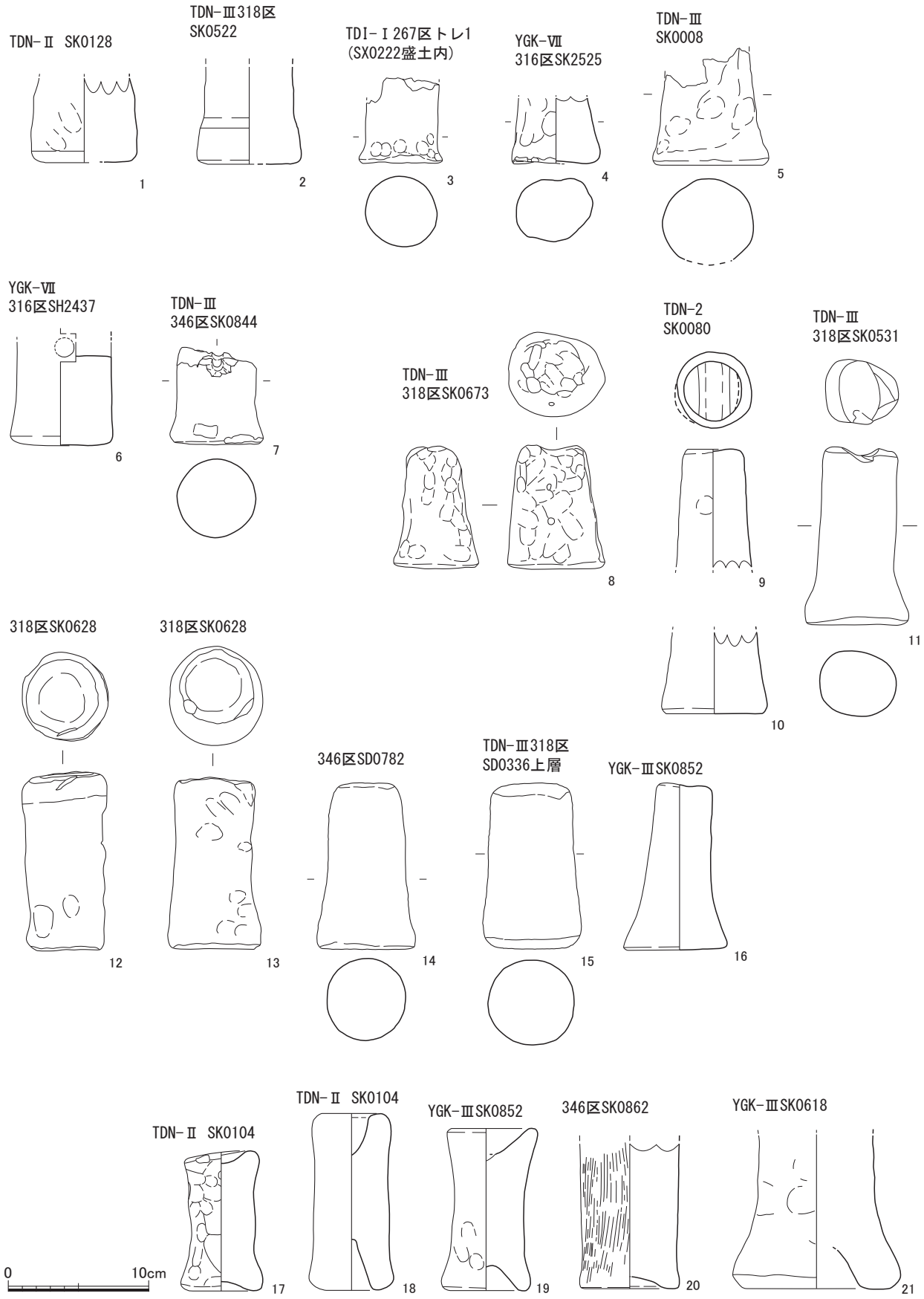


図 211　柱状土製支脚（円柱形）（1/4）

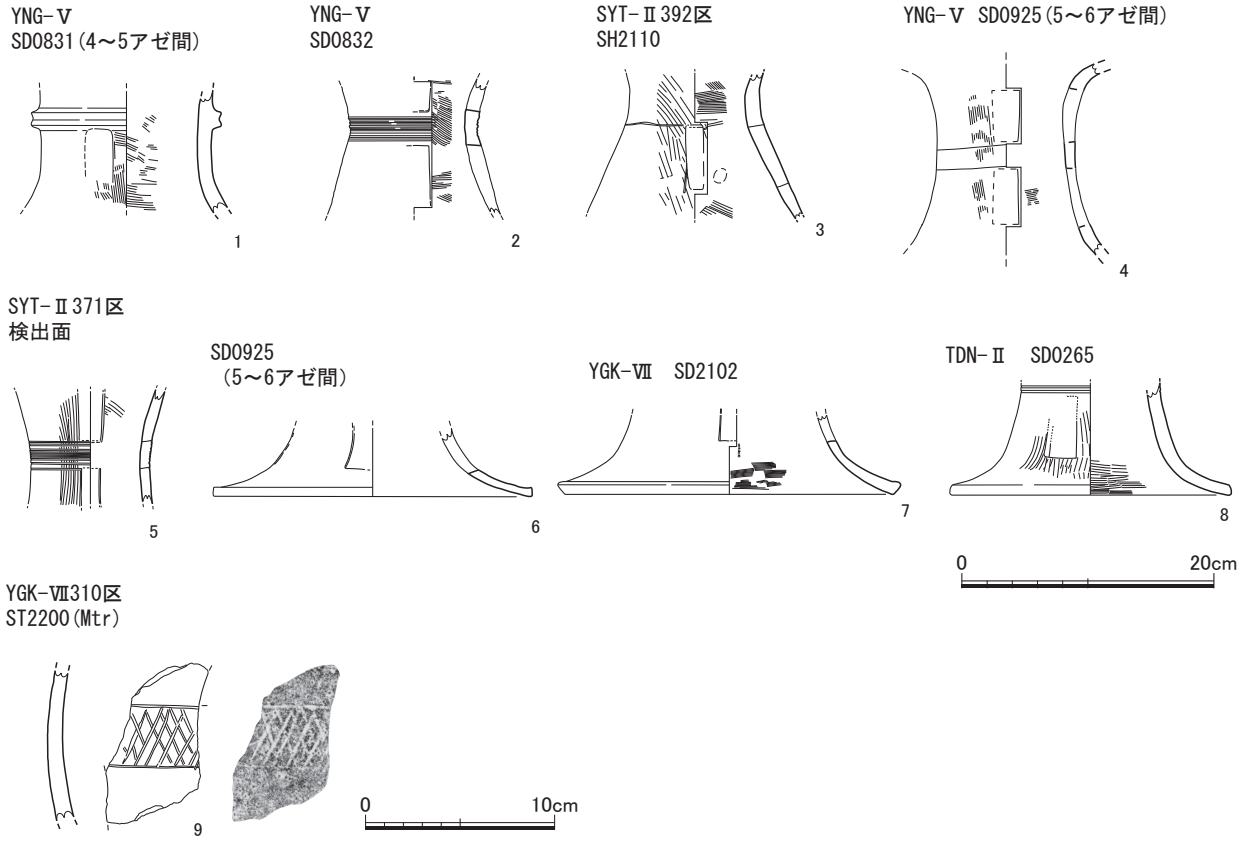


図 212　肥前型器台（1/4,1/6）

は前期末に出現して中期初頭～中期前半に盛行し、中期後半頃まで継続している。集落域と墓域の両方から出土しており、同一遺構から３点以上出土する例もある。

（３）特徴的な土器（後期）

肥前型器台（図 212）

弥生時代後期の北部九州地域にみられる特徴的な土器として、胴部に円形や長方形の透かしを有する、いわゆる「肥前型器台」がある（小田 1967, 上田 2004, 石橋 2014,2015）。本遺跡では、破片資料であるがこれまで９点が確認されており、１～８は集落域から、９は吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 ST2200 前方後方墳の周溝から出土している[3)]。９は平行する上下２本の沈線の間に斜格子の文様が施されており、図の右上と左下には透かし孔の一部が残存する。本遺跡出土例は共伴土器の時期を絞り込めないものもあるが、佐賀平野で肥前型器台が最も盛行する弥生時代後期後半～終末期（石橋 2014）に相当するとみられる。佐賀平野における肥前型器台の展開に関しては、平野東部の城原川流域に分布の中心があり、田手川以東にはほとんど広がっていないことから、吉野ヶ里遺跡一帯が佐賀平野における分布の東限と考えられている（石橋 2015）。

台付甕・台付鉢（図 213）

底部に脚台を有する弥生時代後期の台付甕は、平底甕を主体とする佐賀平野では客体的な存在であり、後期後半古相（千住２式期）に出現するものの、出土数は少ない（石橋 2015, 蒲原 2003）。本遺跡出土で全形が判明するのは５点程度であるが、ほかに脚台部のみの破片も散見される。また、すで

に指摘されているように佐賀平野出土の台付甕は全て小型品である（石橋 2015, 蒲原 2017）。台付甕に共伴する土器は終末期のものが多いが、枝町遺跡 SD025 溝出土土器（6）は脚部の作りがやや異なっており、古墳時代前期初頭とみられる。

このほか、主に弥生時代後期後半～終末期の遺構からは 14 ～ 20 のような脚台付の鉢も出土しているが、脚台部のつくりは台付甕と同様で、口縁部形態は外反するものと碗状に直行または内湾する単純口縁のものがある。なお、佐賀平野における台付鉢の出現は後期前半（村徳永 2 式〔蒲原 2003〕）で、台付甕の出現よりも先行するが、盛行するのは後期後半～終末期で、古墳時代前期初頭にも継続している（蒲原 1991）。

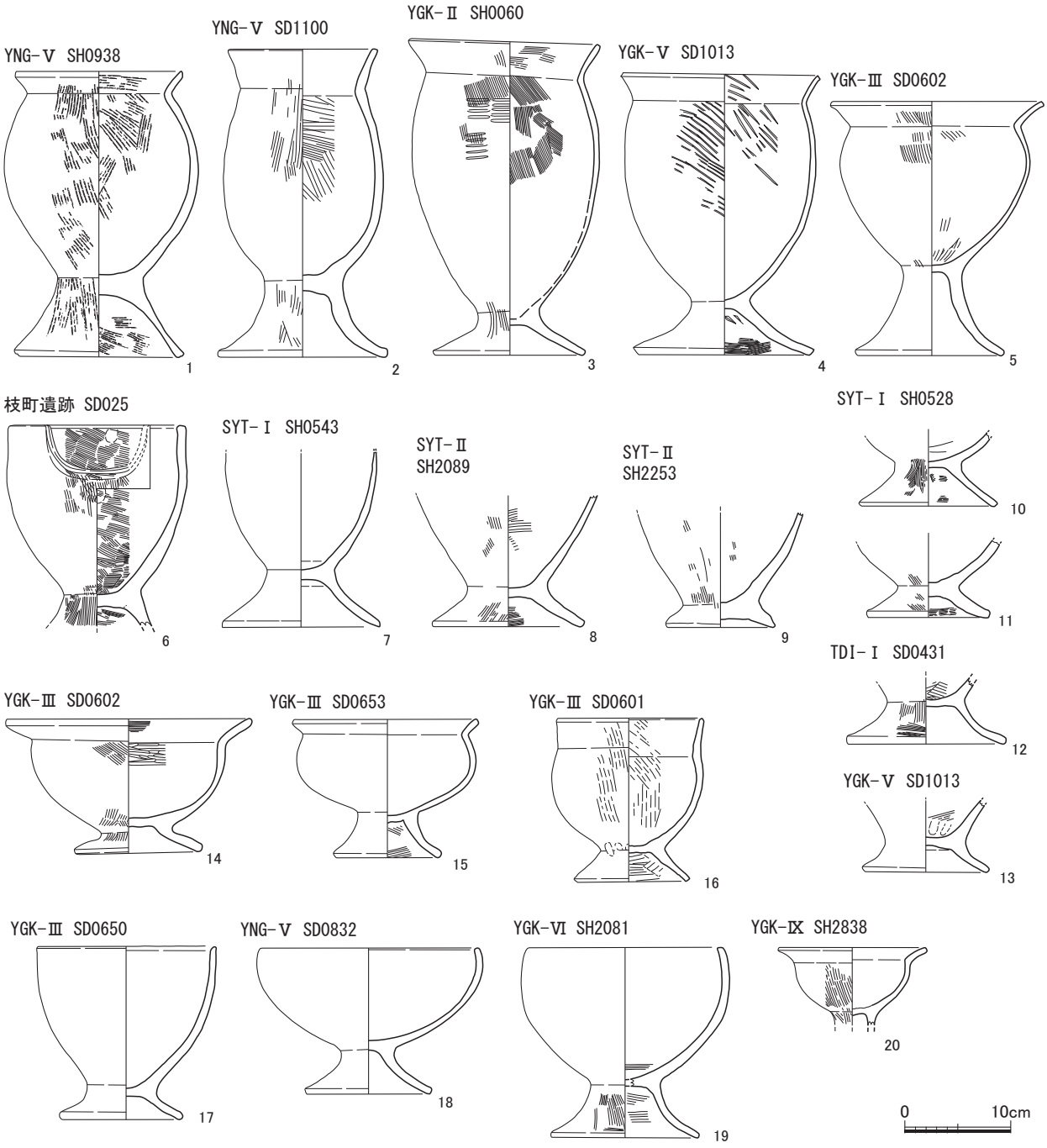


図 213　台付甕・台付鉢（1/6）

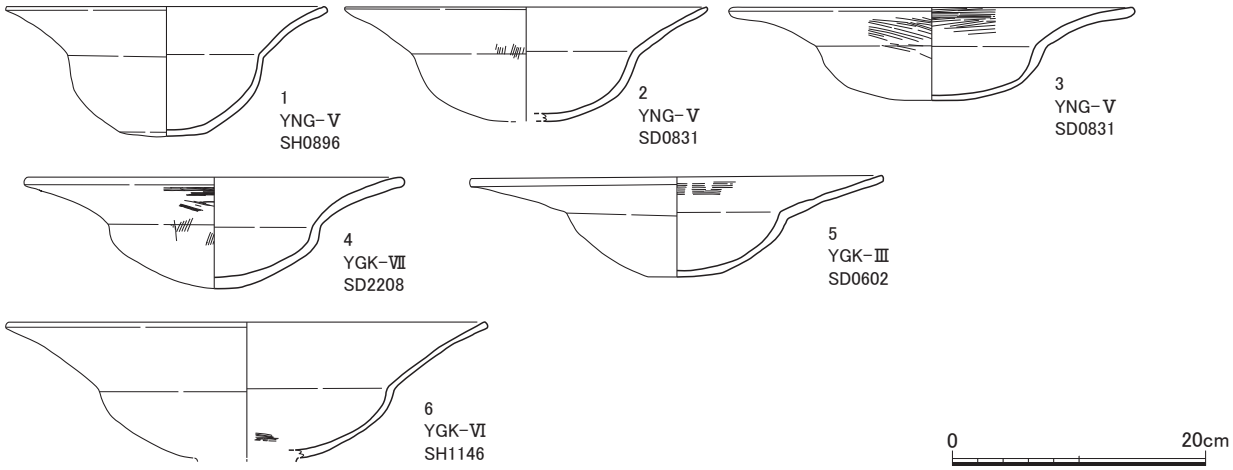


図 214　外反口縁鉢（1/6）

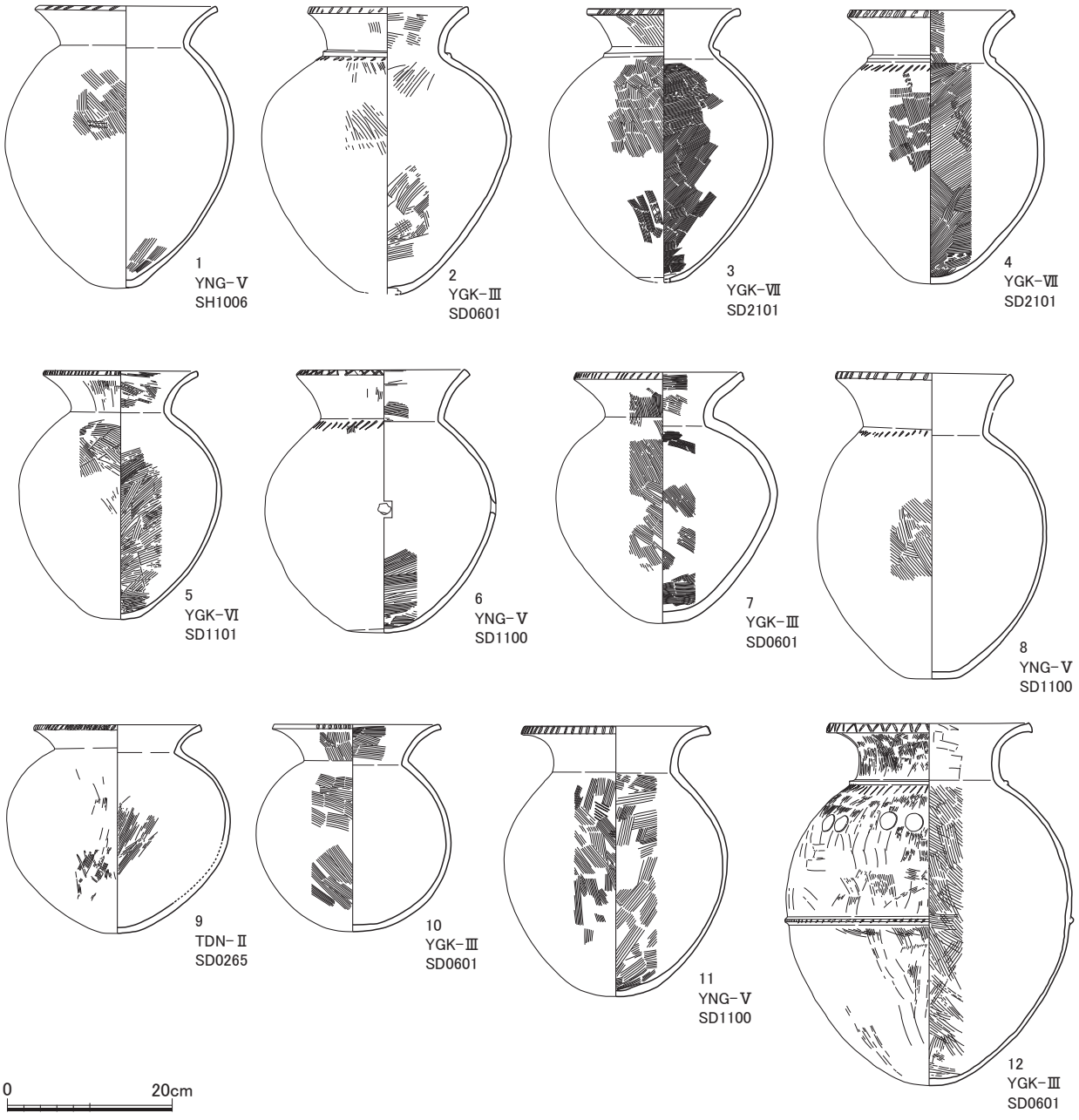


図 215　直口縁広口壺（1/8）

外反口縁鉢（図 214）

口縁部が屈曲して長く外反する浅鉢で、外反部分は湾曲するものと直線的なものとがあり、底部形態は丸みを帯びた平底から丸底へと変遷する。佐賀平野東部地域に特徴的な土器と考えられる（『207集』）。時期的には弥生時代後期後半古段階（千住 2 式）に出現し、終末期（惣座 1 式）まで継続する（蒲原 1991,2003）。

直口縁広口壺（図 215）

弥生時代後期後半～終末期の有明海沿岸地域の土器様式における壺は、複合口縁壺よりも直口縁広口壺が主体的であることが指摘されている（石橋 2014）。佐賀平野の直口縁広口壺は「筑肥型」（種浦 1987）とされるタイプで、肥後地域の影響のもとに筑後から肥前地域にかけて分布することが明らかになっている。図示したのは口縁端部に刻み目が施されるもので、時期的には弥生時代終末期古相（惣座 0 式期）～古墳時代前期初頭（夕ヶ里式期）に相当する（蒲原 1991,2003）。形態は、胴部上位が張り出して胴部下半が窄まり、底部が凸レンズ状を呈するものから、胴部中位を最大径とする丸みを帯びた形態で底部丸底を呈するものへと変化する。なお、頸部付け根に突帯が 1 条巡るものもみられる。12 は頸部付け根と胴部中位に突帯が巡り、胴部上位に円形の浮文が貼り付けられた特異な形態である。

第 2 章第 2 節 1　註

1）石田智子氏の御教示による。

2）図 208-3,4,6 は未報告。

3）図 212-9 は未報告。

第 2 章第 2 節 1　引用・参考文献

石田智子 2008「佐賀平野東部地域における弥生時代中期の土器様相」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 177 集

石田智子 2011「寒水川・切通川流域における弥生時代中期の土器様相」『西寒水四本柳遺跡 2-5 区・6 区』みやき町文化財調査報告書第 5・6 集

石橋新次 2014「佐賀県の肥前型器台」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会・合同大会資料集

石橋新次 2015「佐賀県における台付甕と透かしを持つ装飾器台」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会

上田龍児 2004「器台型土器について」『長崎県・景華園遺跡の研究ほか』福岡大学考古学研究室研究調査報告第 3 冊

小田富士雄 1967「弥生土器」『深堀遺跡』長崎県文化財調査報告書第 5 集

蒲原宏行 1991「古墳時代初頭前後の土器編年―佐賀平野の場合―」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』16

蒲原宏行 2003「佐賀平野における弥生時代後期の土器編年」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』27

蒲原宏行 2017「佐賀・唐津平野」『九州島における古式土師器』第 19 回九州前方後円墳研究会長崎大会　発表要旨集・基本資料集

久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ　庄内式土器研究会

種浦修 1985「小結」『村中角遺跡』諸富町文化財調査報告書第 2 集

種浦修 1987「小結」『唐人廟遺跡』諸富町文化財調査報告書第 3 集

中野充 2005「田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0001 環壕出土の土器」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 163 集

２．金属器

ここでは、吉野ヶ里遺跡から出土した金属器（青銅器・鉄器）の種類と出土位置について簡単にまとめる。なお、集落出土の青銅器、鋳型、鉄器については『207 集』、墓地出土の青銅器、鉄器については『214 集』、『219 集』、『222 集』でそれぞれ報告しているため、詳細はそちらを参照されたい。

（１）青銅器

吉野ヶ里遺跡から出土した青銅器は 28 点である（図 216）。最初の青銅器は、遺跡南端部の田手一本黒木地区Ⅰ区 324 調査区 SJ0100 甕棺墓（城ノ越式）の棺内から出土した細形銅剣 1 本で、中期初頭に属する。中期前半には、遺跡南部の集落中心部にあたる吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 316 調査区の SH2400 円形竪穴建物跡から出土した環状青銅製品（耳環）2 点があり、出土土器から中期前半に属するとみられる。また、中期前半には遺跡中央部北側の吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区に ST1001 北墳丘墓が築造され、最初に埋葬される SJ1006 甕棺墓（汲田式新段階）から細形銅剣が出土している。その後、北墳丘墓には中期後半古相から新相にかけて、細形銅剣 5 本、中細形銅剣 1 本、有柄式細形銅剣 1 本、青銅製把頭飾 2 点が副葬されている。このほか、図示していないが、吉野ヶ里遺跡で過去に採集された細形銅剣 2 本があり、北墳丘墓に伴うものであった可能性が指摘されている（佐賀県 1976）。

弥生時代中期の石製鋳型は 5 点出土している。遺跡南部では、青銅器鋳造に関連する遺構とみられる SK0404 大型土坑から銅剣 3 面・銅矛 1 面が彫り込まれた 4 面鋳型が出土しており、出土土器から中期初頭～中期前半に青銅器鋳造が行われていたと考えられる。近辺では 7 トレンチから細側銅矛の両面鋳型が 1 点出土しているほか、三田川町教育委員会の調査で砥石に転用された銅剣鋳型片が出土している（三田川町 1990）。このほか、遺跡中央部の吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区で SJ0937 甕棺墓に混入して銅剣鋳型片が出土しているほか、遺跡北部の吉野ヶ里地区Ⅳ区 SK0541 土坑（古代）に混入して銅剣鋳型片が出土している。

中期末には、ST1001 北墳丘墓西側の段丘上に位置する吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区 SJ2775 甕棺墓（立岩式）から、熟年女性人骨とともに小型の連弧文鏡 1 面が出土している。このほか、遺跡南西部の低地部にあたる田一本松地区で、包含層から貨泉が 1 枚出土している。

弥生時代後期の青銅器として、遺跡南部の外環壕の一部である SD0265、西側低地部の SD0319 溝跡からそれぞれ銅鏃が 1 点ずつ出土している。後期前半には吉野ヶ里の集落を取り囲む外環壕が形成されるが、このうち遺跡中央部の吉野ヶ里地区Ⅴ区一帯で青銅器が多く出土している。Ⅴ区西部の SD0925 壕跡は後期前半に掘削され終末期（～古墳時代前期初頭）に埋没したとみられ、埋土からは漢式鏡片 1 点、小形仿製鏡 1 面、深樋式銅剣切先が出土しているが、出土層位が明確でなく、所属時期の絞り込みが難しい。また、巴形銅器鋳型と不明青銅器鋳型がそれぞれ近い位置で出土しており。周辺土器の出土状況から鋳型は後期前半代に属する可能性がある。このほか、南内郭を構成する SD0829 溝跡から漢式鏡片が、SD0832 溝跡から小形仿製鏡がそれぞれ出土している。南内郭南東の構えの壕では、SD2208 溝から小形仿製鏡が 1 面出土している。また、古墳時代前期の前方後方墳 ST2200 の周溝から出土した小形仿製鏡 1 面も、周辺の後期の遺構からの流れ込みとみられる。このほか、遺跡西側に隣接する馬郡・枝町遺跡では、古代の土坑（SK007）に混入して小形仿製鏡の鈕部分の破片が出土している（『172 集』）。

遺跡中央部北側では、外環壕を形成する吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区 SD0054 壕跡の北端付近から小形仿製鏡が 1 面出土している。また、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区の 57 調査区（トレンチ）中央の包含層からも小

形仿製鏡が 1 面出土している。

後期後半には、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区で突出部を有する短い溝が掘削されており、溝が埋没する過程で埋納されたとみられる中広形銅戈がある。切先は北墳丘墓に向けられ、水平な状態で出土している。

終末期には、遺跡北部の大曲一の坪地区で福田型銅鐸が埋納された状態で出土している。出土地点は外環壕の北端から北に約 460m 離れた丘陵裾部の低地付近で、浅い埋没谷とみられる黒色土に掘り込まれたとされる小穴から鈕を下に向けた倒立状態で出土している（『152 集』）。

（２）鉄器、鉄製品

吉野ヶ里遺跡では約 200 点の鉄器、鉄製品が出土している。以下では地区別の出土傾向について簡単に見ていくこととする。

弥生時代前期後半～中期の中心的な集落域が形成されている遺跡南部では、中期初頭頃から鋳造鉄斧片再加工品が出現している。SX0222 盛土遺構（南祭壇・墳丘墓？）北西に位置する青銅器鋳造関連遺構とみられる SK0404 大型土坑からは、鋳型とともに青銅製素環頭付鉄刀子や鋳造鉄斧片再加工の鉄ノミが出土している。中期末頃には田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0003･SD0265 の掘削が始まったと考えられ、埋土からは図示したような鉄鏃、鉄鎌、鉄鋤先などが出土している（図 218）。なお、田手二本黒木地区Ⅱ区 SK0087 土坑（時期不明）からはほぼ完形の二条節帯を持つ鋳造鉄斧が出土している。終末期には SX0222 盛土遺構（南祭壇・墳丘墓？）の周囲に 2 条の溝が新たに形成され、外側の SD0431 からは先端部を欠損した鉄矛が出土している。

遺跡中央部では、後期後半から終末期にかけて 2 重の環壕区画である南内郭と、その南東部に弧状の壕（構えの壕）が形成・維持されている。鉄器は溝跡出土が多く、鉄鏃、鉄斧、鉄刀子、鉄鋤先、鉄鎌、鉄摘鎌などがある（図 219）。また、南内郭西方の SD0925 壕跡からは 39 点の鉄器が出土している（図 220）。器種は鉄鋤先が 12 点で最も多く、次いで鉄斧が 7 点ある（鍛造の袋状鉄斧 5 点、鋳造の袋状鉄斧 2 点）。溝跡出土など出土位置の詳細が明らかでないものも多いが、出入口の南側では鉄鋤先や鉄鎌がまとまって出土している。また、8 アゼ南では小型の鋳造鉄斧が、9 アゼ掘り下げ中に大型の鋳造鉄斧や鉄滓（鍛冶滓）が出土している。特徴的なものとして、筒形鉄製品が出土しているほか、折り返し途中とみられる鉄鋤先などもあり、SD0925 壕跡付近で鉄器の加工が行われていた可能性がある。

遺跡中央部北側では、外環壕の一部である吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区 SD0054、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 SD1013 から特に多く鉄器が出土している（図 221）。吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区西部の SJ1204 甕棺墓（後期初頭）の棺外からは鉄製短剣が出土している。吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区（北内郭）一帯では、壕跡や内部の竪穴建物跡から鉄器が多く出土しており、後期後半～終末期に属するとみられる（図 222）。

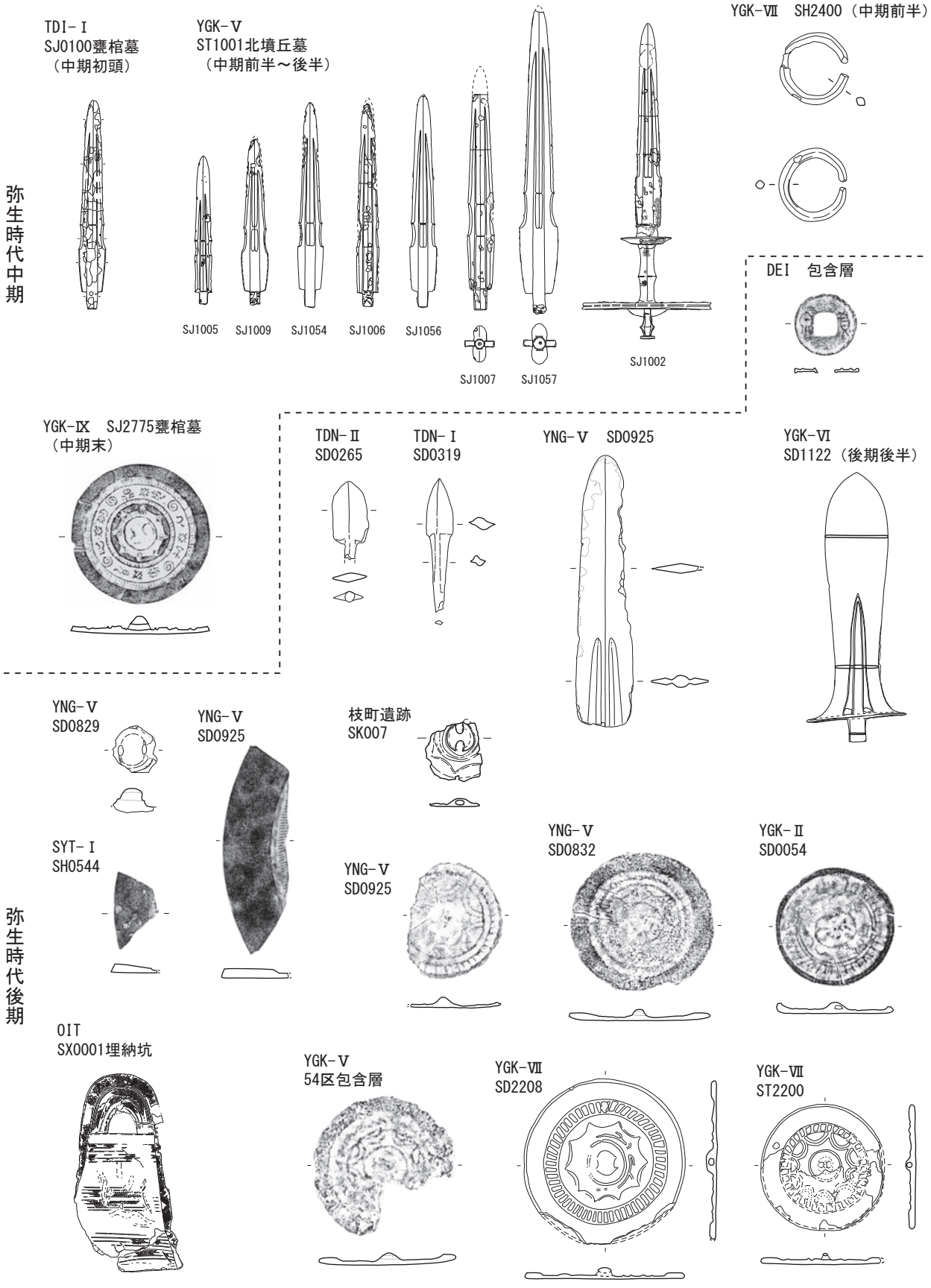


図 216　吉野ヶ里遺跡出土青銅器（銅剣 1/8,1/2, 銅鏡 1/3, 環状・貨泉・銅鏃 1/2, 銅鐸 1/8）

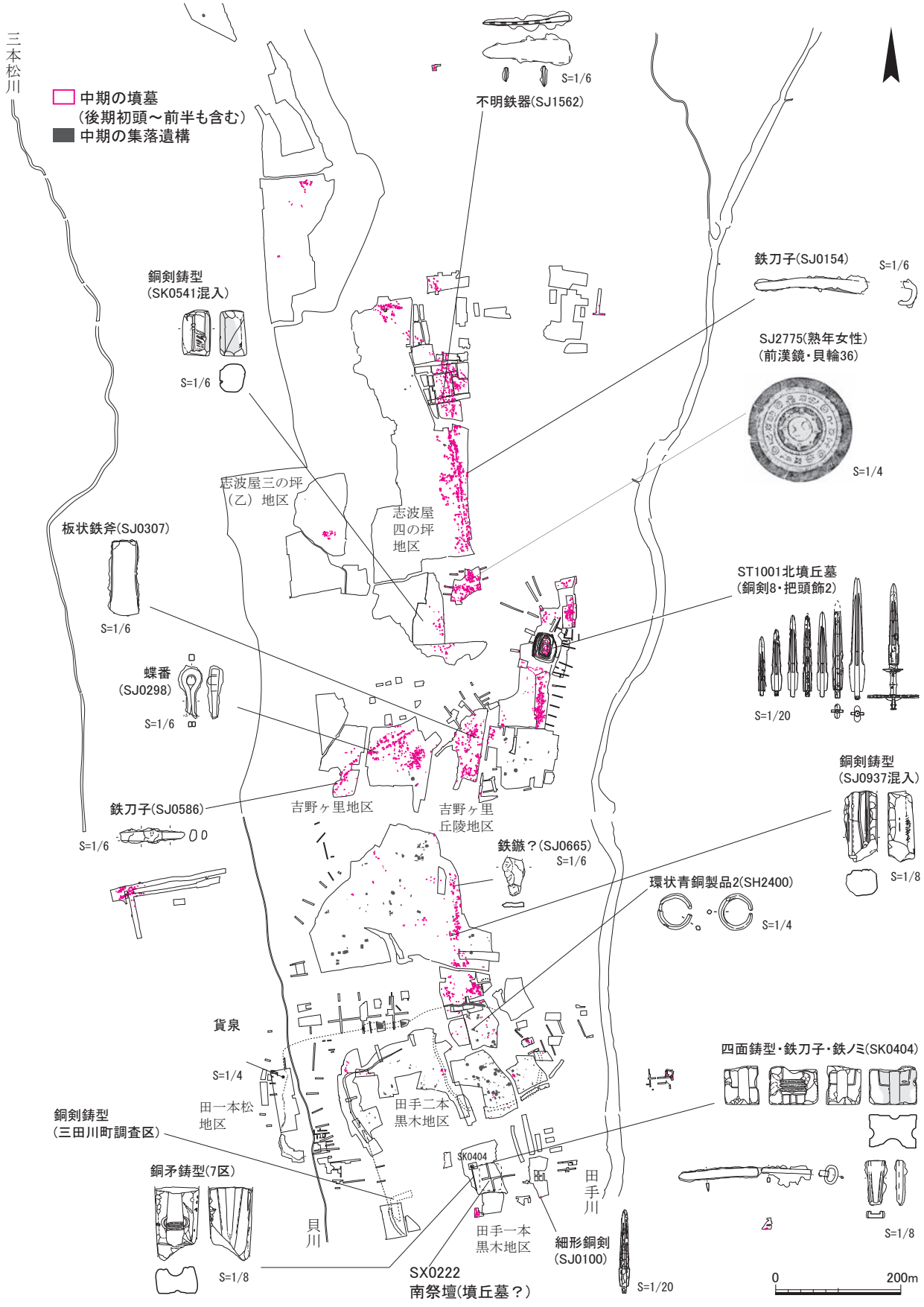


図 217　弥生時代中期　青銅器・墳墓出土鉄器の出土位置（1/9,000）

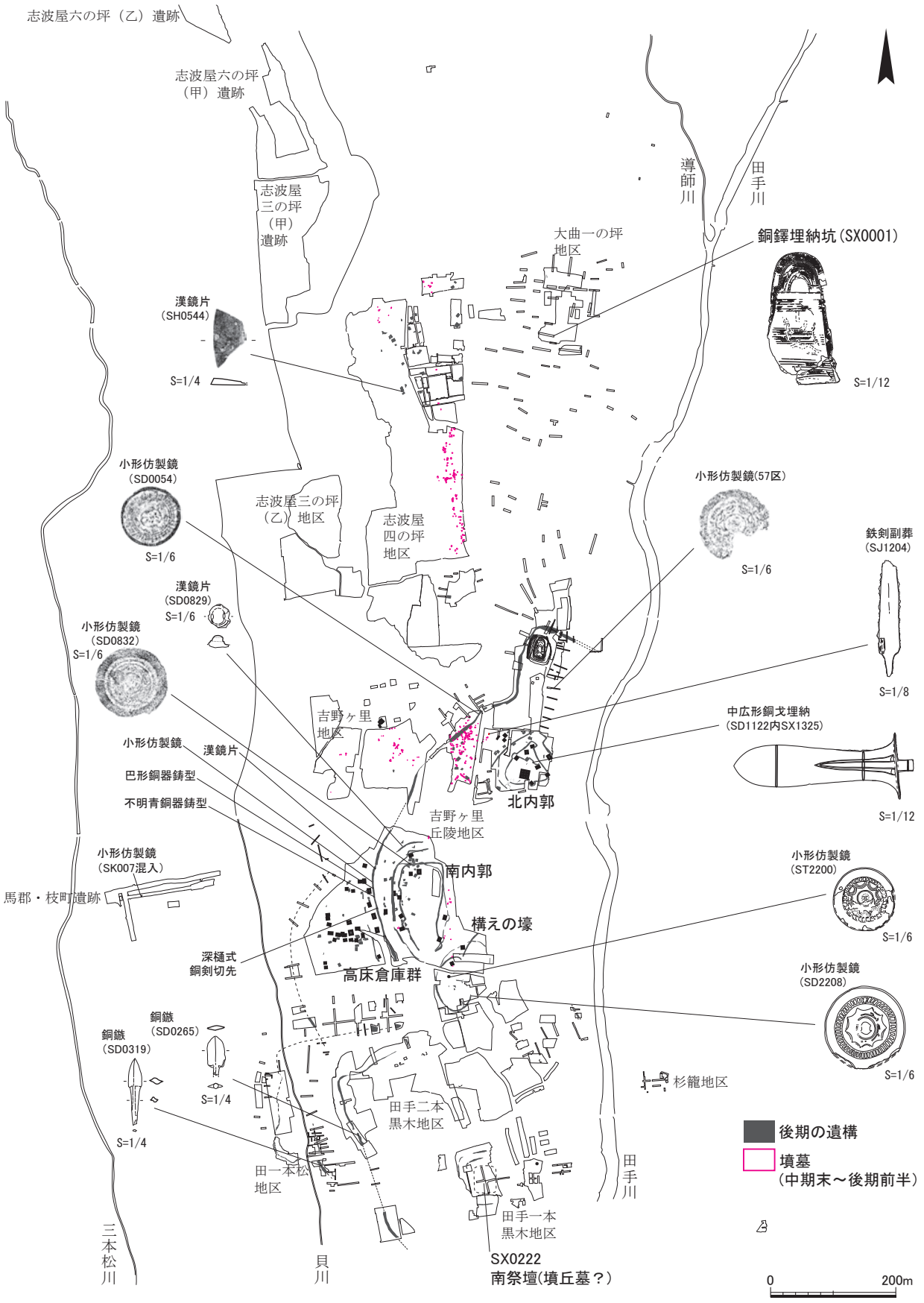


図 218　弥生時代後期　青銅器・墳墓出土鉄器の出土位置（1/9,000）

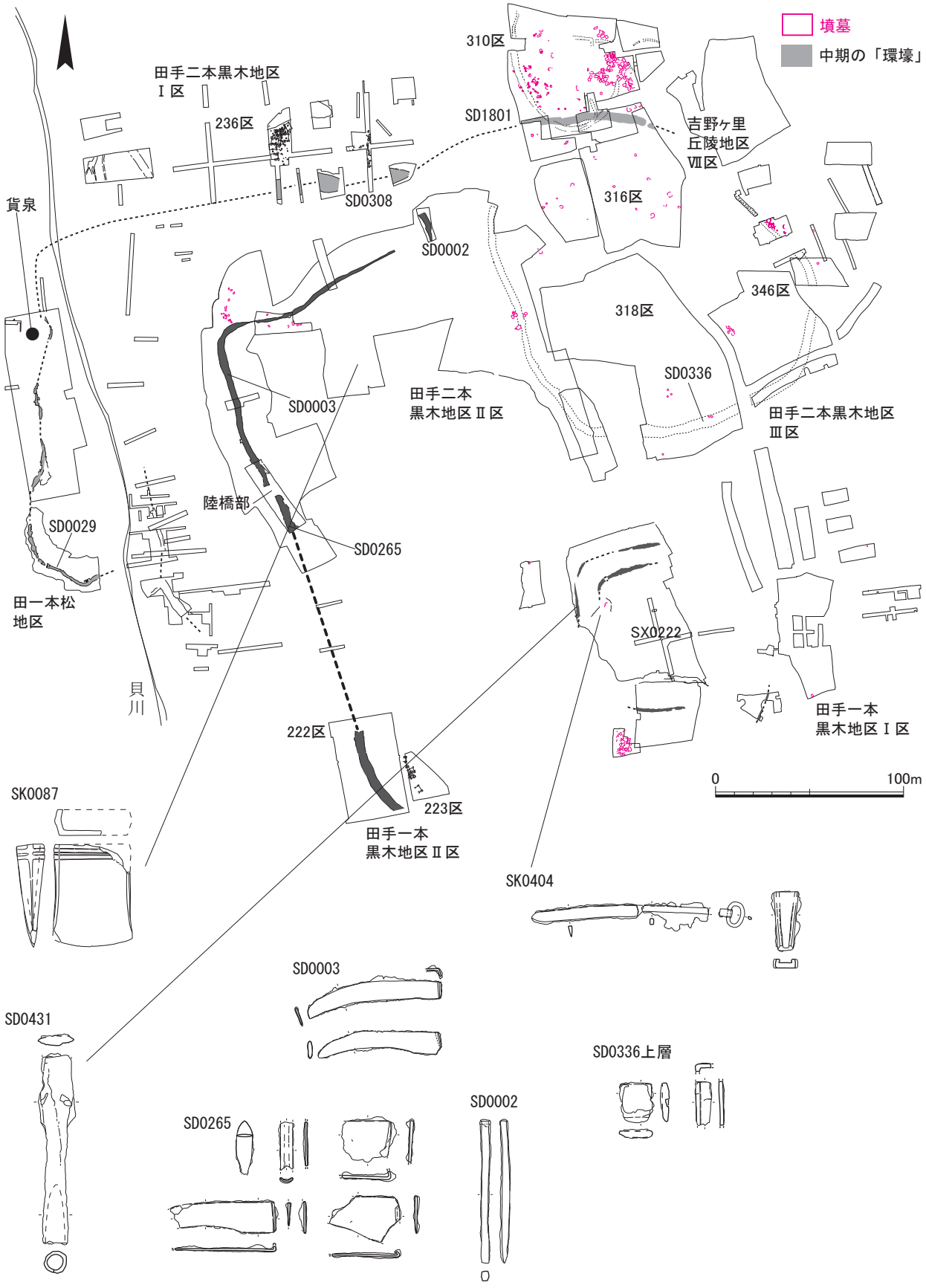


図 219　遺跡南部　遺構の分布（1/3,000）・主な出土鉄器（1/4）

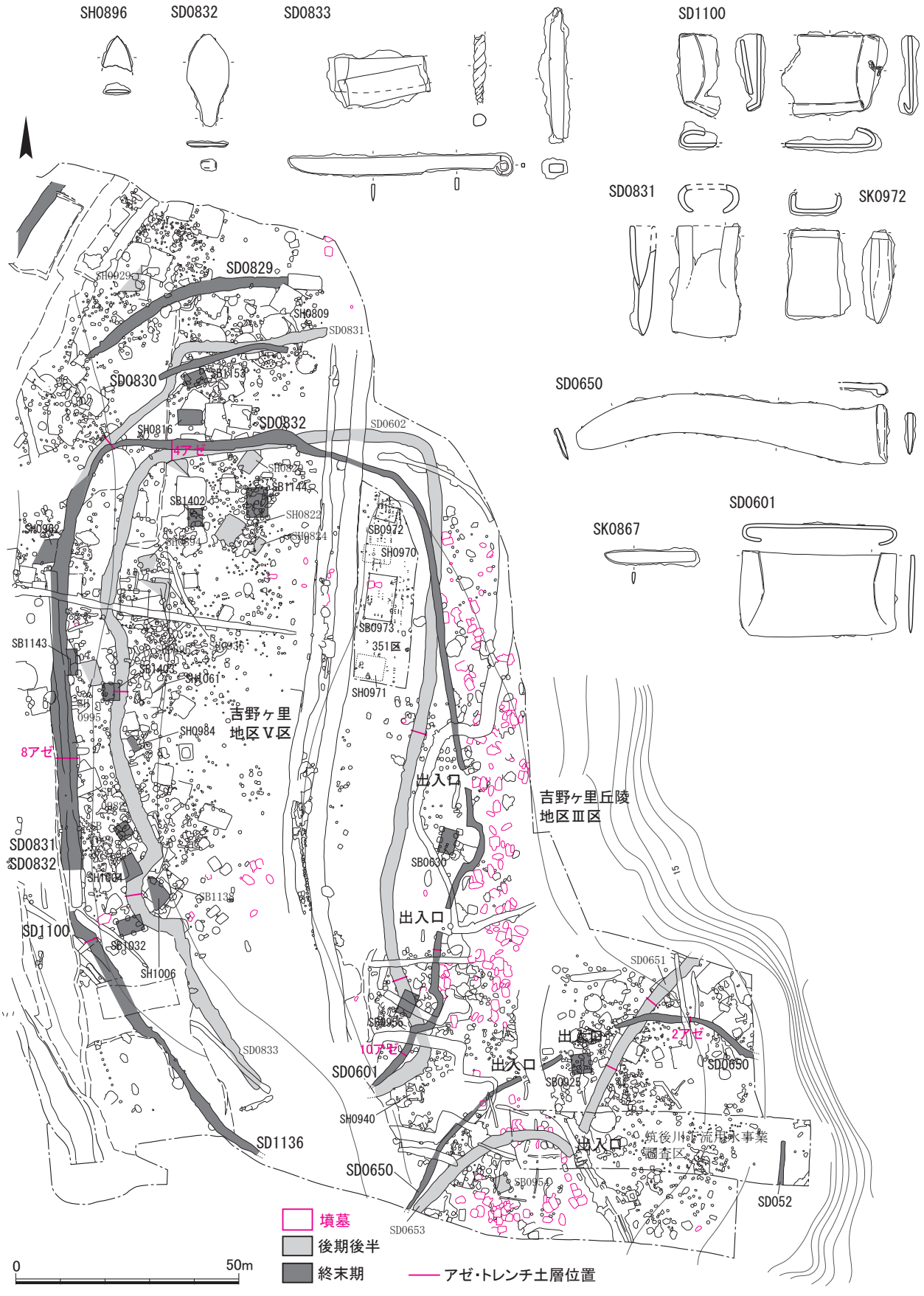


図 220　南内郭・構えの壕　弥生時代後期後半～終末期の遺構の分布（1/1,200）・主な出土鉄器（1/4）

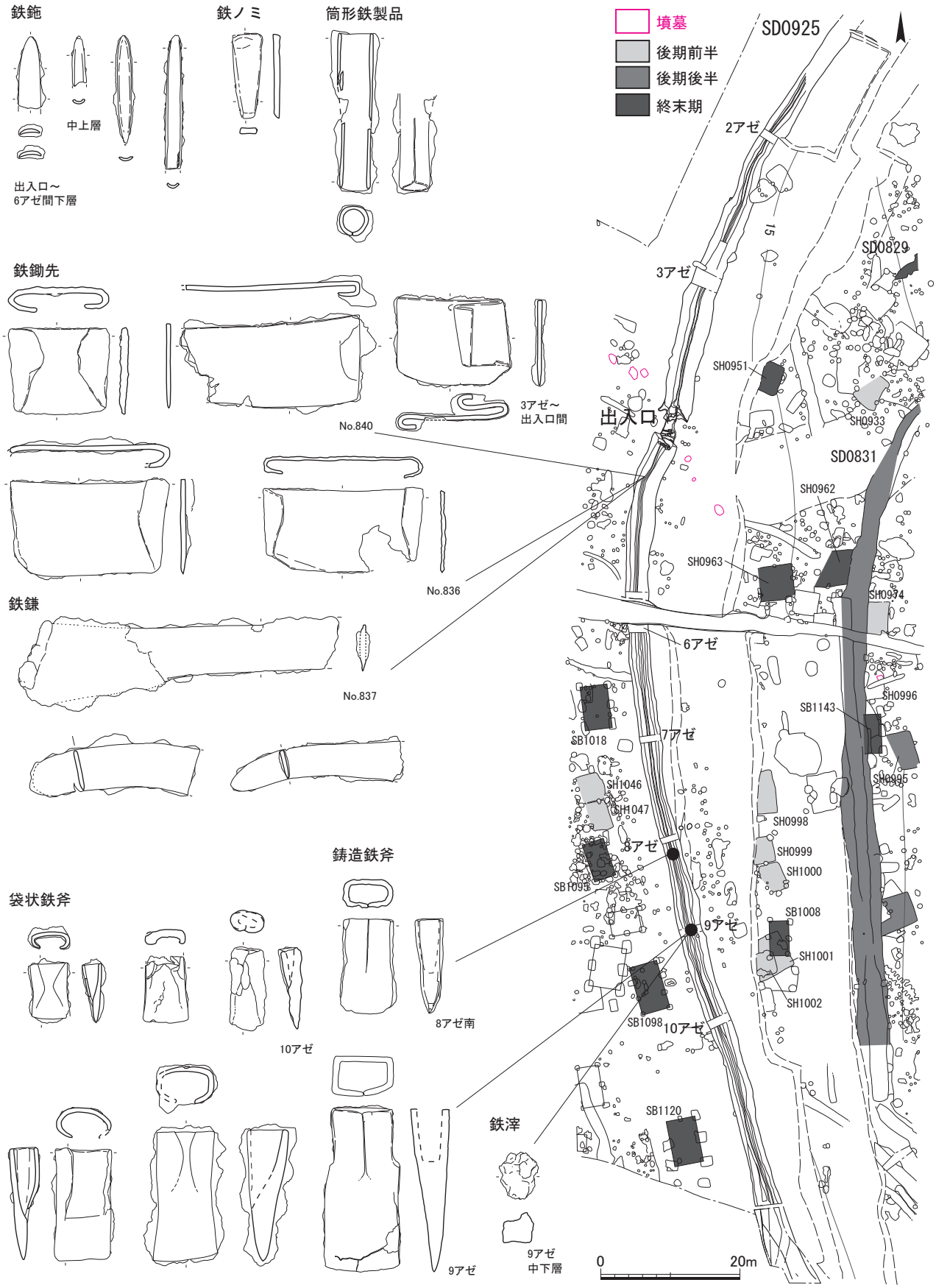


図 221　吉野ヶ里地区Ⅴ区 SD0925 とその周辺（1/800）・SD0925 出土の主な鉄器（1/4）

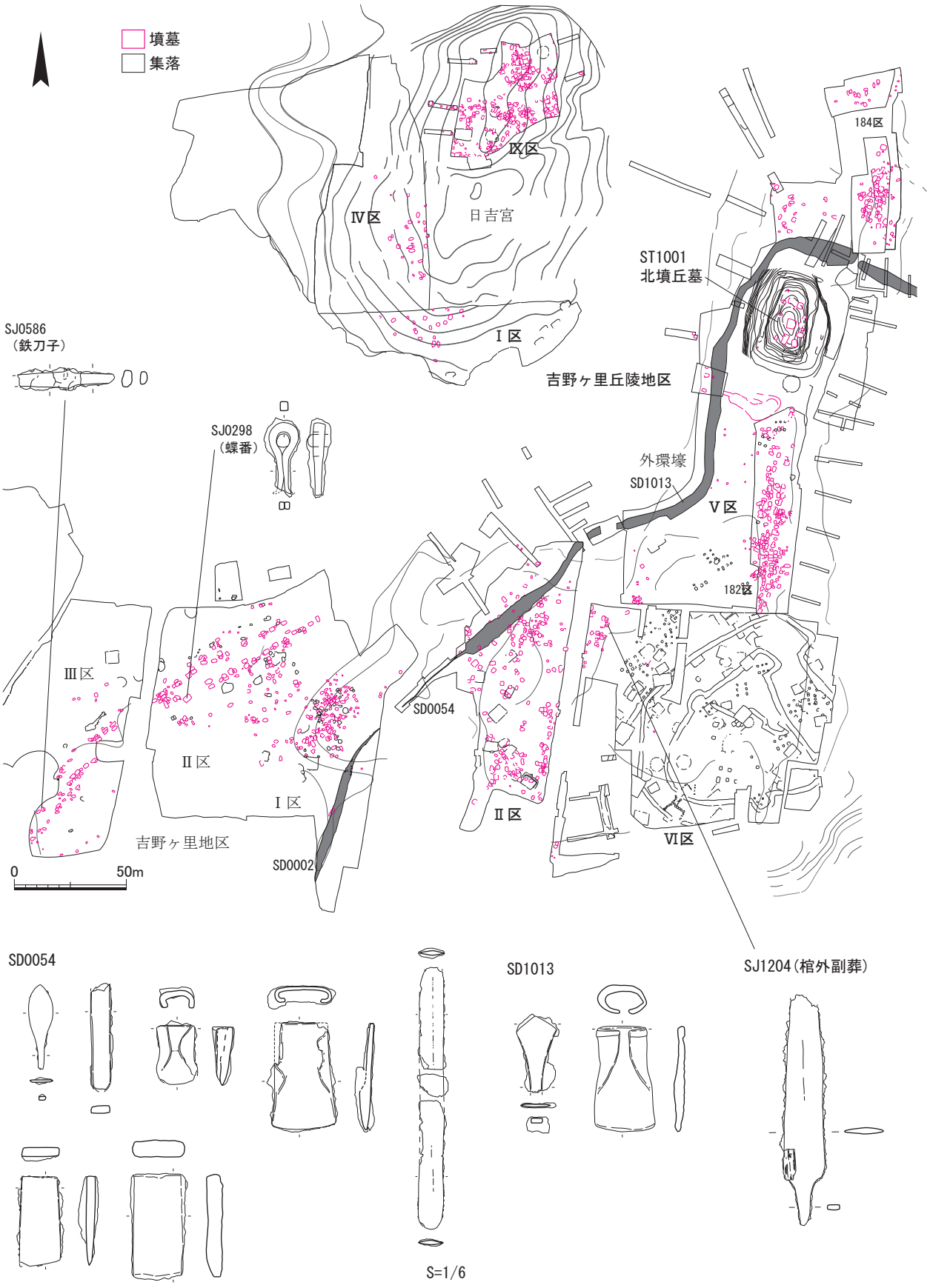


図 222　遺跡中央部　弥生時代遺構の分布略図（1/2,500）・主な出土鉄器（1/4,1/6）

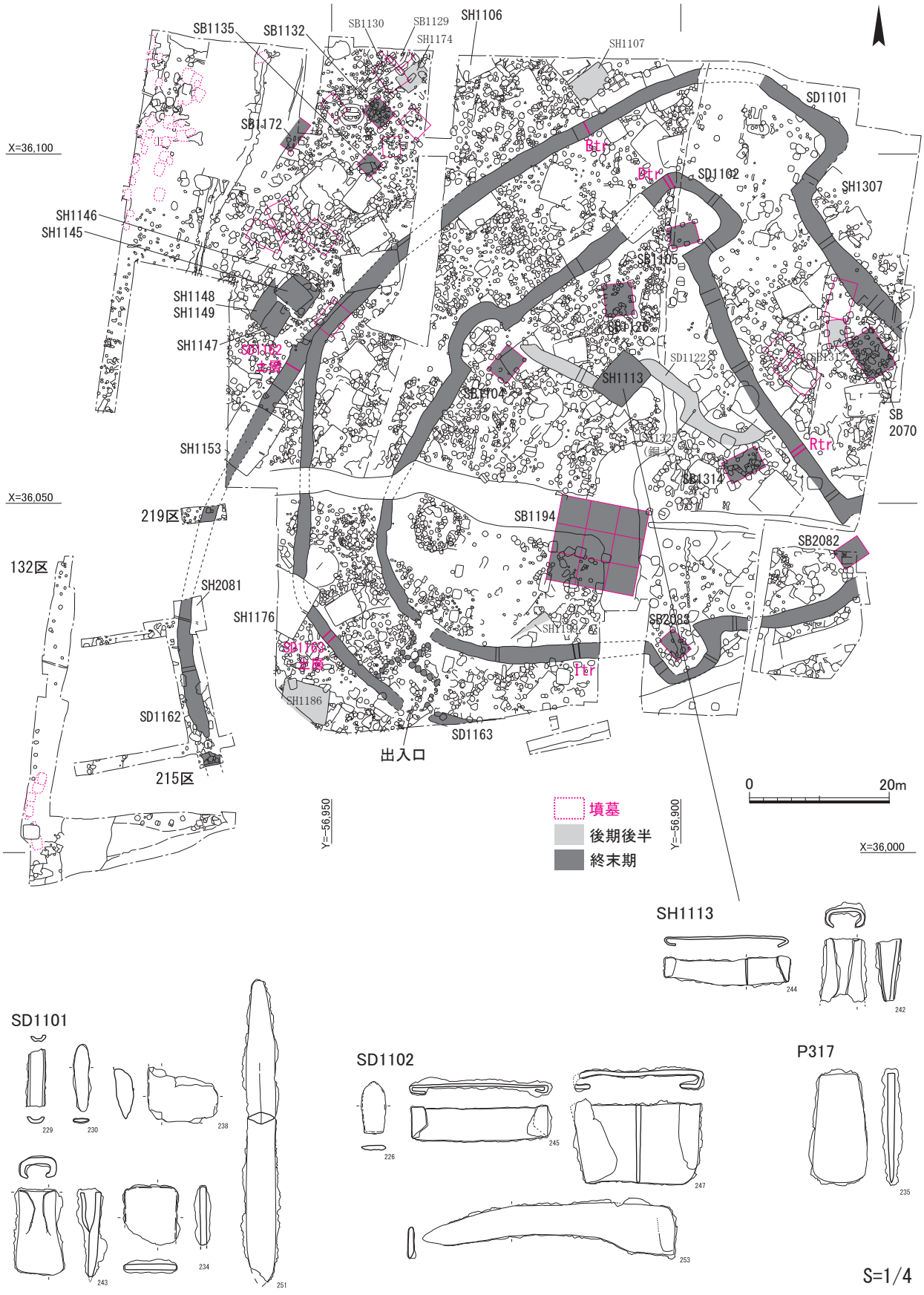


図 222　吉野ヶ里丘陵地区VI区（北内郭）　弥生時代後期後半～終末期の遺構の分布（1/800）・主な出土鉄器（1/4）

３．木製品

吉野ヶ里遺跡は、多数の甕棺墓や墳丘墓、環壕等、丘陵部にある遺跡のイメージが強い。また、さらに現在の公園整備以前の丘陵裾部から低地にかけては農業基盤整備が終了しており、美田が累々と続いていたのであるが、往時においても同様に広大な田園風景が広がっていた感がある。

それまでにも丘陵裾部の調査において臼や鞍等の木製品が出土していたものの、このイメージに後押しされ、水田の検出を目的に、確認調査に着手した。ところが予想に反し、時間をかけ、他機関に調査の教えを請い、様々な調査方法を試しても水田は表れてこなかった。そうした中、調査区の一角に排水溝を掘削した所、巨大な鼠返しや漆塗りの蓋等とともに多量の木製品が出土した。これらにより、調査のベクトルが一気に変わることとなった。その後、田手一本黒木地区Ⅱ区、田一本松地区、田手二本黒木地区Ⅰ区と矢継ぎ早に調査を実施し、丘陵裾部の状況を把握するとともに、往時の生活を鮮やかに投影する農具、工具、容器等、多数の資料を得た。以下では出土木製品全体についてまとめるが、全点を図示していないため、元図については『152 集』、『207 集』を参照されたい。

（１）器種別の特徴について

工具（斧柄）

斧柄と思われる木製品は、９点出土している。このうち縦斧６点、横斧１点、縦横不明２点である。

縦斧は、直柄２本、曲柄３本、雇柄１本が確認できる。直柄のものは、チシャノキ及びアカガシ亜属の芯持ち材を使用し、先端部を肥厚し、幅４cm 程度の装着溝を削り込む。柄は中ほどで装着溝側で大きく湾曲し、柄尻は円錐台形に広がり、湾曲して端面は下方を向く。頭部先端は、柄に直行して平坦に仕上げられる１と、一部を斜めに切り落とした２がある。１は中期の包含層中より出土したもので、方形の抉りの上脇に加工痕が残る。緊縛紐を掛けたために、磨きや手擦れから免れて、痕跡が残ったものか、もしくは紐を掛けやすくするために、わざと痕跡を残したものと考えられる。また、鎌柄であるとの見解もあったが、装着溝内部には保存処理後の確認ながらアタリと思われる三角形の変色箇所を確認し、その痕跡から斧柄と推定した。２についても、表面が劣化しているため、不確実ながら装着溝の上脇にわずかな段差が認められ、右側上脇にはわずかな突出、同下脇にはわずかな窪みが見られ、同様に緊縛痕と考えられる。使用にあたっては、片手で振り下ろしながら木に打ち付けるものと考えられる。２の頭部の切り落としは、振り下ろした際に柄の頭部端が地面を擦らないような工夫と考えられ、柄の湾曲は斧の刃部が木の幹に対して、より垂直に当たるようにしたもので、柄尻の形状は手の平の密着を高めて、手から抜け落ち難く、打撃の衝撃を緩和する構造であると考えられる。周辺での類例として小城市土生遺跡（佐賀県 1977）、生立ヶ里遺跡（牛津町 1995）に同様の製品が認められる。これらには鍔状の意匠も施されており、単なる斧としての役割だけではなく、時には武器や護身具として使用された可能性も推定される。なお、奈良県唐古・鍵遺跡（田原本町 2017）など北部九州以外の地域でも同形態の木製品がみられる（山田編 2004）ことは興味深い。

曲柄は３・５・６がある。いずれも枝分れした一木を利用した曲柄で、袋状鉄斧を装着したと思われるものである。また、柄と斧台の角度については３と５が鋭角、６は鈍角となる。斧台先端部に残る段や断面形状より、いずれも先端部を左にした場合、折り返し部が上になるように装着されたものと推定される。このうち、３・６は小型の袋状鉄斧を装着したものと思われる。斧台部が長く延びて、着装

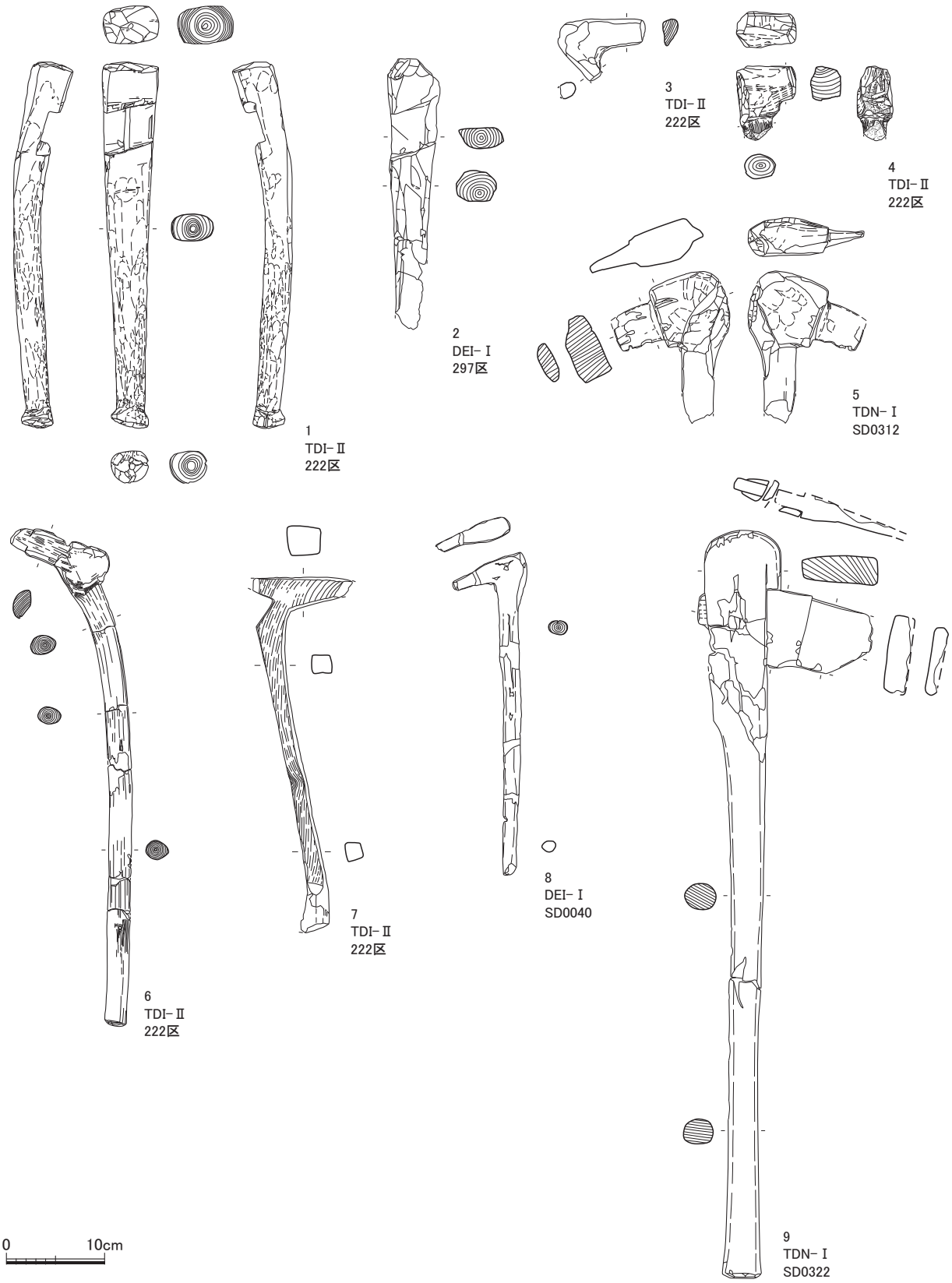


図 224　工具（斧柄）（1/6）

部においては、3 が断面半円形で段を持たず、6 は断面楕円形で段を有する。6 は全長 50.6cm と長く、細部加工には不向きであると思われ、斧台が柄に向かって徐々に厚みを増していることより、中腰で木に打ち込み、伐採した小口の成型や木材を割るための楔として使用した可能性が推定される。一方、

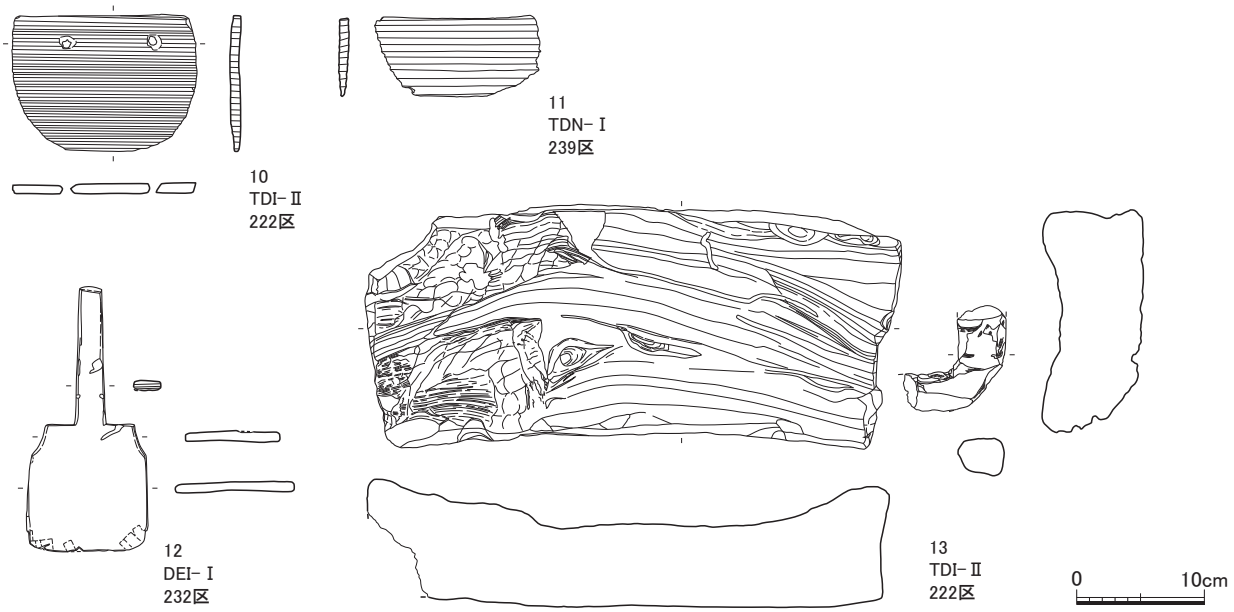


図 225　工具（その他）（1/6）

5 は着装部に明確な段を持った曲柄で、身幅 4cm 以上の中型の袋状鉄斧を装着したものと考えられる。材はアカガシ亜族を使用するが、他の同種のものに比して表面の色調が黒味を帯びる。草木由来の塗料等が塗布されていた可能性がある。

横斧の 7 は柾目の板材から削り出した曲柄であり、断面方形を呈する。斧台上面は水平で、平面形は先端部に向かって徐々にすぼまるバチ型になる。斧台に段などは認められないが、先端は上面の角がわずかに潰れており、小型の袋状鉄斧を装着したものと推定される。また、柄は右手で握った状態で左側に大きく湾曲する。柄尻は一部欠失するものの、両側及び背面に肥厚し、滑り止めを形成する。

縦横不明な 8 は、枝分れした一木を利用した曲柄で、幹を加工した斧台が先端に向かって徐々に細くなり、段を経て断面が正方形になっていく。この装着部形状のうえ、斧台背面に敲打痕と思しき痕跡も見受けられるため、鉄製の鑿や小型の鉄斧を装着して、鑿や楔としての利用が推定される。

工具（ハケ目の原体）

ハケ目の原体と思われる略半円形の柾目板が 2 点出土している。いずれも材は常緑針葉樹で、広葉樹を主体的に使用する出土品の中では異質である。いずれも弧側に向かって厚さを減じる。10 は両側面の一部が摩耗し、木目が浮き出た状態を呈するが、11 は粗く割取ったままのような状態で木目が浮き出る。孔は 10 にのみ認められ、削りによる両側穿孔の 2 孔が穿たれるが、紐ずれと解釈できるほどの痕跡は認められない。また、片面には指ズレともとれる、木目の擦れが一部に認められる。

工具（ヘラ状木製品）

12 は板目材を使用し、平面形は羽子板状を呈する．ヘラ部先端は刃部状に薄く仕上げ、縦方向にわずかに湾曲する。用途不明品であるが、材に重硬なアカガシ亜属を使用し、先端を刃部状に仕上げていることより工具の可能性を推定した。柄の長さは異なるが、ほぼ同様の形状を持つ類似品が小城市土生遺跡で見られる。

工具（作業台）

13 は作業台と思われる。容器の未成品の可能性もあるが、福岡市今宿五郎江遺跡、那珂久平遺跡（福岡市 1987）等に類似する製品の出土が見られため、作業台とした。本体は歪な直方体を成し、上面は中央部が不整形に窪み、底面は平坦である。U 字状の把手が折損して出土しており、本体の小口面にわずかな突起が認められることより、この部分に接合していたもの思われる。上面には木の節なども見受けられ、作業面として使用するには一見不向きに思えるが、上面と、側面の片面には、刃物跡のような鋭利な切痕が多数みられる。切痕の方向は不規則である。点数、形状、切痕より、横槌などとともに農具として使用されるものではないと推定される。

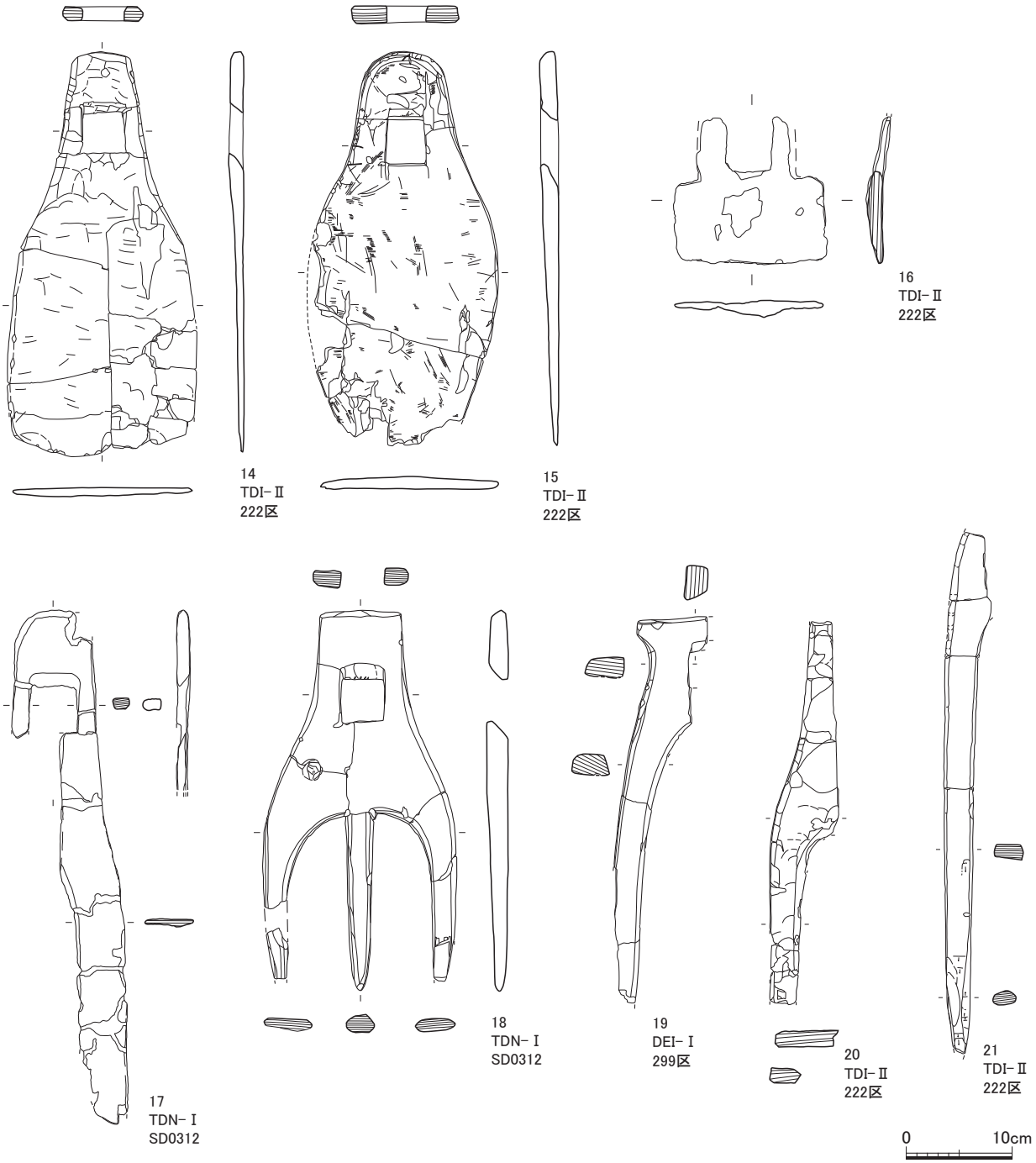


図 226　農具（鍬）（1/6）

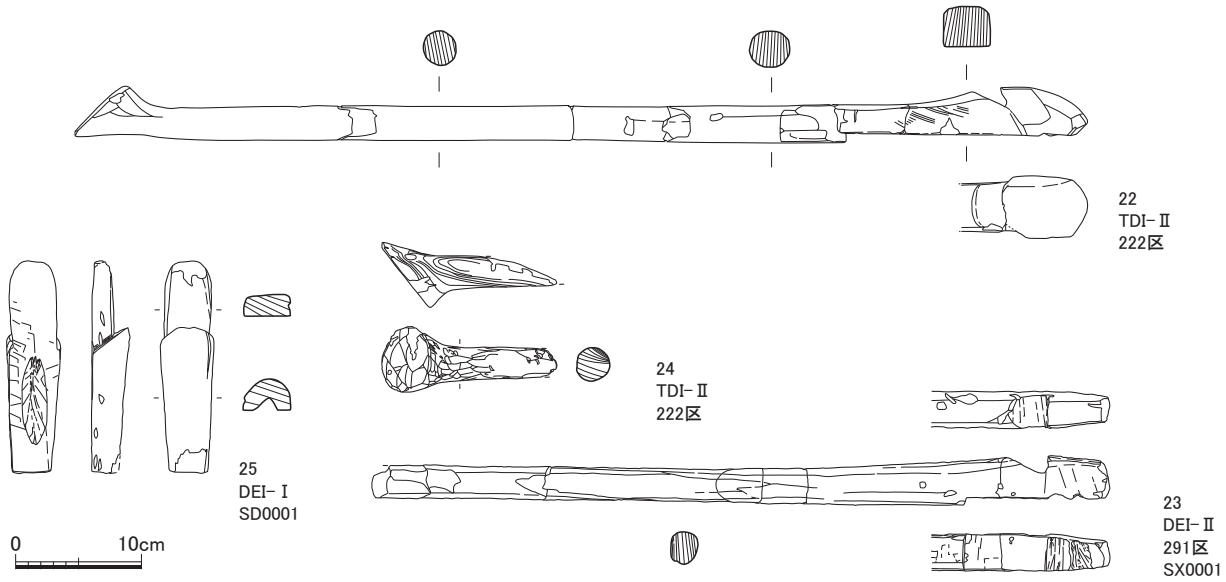


図 227　農具（鍬柄）（1/6）

農具（平鍬・又鍬）

平鍬は 2 点出土している。調査面積や調査位置にもよるが、現在では鍬は起耕具として、農耕具の代表的な道具であるにも関わらず、いささか少ない出土数と言える。又鍬、又鋤の出土数が 10 点であることからすると、この平鍬はいわゆる引き鍬であり、粘性を持ち、固く締まりやすい火山灰土壌で, しっかりと根の張った草が繁茂する耕作地を起耕する場合は、打ち鍬である又鍬の方が使い勝手がよく、農具の主体となっていたのかもしれない。また、2 点のみであるため、形状の特徴を捉えることは難しいが、いずれも撫肩のもので、刃部が丸みを帯びるものと、方形基調で直線的なものが見られる。頭部も刃部に伴って、丸みを持つものと、方形基調のものとがある。形状に若干の違いをあるものの、全長、全幅のみならず着柄孔の位置や法量までもほぼ同様であり、製作において一定の規格があったと考えられる。

なお、現在の鍬において、通常の使用にあたっては刃部左側が先行して摩耗するといわれる。14 は鍬を握った際の鍬身左側が複雑に破損し、15 は左下から右上へ折損していると思われることにより、右効きの人による使用で、刃先を主に使った作業であったことが推定される。このほか、用途不明としたものの中で方形孔を持つ 16（未報告）がある。全長が短く、刃部は確認できなかったが縦方向に緩やかに湾曲しており、泥除け等の可能性が考えられる。

鍬か鋤か判別不明なものもあるが、又鍬の可能性のあるものは 5 点出土している。比較的形状が確認できる 2 点は頭部が細く、撫肩のもので、二又と三又がある。二又の 17 は器壁が非常に薄く、刃部間が狭い。平鍬のような用途に使用されたと考えたが、全長が大きく異なり、明確な使い分けがあった可能性がある。三又の 18 は頭部が水平で撫肩になるもので、法量及び外形ラインは平鍬に酷似する。また、19 も三又鍬と思われるが、一木造りの又鋤を転用したものと思われ、頭部の左右に足掛け用の突出部が残り、頭部上面は水平に成形されているにも関わらず、一部に柄の残存部とみられる痕跡が残る。

他に又鍬と思われる刃部のみの破片が見られる。21 は先端が欠損しているものの、刃部長 44.8cm を測る長大なもので、刃部が直線的に延び、先端部がわずかに湾曲する。20 も類似する形態及び刃部幅を持つため、刃部の長い形態のものである可能性がある。

農具（鍬柄）

直柄が2本と直柄の可能性のある柄尻が1本出土し、組み合わせ具が1点出土している。完形の直柄は、いずれも割り材を使用した組合せ式のもので、TDI-Ⅱ区出土の22はほぼ完形で、鍬身装着部側面に、鍬身を圧着させる段を有する。DEI-Ⅱ区出土の23は側面の段が認められず、柄尻を欠失する。

装着方法は福岡市雀居遺跡、那珂久平遺跡の出土資料から知ることができ、朝鮮半島南部の光州新昌洞遺跡にも類似するものがあり、当該資料も、ほぼ同様の組み合わせ方法を有していたものと思われる。装着部の構造は、22は下面及び両側面を肥厚させ、下面に鋭いV字型の切り込みを入れるとともに、両側面にこの切り込みの1辺と同角度の斜めの段を削り出す。この切り込みと側面の段により、鍬身の圧着、安定させ、装着角度を決定づける。しばしば、鍬先の着柄孔内の傾きをもって、着柄角度とされることが多々あるが、直柄下面の切り込みと、鍬身の着柄孔内の下端の傾きは、直柄との装着角度を決めるものではなく、この柄に刻まれた切り込みと噛み合うためのものである。また、装着部上面においては、段を設けて、平坦に成型する。ここには田一本松地区で出土した25のような形状の組み合わせ具を装着する。組合せ部の上面中央部には返し状の突起が設けられており、この突起により、鍬身が圧着固定され、装着角度も決定付けられる。

このように、直柄では、柄自体の段と切り込みで前方から、組合せ具で後方から挟み込んで、鍬身を固定する構造である。さらに、柄と組み合わせ具の間に楔を打った上に、23の直柄の装着部上面の先端には2条の浅い溝が見られることより、雀居遺跡出土例と同様、柄と直行方向に栓を差し込むことで着柄孔内の隙間をなくし、鍬身の固定をより強固としている。なお、組み合わせ具（25）には栓を装着したと思われる溝は見られず、裏面には薬研状の掘り込みがみられる。栓に代わって、組合せ具がずれたり抜け落ちたりしないよう、柄に突起を設けて組み合うなどの工夫がされていた可能性がある。

鍬身の装着孔にテーパー状になった直柄を差し込むだけで装着可能であるにも関わらず、このような複雑な組み合わせ構造を持つ直柄鍬は中期前半頃、北部九州地域に技術流入することによって成立したとされる。また、新昌洞遺跡出土の鍬柄は、一見同様な組み合わせ方に見えるが、一木作りの柄に楔を打ったものとされる。つまり楔の材質は異なるが、現在の鍬柄の装着方法と同様であり、鍬身を圧着させるためには合理的かつ簡便な方法と考えられる。一方、流入後、工夫による構造改変を受けた柄は、別の材を使用した組み合わせ具を用いることにより、当初と同様の効果を持たせた上、栓を追加することにより、経年劣化によるゆるみを解消したり、容易に別の鍬身に交換できるようにしたと考えられる。

農具（平鋤・又鋤・鋤柄）

欠損部位により平鋤か又鋤か区別がつかない場合が多々あるが、平鋤と推定されるものは3点が確認できる。まず、田手二本黒木地区Ⅰ区で完形品（26）が出土しており、全体の形状を知ることができる。鋤部は細く長く延び、先端は丸くなる。頭部は柄を中心に両側に向かって直線的に下がり、両側面に於いては、上部は面取りするのに対し、下部は面を作らず丸く成型する。鋤自体に現代のスコップのような縦や横方向の湾曲はほぼ見られないものの、鋤部下半で、片面がより平坦で、もう片面はわずかに丸みを帯びる。柄は断面円形で、柄尻はT字形になる。丁寧な加工と磨きを施すが、柄尻の柄と握り部の接合部分に於いて、片側は柄が握り部にV字形に入り込むような意匠であるのに対し、もう一面にはそうした造形が見られない。さらに柄と鋤部が接合する部分において、片側では、柄が徐々に

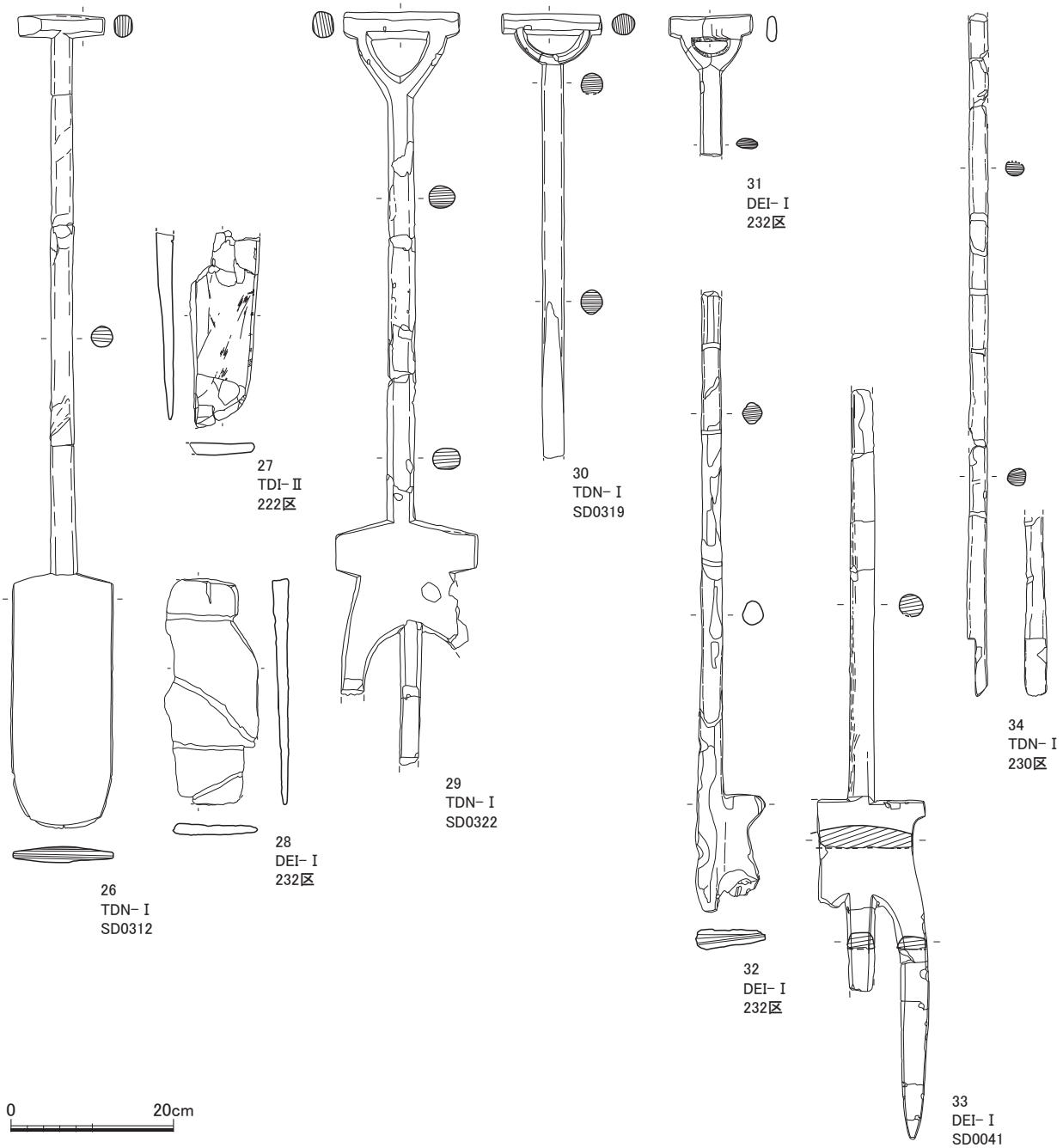


図 228　農具（鋤・鋤柄）（1/8）

扁平になり、ほぼ面を同じくして鋤部に接合するのに対し、もう一面では厚さを急激に減じて、鋤部と接合する。鋤部が平坦で、自然と柄とつながり、握り部にＶ字形の意匠が見受けられる面が表であると推測され、わずかな差異ながら表裏の意識をもって作成されたことがわかる。

また、27 は『207 集』では建築部材とされていたが、26 と同様の形状を成す鋤身と推定できる。柾目材を使用し、中央部がやや厚く、側縁部及び刃部に向かってわずか湾曲するとともに、厚さも薄くなり、縁部は丸く収める。このように形状は類似するものの、先端部では整形とは異なるやや粗い加工痕が認められ、それは内湾側でより顕著である。また、この加工痕を境に上下で色調が異なり、刃部側がより淡い色調を呈する。これらことより鉄製鋤先の装着が想定でき、その加工痕の形状より、内湾側に鉄製鋤先の折り返し部が装着されたものと推定される。

鉄製鋤先が装着されたと推定されるものは他に 27 がある。鋤部のみ残存したもので、上記の 2 点と形状は異なり、短いながらも又鋤に見られるような足掛け用の突出部が付属する。刃部の側面には段が設けられ、先端部の幅が減じられており、鉄製鋤先が装着されていたものと推定される。

又鋤は、しばしば甕棺墓の調査時に墓坑の壁面に刃部の痕跡を確認できることがあり、往時の主要な掘削具であったと思われる。又鋤と確認できるものは 5 点あり、平鋤と同様に柄、鋤部ともに一木造りのものである。鋤部は 3 本の刃部と、両側面から抉りを入れ、左右に張り出す足掛け用の突出部からなる。扁平な柄部は比較的長く、柄尻には Y 字に開いたのち、横一文字の握り部が付属する。それぞれに異なる属性が見られ、刃部においては、両刃状のものと片刃状のものが見られ、足掛け用の突出部を造り出す抉りも、緩やかに湾曲するものと直線的に「く」の字に屈曲するものがある。さらに足掛け用突出部上面の傾きが水平、もしくは傾斜するなど、それぞれ異なる。これらは、両側面の抉りは緩やかに湾曲するものから「く」の字形のものへ、足掛け用の突出部は上面が水平なものから傾斜するものへと、主要な掘削具であったものが鉄器化の伸張に伴い、一部の部位が形骸化してもう一つの要素である「掬う」道具として特化していった可能性などが想定されるが、出土数に限りがあり、詳細については検討できていない。

このほか、柄のみ残存しており、平鋤か又鋤か判別できないものが 5 点出土している。このうち 33 は組み合わせ鋤の柄と思われる。建築部材等との見解もあるが、アカガシ亜属を使用していることより、柄と判断した。装着部が残存し、柄尻部が欠損する。装着部は、径 2cm の柄の一端を 2.6cm まで肥厚し、端部から 6.8cm までを半分に割り欠く。装着部を除く残存長は 77.2cm を測り、一木鋤より長くなるものと考えられる。

農具（横鍬〔杷・朸〕）

不明確なものを含めて 4 点のみの出土であり、着柄孔の形状や刃部形態の違いなど、いずれも異なる属性を有しているため、形状や使用方法の傾向は捉え難い。

朸は 35 の 1 点のみの出土である。形状は、一辺が緩いアーチ形をした長方形板で、円形の着柄孔が設けられる。表面にわずかな段が認められるが、刃部の表現は窺えない。着柄孔の方向より、左上方に向いて柄が装着されたと推定される。また、着柄孔が外側よりテーパーになった柄を装着したものと思われ、主に手前に引いて使用したものと推定される。

杷は、柄孔の形状及び装着方法の異なる 2 点が出土している。36 は方形の着柄孔の周囲に方形の隆起部が残される。鋸歯状に 10 本の刃部が並んでいたと推定されるが、 5 本が欠損する。方形の着柄孔の法量 (長 4.3cm、幅 3.8cm、厚 1.5cm) は、平鍬 (長 5.0cm、幅 3.8cm、厚 1.5cm) と同様であることより、鍬の組合せ式の柄と同種の柄を装着したと考えられる。ただし、孔の傾きは緩く、着柄角度は 90 度程度と推定される。また、刃部の折損面の観察より、押したり引いたりして使用したことが窺えるが、残存する刃部内側に顕著な摩滅が認められ、基本的には手前に引くという動作で使用されたことがわかる。37 は 2 つの着柄孔を持つ。36 が柄孔の周囲に隆起部を作って、折損を回避したのに対し、37 は柄を二又にすることにより力を分散させ、両側に均等に力がかかるようにして両側の折損を防いだものと考えられる。さらに、撓みも軽減されることより、より効率的に作業ができたものと推定される。

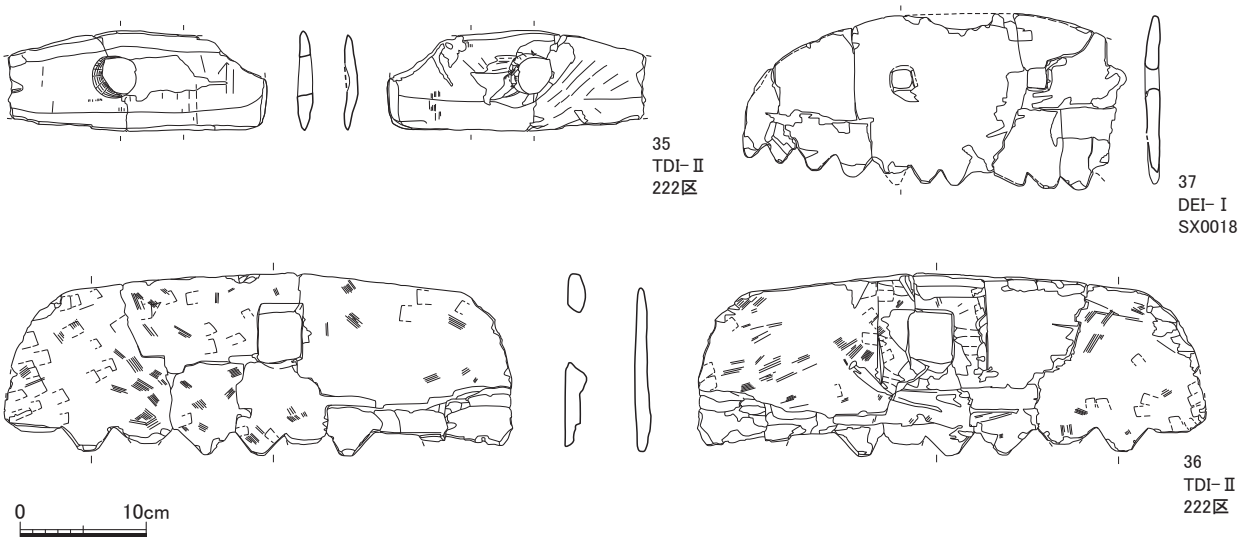


図 229　農具（杁・杷）（1/6）

農具（鉄鎌柄）

鉄鎌の柄の可能性があるものが 1 点が出土している。38 は装着孔を持つもので、柄の先端部は丸く成形され、柄尻には円盤が作り出される。この円盤は、着装孔方向に対して並行ではなく、装着した刃部を水平にして柄を握った際に、小指丘部がしっかりと保持されるように、わずかに歪んで設けられている。着装孔は縦 3.0cm、幅 0.7cm の方形で、角度は約 110 度で鈍角に開く。孔より先端側には円形の意匠が施されるが、柄の側面ラインより前面に突出し、装着孔の柄尻側は背面が突出し、刈り取る際に力が加わる力点をより強固に支持するような意匠であると推定される。なお、鉄鎌の固定に関しては楔のみで、緊縛は行っていないとする見解もあるが、壱岐市原の辻遺跡にて柄に装着したままで出土した鉄鎌は、装着孔が欠損しているにもかかわらず、装着した状態で出土しており（長崎県 1999, 壱岐市 2013）、緊縛されていたことも想定すべきであろう。また、孔背面の側壁が欠損し、破損部が捩じれるように歪んでいることは、この部分に鉄鎌の折り返し部があったものと思われ、刃先を左向きに置いた際、折り返しが裏側に来る乙類の鉄鎌が装着されていたことが推定される。

図 230　農具（鉄鎌柄）（1/6）

なお、頭部両側縁部に粗い加工痕がみられる。全体が丁寧に磨かれた個体にも関わらずこの部分のみに痕跡が残ることは、使用に合わせての改変と考えられ、柄の製作者と使用者が異なることが推定され、木製品製作工人の存在が窺える。

農具（竪臼・竪杵）

竪臼が 2 点出土している。いずれもクスノキの芯持材を使用し、器高及び最大径が 50cm 程度を測る搗き臼である。平面形は 39 は円形、40 は長楕円形を呈する。内部の器壁の傾斜は急で、底面がすぼまり、すり鉢状をなす。外部は胴部がくの字にくびれる鼓形を呈し、側面の四方に幅 6cm 程度の隆起帯が削

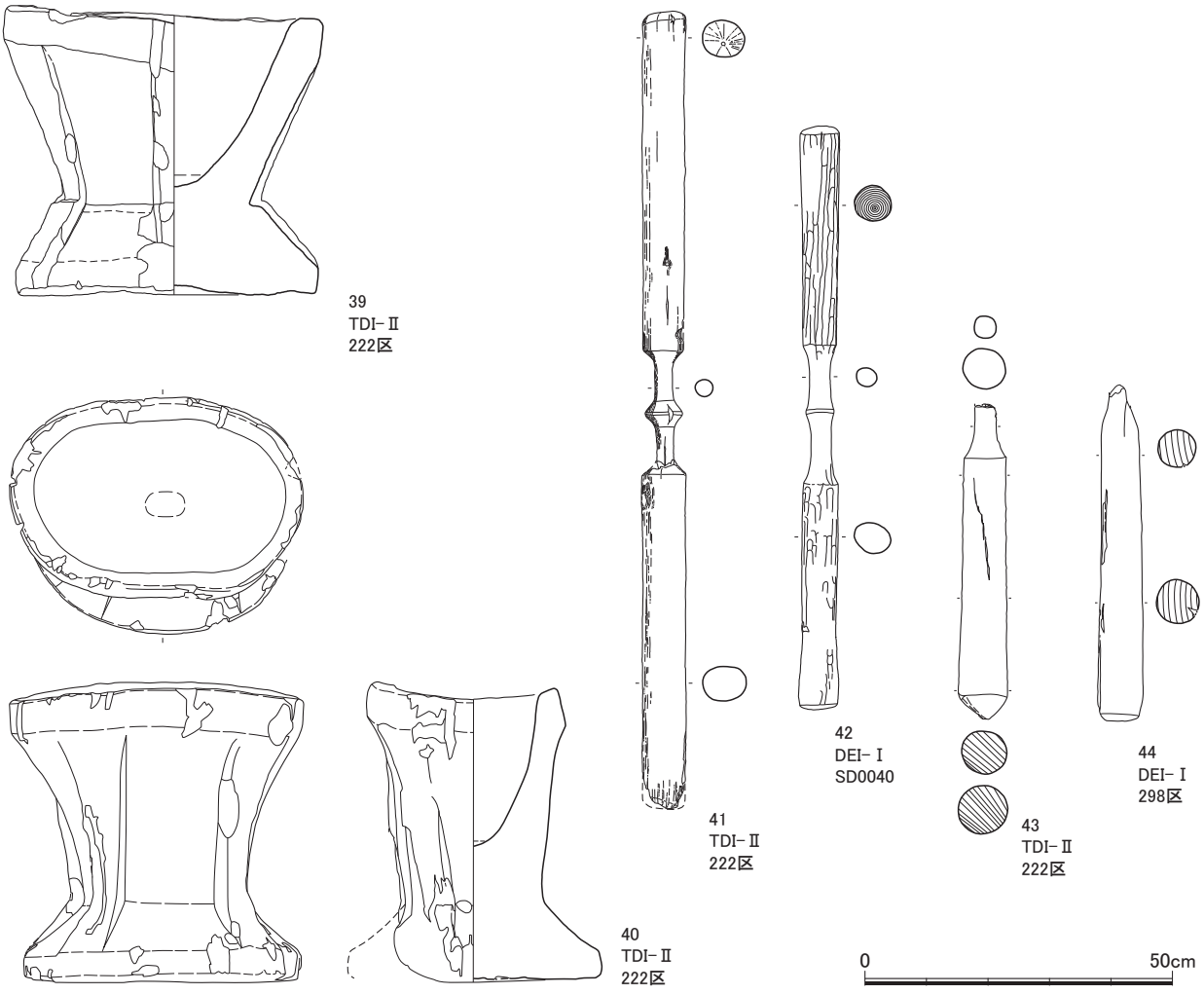


図 231　農具（竪臼・竪杵）（1/12）

り出される。これは、小城市生立ヶ里遺跡出土の臼が四方に透かし柱を設けていることに対して、時期を経て退化、省略したものとみることができる。もちろん透かし同様、装飾、軽量化及び強度保持の意味があったと推定される。装飾性の乏しい農具の中で、このような隆起帯が見られることは、後の民俗例で神聖視され、後に様々な儀礼に使用される臼に込められた特別な意識を垣間見ることができる。

竪杵は殊の外少なく、4 点のみの出土である。いずれも中期に属する可能性が高い。このうち 2 本は完形品である。芯持ち材と割り材を使用したものがあり、完形で出土したものは芯持ち材を使用したものである。完形のものには、握部の中央に双円錐（そろばん玉状）の節帯を持つが、搗き部と明確な段を持つ 41 と、境が不明瞭な 42 がある。後期には節帯が消滅する傾向にあるとされることより、41 が先行するものと考えられる。搗き部両端の形状は平坦で縁部のみ丸みを有する。両側の搗き部長は、ほぼ同様の長さで作成されており、上下対象となる。43,44 は折損して搗き部と握部の一部が残存しているのみであるが、横槌に比して搗き部が長いことより竪杵と判断した。このうち、43 は搗き部先端の形状が蛤状を呈する。かつて、農業従事者より脱穀や籾摺り用とのご教示を得ていたが、先端部の稜線が S 字状を描くことより、左右から摺るように使用されたもので、過度の使用による擦り減った結果の形状であると考えられる。44 は端面がわずかに傾斜する。この程度の傾斜であれば、搗き具合による摩耗と判断される。

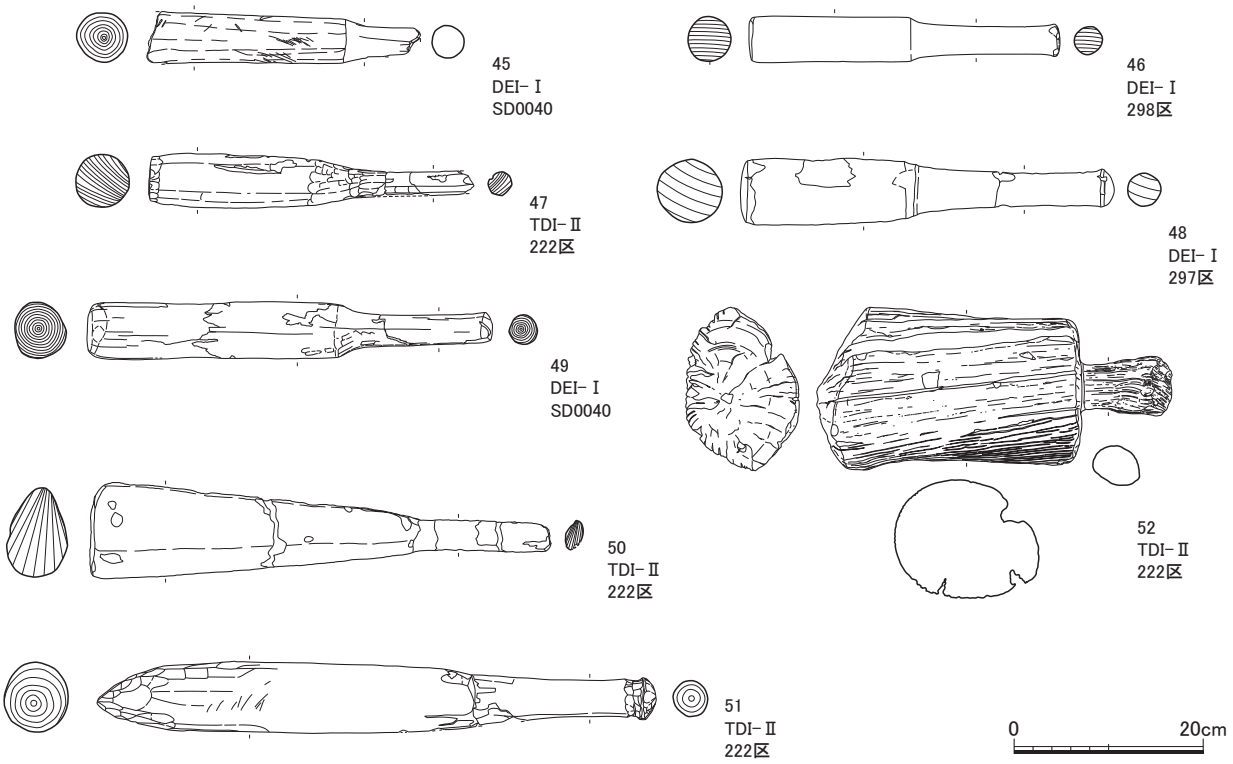


図 232　農具（横杵）（1/8）

農具（横槌）

横槌と思われる木製品は 9 点出土している。木取りは芯持ち材を使用したものと、割り材を使用したものがある。形状は、概ね円柱状の槌部と柄部からなり、槌部と柄部の境は比較的明瞭であるが、段を持つものは少なく、その傾斜は緩やかである。槌部先端には平坦な面を持ち、面の周縁部は丸く収める。柄尻はわずかに肥厚するのみで、斧柄のような円錐台形に成型したものは見られない。敲打するための道具にしてはかなり丁寧な表面加工を施すものがみられる。法量については、柄部と槌部径の比率は 1:2 程度である。また、長さの比は 1:1、1:2 のものが多く、法量に一定の規則性が認められるようである。なお、当然のことながら、使用樹種はツバキ属、アカガシ亜属、イスノキ等の重硬な材を選択する。9 点の内、3 点が中期後半から後期、6 点が中期のものであるが、時間的経過による形態の変化はあまり認められない。槌部先端の形状観察より小型の竪杵として使用された可能性は少ない。

また、使用用途に当たっては、基本的には藁や豆を打つ農具と考えられるが、それ以外の用途が推定さるものがある。52 は柄部と槌部の境が明瞭なもので、槌部径が 17.2cm とひときわ太く、先端部の加工は粗く、伐採時の形状を色濃く残す。柄部は径が楕円で、柄尻を肥厚させて丸く成型する。使用される材が、唯一、クスノキを使用しており、柱材のホゾ部分を切り落としたもの、もしくはそれを横槌として転用したものである可能性が考えられる。48 は工具として使用された可能性がある。槌部側面に明確な敲打痕が残るもので、掛矢として使用されたことがわかる。槌部長が柄部より短く、当初より掛矢用とされた可能性も考えられる。51 は竪杵の転用が想定される大型品で、先端を尖らせ、柄尻は周囲から溝を彫り、半円形の意匠が施される。棍棒など、横槌とは異なる使用方法も推定される。

なお、横槌の出土数をみると、他の農具に比して若干多い傾向にある。藁や豆打ち具として想定しても、その使用頻度は年間を通して頻繁にあるわけではなく、一時期に限られる。損耗が著しいわけで

もないので、他に比して少なくてもよいように思う。さらに、横槌のもう一つの機能とされる掛矢や木槌のような使用用途においても、大半の個体で打撃痕は認められず、工具としての使用もそれほど多くないと思われる。従って、使用頻度が多く、使用痕が残りにくい用途、つまり柔らかいものに対して使用した可能性が考えられる。また、比較的全長が短くて槌部と柄部の段差が小さく、藁や豆を打った際に、段差が少ないと握った手を地面や作業台で打ったり、対象物にあたって怪我をする危険性も考えられる。それでも、あえてこのような形態をしていることは、この形態に利点があるものと考えられる。これより通常用途と異なる用途を想定してみたい。

甕棺の外面には波状の痕跡が認められることがあり、棒状のタタキ痕であることが知られている。これらの痕跡は横方向に連続して見られ、棒状と言われるのみで、その工具の形態は明らかにされてきていない。そこで今回、接合して復元したままで保管してある数基について内外面の器壁を観察した。痕跡は横方向に連続するが、所々でわずかなズレや、途絶えが見られ、単位のわかる痕跡で長さ 17cm 程度であった。状況の良好なものでは、底部から口縁下まで外面全面にわたって認められた（図 233）。内面は径 2 ～ 3cm 程度の不整円形の痕跡が無数に認められる。横方向に連続しているようにもみられるが、重なりが著しく判然としない。

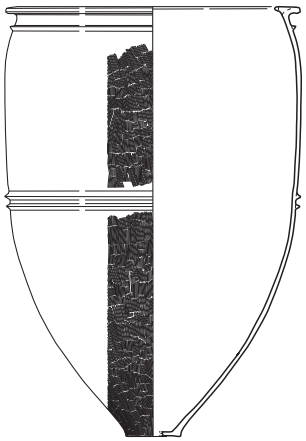
この棒状タタキの工具として横槌を想定できないであろうか。器壁に残る痕跡の幅は、タタキ具合で異なるため、検討には値しないが、長さは槌部長よりやや短い程度で、ほぼ合致する。横槌先端面の周縁部を丸めた形状も、甕棺器壁に段を付けないための形状と推定され、横槌が叩き具として使用された可能性が考えられる。また、甕棺を製作する際には粘土帯を積み上げることによって形を形成していくが、この粘土を帯状にする際にも、横槌は現在の麺棒のような使用方法にて有効に利用できると思われる。なお、甕棺内側の痕跡は、その形状より手の指球痕と想定され、当て具は無く、手で代用していたものと思われる。精神性については推し量る術もないが、横槌では他の器種では使用が認められないツバキが使用されている。ツバキは重硬かつ緻密で、切削加工は困難であるが、強靭で耐久性は高い材とされ、横槌には最適な材である一方、『豊後国風土記』や『日本書紀』などの記載や各地に残るとされるツバキの槌にまつわる伝承など、古くからツバキにまつわる霊力が信じられていた。こうしたことより、吉野ヶ里遺跡では北墳丘墓や主祭殿の存在など祖霊祭祀が認められることと相まって、死者を埋葬するための甕棺の作成においても何らの霊力を期待してツバキの横槌を使用したことも考えられる。

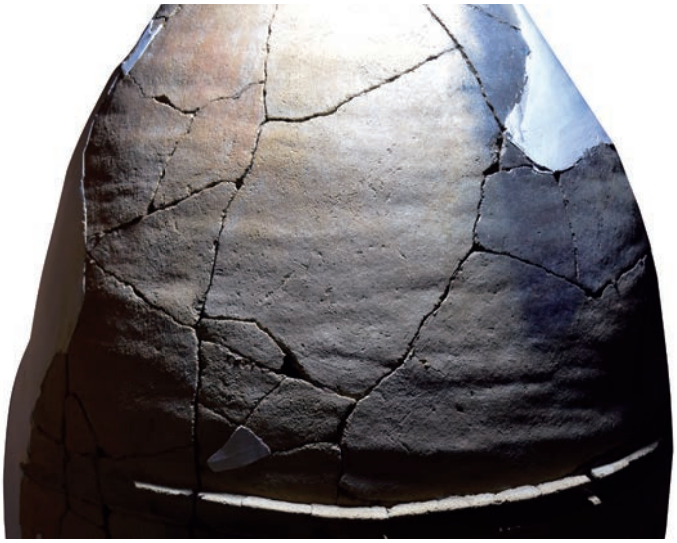
運搬具（天秤棒・背負子・田舟）

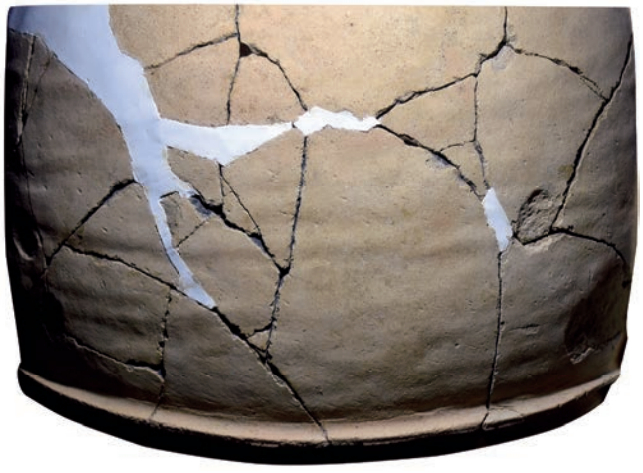
天秤棒と思われるものが 3 点出土している。他に弓や建築部材としての可能性が考えられるが、現在でも天秤棒として使用されるヤマビワや出土した背負子と同じ材であるサカキを使用している点で、天秤棒の可能性を推定した。いずれも、端部に周囲から浅く抉った溝を彫り、荷掛け部を作り出す。なお、52 は一端を杭状に尖らせたもので、長さも 89.4cm とやや短い。両端に荷を吊るす天秤棒ではなく、近世の飛脚が使用した運搬棒のように、片側にのみに荷を掛けた使用方法も想定できるかと思う。また、下位に節を有した材を使用している点において、厳選した材ではなく、一時的な使用に供するものであった可能性も考えられる。

背負子は未成品を含めて 4 点 3 組が出土している。いずれも有爪型背負子と推定され、枝分かれした一本木を利用したものと、角材を台形に組んで梯子形にしたものがある。前者は 3 点 2 組で、いず

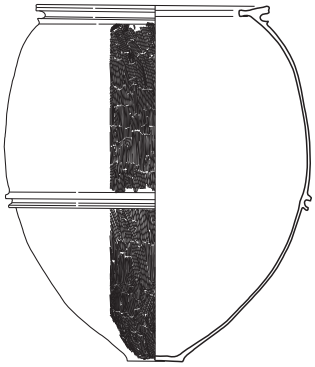
YGK-Ⅴ210区
SJ2072下甕



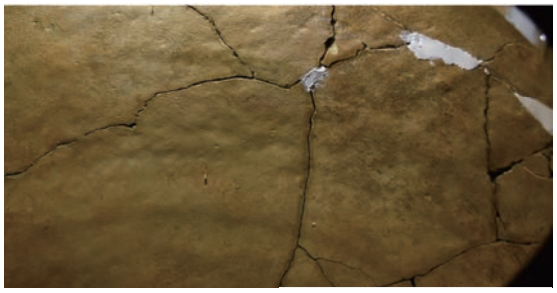




YGK-Ⅸ
SJ2775（石蓋単棺）



0　50cm



内面（胴部上位）

図 233　甕棺の棒状タタキ痕（甕棺 1/20）

れもサカキの材を使用したものである。後者は 1 点のみで、コナラ節を使用し、糸島市上鑵子遺跡（前原町 1996）や福岡市今宿五郎江遺跡（福岡市 2010）で類似した形状のものがみられる。前者の 56・57 は田手一本黒木地区Ⅱ区 222 調査区 5 グリッド A トレンチより出土した一本木を利用した背負子で、1 組と思われる 2 点が並んで出土した。材は幹から枝が分かれた部分を使用し、幹を枠木、枝を爪木としたものと思われる。ほぼ完形であるが、横桟を結合するためのホゾ穴等は開けられておらず、未製品と思われる。また、2 点が並んで出土したことより土坑等に貯木されていた可能性もあるが、残念ながら遺構の確認はできていない。爪木と枠木は鋭角になり、爪木長は 70cm を超える。それに対して枠木は 27 ～ 35.5cm と短く、且つ爪木より上部は 5 ～ 6cm で、先端は三角に成形し、僅かに突出するのみである。58 はその製品で、爪木と枠木の分岐部分のみ残存し、枠木にホゾ穴を 2 つ設ける。他の類例同様、下の孔は貫通し、上の孔は未貫通である。下の孔には横桟を結合し、背負縄を装着したと推定される。また、使用材のサカキは、周辺の遺跡出土のものについても、概ねサカキのようである。天秤棒でもサカキはよく使用さるようで、運搬具に選択的に使用されていることは、サカキが比較的重硬な部類の材で強靭であり、用途に適していたためと考えられる。一方、59 は組み合わせて作られる背負子である。短冊状の柾目板で、側面に略半円形の刳り込みを施す。梯子状に組んだ右側の枠木と推定され、上部が欠損したものである。平面下端部の 1 ヶ所に貫通する長さ 5cm の方形孔が設けられる。爪木を装着する孔と考えられる。また、刳り込みと反対の側面には横桟を結合する 2 ヶ所のホゾ穴と溝が彫り込まれ、ホゾ穴の長さは下位より 4.3、3.0cm を測る。ホゾ穴と溝はいずれも貫通していない。下位のホゾ穴は平面から開けられた孔に対して斜下に位置する。側面のホゾ孔間の平面には、浅い窪みが認められる。背中に当たる部分であり、背当てを取り付ける箇所であろうか。一方、側面の溝は、さらに上方に続いていたと考えられ、頭部の後方に付く板を装着したものと考えられる。なお、接合はしないものの目釘を通した方形の小破片がともに出土しており、最上位の横桟を結合した部分と思われる。これらの構造は、近年まで使用されていた民具の木製背負子とほぼ同様のものと考えられ、枝分かれをした一本木を利用した背負子と組み合わせ背負子の構造の違いは、時期差によるものの可能性があり、前者が先行する可能性がある。

刳物の田船と思われる製品が 1 点のみ出土する。60 は長辺 80.4cm、短辺 37.2cm と、極めて大型の製品である。器形や木取りは槽と同様であるが、短辺側の内壁は、底面と側面が明瞭な境を有しない舟形を呈し、長辺側の側壁は外側に緩やかに開く点において、槽とは異なる。短辺側の縁部片側に長方形孔が 2 か所にあけられ、もう片方には両側面から方形の抉りが設けられる。なお、この孔や抉りに緊縛痕は認められない。また、底部外面は方形の平底になるが、底面に擦れなどの使用の痕跡は窺えない。

漁労具（網枠）

網枠が 2 点出土する。61 はブドウ科、62 はヒノキ科の材を使用する。一本の木を弧状に曲げて、両端を交差し、片側にホゾを削り出し、もう一端にホゾ穴を設け、差し込む。61 ではさらに木製の目釘で固定する。平面形は雫形を呈する。ホゾ穴内に、接着剤などの痕跡は窺えない。材の断面は主に雫形で、交差部前面は楕円形、交差部は方形となる。網を装着する孔の間隔は一定せず、内縁に沿って 2 ～ 3cm 程度の間隔で開けられる。孔の縁は内側に向かって年輪がよじれ、内側向かって強い力が加わったことがわかる。柄等を装着した痕跡は窺えず、交差部周辺には孔が見られないことより、この部分を

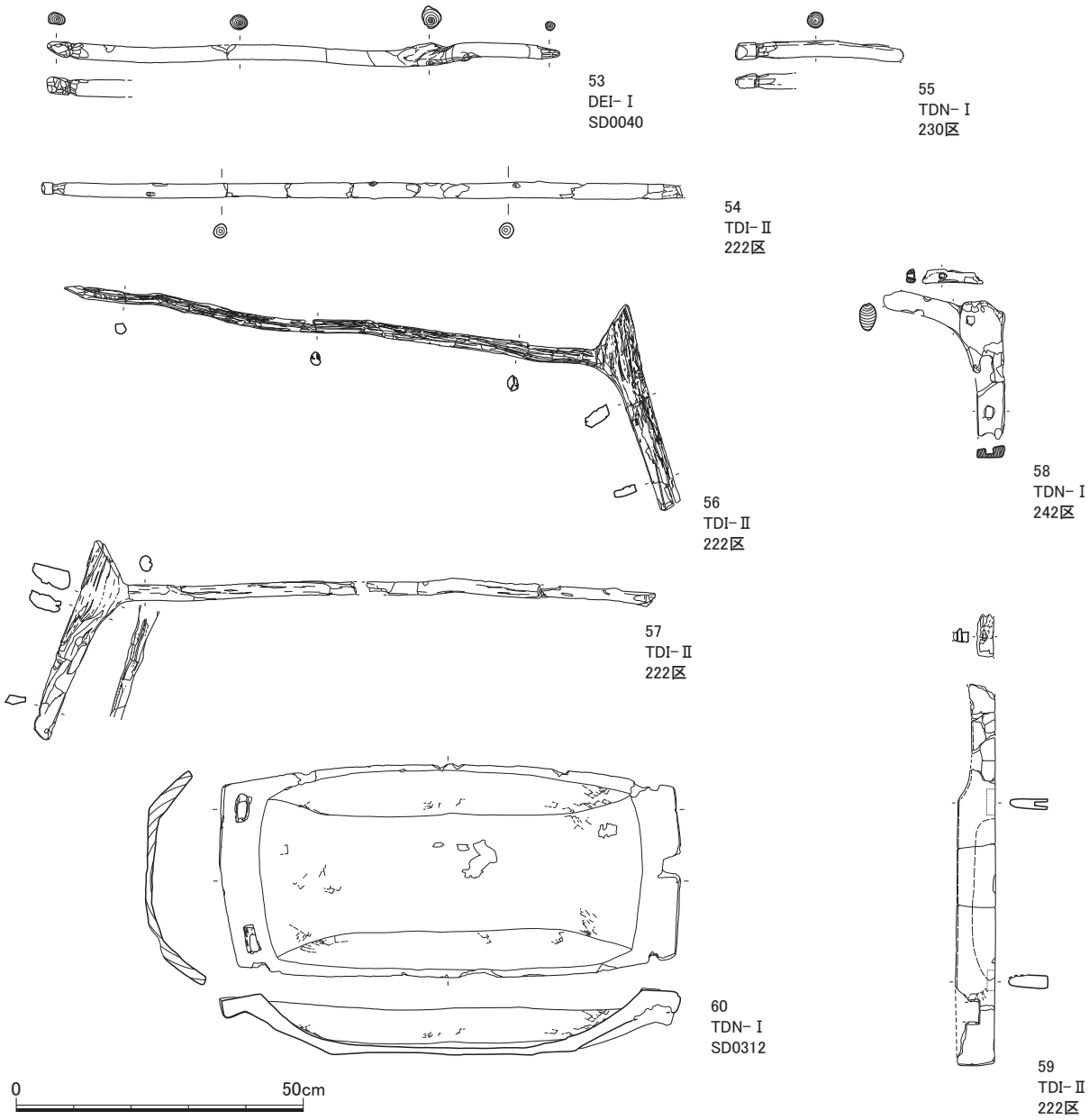


図 234　運搬具（天秤棒・背負子・田舟）（1/12）

握って使用したものと推定される。なお、特筆すべきは、62 においては内側が黒変し、熱処理をして曲げたことが窺える。ホゾ穴内も焦げていることより、あらかじめ穴をあけた後、熱処理して曲げ、組み合わせたものと推定される。また､その手順においては､網枠の先端部から端部に向かって曲げていったようで、端部ほど黒変具合が強い。

武器形木製品（剣形・戈形・木鏃）

剣形木製品が 4 点出土している。いずれも比較的近接した遺構から出土しており、内 3 本は樹種が異なるものの、形状及び法量が類似する。

63 ～ 65 は形状が類似するもので、全長 57 ～ 58cm で、幅 3.6 ～ 4.cm である。整形具合も類似し、加工は粗く、柄尻についても切り離したまままである。いずれも全長の 3 分の 2 程度を剣身とする。63 は中央に鎬を造り出し、下半部で左右に肥厚し、銅矛の関を想起させる形状を呈する。64・65 は両

側面を両刃の形状に加工するが、稜線は歪に蛇行し、65 においては剣身自体が蛇行する。64・65 は折損し、63・64 は切っ先が欠損しているが、刃部を打ち合わせて生じるような欠損は見られない。さらに、この 3 点には、いずれも植物由来と考えられる黒色塗料が、63・65 は剣身部分のみ、64 は全体に塗布される。鉄剣を模して塗布したものと考えられる。なお、往時に、人々が鉄剣をどの程度、詳細に実見できたかは不明であるが、周辺の神埼市志波屋六本松乙遺跡では中期後半（須玖式）の甕棺墓に長剣が副葬されており、この地域は中期から後期を通じて、長剣、素環頭太刀が副葬される地域であり、他地域に比して鉄剣を身近に知りうる地域であったといえる。また、使用用途については、イスノキ、ツバキ、シャンシャンボなど硬い木が使用されていることにおいて単なる模倣ではなく、実際に使用することを目的に選択されたものと思われるが、これらの硬い木は打ち合うと割れやすく、切っ先が欠損していることより、刺突具としての使用が推定される。従って、黒色塗料を塗布していることと合わせると、鉄剣に見せかける必要があり、時には実際に刺突を行うものであったといえる。66 はカキノキを使用した小型の剣形木製品で、全長が 14.2cm しかない。先端が折損しているが、柄まで一木で作成されたものである。鍔の表現はないが、ハバキのような表現が見られ、63 などに比して、加工が緻密で、精細である。なお、出土した剣形木製品には刀剣に特徴的な鍔が表現されていないことより、往時の鉄剣、鉄刀においても、鍔が装着されないものが一般的であった可能性がある。

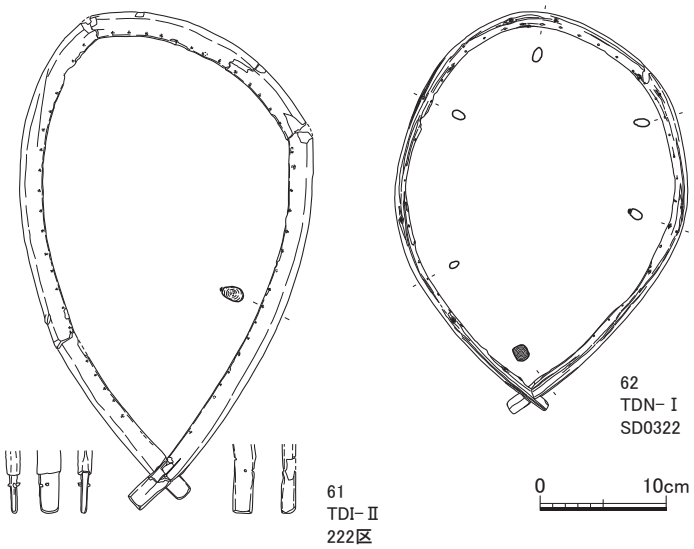


図 235　漁労具（網枠）（1/8）

戈形木製品（67）はサカキを使用する。形状は、同材の枝分れした一木を使用した背負子に類似するが、戈部分の厚みが極めて薄く、組み合わせ用のホゾ穴も見られないため戈形木製品とした。サカキの材質は強靭硬固とされ、枝別れした木材を使用する場合は、都合がよいのであろうか。また、サカキを使用した類例が神埼市詫田西分遺跡（千代田町 1983）で出土している。いずれも中期の所産で、形態を真似た模造品とみられるが、弥生時代の日本列島で見られる戈は柄の片側に装着するものであったはずで、こういった形態の戈をどこで知り得たのか疑問が残る。

木鏃は 11 点出土しており、形態は 2 つの円錐を底面同士で貼り合わせた双円錐形を呈する。その一端が長く延び、茎となるようであるが、境は不明瞭である。材はいずれも国産材中で最も重い木材の一つとされるイスノキを使用しており、気乾比重の高い材を選択的に使用していると考えられる。出土したものは、いずれも先端が潰れたり、ひびが入ったり、一部が欠損したりと、破損品ばかりであり、実際に使用されたと考えられ、一度射た矢を回収したものと思われる。

また、完形に近い形状と推定される先端部のみ潰れた木鏃には、明確な加工痕は残存しておらず、最終的には全体を研磨したものと思われる。しかし、一部には研磨した面の上に加工痕が見られるものがあり、再利用にあたって、手直し再加工を施した痕跡と推定される。先端の潰れたものを再利用するた

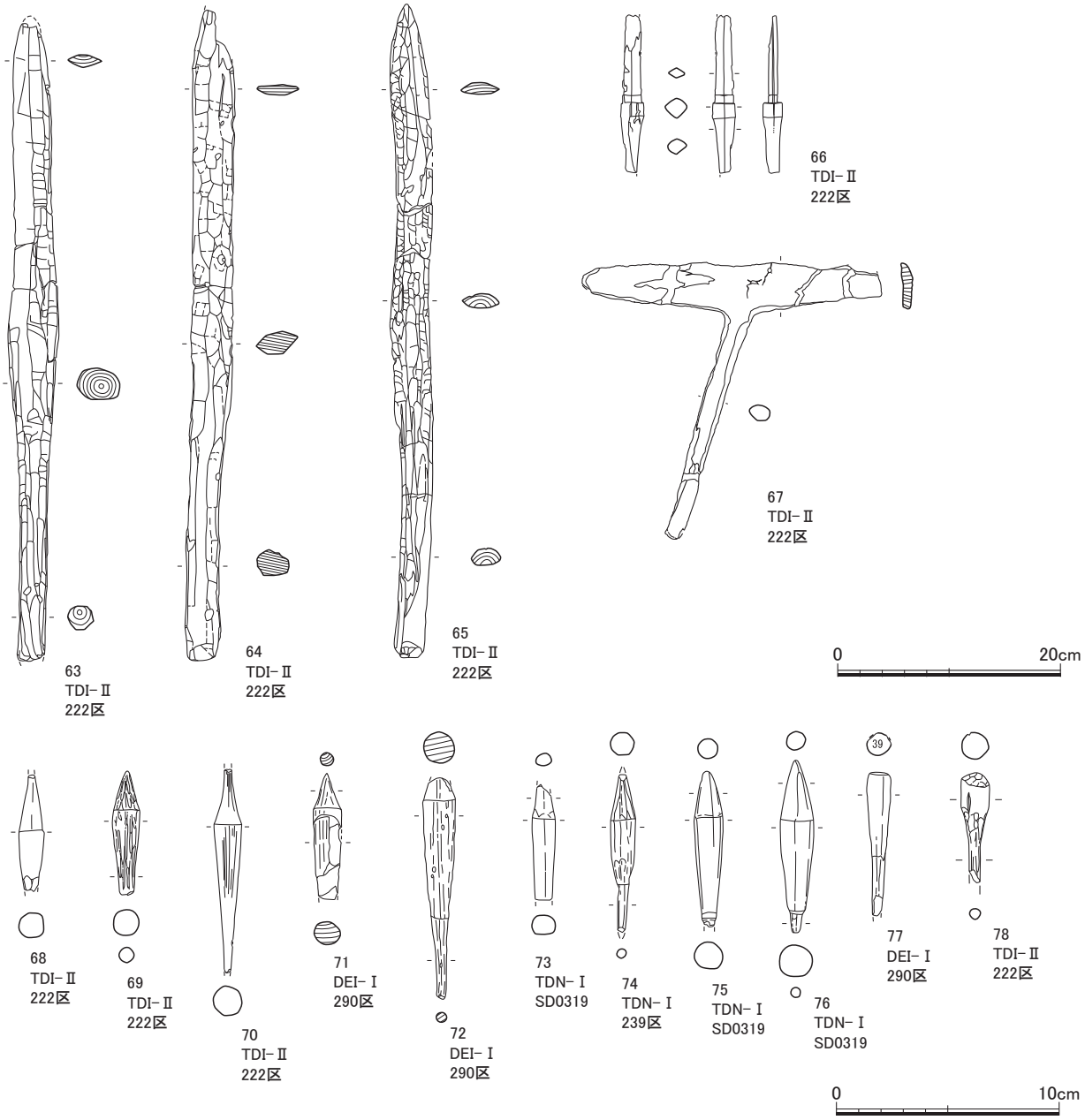


図 236　武器形木製品（剣形・戈形 1/6, 木鏃 1/3）

め、双円錐形中央の段より先端側を削り、先端を再生する。通常は 1 度のみの手直しで、使用不可となることが多かったようであるが、69 では先端側の円錐底面脇に段をもち、さらに段よりわずかに先端側に、新たな加工痕跡が見られ、2 度目の加工を行っていると考えられる。このように基本的に回収可能な矢は回収され、再生可能なものは再加工を施して、再度利用するものと考えられる。また、先端が潰れたものが多く、矢を射る対象物はいずれも硬いものであったことが考えられる。

いずれの木鏃も同形であり、返しが見られない。また、最も重い木の一つを選択しているとはいえ、殺傷能力は低かったと思われ、毒を塗るなどの措置が取られたことも検討、分析する必要がある。

服飾具（履物）

履物が 4 点出土しており、樹種は田手一本黒木地区Ⅱ区出土の 2 点（79・80）はスダジイ、田一本

松地区出土の 2 点（81・82）はクスノキである。平面形は足の形状に合わせた不整隅丸長方形で、側面は 2.4 ～ 2.9cm 程度の立ち上がりを作り出す。79・80 では中央踵寄りの左右に半円形の突出部が付属し、両側面には紐を通したと思われる孔が穿たれる。81 においても、半円形の突出部は認められないが孔の一部が残存する。現代のサンダルのように足の甲側に紐を掛けたものであったと考えられる。

底面は、他遺跡の出土品に見られるような突起等は認められず、平坦である。82 では底面先端にわずかに摩耗が認められるが、それ以外については歩行による使用痕は窺えない。紐をかけた孔内においても同様である。現代の靴のように頻繁に使用するものとは考えられない。ただし、4 点とも中央部で折損しており、使用頻度は少ないものの、歩行による折損と考えられる。また、79 はやや小さく、女性もしくは小児が使用したものと考えられ、使用者が特定の性別や年齢に限ったものではないことがわかる。木製履物については農具の一種や祭祀の装束等の役割が想定されているが、本資料の属性から使用用途を推定することは困難である。なお、福岡市埋蔵文化財センターの HP では、一つの可能性として、「日本はきもの博物館（現松永はきもの資料館）」の収蔵品にある、長野県や愛知県の民俗資料に類似することより、刈り取った芦の切り株から足を保護するための履物であったと想定している。

調理加工具（杓子）

杓子は 12 点出土しており、そのうち杓部に水平に柄が付く横杓子 5 点と杓部に対し垂直もしくは角度をもって柄が付く縦杓子 7 点が出土している。杓子類は、形態が一定せず、様々な装飾が施され、独創的な形態のものが多々見られるほか、スプーン状を呈するものの中には別の用途の可能性も考えられるものも散見される。

83･84･85 は同様の形態を成す縦杓子である。掬い部は長楕円形もしくは丸みを帯びた六角形を呈し、柄尻が尖る長い柄を持つ。掬い部はわずかに湾曲するか平坦で、背面は丸みを持つ。一部には草本由来と思われる薄い黒色塗料が塗られるが、外面の先端及び左側縁部が剥離する。その形態や痕跡より掬う

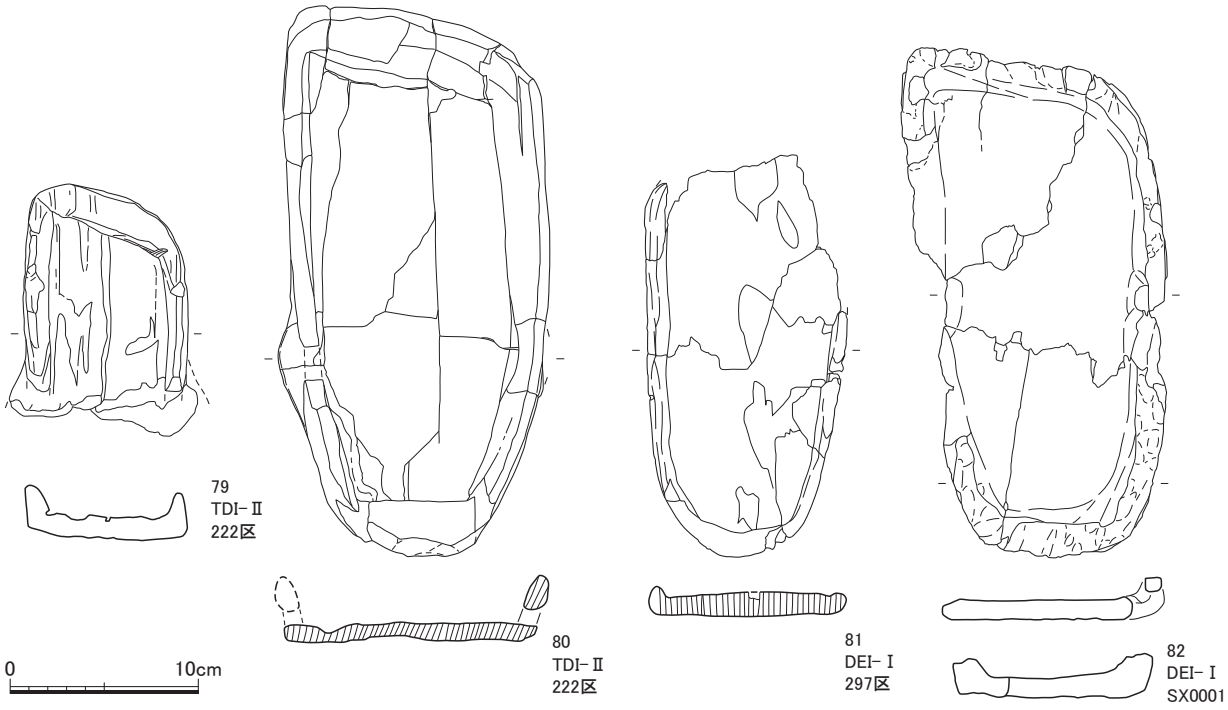


図 237　服飾具（履物）（1/4）

というより、かき混ぜることが主たる用途と思われる。柄は、中位から柄尻付近の断面が歪な楕円で、掬い部に対して、斜めに傾く。握り易さを考慮した傾きと考えられる。長さについては、かき混ぜる上で土器の底部まで届く規格にされたものと思われる。さらに柄の先端が尖っていることについて、意匠である上に、地面に刺して保管した可能性も考えられる。材質は、サカキ、シャンシャンボ、シキミ等、杓子の利用材の中でも硬いものを使用する。85 は掬い部の上位で段を持ち、横断面が半円形を呈する。未成品もしくは別の部材と組み合うものと推定される。87・88・89 は柄と掬い部の一部のみしか残存していないが、半球形の掬い部に湾曲した柄が付く竪杓子と思われる。いずれも一木造りであり、柄についても材を曲げるのではなく、曲げたように削り出す。これにより木目が浮き出てくるようになり、

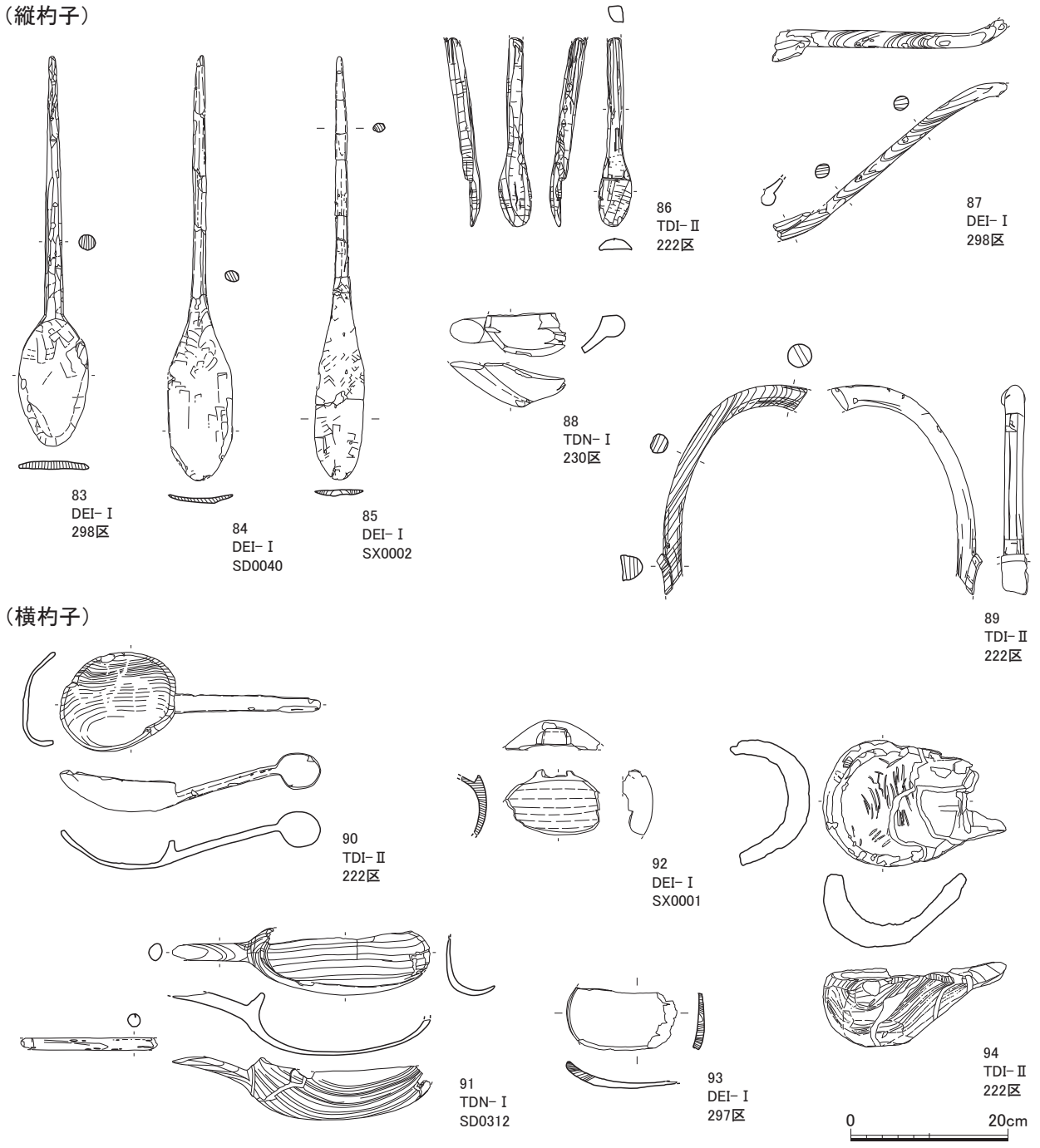


図 238　調理加工具（杓子）（1/8）

装飾効果が向上する。89 はさらに断面楕円形の柄の前面を、浅い長方形の溝状に彫りくぼめることにより、さらなる装飾効果を生み出している。なお、この柄の装飾や掬い部との接合部には、細い刃物の痕跡が見られ、計画的に割り付けした上で製作されたことが分かる。

縦杓子では類似する形態に異なる装飾が施されるのに対して、横杓子には凝った意匠を持つものが多い。90 は浅くいびつな楕円形を呈する掬い部に、断面扁平な楕円形の柄が接続し、柄尻には垂直方向に、円盤を作り出す。掬い部は、右前方が斜めにゆるく傾斜し、右手に所持して通常の液体を掬う動作を想定した場合、右側から漏れることとなり、不都合である。したがって左手で使用するか、右手首を返して前方に押し出すような使用動作が考えられる。これにおいては、円盤状の柄尻も邪魔をしない。種蒔きなど、前方に振りまく際に使用したものと推定したい。91 は平面形が長楕円形で、深さのある掬い部と、断面丸みを帯びた菱形の柄を持つ。掬い部の一部と柄尻は欠損する。掬い部底面中央付近は器壁厚約 2mm と、他の杓子に比してかなり薄く作成される。また、柄の取り付け部は雫形の取り付け金具状の表現がなされる。さらに、掬い部外面は微細な削り痕が並んで格子状を成し、内面の一部にも同様の加工痕が残り、掬い網を模して作成されたようである（図 239）。92 は組み合わせの横杓子であろうか。掬い部口縁外面にソケット状の部位が付く。器壁は丁寧に磨かれており、漆器の素地の可能性も考えられる。94 は柄に透かしを持った横杓子の未製品であろうか。現在出土している木製品では、未製品が少ない。掬い部の内部には幅 2.5cm の鑿状工具痕が多数残る。破損面も黒化しているため、製作途中に破損し、火中に投棄されたと考えられる。

図 239　加工痕のある杓子（図 238-91）

容器

容器は 14 点が出土しており、種類は蓋、槽、箱、盤、皿がある。樹種はクリのように水に強く、クワのように熱伝導率の低い材を選択する。

95・96 は筒形容器の蓋である。断面は低い台形を成す円盤で、上面には黒漆が塗布され、赤漆で中央に点及び二重の円文が描かれる。裏面には段を持って、薄い円盤が削り出される。95 は裏側に容器に被さる立ち上がりの一部が残り、黒漆の上に赤漆で横方向に 8 本並んだ細線が描かれていた。類例が神埼市利田柳遺跡、唐津市千々賀遺跡、糸島市本田孝田遺跡、福岡市雀居遺跡などで出土している。なお、福岡市今宿五郎江遺跡では筒形容器の全形が確認できる遺物が出土している（福岡市 2010）。

槽、箱は割り材の縦木取りで、底面を材の表皮側として使用し、底部厚が薄く、長軸側壁に比して短軸側壁は厚い。これは短軸側面が木口となるため、水漏れや割れを防ぐための処置と思われる。いずれも加工は粗く、103・104 は短辺の側壁外面に把手を造り出す。材は、クリやシイなどのやや加工は難

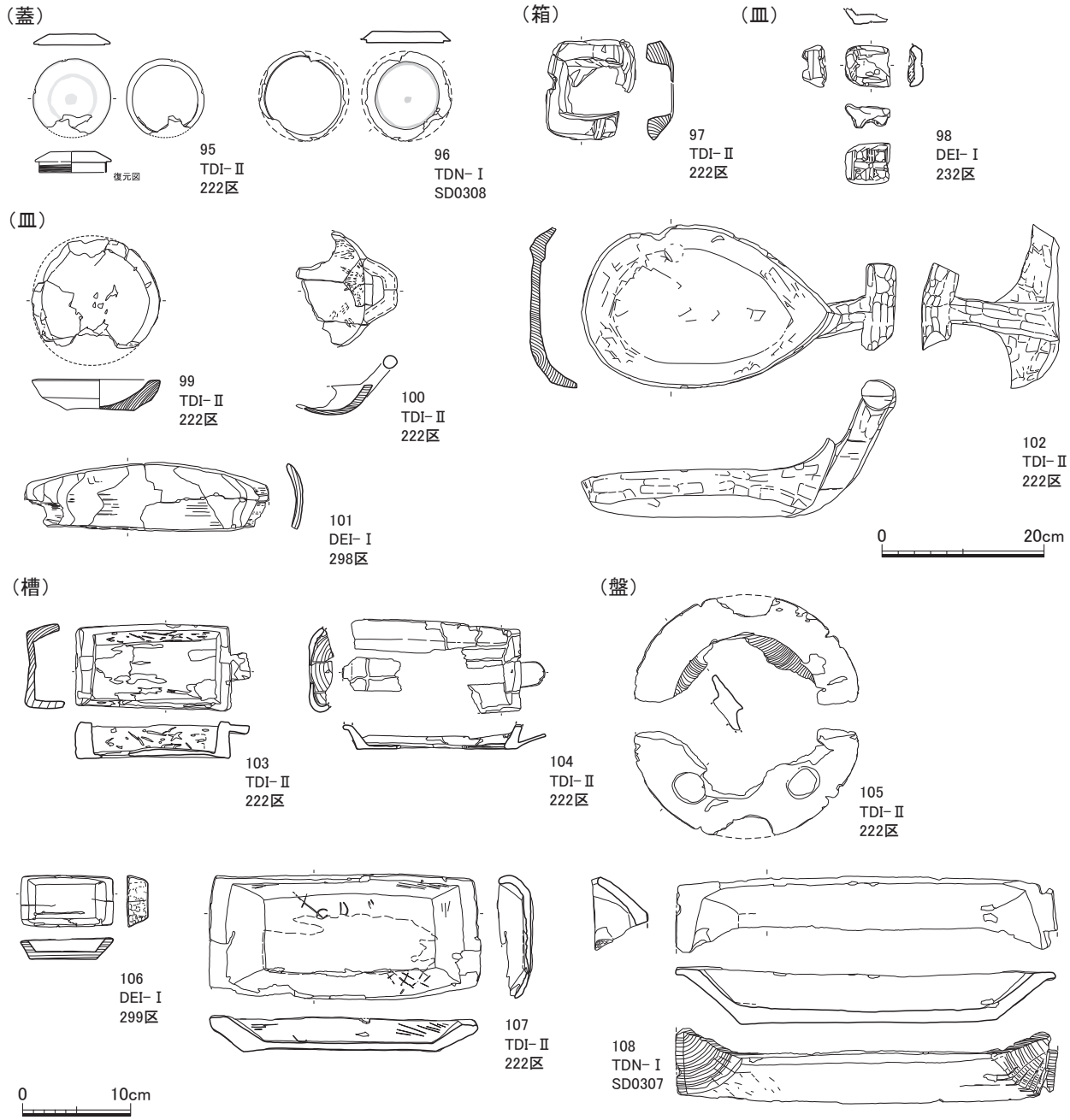


図 240　容器（1/8,1/12）

しいものの、耐水性に優れるものを使用している。

盤（105）も槽同様の材及び木取である。口縁部が幅広の平坦で、内側にわずかに突出する鋤先状をなす。内部は扁平な半球形を呈し、底面には径 7cm の短い円柱状の脚が付く。槽同様、耐水性に優れるクリ材を使用している。

皿としたものは 5 点出土している（98 ～ 102）。クワやクリ等の材を使用しており、槽に類似した粗い加工のやや厚めの器壁を持つものと、アカガシやモチノキ等の比較的硬い材を使用し、薄手で加工が緻密なものが見られる。102 は後者で、平面雫形を呈し、尖る一端の側面に T 字形の把手が付属する。利便性と装飾性を併せ持ったものと考えられ、前述の 2 種の違いは日常使いのものとハレの日用のものと分けられるかもしれない。

調度（腰掛）

109 は刳物腰掛の脚部と思われる。側面の形状が逆台形の板で、中央に方形の透かしを有する。下端面は傾斜し、座板に対して踏ん張るように外傾していたものと推定される。なお、神埼市詫田西分遺跡で法量、器形ともに類似するものが見られる（千代田町 1983）。容器（脚付盤）との見解もあるが、器壁の厚さと底面の整形具合により腰掛と考えておきたい。

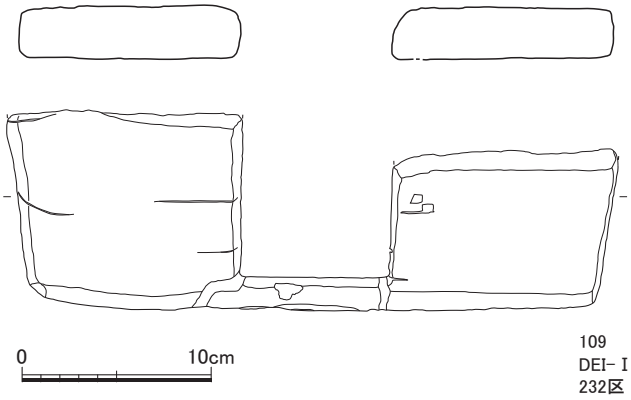


図 241　調度（腰掛）（1/4）

雑具（発火具）

発火具である火鑽臼が 1 点出土している。幅 2.7cm の細い棒状のアワブキの材を使用する。片側は無造作に切り離されたままで、もう一端は折損する。側面には V 字型の切れ込みを入れるが、上面には火鑽杵を安定させるような、前もって削り込まれた浅い窪みは認められない。しかし、切込みを上にして、左端の臼部は浅く、孔内側面の摩耗が乏しため未使用であると考えられ、浅い窪みの代わりを果たしたものと思われる。火鑽穴は 8 個残存するが、穴内が炭化したものは 1 ヵ所のみであり、着火に至ったのはこの箇所のみと考えられる。現在実施している火起こし体験時の着火率とほぼ同程度の確率と思われる。孔内の形状より、火鑽杵の先端形状は丸味を帯びるものと尖るものとがあり、使用によって丸味を帯びていく様が推定される。なお、材のアワブキはその名のとおり、その枝を燃やすと切断面から泡を吹く。水分の含有が多く、発火具には不易に思われるが、現在でも伊勢神宮では神事においてアワブキ属のヤマビワを火鑽杵として使用するそうである。

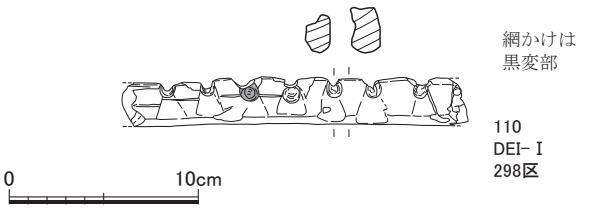


図 242　発火具（火鑽臼）（1/4）

これまでに出土した発火具は 1 点のみというのは、着火後燃料として火中に投棄されるとしても、あまりにも少ない数といえる。また、現代の火起こし体験と変わらない着火率であるなど、日常的に使用する道具としては、疑問の多く残る遺物である。古代を象徴する遺物の一つで、目が行きがちではあるが、ともすれば別の発火方法があったのかもしれない。

建築部材

建築部材として確認できるものは、その判別が困難である上に、大型のものが多く、取り上げ対象になっていないことより、報告できるものは 5 点と少ない。

111 は切断された柱根部分である。凹型に柱が削り込まれたもので、元来、この部分に横木が組み合わされて、柱穴内で柱の沈下防止装置として使用されていた部位と推定される。腐食した当該部分を切断、廃棄し、上部は柱として再利用したものと考えられる。

113 ～ 115 はねずみ返しとみられる。材は容易に大材が入手でき、その芳香による忌避効果等も期待できるクスノキを使用する。いずれも隅丸方形を呈し、中央に円形孔をあける。113 は半分程度のも

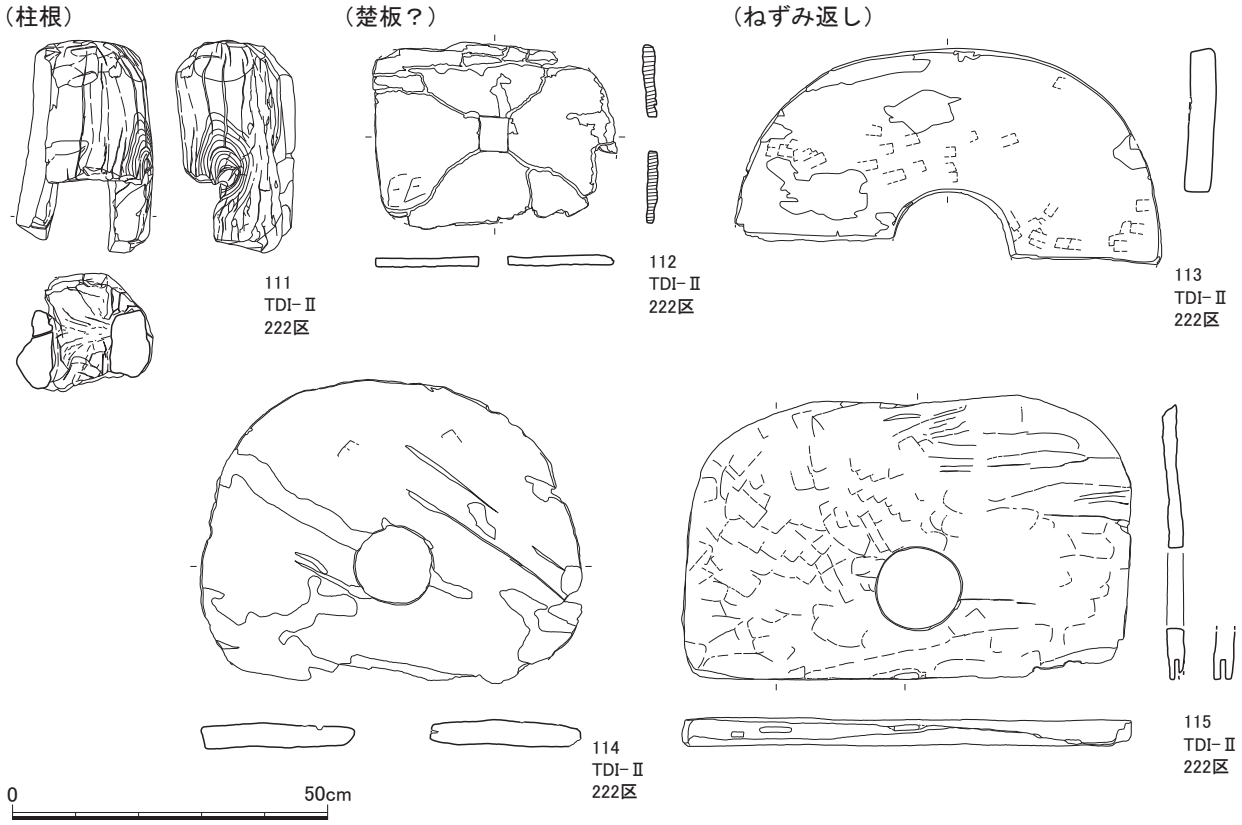


図 243　建築部材（1/12）

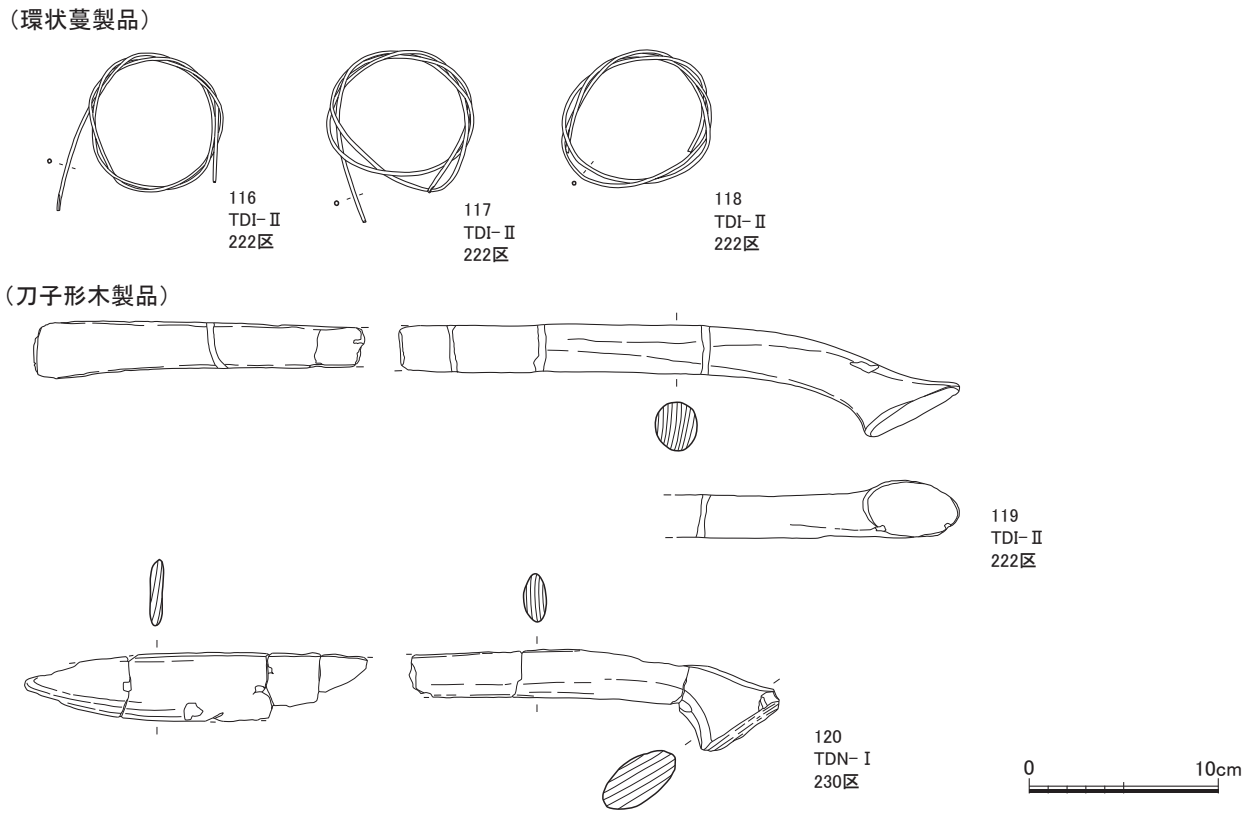


図 244　用途不明木製品（1/4）

のであるが、側面に長方形のホゾ孔を２か所穿っており、２枚を接合して１枚としたものと思われる。いずれも柱のアタリは認められない。なお、112 はこれまでの報告でねずみ返しとされていたが、他の資料に比して、器形、厚さが異なり、孔も方形で小さい。さらに、欠損状況においても、中央の孔を中心に放射線状に割れているため、礎板の可能性も考えたい。ただし、一辺が緩やかな弧状をなし、すり減っていることより、転用材による楚板と推定される。

用途不明製品

116 ～ 118 は用途不明の環状蔓製品で、田手一本黒木地区Ⅱ区 SD0105 溝跡の近接した位置から出土している。いずれも径が 6cm 程度とほぼ同様の法量を呈する。116 で一部に異なる部分が見られるものの、同様の巻き方を成す。材の種類は同定されていないが、いずれも同様の植物で、土圧により扁平に潰れず、断面円形を保つ強度と、巻いただけで形状を保持する適度な弾力性を持つ植物と考えられる。同様の素材のものが遺跡北部の奈良時代の遺構からも出土している。何かを束ねたものか、または、筒状に丸めたものを巻いた綴紐と推定したい。

119・120 は、工具の可能性が考えられる刀子形を呈する木製品である。いずれも中央部を欠損するため全長は不明である。鋤柄に類似する柄尻を持つが、鋤柄に比して大きく湾曲し、著しく扁平である。先端は厚みが薄くなるが刃状にはならず、119 は方形、120 は尖った形状をなす。この先端部には、何かを組み合わせて使用したような痕跡は窺えない。用途不明であるが、茅葺屋根を葺く際に、葦を差し込むための隙間を空けるヘラではないかとの見解を得ている。

（２）考察

柄尻の特徴について

各器種の柄には多様な柄尻が確認できる。現在ではあまり目にしない形状もあり、当初は装飾性の強いものと認識していたが、器種を越えて認められることより、実用的な役割を果たすものであり、その役割に即して選択されたと考えられる。また、欠損などによる全体形状が不明な器種や、用途不明の器種の場合、その柄尻形状より用途の手がかりを得ることができる可能性がある。以下では柄尻形態を５つに分類する（図 245）。

○柄尻１：鍬柄、斧（直柄縦斧）柄、鎌柄で確認でき、他の遺跡では縦杓子でも確認できる。形状は柄尻が急激に肥厚し、湾曲して端部には主軸方向に対して斜めに面を作る。鎌柄、縦杓子では円盤状になる。現在でも斧の柄尻に採用されており、一部では野球のバットにも採用される形状である。握る際は鍬柄の装着状況を参考にすると、柄尻の長い部分に小指丘が当たり、短い側に小指がくるものと推定され、その利点は、手の平がより密着し、柄が手から抜け落ちるのを防ぐとともに、衝撃が手の平に一様に当たることにより衝撃を分散できることにある。また、姿勢制御のためのカウンターウェイトの役割も担っており、スイングの正確性を高めるのに寄与しているものと考えられる。特に片手で、横方向に振り下ろして使用するものに有効であると思われる。なお、鎌柄、縦杓子で円盤状を呈するのは、衝撃緩和より、脱落防止効果が重視された結果と推定される。

○柄尻２：ヘラ状木製品で確認できる。断面厚が薄く、扁平な柄の柄尻に選択されるようであり、表裏両面から斜めに削られた形状をなす。実用性的な利点については認め難く、往時の工具から勘案する

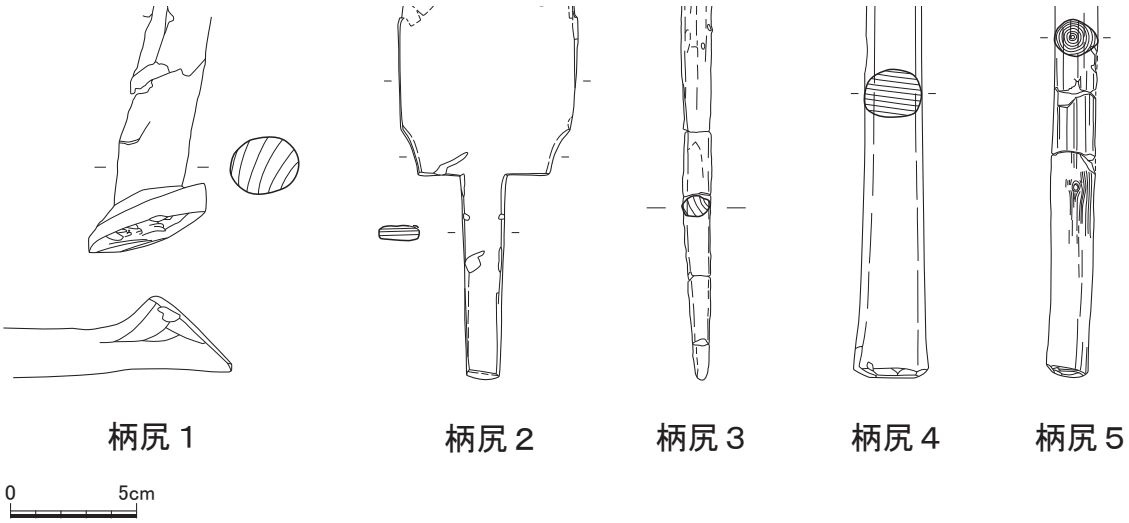


図 245　柄尻の分類（1/4）　向き改変

と、切るより削ることのほうが適していたためと思われ、それに若干の装飾性を加味したものと考えられる。

○柄尻３：スプーン状を呈する杓子の、柄尻で確認できる。形状は長く延びた柄の柄尻を尖らせる。使用時には地面に刺して、一時保管したものか。なお、柄の断面が平行四辺形を呈し、掬い部の平面方向とわずかに軸がずれることが多い。一木であり柄は削り出されるため、木取り等の制約によるものではない。握りやすさなど、使用面、機能面に配慮した形状に作成したものと考えられる。

○柄尻４：横槌と雇柄を使用した組み合わせ式の斧柄で確認できる。形状は、柄尻をわずかに肥厚させ、端面は主軸に直行し、縁部を丸める。横槌の使用動作より推測すると、柄を握る位置が使用時毎に一定せず、短い振幅で上下に振り下ろして使用するものである。強い衝撃を受けるほどの打撃を加えたものとは考えられず、この形状の柄尻は手の平の密着を主眼に制作されたものと推定される。組み合わせ式の斧柄については、明確な利点が認められないが、縄文時代以来の頭部が膨らみ楕円形の装着孔を持つ直柄においても同様の柄尻が認められる。諸手での斜めのスイング軌跡で、振り下ろす遠心力と頭部の重さで伐採していくには特別な柄尻は必要なく、横槌同様、スイングに必要な手のひらの圧着のみが重視された可能性がある。

○柄尻５：切り離したままで、角のみ丸める。

木製品の廃棄について

戦後の高度成長期を迎えるまで、木材は薪や炭として貴重な燃料であった。往時においても煮炊きや明かり、暖を取るためにも木材は貴重な燃料として使用されたに違いない。しかしながら、低地の調査において、しばしば溝や土坑内より多量の木製品が確認されることが多々ある。割れたり、折れたりと欠損したものが大半であるが、なかにはなぜ廃棄されたのか分からないような完存品も含まれる。おそらく，丘陵部の遺構においても、分解・消失してしまっただけで、元来、低地同様に多量の木製品が含まれていたと思われる。廃棄せずに、火にくべて、燃料としてなぜ使用されなかったのであろうか。

吉野ヶ里遺跡の弥生時代前期から後期にかけての自然環境について、低地では湿地となり、一部の閉鎖的静水域ではハンノキが主体となる湿地であったとみられる。これらの地域では湿地に繁茂した植物

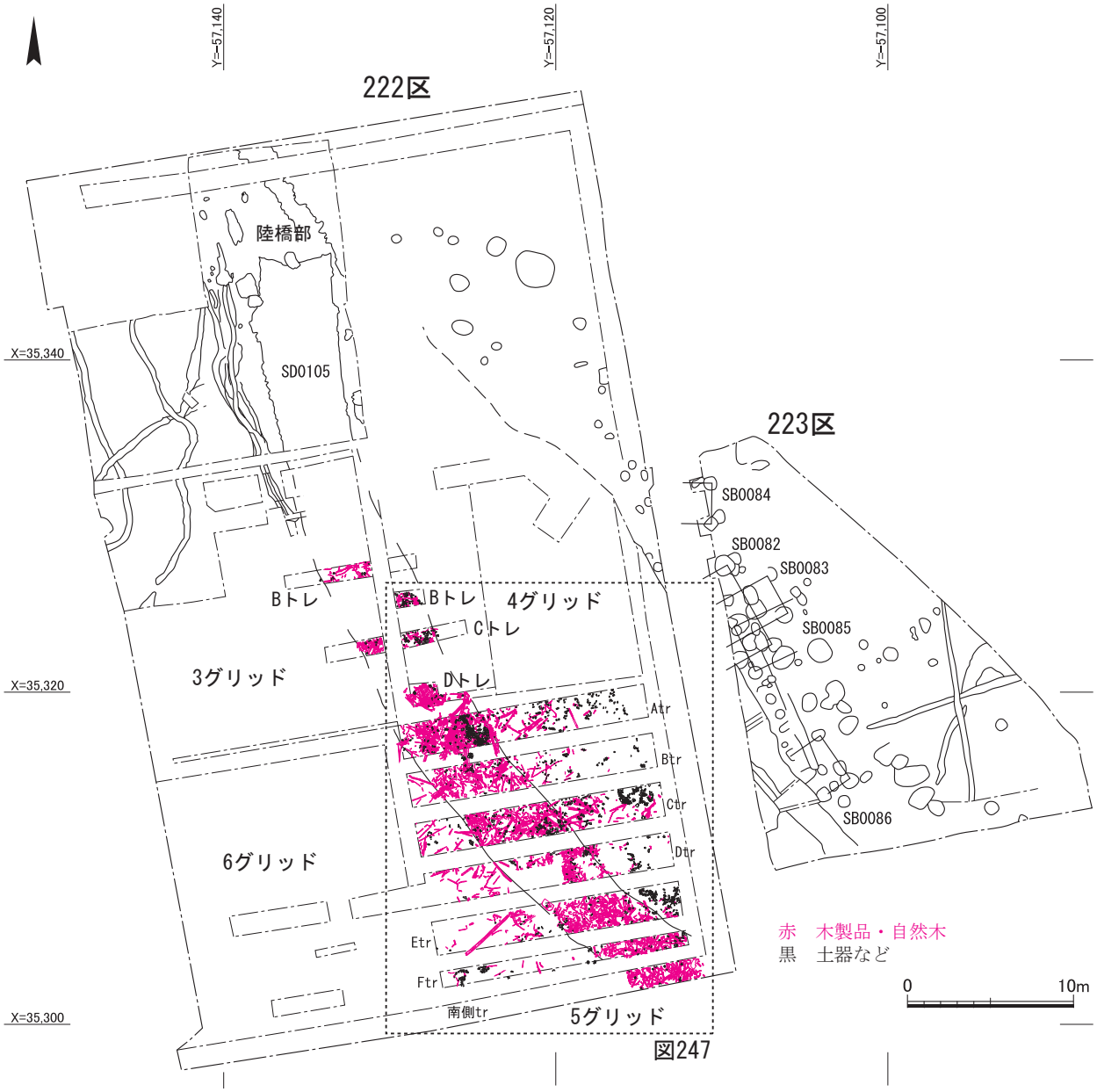


図 246　田手一本黒木地区Ⅱ区 222・223 調査区　遺構の分布（1/400）

により未分解の泥炭層が形成されていたものが、人間の開発により、早くは水田、遅くはヨシ湿地を経て後期には本格的に水田が営まれていたと見られている。

遺跡南端部の田手一本黒木地区Ⅱ区 222・223 区一帯（図 246）は湿地であったと思われ、未分解の泥炭の堆積が認められる場所にあたる。出土した木製品には建築部材がみられるが、今回報告分は取り上げを行った製品についてのみであり、他にも多数の柱材や梯子、雑多な部材、未整形の木片等の堆積が認められた。SD0105 濠跡に帰属するものが大半であるが、それ以外の泥炭層中にも多数認められる。これらの配置状況をみると、一見乱雑に堆積しているように見えるが、集積しておらず、水漬け保管や河川の氾濫による漂着物ではないことは明白である。概ね北東から南西を向いた材か、それに直行する向きの材が多く、列や集中など廃棄単位を見出そうとしても不可能なほど、満遍なく遺棄されている（図 247）。

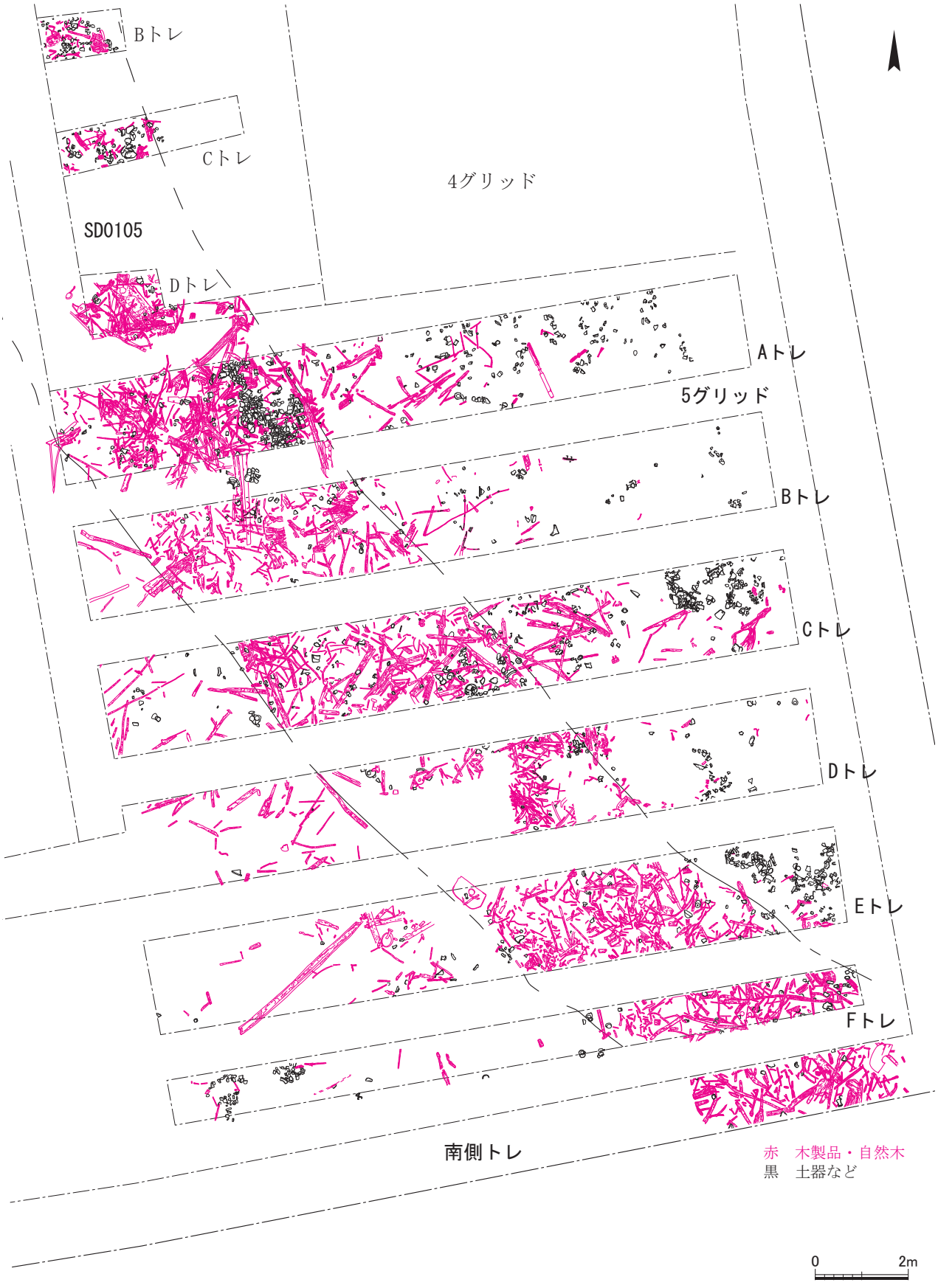


図 247　222 調査区 5 グリッド　木製品出土状況拡大（1/120）

このことは、どのように考えればよいのであろうか。まず、これらが廃棄されたのであれば、丘陵裾際に捨てることが、最も容易である。わざわざ丘陵部から離れた湿地中に運び入れ、満遍なく一様に投棄することは労多くして益なしであり、何らかの意図があったものと考えられる。ここでしばしば、水田を検出した調査で、畦畔の芯として破損した製品や廃材を埋める例がみられる。こうすることで、畦畔の崩壊や沈下を予防し、表面が安定することを知っていたはずである。田手一本黒木地区Ⅱ区へ木材を投棄した時期はちょうど、湿地を水田に改変する過渡期にあたるものと思われ、水田化もしくは湿地へ進出するための足掛かりとしての陸化を図ったのではないだろうか。その後、丘陵部ではなく、この場所に環濠と思われるSD0105溝が掘削された要因の一つには、排水によりさらに西側に向けて水田化を進めるためではなかっただろうか。

器種別の傾向について（図248～251）

報告書掲載分としては総数145点となる。時期の判別が困難なものもあり、やや荒業であるが、全体を概観すると最も高い比率を占めるのは農具であり、31％を占める。農業は主たる生業であり、材料の入手、加工の容易性においても、もっとも木材の利点を発揮できる分野であるといえる。農具の器種別にみると、又鍬や又鋤の起耕具が若干多くみられるが、これは農業以外に濠や墓壙を掘る土木具としても使用されたことによると思われる。横槌についても、工具としても使用されたものと推測され、比較的高い割合を占める。平鍬は思いのほか少なく、出土場所も田手一本黒木地区Ⅱ区のみと限られており、起耕具と言うより、実際は整地具としての性格を強く有していたものと思われる。次に多くみられるのは11％を占める武器である。比率を上げている要因は木鏃が多量にみられるためであるが、木鏃に再使用の痕跡が多々確認できることからすると、これは狩猟具とすべきかもしれない。さらに、剣形・戈形木製品も実際に武器として戦闘で使用されたかどうか不明であるため、本来この部分を占める木製品はないのかもしれない。なお、他の遺跡でしばしば見受けられる、短甲や盾等の武具類は見られない。刀剣装具も見当たらない。木製品で見る限り出土地周辺は穏やかな農村の体をなしている。

次は調理具と容器がともに10％を占めるが、煮炊きや貯蔵に供する土器に対して、主に混ぜたり掬ったりといった調理と皿や鉢などの食器として木製品が使用されたものと考えられる。いずれも耐水性が高い材や熱伝導率の低い材を使用し、その特性を生かした製品としている。また、中には饗宴等に使用したと思われる装飾性の高い容器や漆器等も見られ、日常とハレの日が区別されていたことがわかる。

次は9％を占める工具であるが、斧柄が中心であり他には刷毛目の原体等が見られるのみである。他にヤリガンナや鑿等の柄もあると思われるが、形状的に見出しにくいため低比率となっている。

次に運搬具が6％と、高い比率を占めることは注目される。背負子や天秤棒など、農業の発展に伴う収穫物の増や遺跡間の交流が活発化したことが背景にあると考えられる。これらのほかに、意外に漁労具が少ないことに驚かされる。比較的近隣まで海が近づいていたと考えられ、漁労も主たる生業の一つと考えられることからすると、もう少し種類や数があってもよいように思われる。思いのほか、農業中心、漁業中心といった集落単位ごとの生業が固定化されていたのかもしれない。

また、地区別に器種の構成比率を見た場合、どの地区もほぼ似たような比率を示す。田手一本黒木地区Ⅱ区（TDI-Ⅱ）でわずかに農具の比率が低い傾向が見られるが、総数が多く、建築部材が含まれるなど器種が多様な分、農具の比率が下がったものと解釈したい。これにより、これらの木製品が近隣地区

からの廃棄という前提に立ったならば、木製品で見る限り、いずれの地区においても、基本的な生活様式に違いはないと考えられる。

使用木材と器種について

器種、樹種ともに判明しているのは 114 点である。往時の自然環境は、広葉樹が大半を占める植生であったと推定され、大半の器種は広葉樹を使用するが、暖地に生育する針葉樹もわずかに認められる。また、特定の器種に特定の材が用いられる傾向があることが知られているが、本資料についてもその傾向を窺い知ることができる。

まず、農具ではアカガシ亜属の利用が約 72％と卓越する。非常に硬くて粘りがあり、耐摩耗性に優れているために選択されたものとみられる。他にもツバキ、サカキといった、比較的硬い木材が使用される。だだし、臼は大材が必要であるため、比較的大材を得やすいクスノキを用いたものと思われる。

工具においても、アカガシ亜属の使用率は 44％と高く、他にサカキの使用が見られる等、農具と同様に固い材が好まれたようである。ハケ目の原体においては柔らかく、木目がとおるモミ属やスギ等の針葉樹を利用する。

運搬具では、サカキやコナラ節など、比較的硬い木が使用されるが、農具などで使用されるアカガシ亜属は見られない。枝分かれした一本木を利用した背負子ではサカキが使用される。背負子は３点のみであるが、他に使用例が少ないため選択的に使用されたものと考えられる。また、同じ背負子でも角材を台形に組んだものはコナラ節であり、器種により強い制約があったのではなく、木取や組み方が異なると、それに合わせて柔軟に変更され、適切な樹種が選択されたことが窺える。田舟はヤブニッケイを使用している。クスノキに準じて大材を使用するためであろうか。

武器では、木鏃すべてにイスノキが使われており、注目される。最も気乾比重が重く、硬い材でありながら、農具や工具にはほぼ使用されていない。木鏃の他、剣形木製品、紡錘車等、石や鉄の代替材として使用される、限定的な木材であった可能性がある。また、武器では他にツバキやサカキが使用されており、いずれも硬い材ではあるものの、後に霊力が伴う木とされていたものであり、材の特性のみではなく、材の選択には精神性もかかわっていた可能性が考えられる。さらに、剣形木製品の内１点はカキノキを使用している。カキノキの使用は他に見られず、しばしば黒色塗料の一部で、分析を行っても容易に検出できない草木由来の塗料を、柿渋と推測されることがある（本吉・岡田 2003）。これらの剣身部分にも、このような類の黒色の塗料（未分析）が塗られていることより、関連が想定され、興味深い。

服飾具における履物は、田手一本黒木地区Ⅱ区の２点はスダジイ、田一本松地区の２点はクスノキと、履物の材としては一定していないが、各地区では同じ材を使用している。材の選択に全体的な共通認識があるものと、各地区で個別に選択意識があるものがあったことが窺え、木製品生産や木材選択のあり方を考えるうえで大いに参考となる。また、櫛においては現在同様、ツゲを使用しており、唯一ツゲを使用していることはツゲの重硬さと木肌の緻密さを認識したうえでのことと考えられる。なお、ツゲの櫛は５世紀後半以降に広くみられるとされるもので、それに対し、本資料は弥生時代後期前半のものと思われ、ツゲの使用については比較的早い時期のものといえる。

容器は、クワやクリの他、モチノキなど比較的硬い材の使用が多い。クワは熱伝導率が悪く、冷めに

くいとされ、クリは耐水性に富み、クワやモチノキは木肌が緻密で美しいという特徴があるようで、木材の特性に熟知し、用途に応じた材を使用していといえる。

調理具においても同様にクワやクリなどの比較的硬く、耐水性、耐熱性に優れた材を使用しているほか、シキミやチシャノキ属が使用される。このことは、容器に比して、調理具は薄い器壁や細い柄で比較的強い力や重いものを受ける必要があるため、若干硬い材が選択されたものと推定される。なお、縦杓子の1点に針葉樹であるイヌマキが使用される。イヌマキは針葉樹の中では比較的重厚で、水湿に強く、水桶等に適した材とされ、その性質を重用したものと考えられる。

なお、このように、ハケ目の原体や縦杓子以外にも針葉樹が使用され、紡茎、網枠、舟形木製品等、出土数が少ない器種に使用される傾向にあり、強い選択性が感じられる。

祭祀具と考えられる舟形木製品については、唯一カヤを使用する。カヤは非常に生育の遅い樹木であり、現在では高級な碁盤、将棋盤の材として重用されるが、水や湿気に強く、かつては風呂桶や船舶に用いられたとされる。また、比較的柔らかく、油脂分が多く、木肌は緻密で光沢があるため彫刻にも使用される。これらの特徴を十分認識したうえで、選択的に使用されたものと考えられる。

当然のことながら、広葉樹、針葉樹との区別はなく、それぞれの特性を熟知し、近隣で得られる樹木で用途に即した特性を持つものを選択、利用したものと思われる。

第2章第2節3　引用・参考文献

天本洋一 2009「佐賀県における弥生・古墳時代木製品の動向」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』33

壱岐市教育委員会 2013『原の辻遺跡　原の辻遺跡出土資料集成』壱岐市文化財調査報告書第21集

牛津町教育委員会 1995『生立ヶ里遺跡―出土木製品図録篇―』牛津町文化財調査報告書第7集

国立光州博物館 1993『新昌洞遺跡』

国立光州博物館 1997『光州 新昌洞 低湿地 遺跡Ⅰ』

国立光州博物館 2001『光州 新昌洞 低湿地 遺跡Ⅱ』

佐賀県教育委員会 1973『土生・久蘇遺跡』佐賀県文化財調査報告書第25集

佐賀県教育委員会 1977『土生遺跡群』佐賀県文化財調査報告書第37集

田原本町教育委員会 2017『唐古・鍵遺跡　考古資料目録Ⅲ―木器・木製品・石器・石製品編―』

千代田町教育委員会 1983『詫田西分遺跡』千代田町文化財調査報告書第2集

長崎県教育庁原の辻遺跡遺跡調査事務所 1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第15集

奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録　近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第36冊

福岡市教育委員会 1987『那珂久平遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第163集

福岡市教育委員会 1995『雀居遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集

福岡市教育委員会 2010『今宿五郎江遺跡8』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1066集

前原町教育委員会 1996『上鑵子遺跡　出土木製品の概要』

本吉恵理子・岡田文男 2003「柚比遺跡群出土の漆製品その他の塗膜構造調査―顕微鏡観察報告―」『柚比遺跡群4　分析編』佐賀市文化財調査報告書第158集

山田昌久編 2004『考古資料大観8　木・繊維製品』小学館

表２　吉野ヶ里遺跡出土木製品　樹種別器種一覧表

種別	気乾比重（平均値）	器種／樹種	工具				農具												紡織具		運搬具			漁労具	武器			服飾具		調理具		調度品	容器					祭祀具	発火具	建築部材			土木具	不明	不明	計	
			斧柄	ハケ目の原体	作業台	ヘラ状木製品	平鍬	又鍬	鍬	鍬柄	平鋤	又鋤	鋤柄	横鍬	鎌柄	臼	竪杵	横槌	紡錘車	紡径	天秤棒	背負子	田船	網枠	剣形木製品	戈形木製品	木鏃	履物	櫛	杓子	ヘラ状木製品	腰掛	槽	箱	盤	皿	蓋	舟形木製品	火鑽臼	鼠返し	礎板	柱根	矢板	楔	不明		
広葉樹	0.9	マンサク科イスノキ属イスノキ																1	1						1		9																	12	
	0.84	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	4			1	2	4		1	2	4	4	3	1		2	3												2				1								1	4	39	
	0.81	ツバキ科ツバキ属																3							1																			4	
	0.78	コナラ節																				1																						1	
	0.73	ツバキ科サカキ属サカキ	1														1				1	3				1				1														8	
		ツツジ科スノキ属シャンシャンボ																			1				1					1														3	
	0.7	モチノキ科モチノキ属																																	1									1	
	0.69	ツゲ																										1															1	
	0.67	シキミ科シキミ属シキミ																												1													1	2	
	0.66	ムラサキ科チシャノキ属	1							2																				4								1					2	9	
	0.65 ～ 0.7	アワブキ科アワブキ属																																			1							1	
	0.65	タブノキ属																															1											1	
	0.62	クワ科クワ属																												1					2									3	
	0.61	スダジイ																										2															2	
	0.6	ブナ科クリ属クリ																												3			1		1	1							1	7	
	0.6	ヤマビワ																			1																								1	
	0.6	カキノキ科カキノキ属																							1																			1	2	
	052 ～ 0.61	ブナ科シイ属																														1												1	
	0.52	クスノキ科クスノキ属クスノキ														2		1										2												2				1	8	
	0.48	クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ																					1																						1	
		ブドウ科																						1																					1	108
針葉樹	0.54	マキ科マキ属イヌマキ																												1														1	
	0.53	カヤ																																			1							1	
	0.44	ヒノキ科ヒノキ属																		1																									1	
	0.44	ヒノキ科																						1																					1	
	0.44	モミ属		1																																								1	
	0.38	スギ科スギ属スギ		1																																								1	6
不明			3		1			1	1	1	1	1	1	1			1	1								2					1	3				2			1	1	1	1	6	31	31
計			9	2	1	1	2	5	1	4	3	5	5	4	1	2	4	9	1	1	3	4	1	2	4	1	11	4	1	12	2	1	5	1	1	5	2	1	1	3	1	1	1	1	16	145	145

表３　吉野ヶ里遺跡出土木製品　器種別樹種一覧表

	146	146	146
工具			13
斧柄		9	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	4		
ムラサキ科チシャノキ属	1		
ツバキ科サカキ属サカキ	1		
—	3		
ハケ目の原体		2	
モミ属	1		
スギ科スギ属スギ	1		
ヘラ状木製品		1	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	1		
作業台		1	
—	1		
農具			45
平鍬		2	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	2		
平鋤		6	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	4		
—	2		
横鍬		4	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	3		
—	1		
鍬柄		3	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	1		
ムラサキ科チシャノキ属	1		
—	1		
又鍬		6	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	5		
—	1		
又鋤		4	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	3		
—	1		
竪杵		4	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	2		
ツバキ科サカキ属サカキ	1		
—	1		
横槌		9	
マンサク科イスノキ属イスノキ	1		
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	3		
ツバキ科ツバキ属	3		
クスノキ科クスノキ属クスノキ	1		
—	1		
鋤柄		3	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	2		
ムラサキ科チシャノキ属	1		
臼		2	
クスノキ科クスノキ属クスノキ	2		
鎌柄		1	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	1		
鍬		1	
—	1		
紡織具			2
紡錘車		1	
マンサク科イスノキ属イスノキ	1		
紡錘車の軸		1	
ヒノキ科ヒノキ属	1		
運搬具			8
背負子		4	
ツバキ科サカキ属サカキ	3		
コナラ節	1		
天秤棒		3	
ヤマビワ	1		
ツツジ科スノキ属シャンシャンボ	1		
ツバキ科サカキ属サカキ	1		
田舟		1	
クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ	1		
漁労具			2
網枠		2	
ブドウ科	1		
ヒノキ科	1		
武器			16
木鏃		11	
マンサク科イスノキ属イスノキ	9		
—	2		
剣形木製品		4	

マンサク科イスノキ属イスノキ	1		
カシノキ科カシノキ属	1		
ツバキ科ツバキ属	1		
ツツジ科スノキ属シャンシャンボ	1		
戈形木製品		1	
ツバキ科サカキ属サカキ	1		
服飾具			5
履物		4	
スダジイ	2		
クスノキ科クスノキ属クスノキ	2		
櫛		1	
ツゲ	1		
調理具			15
杓子		13	
ブナ科クリ属クリ	3		
ムラサキ科チシャノキ属	4		
クワ科クワ属	1		
シキミ科シキミ属シキミ	1		
ツツジ科スノキ属シャンシャンボ	1		
マキ科マキ属イヌマキ	1		
—	2		
ヘラ状木製品		2	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	2		
調度			1
腰掛		1	
—	1		
容器			14
槽		5	
ブナ科クリ属クリ	2		
ブナ科シイ属	1		
—	2		
蓋		2	
—	2		
皿		5	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	1		
モチノキ科モチノキ属	1		
クワ科クワ属	2		
—	1		
箱		1	
タブノキ属	1		
盤		1	
ブナ科クリ属クリ	1		
祭祀具			1
舟形木製品		1	
カヤ	1		
発火具			1
火鑽臼		1	
アワブキ科アワブキ属	1		
建築部材			5
鼠返し		3	
クスノキ科クスノキ属クスノキ	2		
—	1		
礎板		1	
—	1		
柱根		1	
—	1		
土木具			1
矢板		1	
—	1		
不明			17
楔		1	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	1		
不明木製品		16	
ブナ科コナラ属アカガシ亜属	4		
クスノキ科クスノキ属クスノキ	1		
ムラサキ科チシャノキ属	2		
ブナ科クリ属クリ	1		
カキノキ科カキノキ属	1		
シキミ科シキミ属シキミ	1		
—	6		

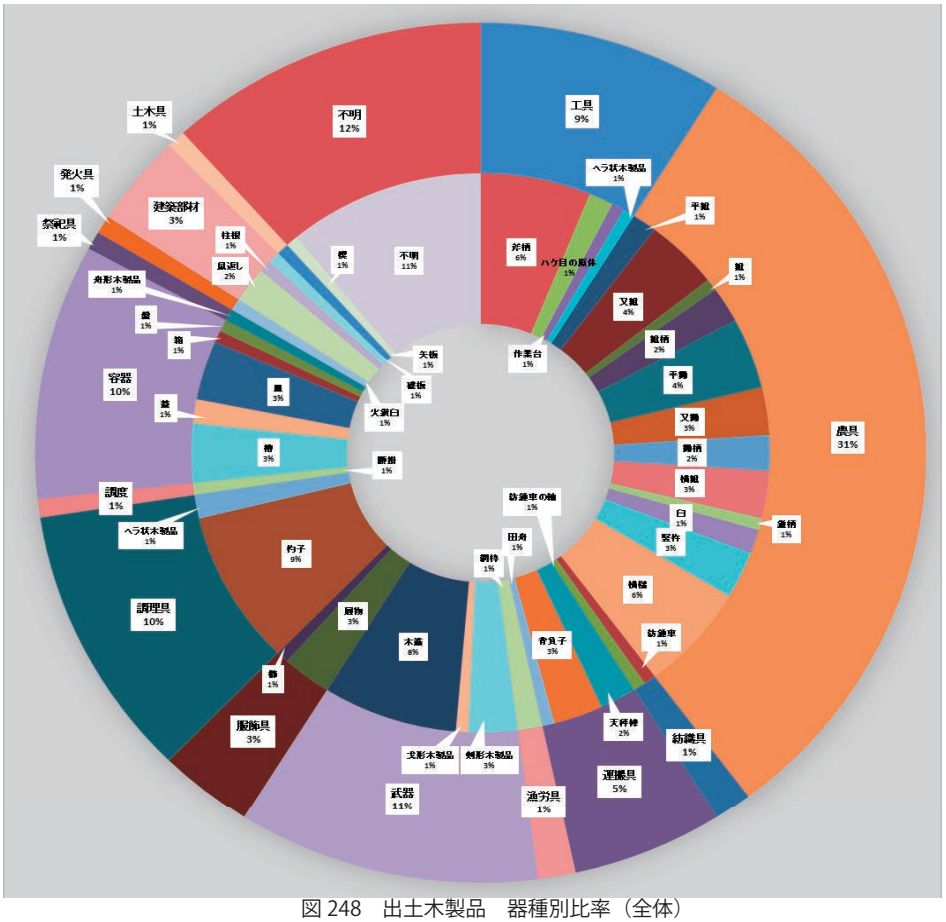


図 248　出土木製品　器種別比率（全体）

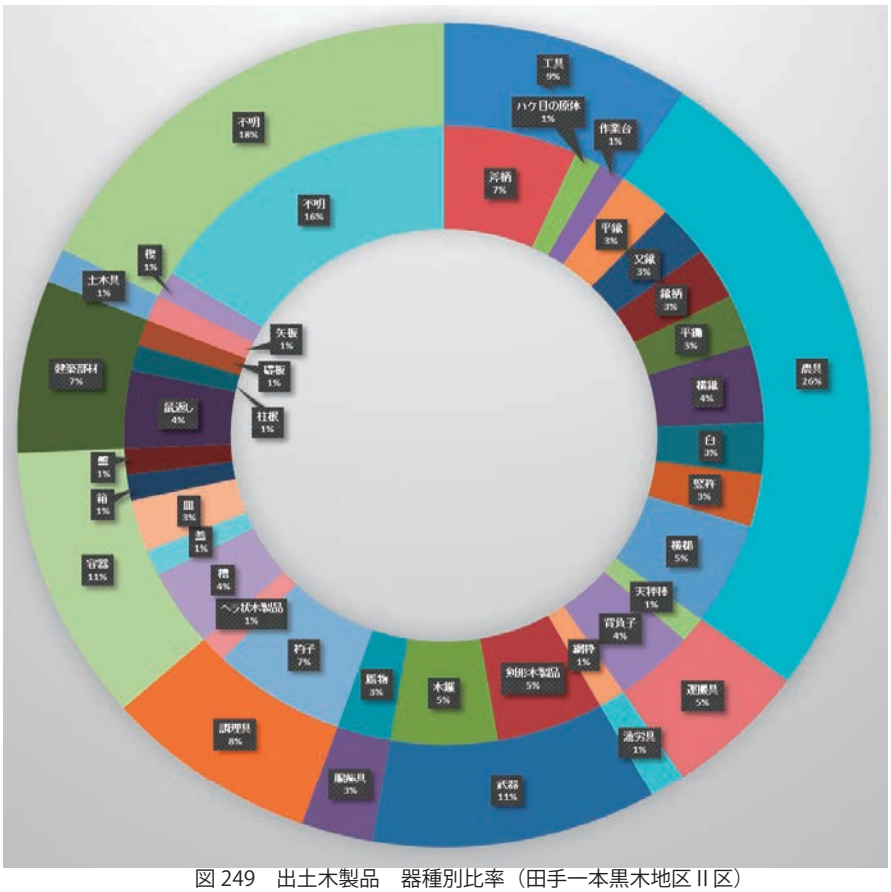


図 249　出土木製品　器種別比率（田手一本黒木地区 II 区）

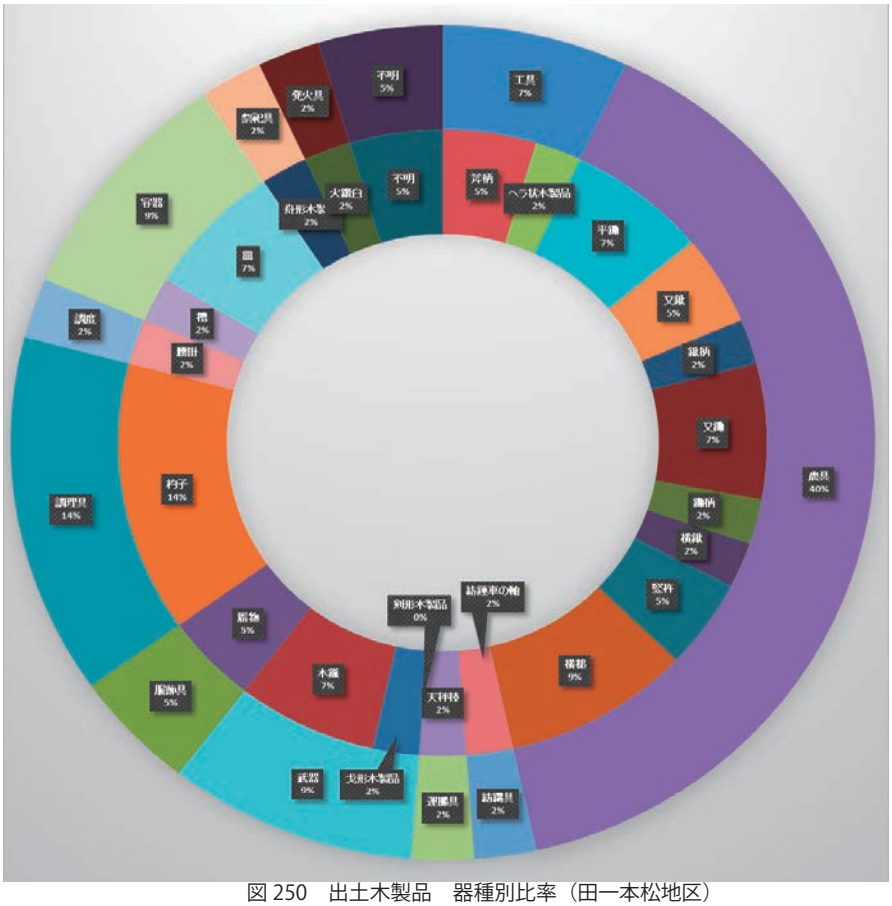


図 250　出土木製品　器種別比率（田一本松地区）

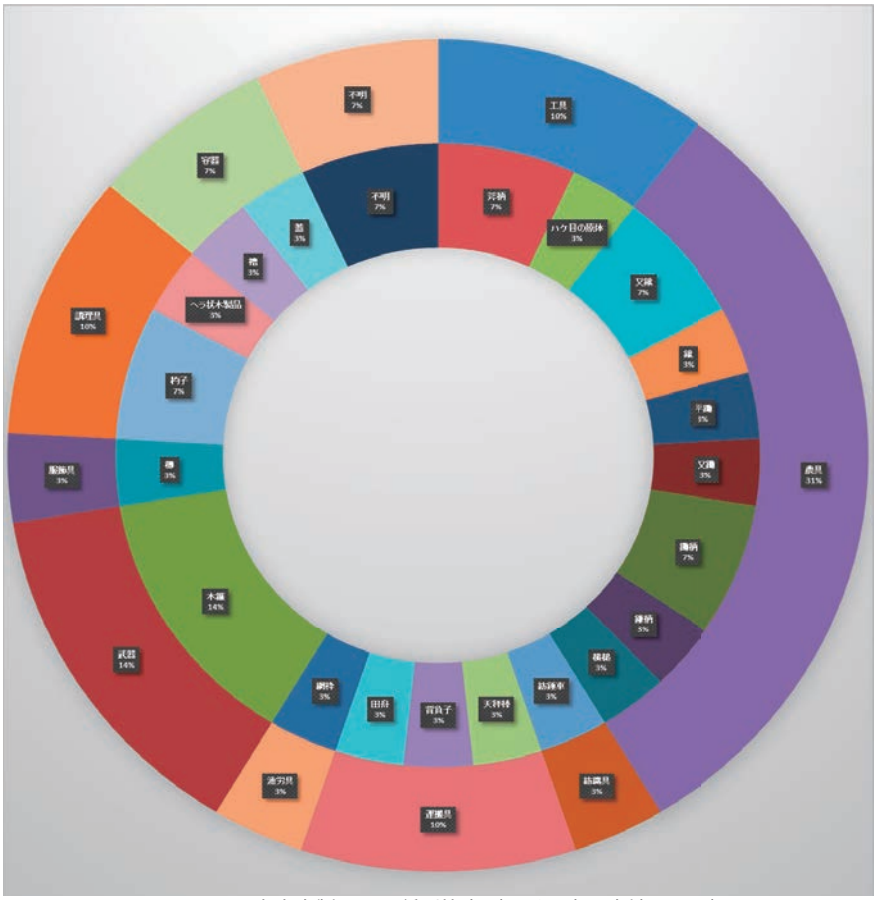


図 251　出土木製品　器種別比率（田手二本黒木地区Ⅰ区）

4　石器・石製品

本項では、弥生時代の石器、石製品（鋳型や玉を除く）の特徴と変遷についてまとめる。弥生時代集落編（『207 集』）では、集落出土石器について器種ごとに特徴を整理し、弥生時代墓地編（『214 集』）、墓地総括編（『222 集』）では墓地出土石器についてまとめたが、以下では集落及び墓地出土石器や、『207 集』以降の新出資料等を含め、時期ごとの特徴と変遷について再度整理を行う。なお、本来であれば時期別の出土数量や石材比率等を明確に提示すべきであるが、遺構外から出土しているもの、共伴土器から所属時期が絞り込めないものが多いことに加え、未整理資料も多く残されているため、現時点での状況を報告することとしたい。

（1）弥生時代前期の石器・石製品

前期初頭～前期前半

佐賀平野では弥生時代早期から大陸系磨製石器が出現するが、平野中央部～東部地域よりも平野西部地域が先行することが指摘されている（兒玉 2008）。吉野ヶ里遺跡では早期に限定できる石器は認められないことから、大陸系磨製石器が出現するのは前期初頭～前期前半とみられる。確認されている器種は石庖丁、石鎌、両刃石斧で、当該期の検出遺構が少ないこともあり器種や数量は少ない（図 252）。

石庖丁は、紐穴が擦切で穿孔されたもの（1）と、平面三角形状のもの（2）がある。1 は包含層出土で共伴土器を特定できないが、他遺跡の出土例などからこの時期に相当すると考えられる（『222 集』）。石材は、擦切孔石庖丁が堆積岩系、三角形石庖丁が菫青石ホルンフェルスである。3 の石鎌は破片のため全体形が不明であるが、石材は菫青石ホルンフェルスで、この段階から流通品が供給されていたと考えられる。両刃石斧は小型、中型、大型が 1 点ずつ出土しており、当初からサイズが分化していたと考えられる。平面形は基部が窄まり、横断面形は扁平な楕円形で、前期後半以降の太形蛤刃石斧ほどの厚みには達していない。石材は 4 が火成岩系、5 が安山岩、6 が砂岩とみられるが、原産地は不明である。

前期初頭～前期前半の遺構から出土している打製石器は少ないが、安山岩製の凹基式石鏃のほか、

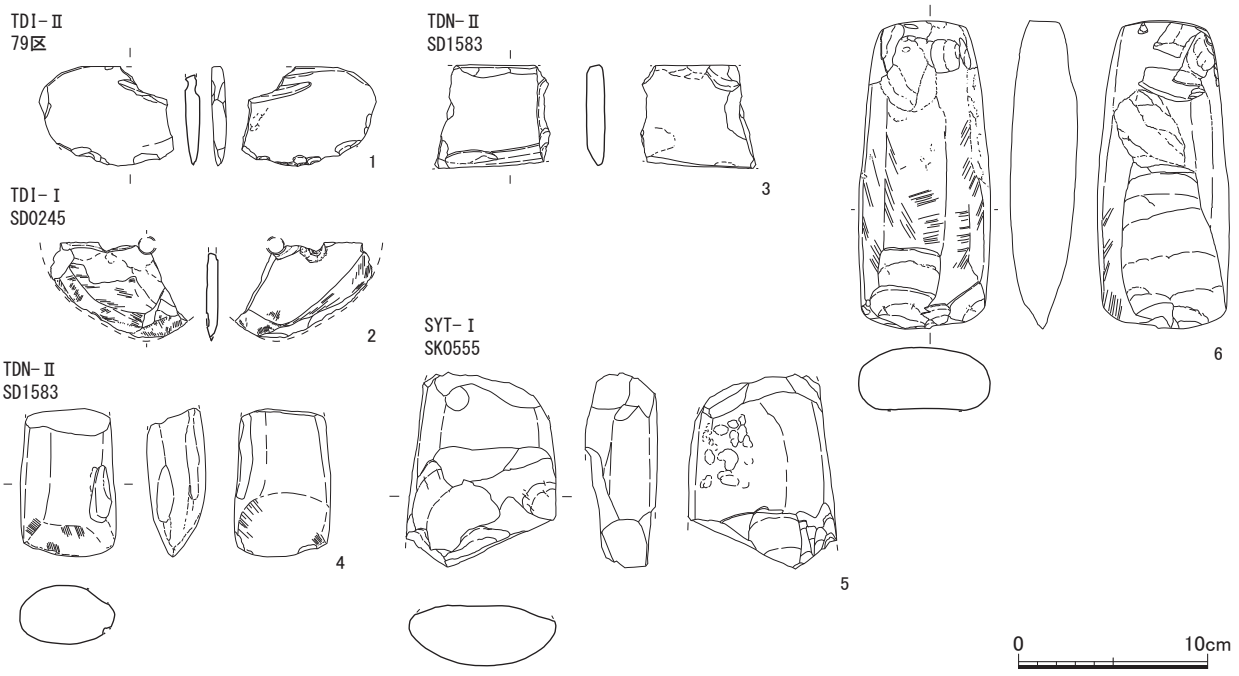


図 252　前期初頭～前期前半の石器（1/4）

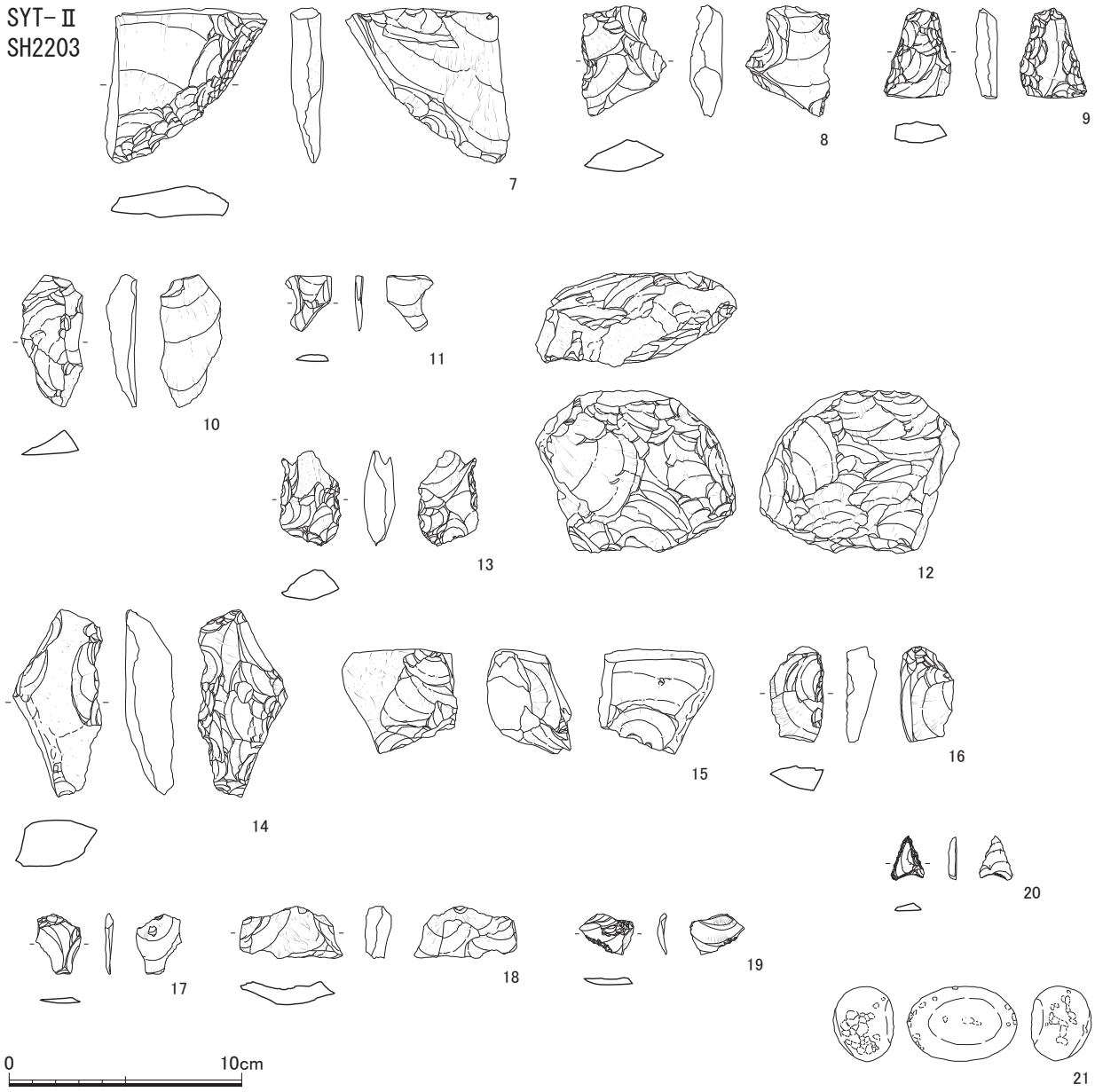


図 253　前期初頭～前期前半の打製石器ほか（1/3）

安山岩、黒曜石の剥片などがみられる。遺跡北部の志波屋四の坪地区Ⅱ区 395 調査区 SH2203 竪穴建物跡（焼失住居跡）からは、前期初頭の土器とともに安山岩製の石核と剥片、スクレイパー、石鏃など 14 点が出土しているほか、端部に敲打痕が残るハンマーストーンとみられる小型円礫が出土していることから、打製石器の製作が行われていたと考えられる（図 253）。石材は、7 ～ 18,20 が安山岩、19 が黒曜石、21 が花崗岩である（『211 集』）。安山岩は多久市鬼の鼻山産、黒曜石は伊万里市腰岳産とみられ、縄文時代からの石材利用が継続している。

前期後半～前期末

弥生時代前期後半になると、遺跡南部を中心に集落の規模・範囲が拡大することに伴い、出土石器の数量も急増している。資料的にまとまっているのは、遺跡南部で前期後半代に機能した田手二本黒木地区 SD0001・SD0336 環壕跡から出土した石器群である（『163 集』,『177 集』,『207 集』）。磨製石

器の器種は、石庖丁、石鎌、太形蛤刃石斧に加え、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、紡錘車、磨製石剣、磨製石鏃が新たに出現している（図 254）。

前期後半代の磨製石器の特徴として、北部九州地域で広域に流通する石器が出現する。福岡市西区の今山遺跡で生産された玄武岩製太形蛤刃石斧（以下「今山石斧」）は、前期後半代の環壕である SD0001・SD0336 埋土から小破片を含めて 50 点出土しており、前期後半には供給されていたことを示している。完形品はほとんどなく、壊れた状態で出土しているが、破損後に刃部再形成のための調整剥離が施されたものや、折れ面を磨り石として転用されたもの、剥落した破片をスクレイパーなどとして転用するために再加工が施されたものなども認められる。比率は、SD0001・SD0336 環壕跡から出土した太形蛤刃石斧の約 6 割を今山石斧が占める。穂摘具である石庖丁は、福岡県飯塚市立岩遺跡群で生産された赤紫色泥岩（輝緑凝灰岩）製石庖丁（以下「立岩石庖丁」）が SD0001・SD0336 環壕跡から 4 点出土している。4 点とも埋土上層出土であることから、立岩遺跡群での生産が開始して間もない前期末～中期初頭から供給されていたと考えられる。6 は完形品で、いわゆる左右交互刃である。

また、石材原産地や石器生産地が未だ明確になっていないが、流通品とみられる石器も複数認められる。長崎県の対馬島南端部の対州層群が原産地と考えられている菫青石ホルンフェルス（頁岩質砂岩）製石器（能登原・中野・小山内 2007, 能登原 2014）は、本遺跡では前期初頭～前期前半から出現しているが、前期後半から増加しており、対象器種も石庖丁、石鎌、磨製石剣、磨製石鏃、紡錘車などと多様化している。なかでも同石材製の石庖丁が最も多く、前期後半代の SD0001・SD0336 環壕から出土した石庖丁の約 7 割を占めている。このほか、前期には片岩製石庖丁が少量出土しており、原産地は不明であるが在地産の可能性がある。29 は孔部分で折損した片岩製石庖丁の完成品であるが、紐穴は両面からの敲打のみで穿孔されており、不整楕円形を呈する。

片刃石斧の石材は、全時期を通じて層灰岩製が主体をなす。本遺跡での層灰岩製片刃石斧の出現は前期後半とみられ、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、ノミ形石斧の石材に多用されており、SD0001・SD0336 環壕跡出土片刃石斧の約 6 割を占めている。層灰岩の原産地は、対馬南部、北九州の脇野亜層群、あるいは朝鮮半島南端部などと考えられており、長崎県壱岐市原の辻遺跡では層灰岩製の未成品が大量に出土しているが（森 2011,2013）、他の石器生産地の実態は明らかになっていない。なお、本遺跡出土の層灰岩製片刃石斧の未成品については後述する。

太形蛤刃石斧の石材に用いられる含偽礫ホルンフェルスは黒色の斑点（偽礫）を含む特徴的な石材で、北部九州地域で弥生時代前期～中期に流通しており、石材原産地は対馬である可能性が指摘されている（能登原・中野・小山内 2007）。同石材製の石斧は、破片を含めて遺跡全体で 30 点程度出土しており、このうち前期後半代の SD0001・SD0336 環壕跡からは 7 点出土している。環壕下層からも出土していることから、現在のところ生産地は不明であるが、前期前半新相頃には供給されていたと考えられる。また、39 は原産地不明の細粒砂岩を素材とした厚手の石斧で、図示していないが裏面の刃部には破損後に再研磨された痕跡が認められる。

本遺跡では磨製石器の未成品の出土量が完成品に比べて極めて少ないことから、流通品が主体であったと考えられる（『207 集』）。遺跡南部の前期後半～中期初頭の遺構から出土した磨製石器の未成品としては、図示した 6 点がある（図 255）。石庖丁未成品 4 点のうち 46,47,50 は孔部分を通って折れていることから、穿孔途中に破損したとみられる。51 は粗い調整剥離が施された素材に近い段階の未成品で、

図 254　前期後半代の磨製石器（SD0001・0336 環壕跡出土）（1/4）

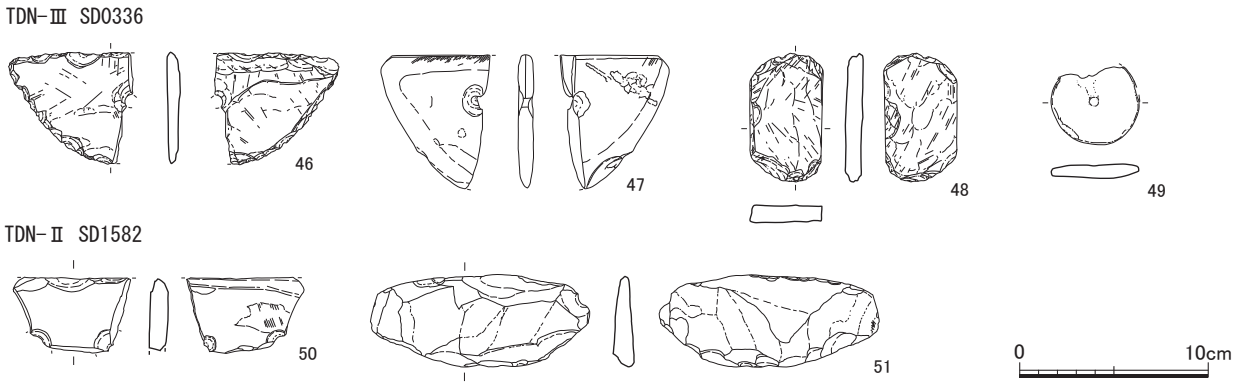


図 255　磨製石器未成品（前期後半～中期初頭）（1/4）

石材は明緑色の片岩である。48 は扁平片刃石斧の未成品とみられ、板状素材の上下両端に粗い調整剥離が施された素材に近い形状であり、研磨整形は施されていない。石材は暗緑色の片岩である。49 は紡錘車の未成品で、体部の整形が終わっていないが中央に回転穿孔途中の痕跡が残る。石材は片岩。

前期後半代の打製石器としては、石鏃やスクレイパーに加え、穿孔具である打製石錐がある（図 256）。打製石鏃は 52 のような平面三角形状の凹基式が最も多いが、54,55 のような木葉形や有茎式も少数認められる。石材は黒曜石よりも安山岩が多い。53 は加工途中の未成品である。56 ～ 58 は石錐で、下端部に調整剥離による錐部が作出されている。石材は 56 が黒曜石､57,58 が安山岩である。このほか、59 ～ 61 のようなスクレイパーが数多く出土しているが、全体的に加工度は低く、日常的に使用される万能切削具的性格を持つ石器と考えられる（『163 集』）。なお、58 は砂岩製磨製石斧の破片に二次加工が施されてスクレイパーに転用されたものである。60,61 は安山岩製で、60 は素材剥片の鋭い縁辺部の一部に二次加工が施されて刃部が形成されており、61 は両面からの調整剥離により縁辺部に刃部が形成されている。

前期末～中期初頭には打製石器の数量が増加する。62 ～ 77 は吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 316 調査区 SH2437 竪穴建物跡出土で、前期末～中期初頭の土器とともに石器 166 点が出土している（『207 集』）。打製石器 159 点の内訳は黒曜石が 83 点、安山岩が 76 点で、製品は安山岩製が多く、図の 68,70 以外は安山岩製である。また、円礫素材の敲石（77）は石器製作に係るハンマーストーンと考えられる。スクレイパーの石材は黒曜石よりも安山岩が多く、特に大型品については安山岩に限られることから、本遺跡には大型の黒曜石石材がほとんど持ち込まれていなかった可能性がある（『163 集』）。剥片まで含めた遺跡全体の石材比率は算出できていないが、全体的に安山岩の比率がやや高いと推測される。このほか、図示していないが、前期後半代の礫石器として磨石、敲石、石皿（作業台）、砥石があるが、磨石や敲石の花崗岩円礫は遺跡周辺の石材が用いられたとみられる（『163 集』,『207 集』）。

（２）弥生時代中期の石器・石製品

弥生時代前期末～中期初頭になると集落規模や範囲がさらに拡大し、中期前半にかけて多数の竪穴建物と貯蔵穴からなる中心的な集落域が遺跡南部の段丘上に展開するようになる。石器は磨製、打製ともに遺跡南部で最も多く出土しており、石器利用の最盛期を迎えている。

石庖丁の形態は、背部が直線的な外湾刃半月形が主体で、紡錘形はほとんどみられない。刃部は断面形が左右ほぼ対象の両刃で、端部左右交互刃のものを除いて片刃は認められず、刃部の鎬も明瞭でな

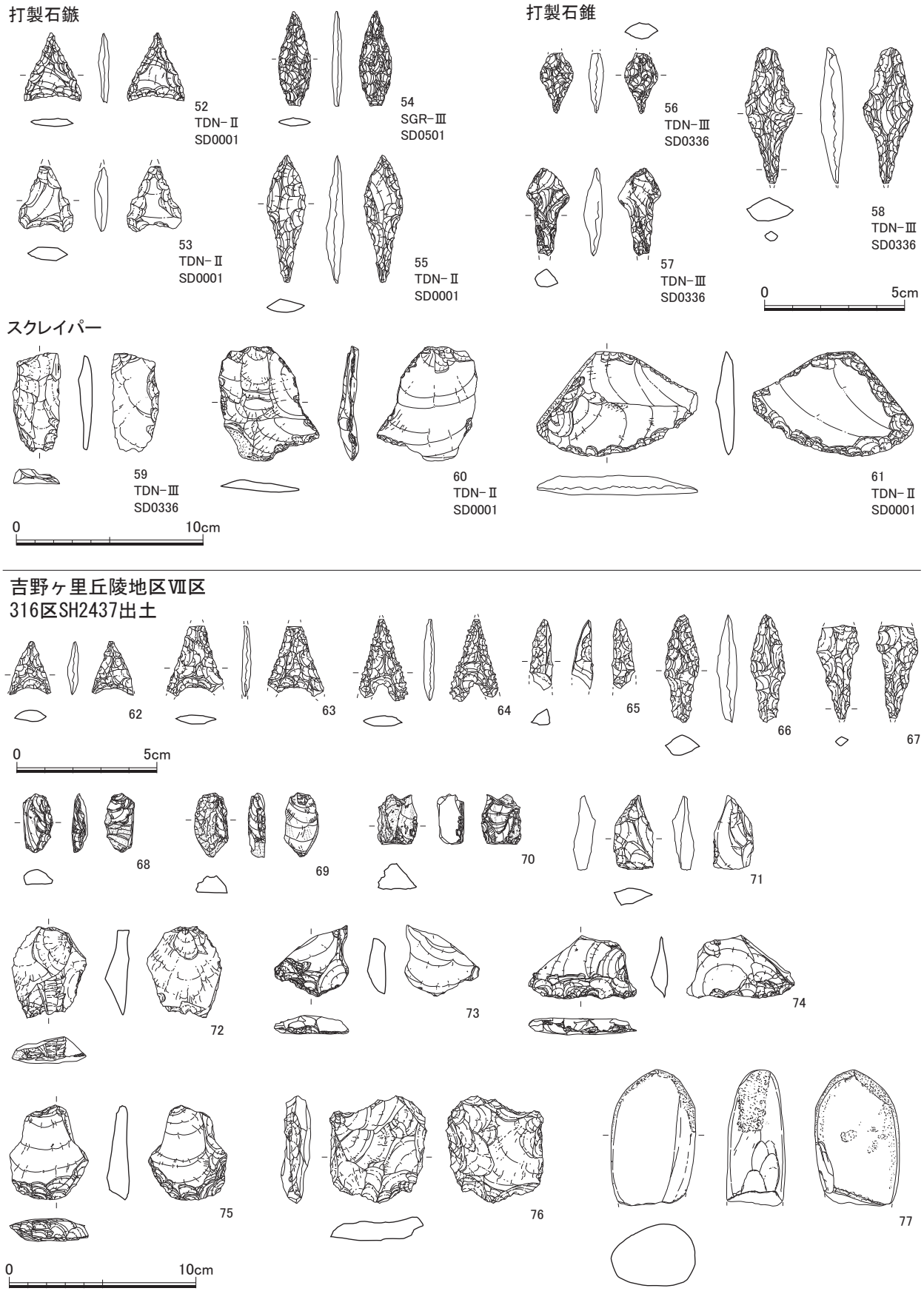


図 256　上：前期後半～中期初頭の打製石器（1/2,1/3）　下：前期末～中期初頭の打製石器等（1/2,1/3）

いものが多い。石材は菫青石ホルンフェルス製と立岩石庖丁が主体的で、他に砂岩や頁岩質の堆積岩系石材が用いられている。前期末～中期初頭から供給される立岩石庖丁（図 257）は、中期以降に増加し、一部は後期まで継続している。図示したのは中期～後期のもので、形態は背部が直線的な外湾刃半月形が主体である。研ぎ減りによって身幅が狭まった結果、刃部が直線的になったものや、紐孔の位置が背部よりも刃部に近い位置になるまで刃部が研ぎ直されたものもみられることから、他の石材製の石庖丁に比べて使用による消耗が激しかったと推測される。紐穴は両面からの敲打後回転穿孔によるものと、敲打が施されない直接回転穿孔の 2 種類がある。なお、菫青石ホルンフェルスや後述する玄武岩質安山岩製、その他の堆積岩系の石庖丁は、完成品の紐孔に再穿孔が施された痕跡が認められるものが散見されるが、立岩石庖丁は再穿孔の痕跡が認められるものはほとんどない。また、遺跡南部の田手二本黒木地区Ⅲ区 318 調査区 SH0529 円形竪穴建物跡から出土した立岩石庖丁（90）は、剥離面に回転穿孔が施される途中のもので、端部に抉りを有する。以前の報告では未成品としたが（『177 集』,『207 集』）、破損した大型石庖丁の再加工品の可能性もある [1)]。

菫青石ホルンフェルス製石庖丁（図 258）は、前期後半～中期前半にかけて北部九州地域全体で供給量が増加しており（能登原 2014）、本遺跡でも同様の傾向を示す。形態は背部が直線的な外湾刃半月形が主体である。平面三角形状のものもあるが、左右非対称であることや 2 孔と背部が平行しないことから、刃部の研ぎ直しによって結果的に三角形状になった可能性がある。表面の風化により不明なものもあるが、穿孔は両面からの敲打後回転穿孔によるものが多い。また、出土数は少ないが、130 のようないわゆる大型石庖丁は、前期後半～中期初頭頃に属すると推測される。

完成品に比べて数は少ないが、菫青石ホルンフェルス製石庖丁の未成品も出土しており（図 259）、131 はほぼ素材に近い状態と考えられる。製作工程は、132 のように板状素材の周縁に調整剥離を加えて整形し、133 のような外湾刃半月形に整形される。そのあとに紐穴部分に両面からの敲打による窪みを作り、さらに石錐を回転させて穿孔が施され（134）、最後に研磨整形されて完成するのが基本的な工程と考えられる。なお、穿孔前に刃部や体部に部分的な研磨整形が施される場合もある。特に、135 ～ 141 のように穿孔途中で折れたとみられる未成品が多いことから、製作工程上の難関であったことが伺える。また、立岩石庖丁や菫青石ホルンフェルス製石庖丁以外にも、砂岩、片岩、堆積岩系（不明）の石材製の石庖丁もみられ（図 260）、原産地や生産地は不明であるが集落外部から供給されていたと考えられる。なお、紐穴の穿孔具としては、前述した安山岩製、黒曜石製の打製石錐のほか、少ないながら砂岩製の磨製石錐も出土している（図 261）。

太形蛤刃石斧（図 262）は、176 ～ 182 のような厚手の今山石斧が主体を占める。176,177 は小型の完形品であるが、破損後の再加工品の可能性がある。178 は出土遺構番号が不明なため時期が明確でないが、今山石斧の未成品もしくは完成品の破損後の再加工品と考えられ、未成品であれば原産地から遠く離れた消費地で出土する稀少な例として注目される（『222 集』）。このほか、北九州市の高槻遺跡、高津尾遺跡で生産され、東北部九州地域を中心に流通した安山岩質凝灰岩製の太形蛤刃石斧である高槻型石斧（梅﨑 1996）が出土している（183 ～ 185）。風化が激しいため表面が剥落したものが多い。同時期に盛行する今山産玄武岩製太形蛤刃石斧に比べて法量は小さい。本遺跡では 5 点出土しており、流通域の西限であったと考えられる（『207 集』）。出土遺構から所属時期を判断できるものはないが、中期に供給されたと考えられる。このほか、含偽礫ホルンフェルス製（186,188）や産地不明の安山岩、

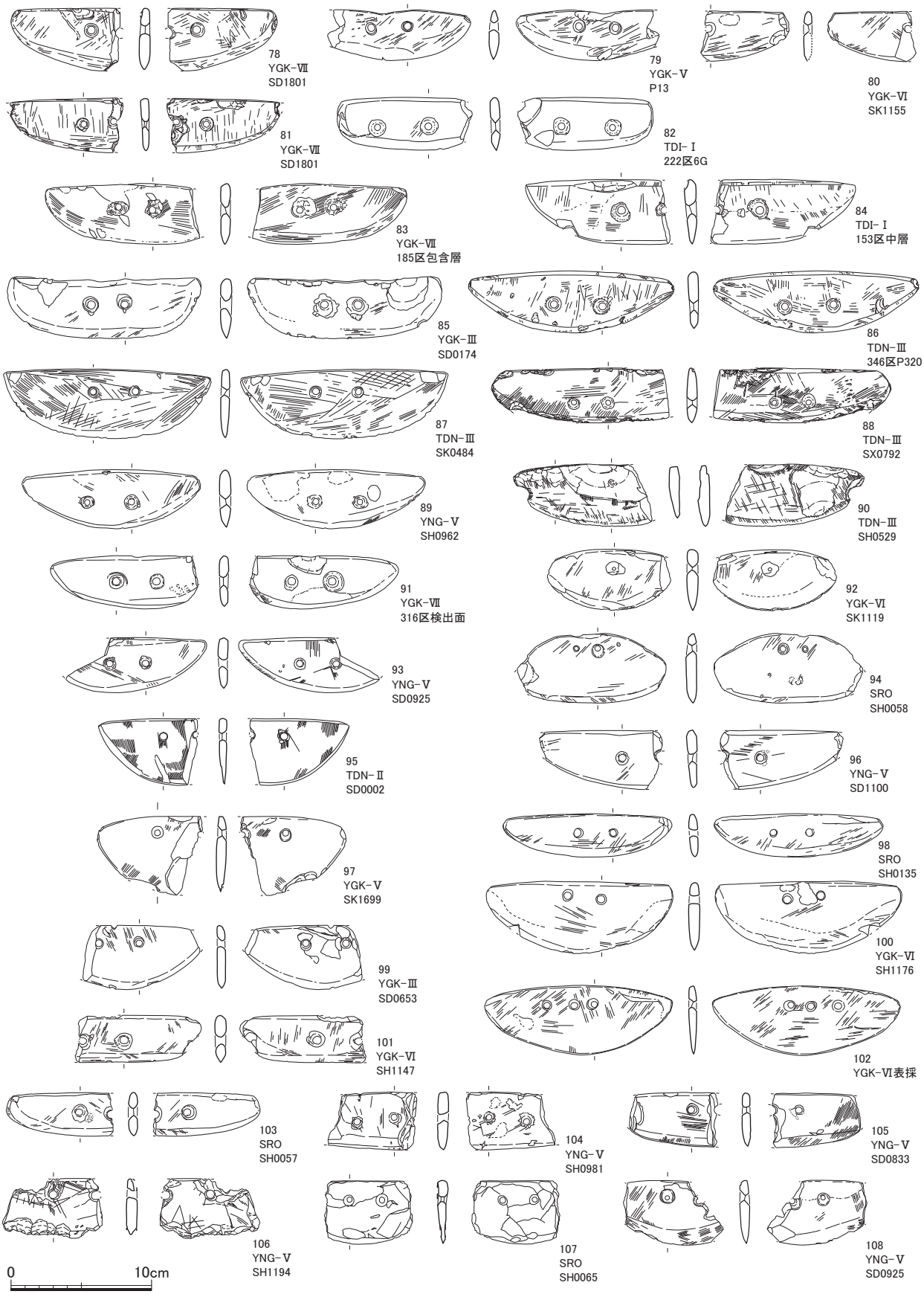


図 257　立岩石庖丁（1/4）

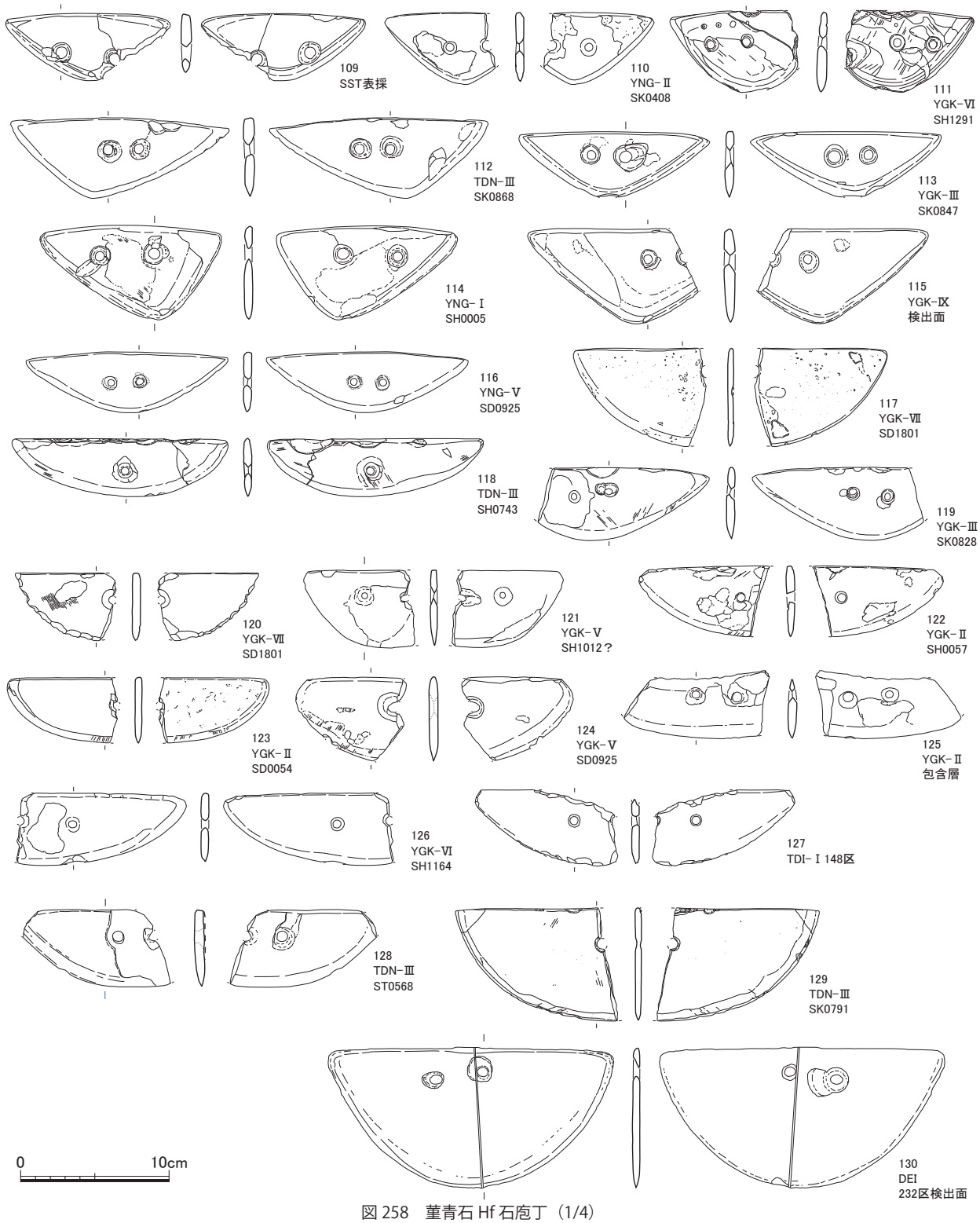


図 258　菫青石 Hf 石庖丁（1/4）

玄武岩製の石斧もみられる（187,189）

片刃石斧（図 263）は、前期後半代に引き続き中期においても層灰岩製が主体を占めており（190 ～ 200）、次いで砂岩質の石材（ホルンフェルス？）が用いられている（201 ～ 210）。サイズ別にみると、層灰岩製は小型のノミ形から中～大型品まで幅広く利用されているのに対し、砂岩質（ホルンフェルス？）の石材は小型品があまり見られないという違いがある。195 は吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 122 調査

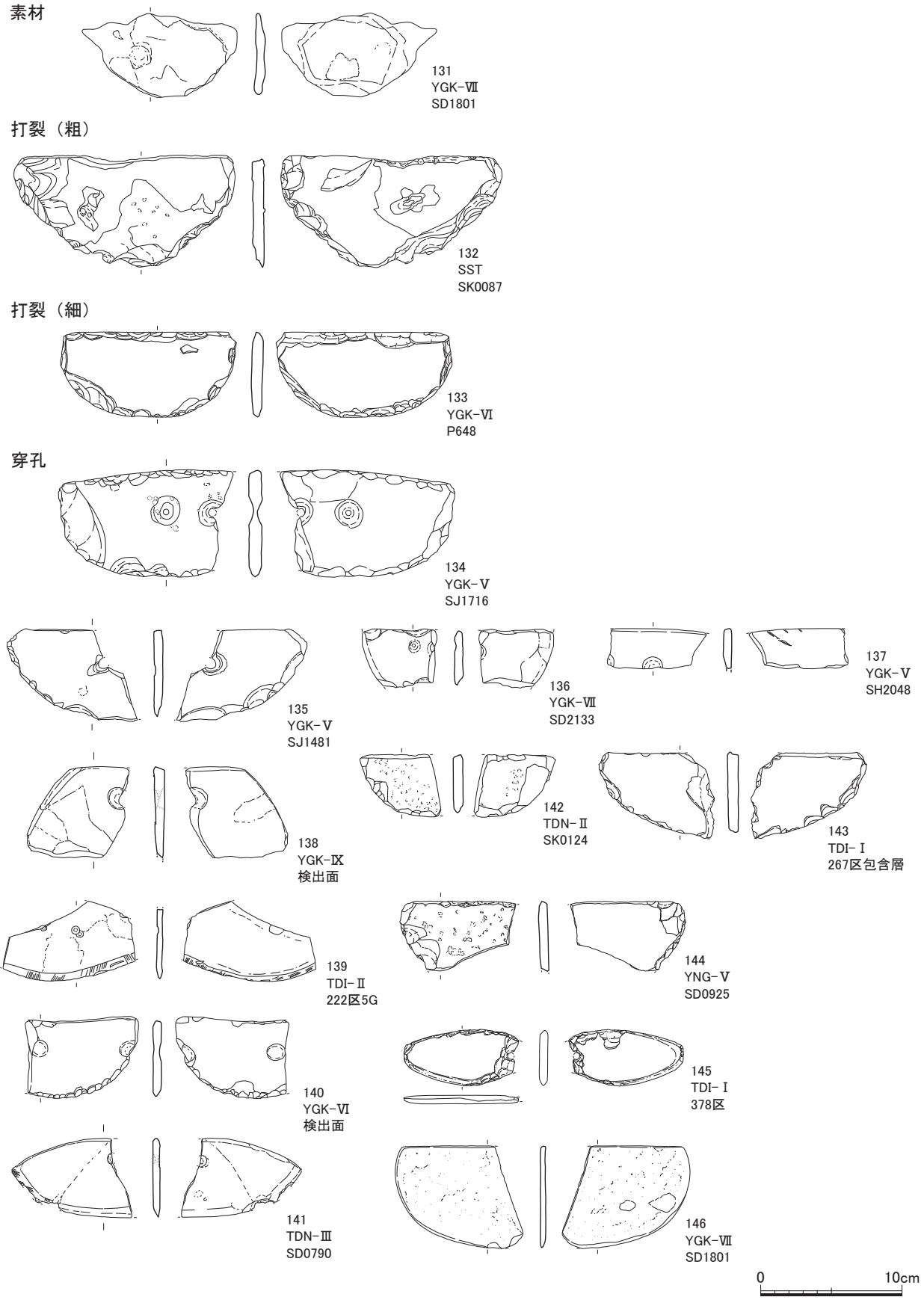


図 259　菫青石 Hf 石庖丁未成品（1/4）

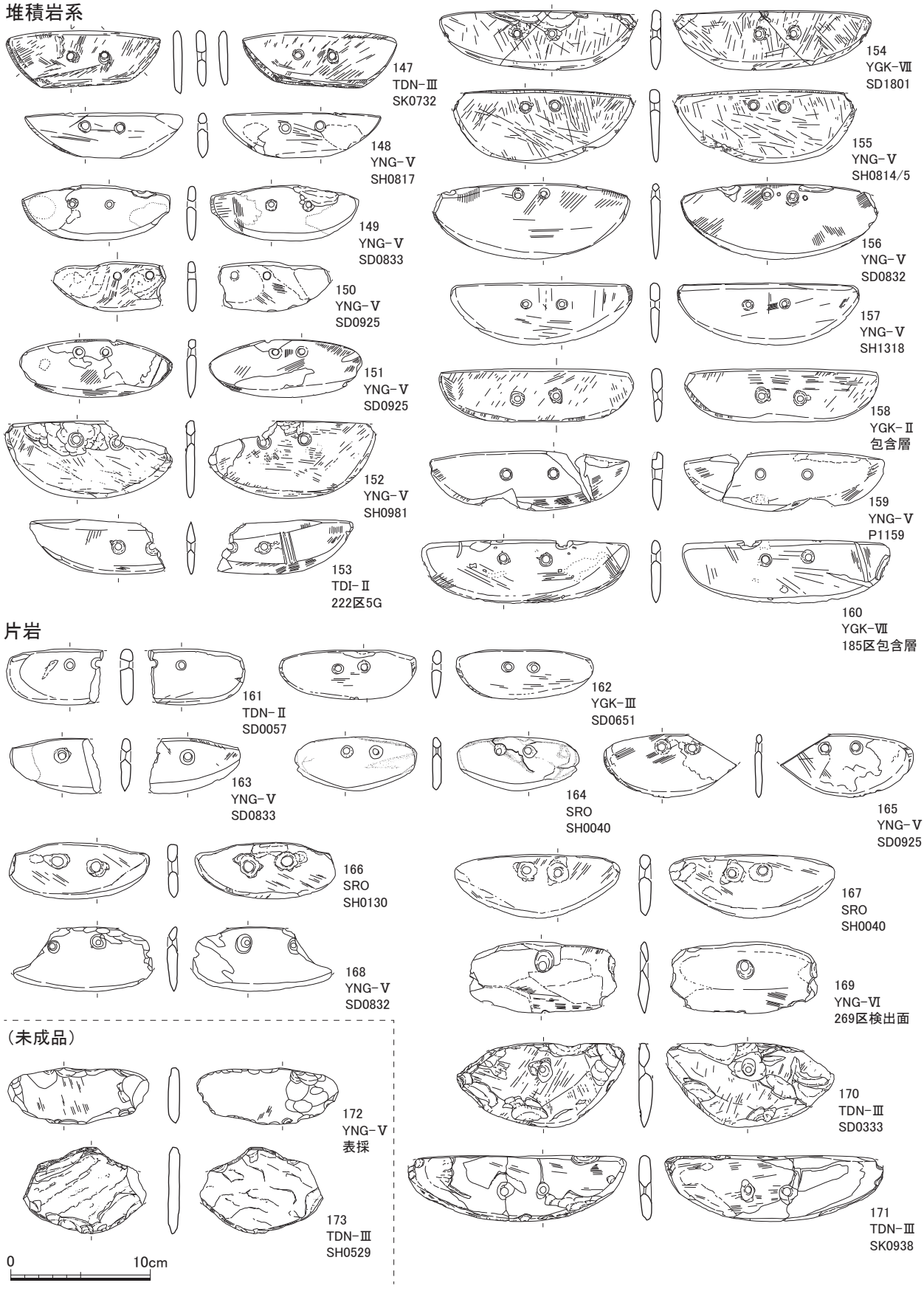


図 260　その他石材の石庖丁と未成品（1/4）

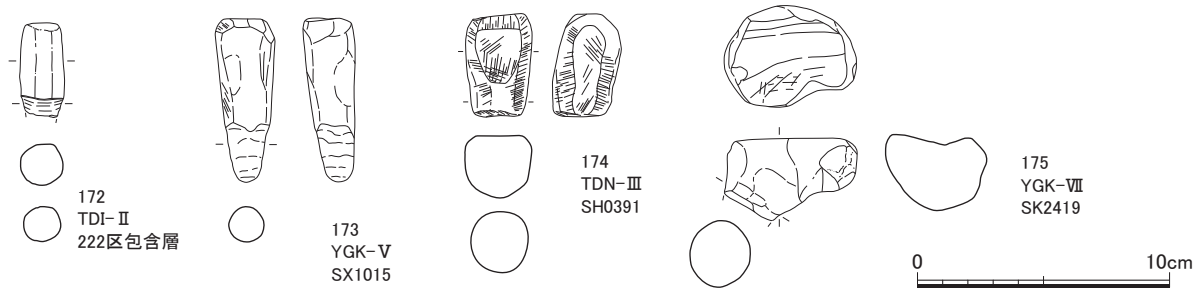


図 261　磨製石錐（穿孔具）（1/3）

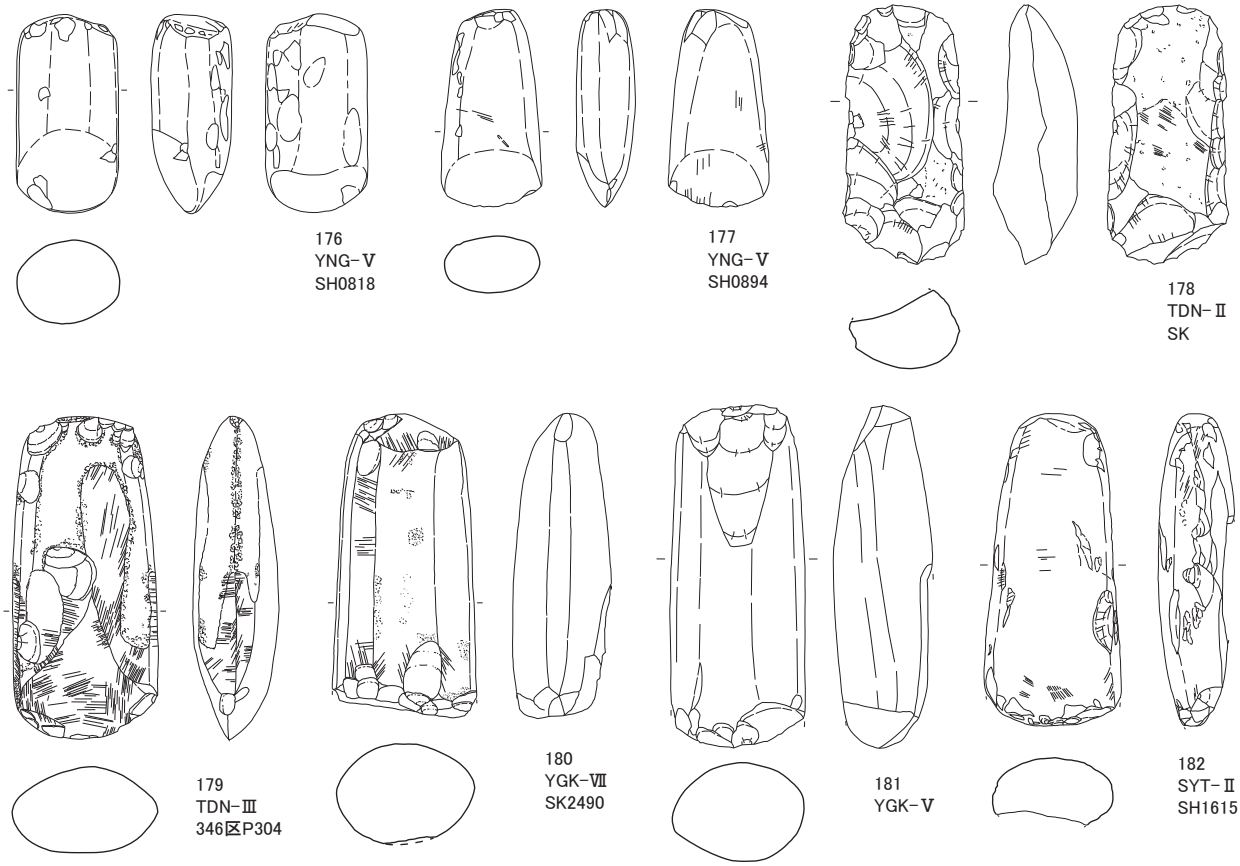
区包含層出土の大型の柱状片刃石斧で、刃先を僅かに欠損するがほぼ完形である。身の主軸と平行する縦方向に葉理が入る縦目取りで、石材はあまり風化していない黒色の層灰岩である。また、数は少ないが層灰岩製片刃石斧の再加工品、未成品、素材剥片が出土している（図 264）。211 ～ 214 は縦長の素材剥片に部分的な調整剥離が施されており、小型の扁平片刃石斧の未成品とみられる。215 は側縁に柱状片刃石斧の抉りの痕跡が残ることから、破損後に扁平片刃石斧への再加工を試みたとみられる。216 は体部の中央に擦切痕が残り、裏面は剥落していることから、元は片刃石斧の破片とみられ、小型の石ノミを作るために再加工を試みたものと考えられる。217 は柱状片刃石斧で、調整剥離痕が研磨面を切っている部分があることから、破損後の再加工品と考えられる。前述した原の辻遺跡以外では、層灰岩製片刃石斧の未成品や剥片が出土する事例は少ないため、生産と流通の実態が明らかになっていないが、本遺跡では完成品と未成品（または素材）の双方が供給されていた可能性がある。

石鏃は、石庖丁に対して出土数が極めて少ないうえ、破片が多く全形が判明するものが少ないが、基本的には刃部が内湾する曲刃形が主体とみられる（図 265）。刃部断面形は明確な片刃のものはなく、左右非対称の偏両刃が多い。石材は、石庖丁等に用いられる菫青石ホルンフェルス製とその他の堆積岩系石材があり、前者が薄身である。また、226,227 は未成品とみられる。石鏃の盛行期は他の大陸系磨製石器群と同様に前期後半～中期前半とみられるが、後期の遺構から出土しているものも少数ある。なお、石鏃とした石器が全て収穫具としての機能・用途であったかについては再検討が必要である。

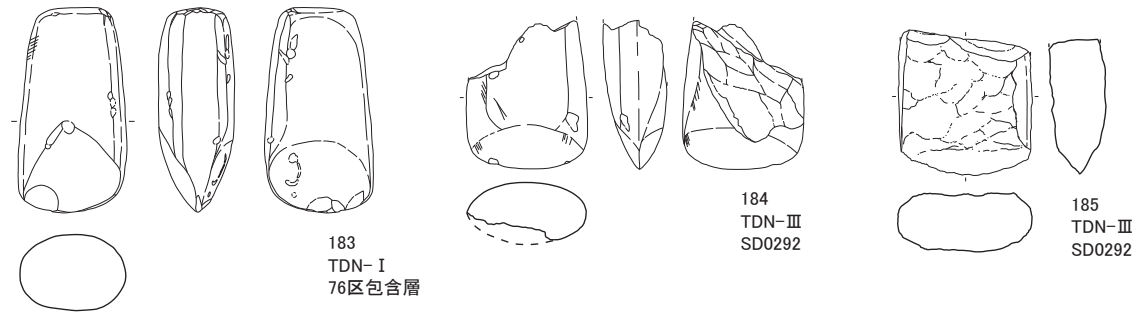
紡錘車は、片岩系の石材製が最も多く、ほかに滑石や堆積岩系の石材が用いられている（図 266）。滑石製で厚手のものは古墳時代以降の混入品の可能性がある。231 は中期の壕跡である吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 SD1801 の最下層出土で、放射状の線刻が施されている。また、穿孔途中の痕跡が残る未成品も出土している。両面からの敲打後に回転穿孔されるものが多く、石庖丁の穿孔方法と共通している。このほか、245,246 のように石庖丁の破片に調整剥離や研磨整形などの再加工が施されて紡錘車に転用されたものも認められる。

中期の打製石器は、遺跡南部の中心的な集落域を中心に、竪穴建物跡や土坑から多数出土している。前期後半代と同様、器種は打製石鏃、石錐、スクレイパーであるが、石核、微細剥離痕のある剥片、使用痕のある剥片などのほか、膨大な量の不定形剥片や細片が出土しており、日常生活用の便宜的な利器として大量に消費されていたことがうかがえる。特徴的な石器として、両側縁に浅い抉りを有する、いわゆる「アメリカ式石鏃」が中期前半に出現している。現時点では系譜が辿れないが、同石鏃は筑後北部地域でも中期前葉に出現することが明らかになっており（吉留 2004）、共通する。図示したのは 4 点で、図 267-247 は吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 184 調査区 SJ1716 甕棺墓（須玖式）の棺内から出土しており、その他の 3 点は集落域から出土している。石材は、248 が黒曜石で、その他の 3 点が安山岩で

今山石斧



高槻型石斧



その他の石材

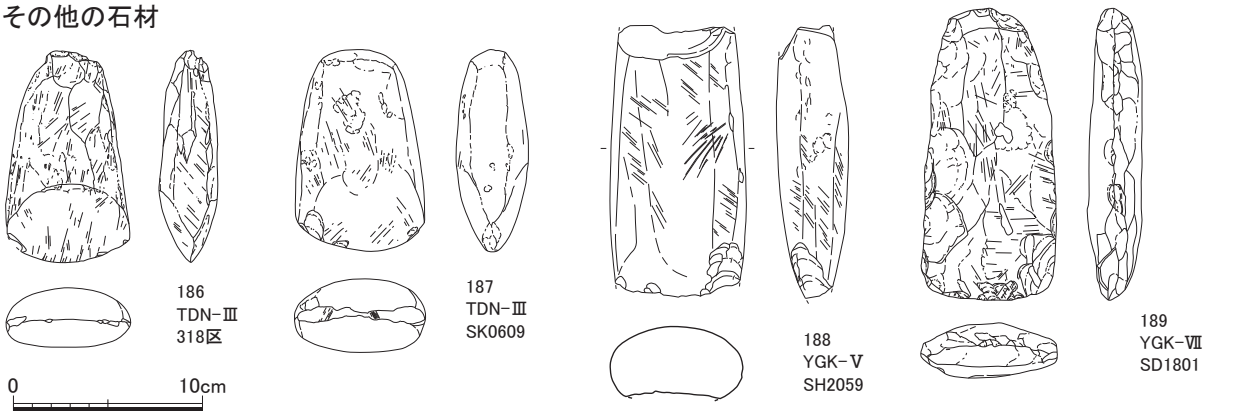


図 262　太形蛤刃石斧（1/4）

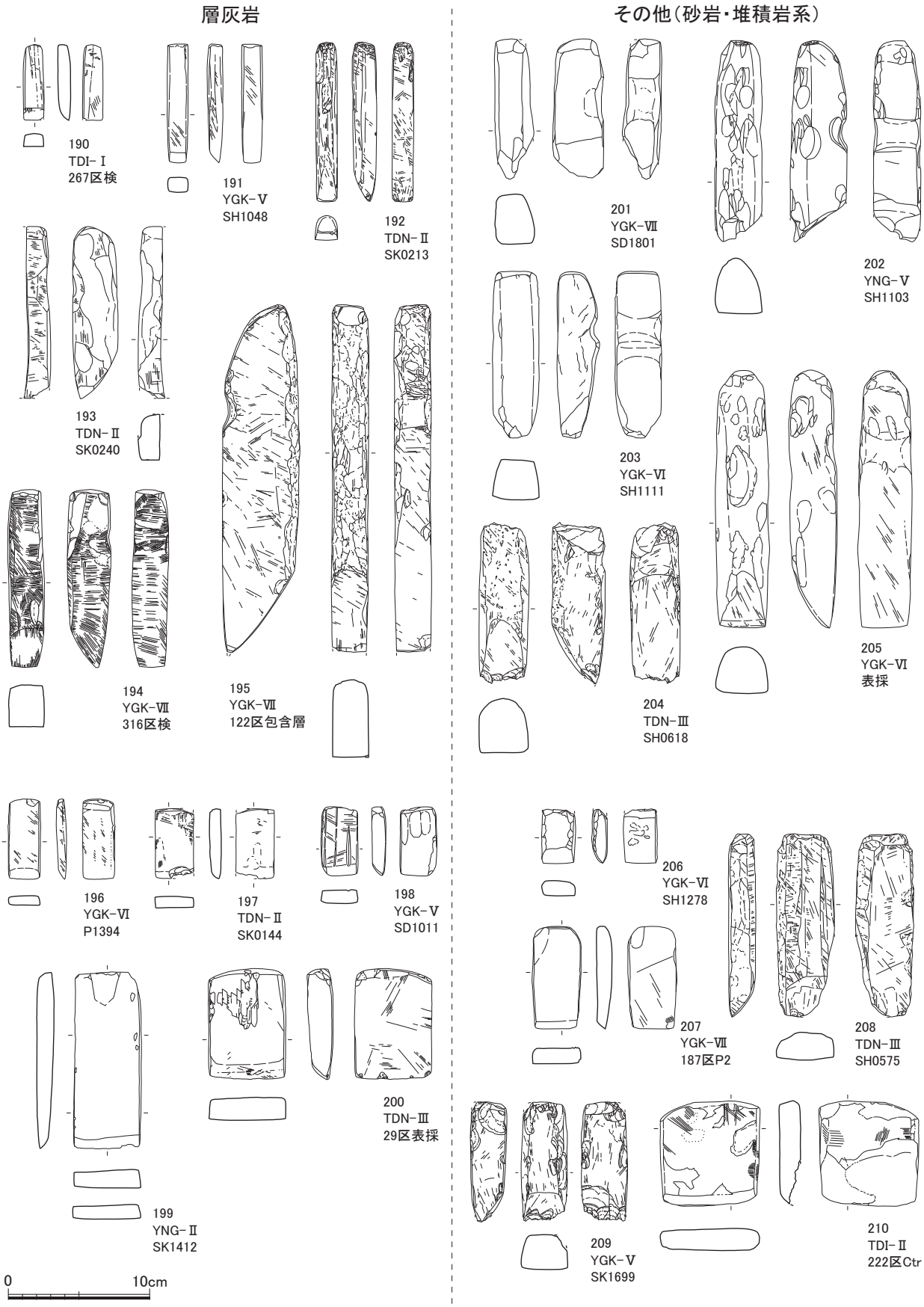

層灰岩
その他（砂岩・堆積岩系）
190
TDI-Ⅰ
267区検
191
YGK-Ⅴ
SH1048
192
TDN-Ⅱ
SK0213
193
TDN-Ⅱ
SK0240
194
YGK-Ⅶ
316区検
195
YGK-Ⅶ
122区包含層
201
YGK-Ⅶ
SD1801
202
YNG-Ⅴ
SH1103
203
YGK-Ⅵ
SH1111
204
TDN-Ⅲ
SH0618
205
YGK-Ⅵ
表採
196
YGK-Ⅵ
P1394
197
TDN-Ⅱ
SK0144
198
YGK-Ⅴ
SD1011
206
YGK-Ⅵ
SH1278
207
YGK-Ⅶ
187区P2
208
TDN-Ⅲ
SH0575
200
TDN-Ⅲ
29区表採
199
YNG-Ⅱ
SK1412
209
YGK-Ⅴ
SK1699
210
TDI-Ⅱ
222区Ctr
0
10cm

図 263　片刃石斧（1/4）

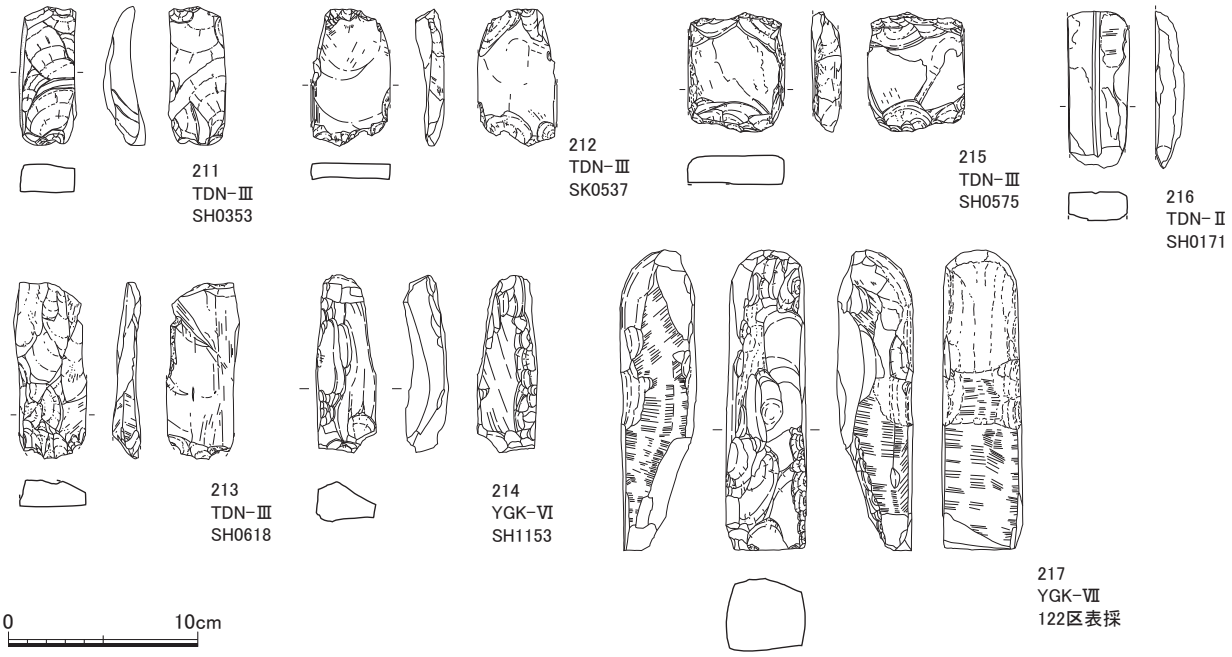


図 264　片刃石斧未成品・再加工品（1/4）

ある。このほか、長崎県佐世保市針尾島産とみられる暗灰色の黒曜石製石鏃が 3 点あり、251 は土坑墓から、他の 2 点は集落遺構から出土している。時期は前期後半～中期とみられ、少ないながらも同石材が用いられている。

また、遺跡南部の田手二本黒木地区Ⅲ区 356 調査区 SK1503 土坑から、角礫状の黒曜石原石 3 点が一括で出土している（254 ～ 256）（『211 集』）。伊万里市腰岳産とみられる扁平な板状または角礫状で、外面には自然面が残り、剥片剥離の痕跡は認められない。重量は 254 が 118.0g、255 が 156.3g、256 が 129.8g である。共伴土器がないため所属時期が不明であるが、縄文土器は出土しておらず、周囲の状況等から弥生時代前期～中期に属する可能性があり、原産地から離れた消費地での石器石材の埋納事例として注目される。同様に、佐賀市久保泉町の鈴熊遺跡で腰岳産とみられる長さ 13cm 前後の黒曜石原石 4 点が ST002 古墳墳丘下から出土しており、集積されていた可能性が指摘されている（佐賀県 1993）。なお、遺跡南部の集落域などから出土した未報告資料のなかに径 2 ～ 3cm 程度の小型円礫の黒曜石原石が複数あり、伊万里市腰岳産とみられるが、これらは石器石材として集落に持ち込まれたものの、剥片剥離を行うには小さすぎると判断され、廃棄されたと考えられる（『163 集』）。

中期後半になると遺跡全体で集落規模が縮小することから、総体的に石器が減少している。遺跡南部の集落域では、竪穴建物跡や土坑から石器が出土しており、打製石鏃の未成品も認められることから、中期末頃までは石器の製作と利用が継続していたと考えられる。

墳墓出土の石器

弥生時代前期末以降には甕棺墓地の造営が活発化することに伴い、墓域からも石器が出土するようになる。甕棺墓や土坑墓から出土している石器は武器形石器だけで、器種は磨製石剣、磨製石鏃、打製石鏃の 3 種類である。墳墓出土の石器は、副葬品である場合と、殺傷人骨に伴う場合の両方がある。なお、武器形石器総体については（城門 2008：『177 集』）、墳墓出土石器については『222 集』でまとめられているため、ここでは図は割愛し、概要のみ述べる。

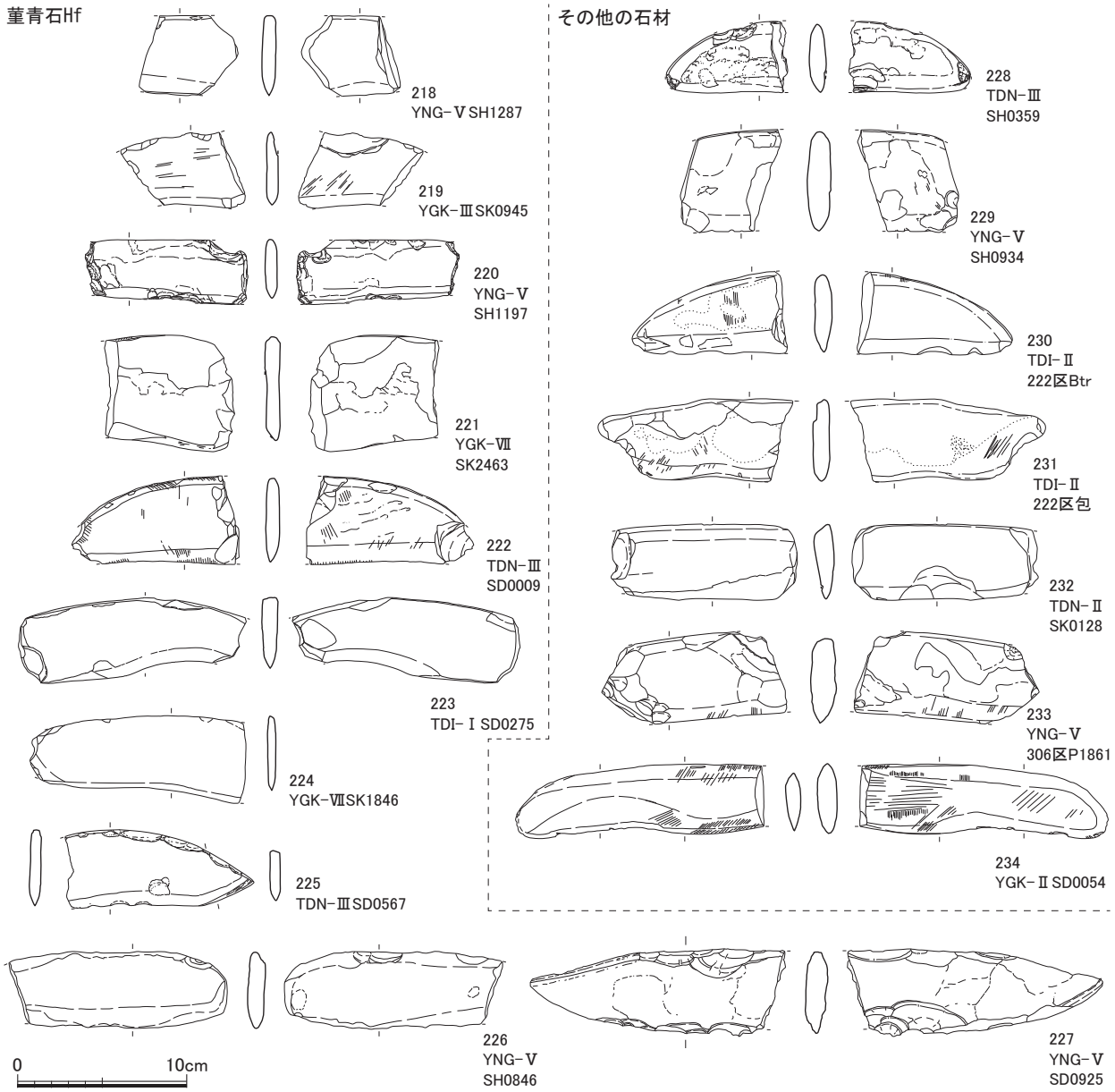


図 265　石鎌（1/4）

前期末～中期初頭には、2 基の甕棺墓（吉野ヶ里地区Ⅰ区 SJ0069、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区 SJ1229）でそれぞれ棺内から磨製石剣の破損した切先片が出土しているが、人骨が残存していないため詳しい出土状況は明らかでない。中期初頭～中期前半とみられる吉野ヶ里地区Ⅱ区 330 調査区 SP1411 土坑墓からは墓坑底面付近から打製石鏃、磨製石鏃、磨製石剣の破片など 8 点が出土している。人骨は残存していないが、石器はいずれも破損していることから、殺傷人骨に伴う可能性がある。また、中期前半（汲田式）の甕棺墓から打製石鏃を伴うものが 4 基（各 1 点）、磨製石鏃を伴うものが 1 基（1 点）出土しているが、人骨が残存していないため詳細は明らかでない。

中期後半（須玖式）の甕棺墓からは、打製石鏃を伴うものが 2 基（各 1 点）、磨製石剣の切先を伴うものが 2 基（各 1 点）あるほか、棺内から磨製石剣の切先 1 点と打製石鏃 2 点を伴う墳墓もある（吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 184 調査区 SJ1740 甕棺墓）。中期末（立岩式）の甕棺墓からは、打製石鏃を伴うものが 1 基（吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 184 調査区 SJ1716 甕棺墓）ある。また、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区

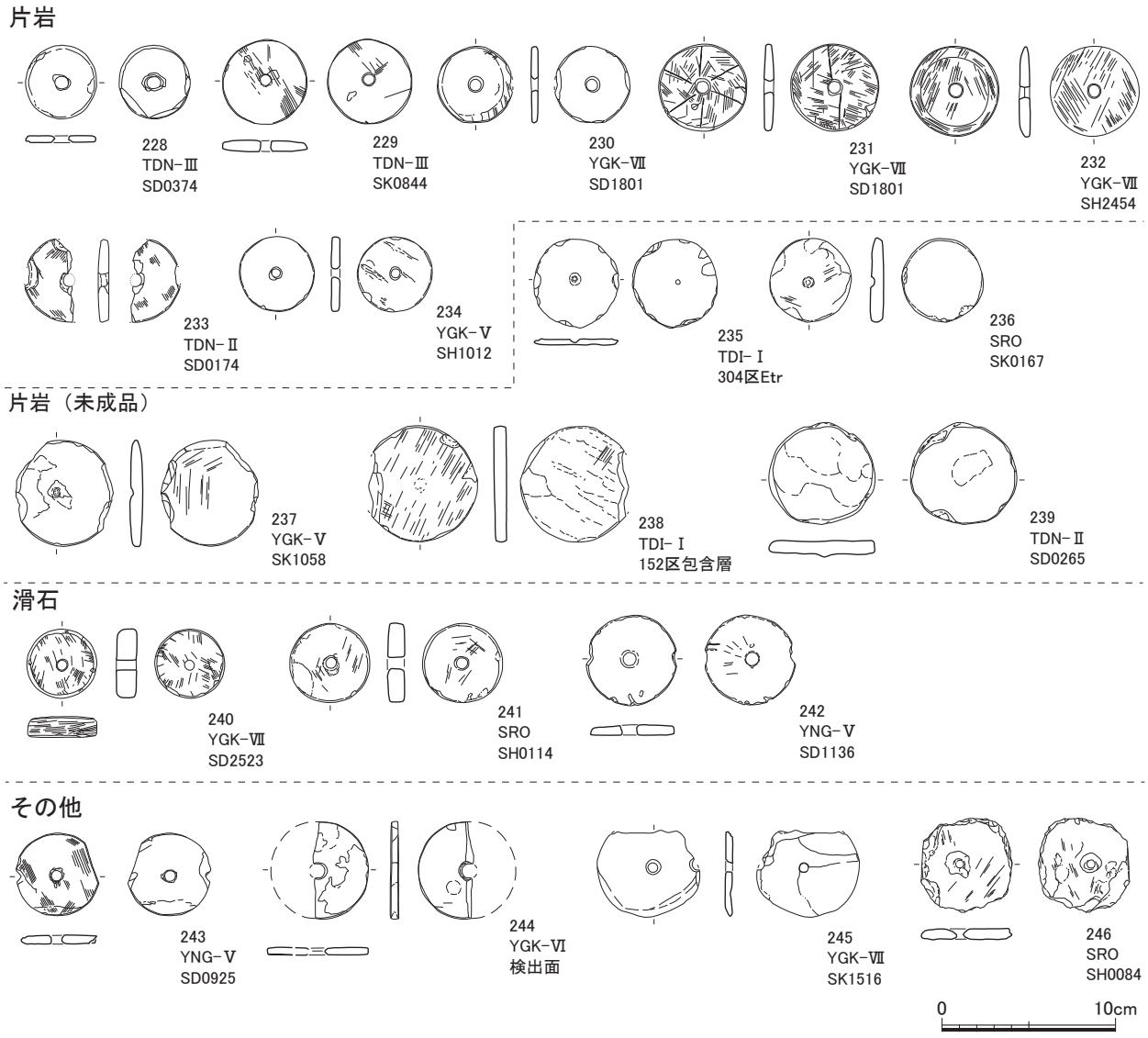


図 266　紡錘車（1/4）

SJ0312 甕棺墓からは、残存状況の良くない壮年男性人骨とともに鏃 10 点が出土しており、一部は人骨に嵌入した状態で出土していることから、いわゆる殺傷人骨に伴うものと判断される。また、同区域の SJ0248 甕棺墓（後期初頭：桜馬場式）の棺内からは磨製石鏃が 1 点出土しているが、人骨は残存しておらず、副葬か殺傷人骨に伴うかは明らかでない。なお、二塚山遺跡（上峰町・吉野ヶ里町）においても、13 号甕棺墓（後期初頭）の棺内から磨製石鏃が出土しており（佐賀県 1979）、石器副葬の下限と考えられる。

以上のことから、墳墓出土の石器は前期末頃に出現し、後期初頭まで継続していたことがわかる。中期後半～末頃までは竪穴建物跡や土坑から石器が出土しているが、後期以降は集落域で石器が減少し、徐々に鉄器化が進行する時期にあたるが、墓域では少ないながら石器が残存している。また、北部九州地域全体でみても、佐賀平野は打製石鏃が中期末頃までは認められ、打製石器が比較的遅くまで残存した地域と考えられるが、その背景としては伊万里市腰岳と多久市鬼の鼻山という 2 大石材原産地が比較的近くにあり、石材流通ルートが遅くまで機能していた可能性がある。なお、本遺跡では中期初頭から鉄器が出現しており、中期前半から中期後半にかけて甕棺墓に鉄器が副葬されていることなどから、

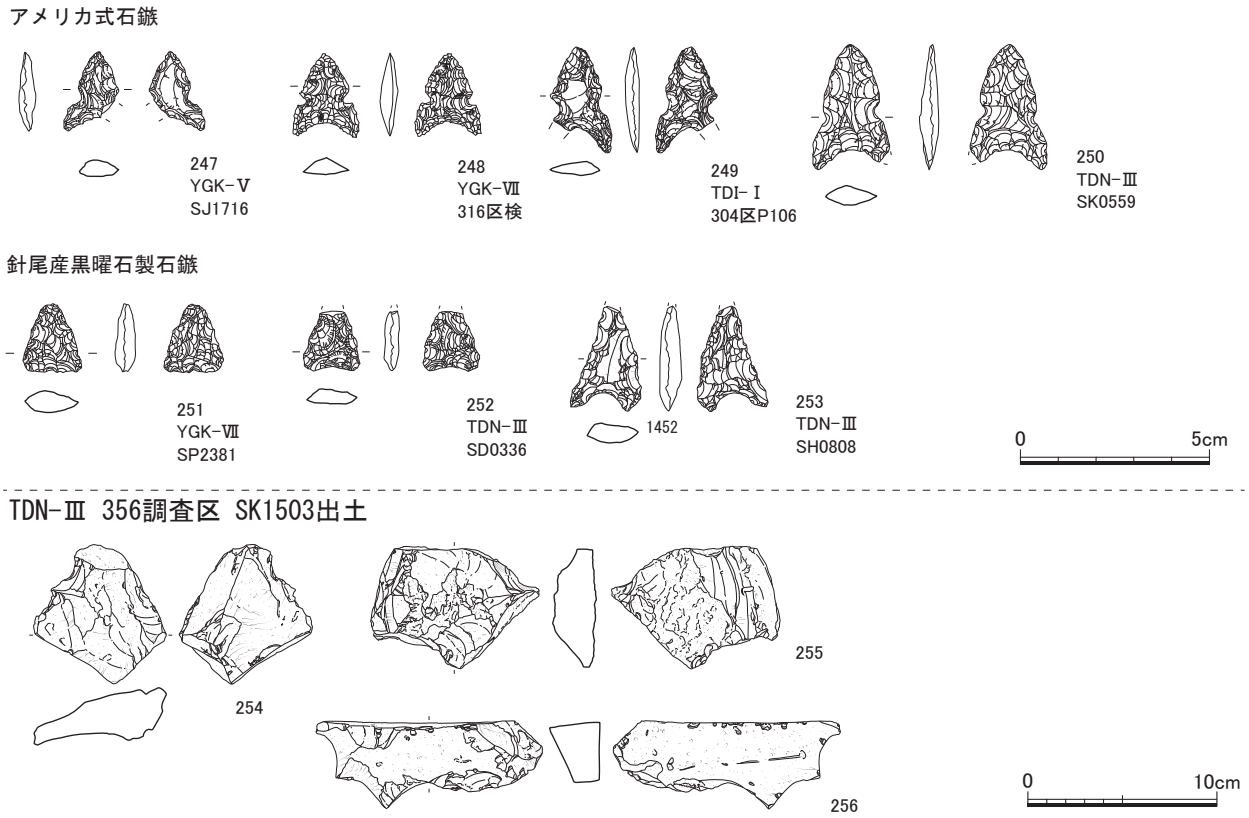


図 267　特徴的な打製石鏃（1/2）・黒曜石原石（1/4）

利器の鉄器化が遅れていたとは考え難い。そのため、使用目的に応じて石器と鉄器が使い分けられ、特に墓地では遅くまで石器が使われる何らかの理由があったと推測される。

（3）弥生時代後期の石器・石製品

弥生時代後期になると利器の鉄器化が進行し、一部を除いて石器の利用は衰退したと考えられる。後期にも明らかに残存する石器としては、石庖丁、砥石のほか、少量の石製品がある。このほか、後期の溝跡などからも多量の石器が出土しているが、混入の可能性もあり、後期に属するかどうかの判別は難しい。ただ､後期の竪穴建物跡や土坑などから出土する石器の量は中期に比べて明らかに減少している。

後期になっても穂摘具は完全には鉄器化しておらず、石庖丁の需要は継続していたと考えられる。中期に盛行していた立岩石庖丁や菫青石ホルンフェルス製石庖丁は、後期初頭～後期前半頃までは残存したと考えられるが、後期の遺構から出土する赤紫色泥岩製石庖丁は、立岩遺跡群で生産されたものではなく、北九州市域で産出する同系統の類似石材である可能性も指摘されている。傾向として、立岩石庖丁がやや暗い紫色を呈するものが多いのに対し、北九州産の石材はやや明るい色調であるといった差異はあるが、埋没環境の違いや風化による色調の変化などもあり、肉眼で両者を明確に判別するのは難しい。このほか、後期には後述する玄武岩質安山岩製石庖丁や、片岩、堆積岩系石材の石庖丁も認められ、中期までとは違ったありかたを示している。

後期の遺構から出土した石庖丁の形態は、背部が直線的な外湾刃半月形のほか、紡錘形や隅丸長方形状のものもみられるようになり、多様化している。また、中期に比べて小型化しており、紐穴の位置は背部に近いものが多いなど、北部九州地域の一般的な傾向と一致する。穿孔方法は基本的に両面から

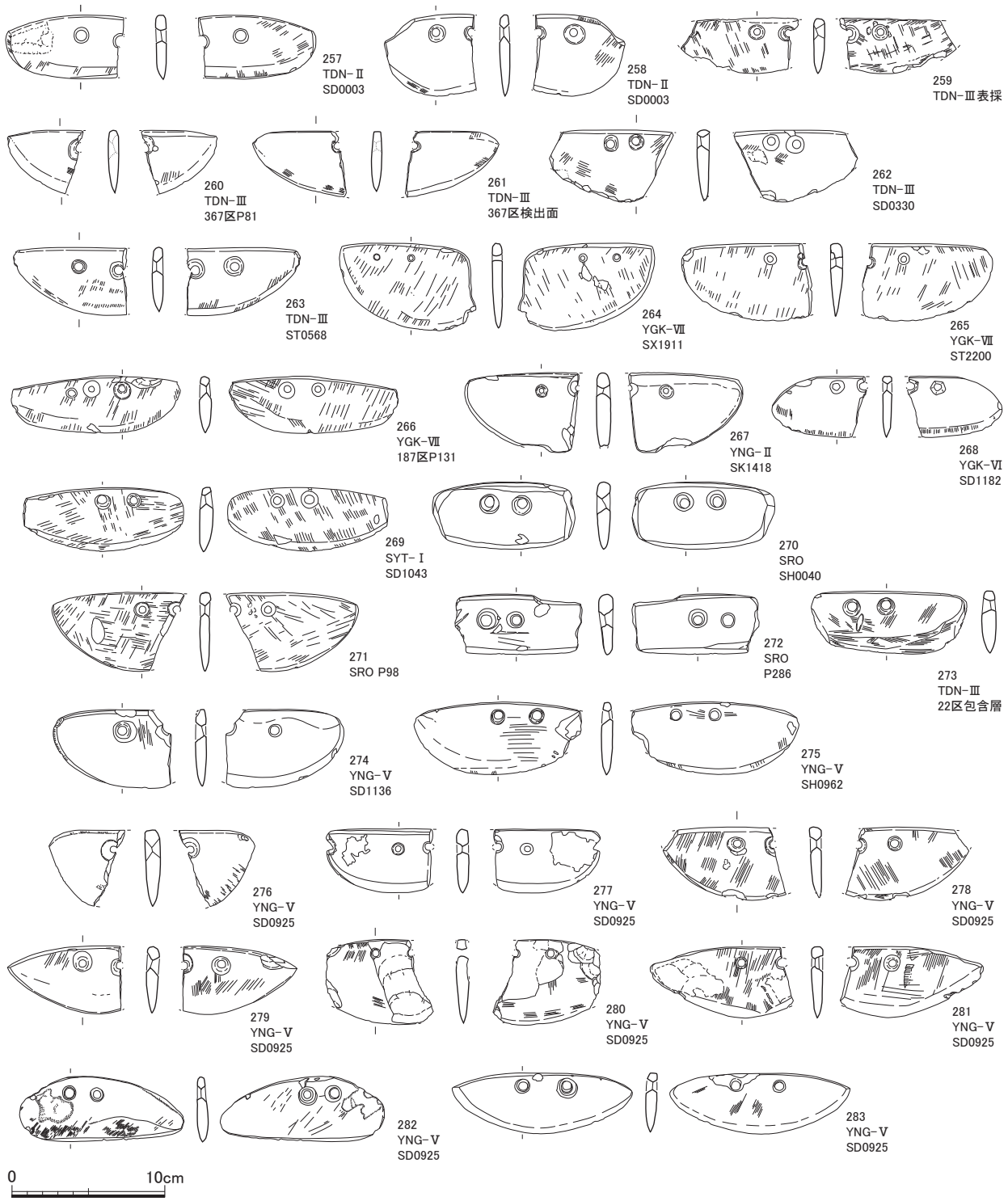


図 268　玄武岩質安山岩石庖丁（1/4）

の直接回転穿孔ばかりになるが、石材による差異が認められ、片岩系石材は孔断面形が左右非対称のものや孔径が左右で異なるものが多い傾向がある。また、石材を問わず外孔径と内孔径の差異が小さいものが増加しているほか、外孔と内孔の間が内湾するものがみられることなどから、穿孔具に鉄器（鉄錐？）が用いられた可能性がある。

弥生時代後期の石器では、玄武岩質安山岩製石庖丁（図 268,269）の盛行が特筆される。同石庖丁は、風化した表面の色調が暗～明灰色を呈し、黒色鉱物（鉄変質したカンラン石）をまばらに含む石材で、

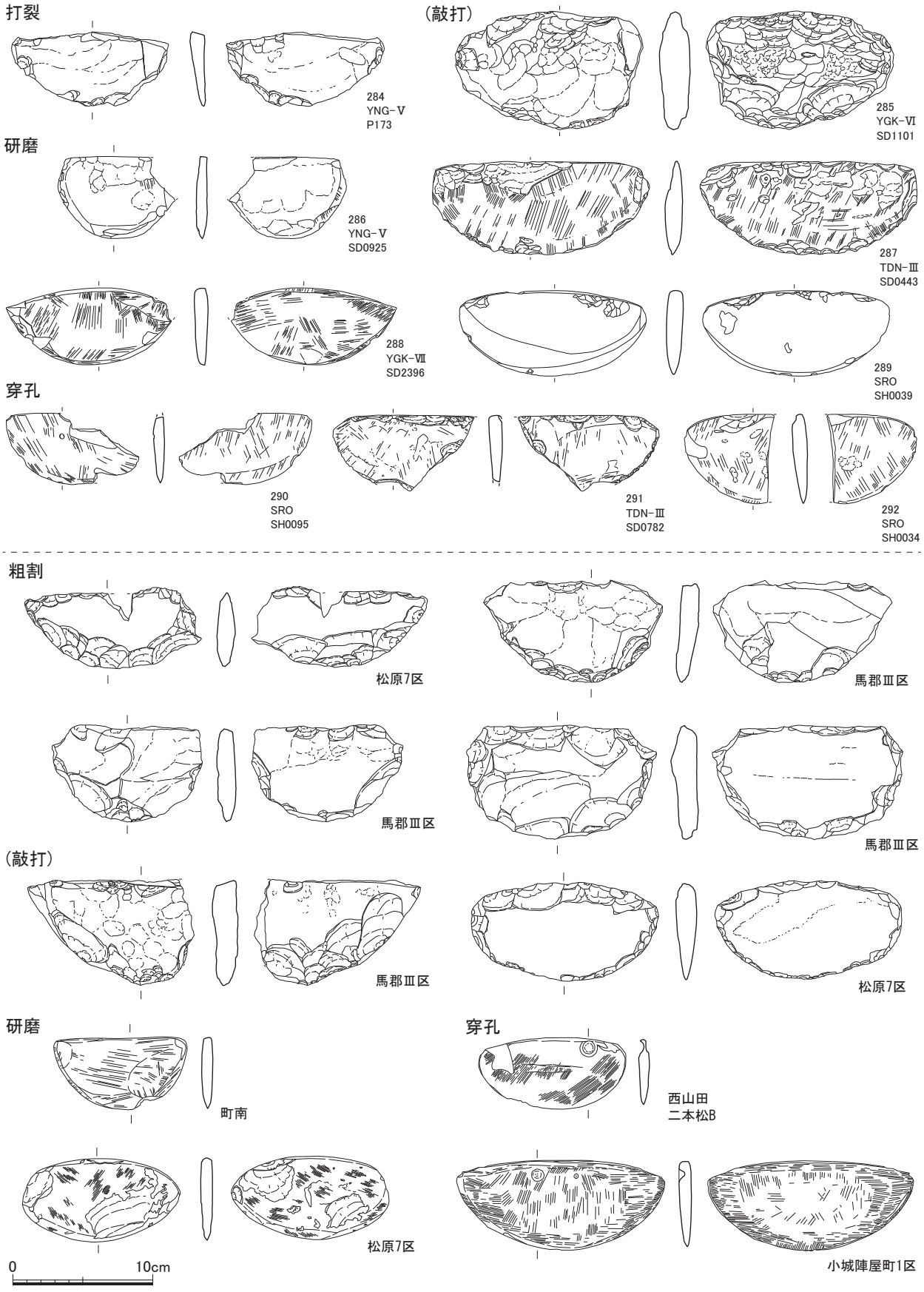


図 269　玄武岩質安山岩石庖丁未成品（1/4）

弥生時代中期末～後期初頭頃に出現し、終末期（～古墳時代前期初頭）まで継続している。分布範囲は佐賀平野東部地域を中心に肥前、筑後、筑前、唐津地域に及んでいる（渡部・能登原・米村・足立・小山内 2011）。本遺跡では完成品と未成品合わせて約 60 点が後期の壕跡や竪穴建物跡などから出土している。形態は背部が直線的な外湾刃半月形が多いが、紡錘形や長方形状もあり、規格性は高くない。また、未成品から復元される製作工程は、基本的には打裂→敲打→研磨→穿孔の順である。敲打整形は、285 のように体部の厚みを減らすために施されたとみられ、粗い敲打痕とやや細かい敲打痕が認められる。また、紐穴は両面からの直接回転穿孔によるが、268 は紐孔の形態が外孔、内孔ともに正五角形を呈する特異な例で、孔の内面には明確な稜線を有する。もう片方の紐孔も五角形状を呈するが、やや円形に近い緩やかな五角形状であることから、円形孔を作成したあとに五角形に整形されたと考えられる。現時点では加工具や加工方法は不明であるが、ノミ状の鉄器が使用された可能性が高い。

玄武岩質安山岩の石材原産地は多良岳東部の玄武岩～安山岩地帯と考えられ、なかでも有明海西岸につながる多良川河口付近で採取可能な板状礫が素材として選択されていた可能性が高い。ただし、原産地近辺は弥生時代後期の遺跡が少なく、製品の出土例が確認されていないことから、原産地付近に生産遺跡が存在したかは明らかでない。そのため、同石庖丁の生産と流通の実態はほとんど明らかになっていないが、現時点では、①原産地と離れた場所に生産地が存在し、そこから各集落に未成品または完成品が流通していた、②原産地から素材の状態で各集落に供給されていた、という２つのパターンが想定される。ただし、未成品の分布の特徴として、打裂・敲打段階の未成品は佐賀平野東部地域の限られた遺跡（神埼市馬郡遺跡Ⅲ区、吉野ヶ里遺跡、吉野ヶ里町松原遺跡）でしか出土していない。また、吉野ヶ里地区Ⅴ区西部に隣接する神埼市馬郡遺跡Ⅲ区で、同石材の未研磨の未成品 4 点が土坑からまとまって出土しているほか（神埼町 2001）、吉野ヶ里遺跡や松原遺跡では各工程の未成品が出土している（東脊振村 1997）（図 269）（渡部 2017）。以上のことから、石材原産地から素材の状態で吉野ヶ里遺跡一帯に持ち込まれ、完成品又は研磨整形済で未穿孔の未成品が各集落へ供給された可能性も考えられる。

弥生時代後期に玄武岩質安山岩製石庖丁が出現、盛行する背景としては、それまで北部九州地域の広域流通品であった立岩石庖丁や菫青石ホルンフェルス製石庖丁の供給が中期末頃に低下したことへの対応として、新たに石材産地の開発が行われた結果と考えられる。なお、肥前西部地域（武雄、諫早、雲仙）では弥生時代後期に在地の安山岩系石材を用いた片刃石庖丁が製作・流通していることについて、同地域で弥生時代後期に盛行する台付甕との関連性も指摘されている（宮崎 2019）。石庖丁や土器の様相から、弥生時代後期の佐賀平野や西北部九州地域内部の地域間関係に変化が生じたことが窺える。

弥生時代後期の砥石は細粒化する傾向があるが、特に注目されるのが暗灰色頁岩製砥石[2)]である（図 270-293 ～ 299）。石質は細粒、緻密であることから仕上げ砥として使用されたと考えられる。破損品が多いが、形態的には柱状が多く、砥面が著しく研ぎ減りしているものが多いうえ、破損面を砥面として再利用した小型品もみられ、置砥、手持砥の両方で使用されていたと考えられる。また、同砥石の特徴として、ほとんど全ての砥面に二次的な黒色物が付着しているものが多い。未分析のため黒色物の成分は不明であるが、研ぎ出す対象物（鉄器？）に関係する可能性があり、今後は科学分析などの詳細な検討が必要である。なお、暗灰色頁岩の石材原産地は明らかになっていないが、対馬島の浅茅湾周辺が候補地と考えられている（森 2014）。また、暗灰色頁岩製砥石とともに砂岩製の砥石も多用されている（300 ～ 305）。石材の特徴から複数種類の砂岩が用いられているが、原産地は明らかになっていない。

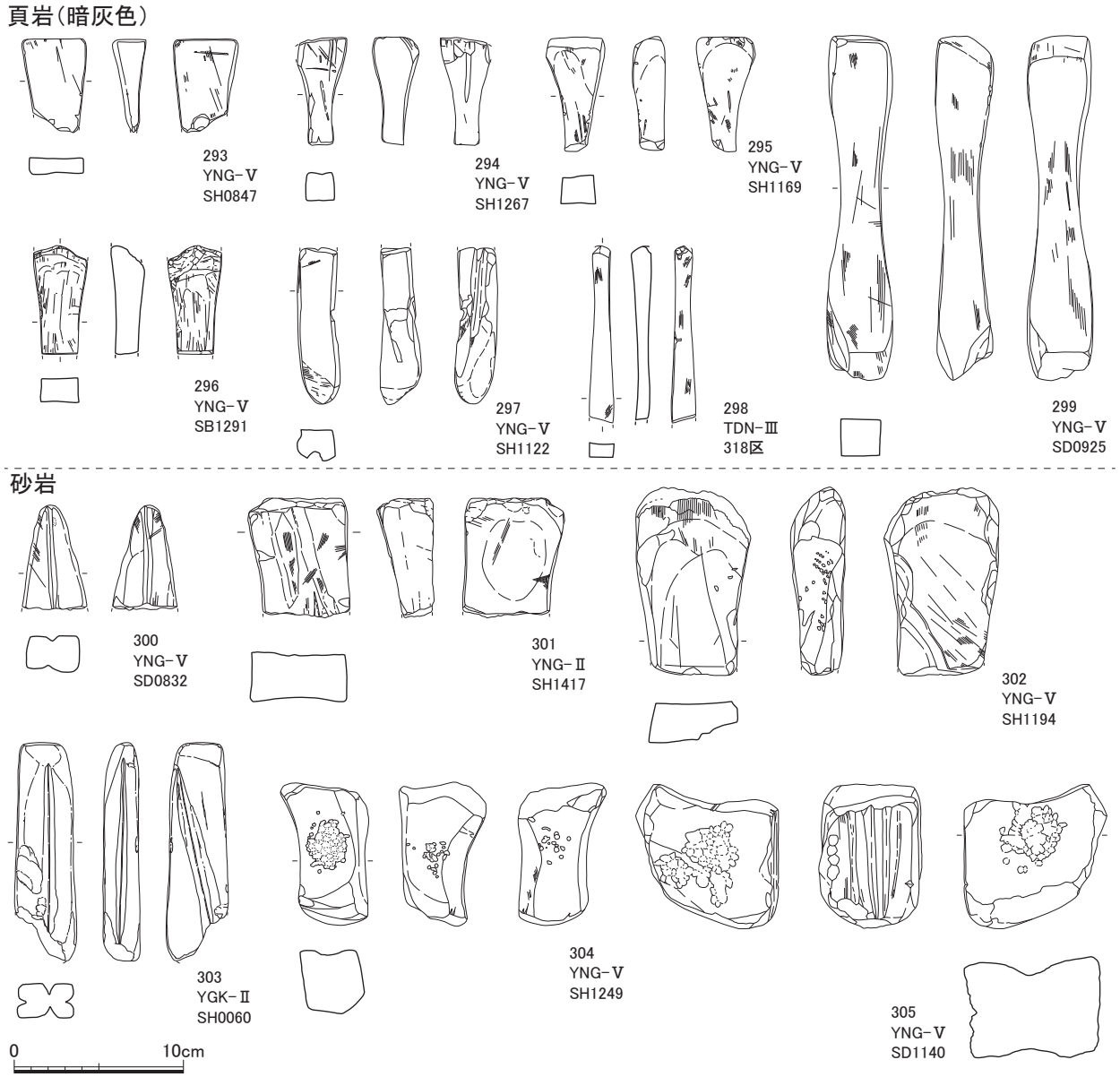


図 270　砥石（弥生時代後期）（1/4）

砥面には鋭い線状痕が残るものや、台石、敲石などとして用いられたとみられる敲打痕が残るものもある。このほか、礫石器として完形の石杵が吉野ヶ里地区Ⅴ区 SD0925 環壕の 8 アゼ～ 9 アゼ間から出土している（図 187）。平面形はＬ字に近く、下端部の磨り面には朱とみられる赤色顔料が付着している。

（4）特徴的な石器・石製品

ここでは、詳細な所属時期が不明であるが、弥生時代中期～後期に属するとみられる特徴的な石器、石製品について述べる（図 271）。

石製把頭飾（306）

2 点出土している。1 点は図示していないが、吉野ヶ里遺跡で過去に採集されたもので、石材は蛇紋岩とされる（佐賀県 1976）。採集地点は遺跡南部の田手二本黒木地区と推定されており、前期～中期の集落に伴う可能性が指摘されている（徳永 1994）。306 は吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 ST1001 北墳丘墓の

北面部撹乱出土で、頂部を欠損する（『132 集』）。素材は細粒角閃石斑糲岩とされ、佐賀平野北側の脊振山系で産出する在地の石材と判断されている（徳永 1994）。神埼地域では他に神埼市荒堅目遺跡で不時発見された褐鉄鉱製 1 点が存在する（佐賀県 1976）。

石鋸（307）

弥生時代中期前半代に築造された遺跡南端部の SX0222 盛土遺構（南祭壇・墳丘墓？）の南東部、盛土内にあたる田手一本黒木地区Ⅰ区 153 調査区の包含層（中層）から出土した（『219 集』）。丸みを帯びた小型の扁平な板石を素材とし、下半部が断面 V 字形をなしている。下辺の刃先部分は潰れて丸みを帯びているが、V 字部分の両側面は縦方向の細かな擦痕が残存する。石材は砥石に多用されている軟質でやや粗い赤茶色の砂岩である。所属時期は弥生時代中期（前半代か）と考えられる。

打製石庖丁（308）

完形の打製石庖丁で、長さ 14.1cm、幅 5.33cm、厚さ 1.2cm、重量 113.2g を測る（『207 集』）。肉眼観察であるが、石材は香川県金山産サヌカイトとみられる優品である。遺跡中央部の吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区 SD1101 壕跡の 7 アゼ以西から出土した。SD1101 は弥生時代終末期に形成された北内郭を構成する 2 重環壕の外壕にあたる。本資料は、瀬戸内地域での同石庖丁の盛行期である弥生時代中期後半～中期末頃に搬入されたとみられ、SD1101 壕に伴うものではなく、周囲の遺構からの混入品と考えられる。背部には手擦れとみられる面的な摩滅の痕跡が認められるほか、刃部は剥離面を切って部分的に研磨整形が施されていることから、実際に使用されていたと考えられる。本遺跡出土石器（玉を除く）のなかで最も遠隔地から搬入された資料であり、金山産サヌカイト製石庖丁の流通範囲の西限と考えられる [3)]。これまでのところ佐賀平野では唯一の出土例であり、瀬戸内地域からの搬入の契機や背景などが注目される。

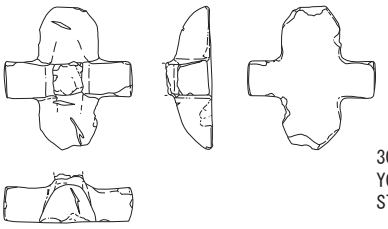
棹秤石権 1（309）

長さ 6.0cm、幅 3.4cm、厚さ 2.4cm、重量 72.1g の石製品で、頂部には両面からの回転穿孔による径 0.3cm の孔を有する。孔外径は 0.8cm で、両面からの回転穿孔によるが内面は僅かに左右非対称である。裏面は平坦であるが、主面の孔部分は表面が抉れており、側面環下半部が膨らむ形状をなす。各面ともに平坦に研磨整形されており、部分的に粗く細いケズリ状の調整痕が残る。横断面形は各面が僅かに膨らむ隅丸長方形を呈する。石材は黄白色を呈し、軟質の堆積岩系とみられる。報告当時は不明石製品（重りか）とされていたが（『177 集』）、その後、石製棹秤権であることが明らかになった [4)]（武末 2012, 輪内 2016）。出土地点は遺跡南部の吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 316 調査区東端部の SX2487 不明遺構で、未完掘であるが土坑とみられ、埋土からは古代の須恵器とともに弥生時代中期前半～中期後半の土器片が出土していることから時期の絞り込みは難しい。断定はできないが、周囲の遺構の分布状況からみて中期前半～中期後半の集落に伴う可能性がある。

棹秤石権 2（310）

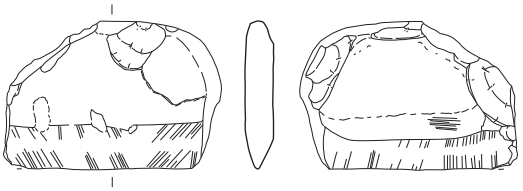
長さ 4.2㎝、幅 1.8㎝、厚 1.9cm、重量 18.4g の小型品で、頂部に約 1.5 ～ 2㎜の小孔を有する。孔内部には土が詰まっているが、貫通しているとみられる。孔の両側は頂部に向かって僅かに抉れており、体部との間に僅かな段差を有する。底部は平坦に整形されており、体部は四面が平坦に面取り整形されて断面方形を呈する。下端部は各側面から底部に向かって削り出されて窄まっており、加工痕から鉄製のノミ状工具で整形された可能性がある。石材は暗灰色頁岩で、前述した弥生時代後期に盛行する砥石

石製把頭飾



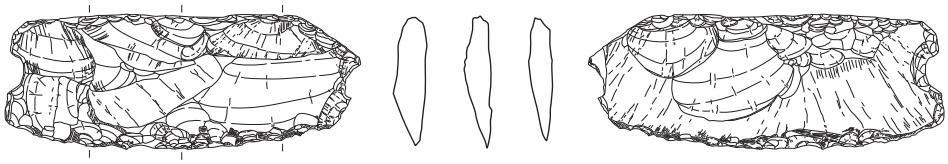
306
YGK-Ⅴ
ST1001北面撹乱

石鋸



307
TDI-Ⅰ
153区包含層

打製石庖丁

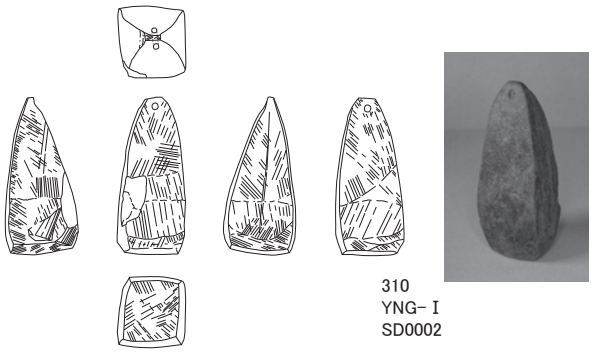


308
YGK-Ⅵ
SD1101

0 10cm

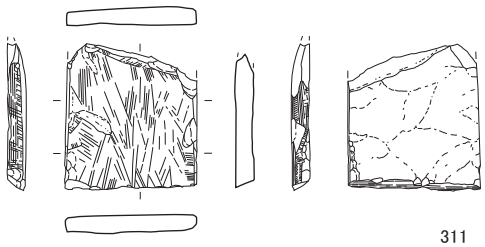
石権（棹秤権）

309
YGK-Ⅶ
SX2487



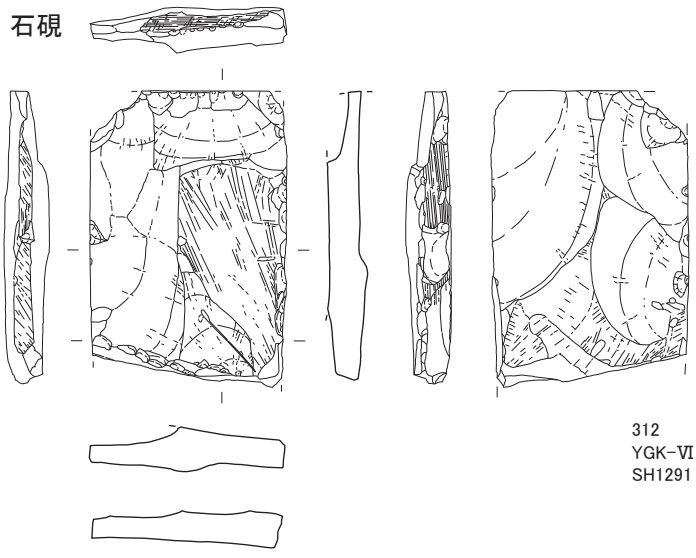
310
YNG-Ⅰ
SD0002

研石



311
TDI-Ⅰ
SD0026
SD0027
切合

石硯



312
YGK-Ⅵ
SH1291

0 10cm

図 271　特徴的な石器・石製品（1/3,1/2）

の石材と同一とみられる。材質は不明だが全体的に黒色物が面的に付着している。出土地点は吉野ヶ里地区Ⅰ区 SD0002 外環壕の下層で、後期前半新相～後期後半古相に属すると考えられる。

研石（311）

長さ 3.85+㎝、幅 3.5㎝、最大厚 0.5cm、重量 11.0g。小型方形状の板石で、上端は欠損している（『222 集』）。左右両側縁はごく僅かだが平行していない。主面（図の左）はほぼ平坦に研磨整形されているが、縦断面図のように上部が僅かに厚く、中央から下部は僅かに窪んでいる。裏面は剥離面のままであるが、左辺下部に整形目的とみられる微細な剥離痕が残る。両側面は主面側からの擦切による分割後、研磨による面取り整形が施されている。側面の研磨整形は、主面右側面が斜方向の細かい研磨痕の上に身の長軸と平行する縦方向のやや鋭い研磨痕が認められる。左側面は、身の長軸と平行する縦方向のやや鋭い研磨痕の上に斜方向の細かい研磨痕が認められる。また、下端部は傾斜しており平坦面を有するが、石材の自然面（礫面）とみられ、研磨整形は施されていない。その他、主面左側には「コ」の字形の鋭い加工痕が２ヶ所に認められるが、表面を整形する際のノミ痕とみられる。以上のことから、本資料は方板形研石（吉田 1993）の可能性がある。出土遺構は遺跡南端部に位置する田手一本黒木地区Ⅰ区 222 調査区 SD0026・SD0027 溝の切合部分で、共伴土器がないため遺構の時期は不明である。周囲は鎌倉時代末期の寺院跡（妙法寺跡）に関連する遺構・遺物が多く出土している区域であるが（『132 集』,『211 集』）、弥生時代の遺構からの流れ込みと考えられる。

石硯（312）

長さ 7.85+㎝、幅 5.2㎝、最大厚 1.2㎝、最小厚 0.4㎝、重量 57.1g。長方形の板石で、下端は斜めに折損している（『222 集』）。主面（図の左）は右側に研磨による平坦面を有し、その他は広く浅い剥離面である。B 面は左右に広い剥離面が残り、下部は浅い剥離面を切って研磨された痕跡が残る。裏面は全体的に凹凸があり、平坦面にはなっていない。また、下辺を除く三側縁には研磨による平坦面が形成されている。右側面は、斜方向の細く弱い擦痕の上に縦方向の粗い擦痕が認められる。左側面は、縦方向の細かい擦痕の上に、斜方向の粗い擦痕が認められる。上端面は、横方向の強い擦痕の上に斜め方向の弱い擦痕が認められる。なお、下端部は折れ面であるが、主面下辺左側には細かい調整剥離痕が連続することから、折れた後に整形された痕跡とみられる。主面右側の平坦面には斜方向の鋭い擦痕と弱い擦痕が認められる。また、右辺には整形目的とみられる調整剥離が研磨面を切って施されている。両面にみられる広い剥離面は、側面が整形された後に施されている。このことから、主面右側の平坦面及び下辺を除く３辺の整形が施された後に、全体的に厚みを減じる目的で施された調整剥離と考えられる。これらのことから、長方形板石硯の製作途中品、あるいは砥石から石硯への転用品の可能性がある。全体的に風化しているが、石材は黄褐色を呈する頁岩質で、金雲母状の粒子をまばらに含む。肉眼観察では、福岡市西新町遺跡出土の石硯と酷似している。出土遺構は吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区 SH1291 長方形竪穴建物跡で、弥生時代終末期に成立する２重環壕区画（北内郭）の内側に位置する。削平のため遺構の残存状況が悪く、共伴土器は細片のため所属時期を明確に判断できないが、周囲の状況から遺構の時期は弥生時代後期前半と考えられる（『207 集』）。

（５）まとめと課題

吉野ヶ里遺跡は弥生時代全時期を通じて継続する大規模・拠点的な集落であることから、弥生時代石器の出現、盛行、衰退の過程を把握することができる遺跡である。出土石器には多種多様な石材が用いられているが、遺跡近辺では地質環境的に石器製作に適した石材が採取できないことから、ほとんどの

石器が集落外部から供給されたものであり、消費地遺跡としての性格を強く示している。供給される石器は北部九州地域一帯で広く流通するものが多いが、東北部九州地域の高槻型石斧や、香川県金山産サヌカイト製打製石庖丁など遠隔地からの搬入品は、地域間交流のありかたを考える上で重要な資料である。また、近年の研究で明らかになってきた石権、石硯・研石[5]などの特徴的な石製品の存在は、弥生時代の社会がより複雑で高度な文化水準にあったことを窺わせるものであり、既存資料の見直しや再検討が急務である。特に、文房具である石硯、研石については、使用された墨の痕跡をどのように抽出していくかが重要と思われ、分析手法の開発も含めてさらなる検討が必要である。

今後の課題としては、膨大な未整理資料の整理を継続して進めることが前提であるが、石器の器種組成や石材比率を時期別、地区別に整理し、その変遷をより詳細に検討する必要がある。また、磨製石器の転用や再加工のありかたについても、石器製作の技術体系を明らかにする上で検討が必要である。石材原産地に関しては、近年の地球科学的手法の進展などにより研究が進んでいるが、原産地が不明のままの石器石材も数多く残っている。本遺跡のように多種多様な石材製の石器が出土することは、当時の物資流通のありかたが複雑であったことを示しており、遺跡の特性にも関わる問題といえる。これらの資料についても科学分析による石材原産地同定を進めていく必要がある。資料的に最も多い打製石器についても、剥片剥離技術の詳細な検討を進め、磨製石器と同様に石器製作の技術体系を明らかにする必要がある。このほか、石器から鉄器への転換過程についても、本項では詳細な検討を行うことができていない。本遺跡では石器、鉄器ともに豊富に出土していることから、遺構の時期的変遷と併せて詳細な検討を行うことで、利器の鉄器化過程の一端を解明することに寄与できると思われる。特に、石器と鉄器との共伴事例の検討や、石器製作に鉄製工具が使用された可能性などについては、今後さらに検討が必要と考えられる。

第 2 章第 2 節 4　註

1）武末純一氏の御教示による。

2）石材名称について、（森 2014）は青灰色泥岩としている。なお、297 の表面に残る凹部は、森氏が指摘する二枚貝の浸食痕跡とみられる。

3）乗松真也氏の御教示による。

4）石権の認定にあたっては武末純一氏、輪内遼氏の御教示を得た。

5）石硯・研石の認定にあたっては柳田康雄氏、久住猛雄氏、西谷正氏らより多くの御教示を得た。

第 2 章第 2 節 4　引用・参考文献（他は第 1 章第 2 節を参照）

兒玉洋志 2008「有明海北岸地域における弥生時代開始期の磨製石器の展開」『地域・文化の考古学―下條信行先生退官記念論文集―』

佐賀県教育委員会 1976「付　県下の新考古資料」『寺浦廃寺跡』佐賀県文化財調査報告書第 34 集

武末純一 2012「弥生時代の権―青谷上寺地遺跡出土例を対象として―」『福岡大学考古学論集 2』福岡大学考古学研究室

徳永貞紹 1994「弥生時代の石製剣把頭飾」『先史学・考古学論究』熊本大学文学部考古学研究室創設 20 周年記念論文集　龍田考古会

能登原孝道 2005「田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0001 環壕出土石器の概要」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 163 集

能登原孝道・中野伸彦・小山内康人 2007「いわゆる「頁岩質砂岩」の原産地について」『九州考古学』82　九州考古学会

森貴教 2013「弥生時代北部九州における片刃石斧の生産・流通とその背景 -「層灰岩」製片刃石斧を中心に -」『古文化談叢』69　九州古文化研究会

森貴教 2014「弥生時代における砥石使用形態の変化―石器から鉄器へ―」『季刊考古学』127

吉田恵二 1993「長方形板石硯考」『論苑考古学』天山舎（吉田恵二 2018『文房具が語る古代東アジア』同成社　所収）

輪内遼 2016「弥生時代の権衡―九州の新出資料を中心に―」『古文化談叢』76　九州古文化研究会

第３節　神埼地域における弥生時代遺跡の動態

本項では、吉野ヶ里遺跡の弥生時代集落と墓地の変遷過程とその特徴について、地域のなかで位置づけることを目的に、佐賀平野東部地域、特に神埼地域を中心に弥生時代遺跡の動態をみていくこととする。本来であれば、佐賀平野全体、ひいては北部九州地域全体のなかで検討する必要があるが、まだその段階には至っていない。以下では神埼地域における弥生時代集落と墓地の時期的変遷について、これまで報告されている遺跡を中心に述べるが、必要に応じて周辺地域の動向についても触れることとする。佐賀平野の地域区分及び地形区分[1)]は図 272 のとおりで、有明海北岸の推定海岸線については下山正一氏の研究（下山ほか 1994）を参照している。

１．縄文時代晩期から弥生時代前期の集落と墳墓

（１）縄文時代晩期後葉～弥生時代前期前半

吉野ヶ里遺跡の縄文時代晩期の様相については不明な点が多い。弥生時代初頭には、遺跡南部の段丘上で前期初頭～前期前半の土器を伴う断片的な溝が複数掘削されており、連続して環壕となる可能性がある。また、遺跡南端部西側の低地部では包含層から擦切孔石庖丁が出土しており（『222 集』）、明確な水田跡は検出されていないものの、集落出現当初から稲作農耕が行われていた可能性がある。吉野ヶ里遺跡は集落出現当初から神埼地域の拠点的な場所であった可能性があるが、溝（環壕？）に伴う竪穴建物跡などは確認されておらず、集落の実態は明らかになっていない。なお、弥生時代前期初頭～前期前半の神埼地域一帯では、溝（環壕）を伴う集落は他に確認されていない。

前期前半の集落としては、吉野ヶ里遺跡中央部の吉野ヶ里地区Ⅴ区、北部の志波屋四の坪地区Ⅱ区で円形竪穴建物跡が 1 棟ずつ確認されており、他には貯蔵穴とみられる少数の土坑がある。吉野ヶ里遺跡北側の志波屋六の坪（甲）遺跡では前期前半の竪穴建物跡が 1 棟営まれている。遺構の分布状況から、前期初頭～前期前半における吉野ヶ里遺跡の集落規模は小さく限定的で、志波屋・吉野ヶ里段丘上に 4 ～ 5 ヶ所程度の居住単位が点在していたと考えられる。

志波屋・吉野ヶ里段丘北側の山麓部では、船塚遺跡で晩期後葉の円形竪穴建物跡が 1 棟（神埼町 2000）、寺ヶ里遺跡で前期初頭の土坑 7 基が検出されている（佐賀県 1999）。低位段丘上の上志波屋七の坪遺跡では、自然流路跡から晩期後葉～弥生時代前期初頭の土器が出土している（神埼町 1996）。神埼地域の西側では、日の隈山北方の猿嶽 A 遺跡で前期初頭の土器が、帯隈山西部の鈴熊遺跡で抉入柱状片刃石斧が（佐賀県 1993）、西原遺跡で擦切孔石庖丁が（佐賀県 1983）、それぞれ出土しており、山麓南部に集落が展開していたとみられる。

沖積平野部では、巨勢川東岸の低位段丘裾部に位置する琵琶原遺跡で谷地形部の包含層から前期初頭～前期前半の土器や石器が出土しており（佐賀市 1993）、隣接する赤井手遺跡では前期前半の竪穴建物 4 棟と土坑からなる集落が展開し（佐賀市 1998）、若宮原遺跡では溝状遺構から前期前半の土器が出土している（佐賀市 1998）。周辺では、泉三本栗遺跡（下和泉三本栗遺跡）で前期前半の円形竪穴建物跡が 3 棟確認されており（佐賀市 1987）、巨勢川東岸付近の村徳永遺跡では土坑、貯蔵穴から前期初頭～前期前半の土器が出土している（佐賀市 1990,1991,1992）。近接する薬師森遺跡では土坑と溝から前期初頭の土器が出土し（佐賀県 1998）、その後の調査では溝から前期初頭の土器とともに矢板や杭列が検出されている（佐賀市 2000）。巨勢川西岸付近では、千布二本黒木遺跡（佐賀市 1993）、友貞遺跡（佐

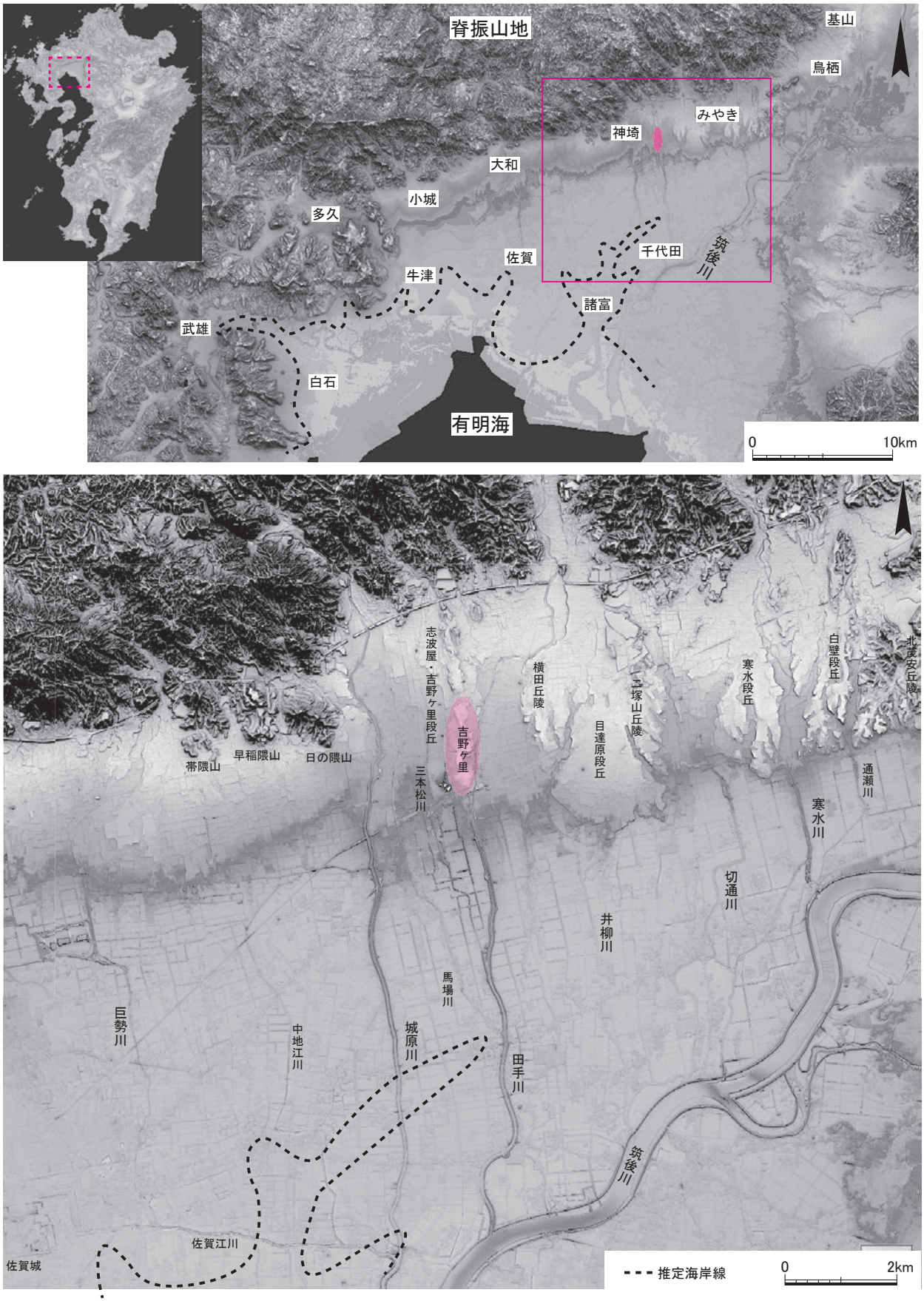


図 272　上：佐賀平野の地形区分（1/400,000）　下：神埼地域の地形区分（1/100,000）

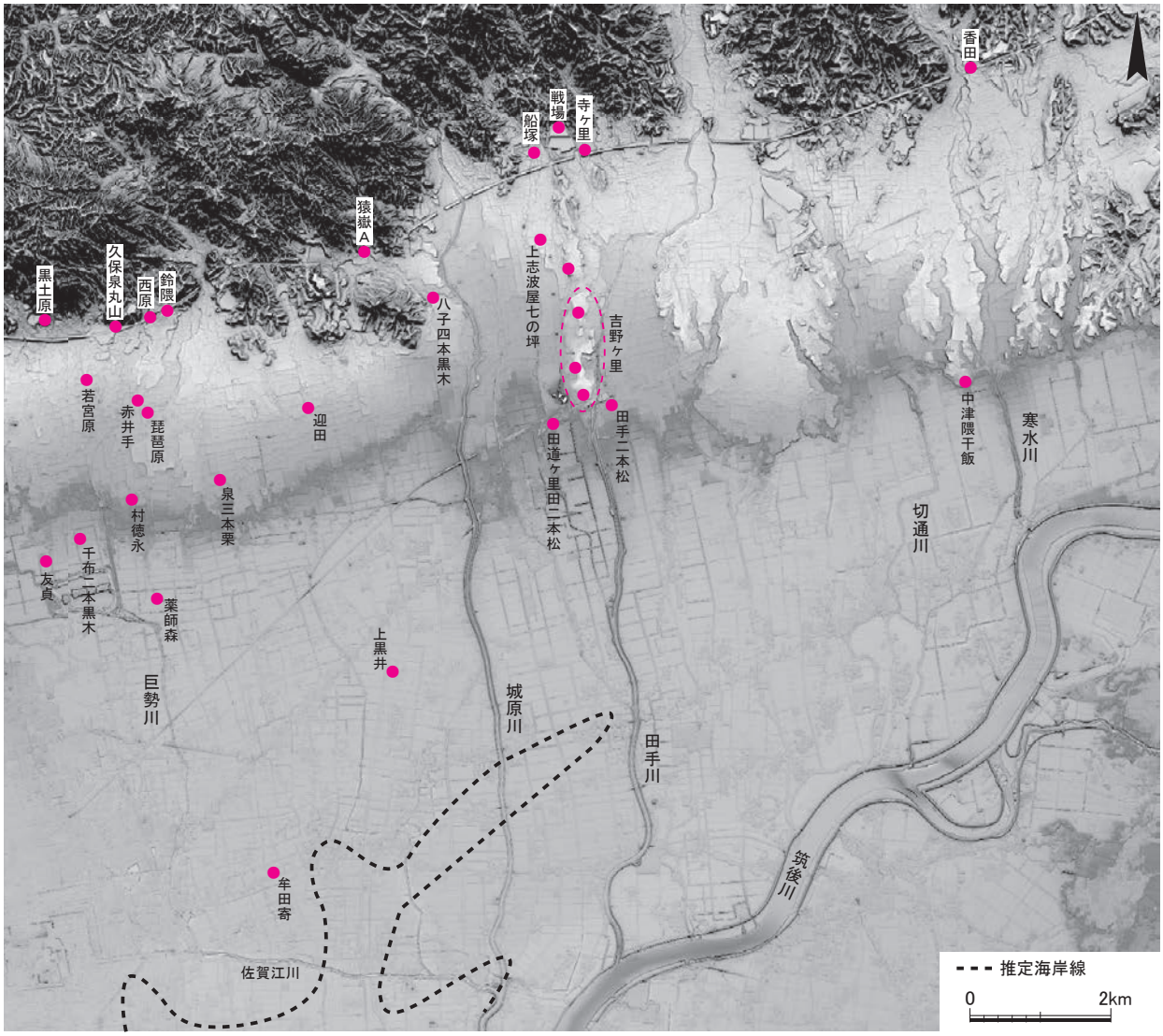


図 273　縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半の遺跡分布（1/100,000）

賀市 1995）で土坑から前期初頭～前期前半の土器が出土している。このほか、巨勢川下流域東岸の牟田寄遺跡 17 区で小穴から完形の丹塗磨研壺が出土している（佐賀市 1998）。また、概要報告のみであるが、城原川西岸の上黒井遺跡では縄文時代晩期～弥生時代前期の貝層と土坑が検出されたと報告されており（佐賀県 1986）、早い段階から平野南部の沖積低地にも集落が形成されていたとみられる。

志波屋・吉野ヶ里段丘南部周辺では、田手二本松遺跡で前期初頭の土器が（佐賀県 1998）、田道ヶ里田二本松遺跡で前期初頭～前期前半の土器が出土している（神埼町 1996）。明確な遺構は確認されていないものの、段丘上だけでなく沖積平野部でも前期初頭から集落が展開しはじめたとみられる。

神埼地域の東側では、確認されている前期初頭～前期前半の遺跡は少ない。切通川と寒水川に挟まれた寒水段丘南端部の中津隈干飯遺跡では前期初頭～前期前半の土器が出土しており、明確な遺構は確認されていないが集落が展開していたと考えられる（北茂安町 1988）。

縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半の墳墓の数は少ないが、城原川西岸の平野部に位置する迎田遺跡で晩期の埋甕が 1 基検出されており（神埼町 1991）、志波屋・吉野ヶ里段丘北側の山麓部に位置する戦場古墳群では 1 区で前期前半の壺棺墓が、6 区で前期前半の支石墓が確認されている（佐賀

県 1999)。城原川西岸の八子四本黒木遺跡では祭祀遺構から前期前半の土器が出土しており（神埼町 1980)、埋葬が始まっていた可能性がある。このほか、佐賀市東部の山麓部に位置する久保泉丸山遺跡で支石墓 118 基からなる大規模な墓地が形成されており（佐賀県 1986)、周辺の礫石遺跡（佐賀県 1989)、黒土原遺跡（佐賀市 1987）や、神埼地域東側のみやき町香田遺跡（佐賀県 1981）などでも支石墓群が確認されている。

（２）弥生時代前期後半～前期末

前期後半には神埼地域で環壕集落が出現する。吉野ヶ里遺跡では南部の段丘上に大規模な環壕（SD0001･SD0336）と小規模な環壕２条が形成され、居住用と貯蔵穴用に機能分化していたとみられる。田手川東岸の横田丘陵上に位置する瀬ノ尾遺跡では、平面 C 字形の小規模環壕（径 23m）が前期後半に形成されており（東脊振村 2001)、内部に竪穴建物が分布していないことから貯蔵穴専用の環壕とみられる。なお、瀬ノ尾遺跡の北側の松原遺跡でも前期後半～前期末の土器が出土しており（東脊振村 1998)、前期後半に環壕が形成されていた可能性がある。

神埼地域の東側では、寒水川と切通川に挟まれた寒水段丘東端の町南遺跡で断面 V 字形の弧状溝から前期後半代の土器が出土し（佐賀県 1983)、その後の調査で溝の延長部分が検出された結果、半径約 70 ｍの平面円形の環壕と推定されている（みやき町 2012)。壕の内外には前期後半～前期末の貯蔵穴が 34 基以上分布しているが、壕の内側からは同時期の竪穴建物跡は検出されていない。貯蔵穴専用の環壕としては規模が大きいことから、環壕内部の未調査区域に居住域が存在する可能性がある。環壕から南に約 300 ｍ離れた 12 区では前期後半代の竪穴建物や土坑群が展開しており（みやき町 2014)、集落は中期初頭以降にも継続していることから、神埼地域東側における拠点的な場所と考えられる。

志波屋・吉野ヶ里段丘の西側では、城原川東岸山麓部の的五本黒木遺跡で断面 U 字状の小規模な溝から前期末の土器が出土している（神埼町 1985)。部分的な調査であり、溝以外に前期の遺構が検出されていないことなどから、溝が環壕となるかは明確でない。

神埼地域の周辺では、鳥栖市西部の朝日山南麓、安良川西岸の低位段丘上に位置する幸津遺跡で、残存幅 3.6m、深さ 1.8m、断面 U 字～逆台形の壕跡が検出されている。範囲は明確でないが、出土土器や地形などから前期後半代に機能した環壕の一部と考えられる（佐賀県 2007)。また、鳥栖市北部の柚比丘陵に所在する八ツ並金丸遺跡では、低丘陵の頂部に平面 C 字形の小規模環壕（直径 28m）が形成されており（佐賀県 2003)、前期後半代に機能した貯蔵穴専用の環壕と考えられる。

環壕を伴わない集落としては、田手川東岸山麓部の石動四本松遺跡で前期後半の土器が出土しており（東脊振村 2006)、西岸の西石動遺跡では前期末～中期初頭の集落が展開している（佐賀県 1990)。城原川と志波屋・吉野ヶ里段丘の間の低位段丘上に位置する的遺跡では土坑から前期後半～前期末の土器が出土しており（佐賀県 1991)、南側の志波屋一の坪遺跡では前期後半の円形竪穴建物跡と壺棺墓が検出されている（神埼町 1996)。志波屋・吉野ヶ里段丘南西裾部の田手二本黒木遺跡Ⅲ区（吉野ヶ里遺跡田手一本黒木地区Ⅱ区 222 調査区と一部重複）では土坑から前期末の土器や斧柄、竪杵などが出土しており（三田川町 1990)、吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区の前期集落の一部と考えられる。

城原川西岸では、利田黒木遺跡で前期後半の土器が（神埼町 2011)、利田柳遺跡で土坑から前期後半～前期末の土器が（神埼町 2001)、迎田遺跡Ⅱ区で土坑から前期末の土器が出土している（神埼町

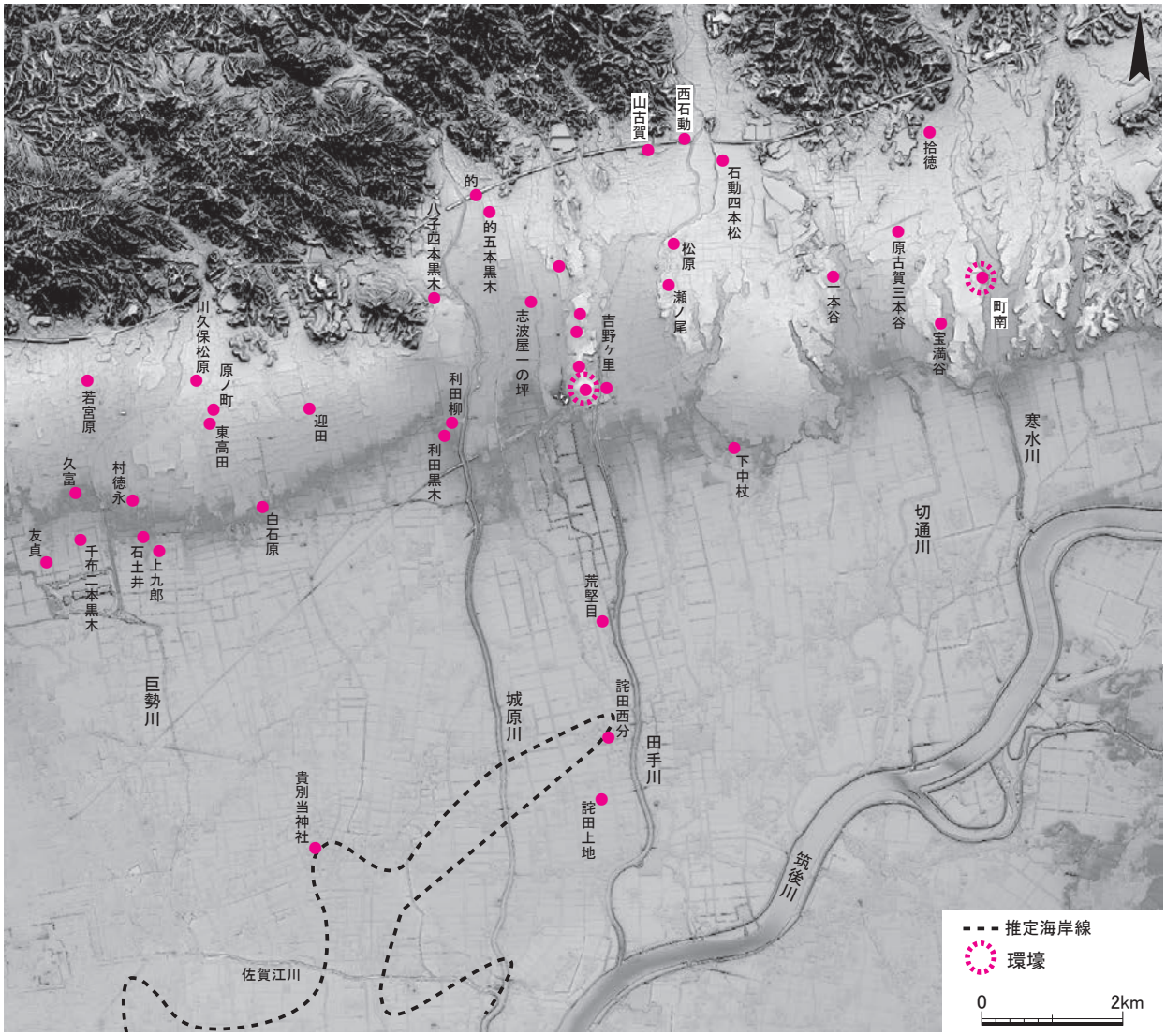


図 274　弥生時代前期後半～前期末の遺跡分布（1/100,000）

1991）。さらに西側の佐賀市東部地域では、原ノ町遺跡で土坑、貯蔵穴から前期後半の土器が、東高田遺跡 1 区で包含層から前期末の土器が出土しており（佐賀市 1993）、川久保松原遺跡では前期後半代の円形竪穴建物跡が検出されている（佐賀市 1994）。白石原遺跡では前期末～中期初頭の円形竪穴建物と土坑、中期初頭の甕棺墓が検出され（佐賀市 2012）、石土井遺跡 3 区、上九郎遺跡 2 区では土坑から前期後半～前期末の土器が出土し（佐賀市 2002）、村徳永遺跡では前期初頭からの集落が前期後半以降にも継続している。巨勢川西岸付近では、久富遺跡（佐賀市 1985）、千布二本黒木遺跡（佐賀市 1993）、友貞遺跡（佐賀市 1994）で土坑から前期後半～前期末の土器が出土している。前期後半代には神埼地域西側の巨勢川流域の平野部でも集落数が増加しているが、明確な環壕は検出されていないとともに、拠点的といえる規模の集落は確認されていない。

志波屋・吉野ヶ里段丘の東側では、目達原段丘南端裾部の下中杖遺跡で土坑から前期後半代の土器が出土しており（佐賀県 1998）、段丘北東部の一本谷遺跡では前期末から中期初頭にかけて集落が形成されている（上峰村 1983）。神埼地域の東側では、切通川東岸の寒水段丘西側に位置する宝満谷遺跡で前期末に竪穴建物 6 棟と土坑群で構成される集落が形成され、中期以降にも継続している（北茂安町

1980)。段丘北側の原古賀三本谷遺跡では土坑から前期後半の土器が（中原町 1990)、段丘北側の拾徳遺跡では溝や土坑から前期後半代の土器が出土している（中原町 1998)。

前期後半の神埼地域では、脊振山麓南部に派生する平野北部の低位段丘上だけでなく、平野南部の沖積低地にも集落が数多く展開するようになる。これらの集落は貝塚を伴うことが多く、当時の有明海北岸の推定海岸線（下山ほか 1994）に近い位置に営まれている。田手川下流域では、西岸の自然堤防上に位置する荒堅目遺跡（神埼町 1985)、詫田西分遺跡（千代田町 1983,1992,1999）で土坑から前期後半代の土器が出土しており、集落が形成されている。このほか、概報のみであるが南方の詫田上地貝塚でも前期の土器が出土している（佐賀県 1983)。西側の城原川下流域では確認されている遺跡数が少ないが、貴別当神社遺跡（千代田町 1991,1992）で前期後半の土器が出土しており、集落が形成されている。なお、これらの低地集落では竪穴建物跡が確認されておらず、掘立柱建物に居住していた可能性がある。

前期後半代の墳墓としては、吉野ヶ里遺跡北部の志波屋四の坪地区Ⅰ区で壺棺墓２基が営まれている。周辺では、田手川上流域の山麓部に位置する山古賀遺跡で前期後半の壺棺墓 2 基が検出されている（佐賀県 1983)。城原川西岸付近の利田柳遺跡では前期後半に壺棺墓が造営され、前期末以降には甕棺墓地が形成されている（神埼町 1980)。日の隈山東麓裾部の八子四本黒木遺跡では甕棺墓と木棺墓・土坑墓からなる墓地が営まれ、中期以降にも継続する（佐賀県 1977, 神埼町 1980)。神埼地域の東側では、町南遺跡 12 区で前期後半の壺棺墓が 1 基検出されている（みやき町 2014)。前期後半の神埼地域では集落に比べて墳墓の数は少なく、基本的に集落と同じく低位段丘上に展開しているが、利田柳遺跡のように沖積平野の微高地上に営まれる場合もある。前期末以降になると神埼地域全体で甕棺墓地の造営が活発化する。

小結　弥生時代前期の集落と墓地の様相

神埼地域における弥生時代前期初頭～前期前半の集落は山麓南部の低位段丘上に立地していることが多いが、段丘裾の平野部でも集落が展開している。検出されている遺構数は少なく、集落の詳しい構造については明らかになっていない。また、佐賀平野ではこれまで明確な水田跡が検出されていないが、集落出現当初から水稲農耕が行われていたと考えられる。平野南部の沖積低地では確認されている遺跡数が少ないが、弥生時代初頭から開発の手が入っており、前期後半以降に開発が進行したと考えられる。

前期後半以降には平野北側の低位段丘上や扇状地上を中心に集落数が増加するとともに、平野南部の沖積低地でも当時の推定海岸線付近や河川流域に集落が展開するようになる。環壕を伴わない集落は基本的に竪穴建物 10 棟以下と小規模なものばかりで、分散して展開している。環壕集落の出現は前期後半からで、集落を取り囲む明確な環壕は吉野ヶ里遺跡（田手二本黒木地区）と町南遺跡でのみ確認されている。また、径 20 ～ 25m 程度の貯蔵穴専用と考えられる小規模環壕は、神埼地域では吉野ヶ里遺跡と瀬ノ尾遺跡でのみ確認されている。吉野ヶ里遺跡では居住域を囲む大規模な環壕と小規模な環壕の両方が同時に展開しており、集落内部で機能分化が進んでいたと考えられる。前期後半代には稲作農耕の安定化による人口増加、集落数の増加に伴って開発が進行し、さらには環壕が形成されることによって小地域の集落群の拠点形成が進んだと考えられる。集落群の単位を把握するのは難しいが、吉野ヶ里遺跡周辺では各段丘を単位として集落群が構成されていたと推測される。このほか、前期後半代の墳墓は土坑墓、木棺墓、壺棺墓が主体とみられるが、集落に対して確認されている墓地の数は少なく、集落に付随する小規模なものだったと考えられる。

２．弥生時代中期の集落と墳墓

（１）弥生時代中期初頭～中期前半

丘陵上の集落と墓地

中期初頭になると、神埼地域では集落、墓地ともに遺跡数が大幅に増加する。吉野ヶ里遺跡では南部の段丘上に展開していた前期後半代の環壕が埋没した後、同じ場所に中心的な集落域が形成されており、中期を通じて継続している。墓地は、前期末から中期初頭にかけて甕棺墓の造営が活発化し、中期前半（汲田式）から中期後半（須玖式）にかけて墓地の最盛期を迎える。吉野ヶ里遺跡の出現当初の墓地は甕棺墓 20 ～ 30 基程度で構成される小規模なものが多く、志波屋・吉野ヶ里段丘上に 9 ヶ所程度が分散して展開している。中期前半には墳墓数が飛躍的に増加し、約 870 基の甕棺墓が検出されている。丘陵尾根上の 5 箇所に列埋葬墓地が形成されるようになるとともに、集塊状の墓地も継続して営まれている。甕棺墓の列埋葬は、中期初頭の時点で段丘上面の広い場所に形成された墓地を起点とするかのように中期前半から形成され、中期後半以降にも継続している点が特徴的である。

中期初頭には、城原川西岸山麓部の切畑遺跡で竪穴建物 8 棟と土坑、貯蔵穴 20 基程度からなる集落が営まれており、このうち SB051 円形建物跡は直径約 10.4m と特に規模が大きいことから、集落内で何らかの特殊な機能を持った建物と想定されている（佐賀県 1993）。また、土坑からは中期初頭の土器とともに朝鮮系無文土器である黒色磨研長頸壺が出土している。周辺では、朝日北遺跡（佐賀県 1992）で甕棺墓約 120 基、花浦遺跡（神埼町 1988）で甕棺墓約 65 基、志波屋六本松乙遺跡（佐賀県 1991）で甕棺墓 85 基からなる墓地が営まれており、時期幅は中期前半～中期後半に収まる。花浦遺跡では中期前半の甕棺墓から貝輪を装着した女性人骨が出土しており、いわゆる一般墓地とは異なる性格の墓地であった可能性がある。また、詳細が明らかでないが、志波屋・吉野ヶ里段丘北側の三津永田遺跡では中期初頭頃から甕棺墓が造営され、後期まで墓地が継続していたとみられる（金関・坪井 1961）。

日の隈山東麓と城原川西岸の間の低位段丘上では、熊谷遺跡（神埼町 1996, 神埼市 2010）、塚原遺跡（神埼町 1995）、西田遺跡（神埼町 2000）、八子六本黒木遺跡（神埼市 2009）、八子一本黒木遺跡（神埼町 2004,2006）などで中期初頭から竪穴建物と土坑、貯蔵穴で構成される小規模な集落が展開している。墳墓は、八子四本黒木遺跡で前期末～中期初頭からまとまった規模の墓地が形成されており、後期初頭までほぼ継続して甕棺墓が営まれている（佐賀県 1977, 神埼町 1980,2006, 神埼市 2009）。近接する八子六本黒木遺跡では中期前半から形成された甕棺墓地が中期後半以降にも継続し（神埼町 2002,2003,2005, 神埼市 2009）、近接する八子二本黒木遺跡（神埼町 2006）、八子三本黒木遺跡（神埼町 2002,2003）、西田遺跡（神埼町 2000, 神埼市 2010）などでも甕棺墓地が営まれている。南側の利田柳遺跡では、Ⅲ区で前期後半に形成された墓地が中期を通じて継続しており、墳墓数は 50 基程度と規模は大きくないが、周辺の調査で相当数の墳墓が確認されていることから、大規模な墓地が形成されている（徳富 2001）。また、集落は中期初頭に形成されており、墓地とともに中期末まで継続している（神埼町 1980,2001）。城原川西岸平野部の伏部大石遺跡では、過去に中期の甕棺墓 27 基などが検出されているが[2)]、その後の調査で 3 区の土坑群から中期初頭の土器が出土しており（神埼市 2014）、隣接する 4 区では中期前半代とみられる甕棺墓 18 基が造営されている（神埼市 2013）。近接するこだかじま遺跡（未報告）でも中期初頭を主体とする甕棺墓 40 基が検出されている（徳富 2001）。

志波屋・吉野ヶ里段丘東側の田手川流域では、脊振山系南麓に派生する低位段丘上を中心に、中期

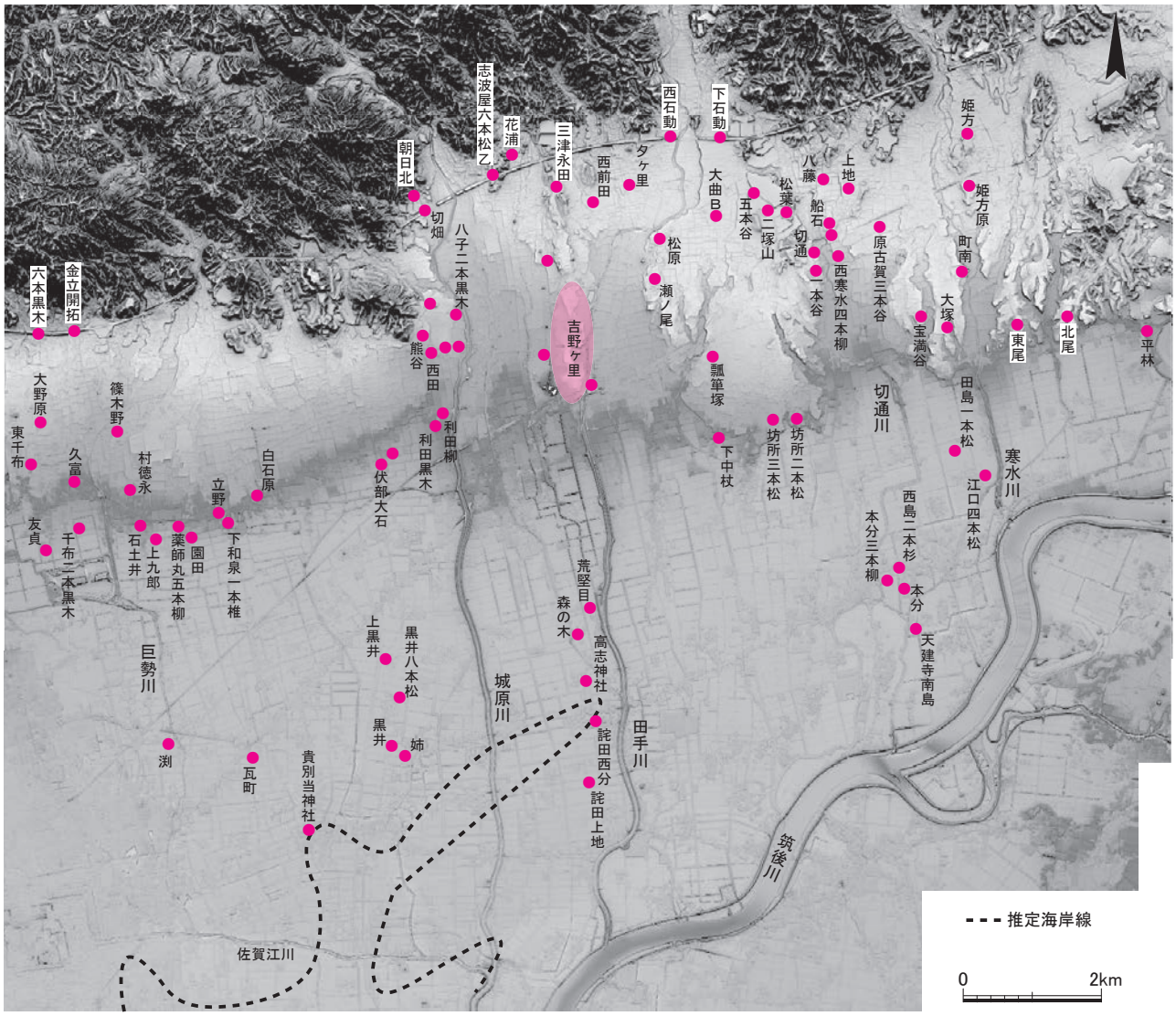


図 275　弥生時代中期初頭～中期前半の遺跡分布（1/100,000）

初頭から集落と墓地が数多く展開するようになる。田手川西岸では、概報のみであるが夕ヶ里遺跡（庄尾分遺跡）で中期初頭の円形竪穴建物跡が 2 棟確認されている（佐賀県 1983）。西前田遺跡では中期初頭に集落と墓地が出現しており、墓地は中期初頭～中期前半の甕棺墓 140 基を主体とし、集落は中期末まで継続している（東脊振村 1981,1982）。山麓部では、田手川西岸の西石動遺跡で前期末～中期初頭の集落と中期初頭～中期前半の墓地が営まれており（佐賀県 1990）、過去には中細形銅戈が両面に彫り込まれた石製鋳型が採集されている（松尾 1932, 七田 1934a）。田手川東岸では、下石動遺跡で中期初頭～中期前半の円形竪穴建物約 10 棟と土坑群からなる集落が（佐賀県 1987）、大曲 B 遺跡で中期初頭の円形竪穴建物、掘立柱建物、土坑からなる小規模な集落が展開している（東脊振村 1985）。横田丘陵上では、松原遺跡で前期後半に形成された集落が中期以降に拡大したとみられ、甕棺墓地の造営も中期初頭～中期前半が中心とみられる（東脊振村 1977,1997,1998,2003, 吉野ヶ里町 2010,2015）。南側の瀬ノ尾遺跡では中期初頭から後期初頭にかけての甕棺墓 229 基が検出されており（東脊振村 2001）、各遺構の細かい時期などは検証できないが、中期初頭～中期前半には吉野ヶ里遺跡と田手川を挟んで向かい合う横田丘陵上に拠点的な集落と墓地が形成されたとみられる。

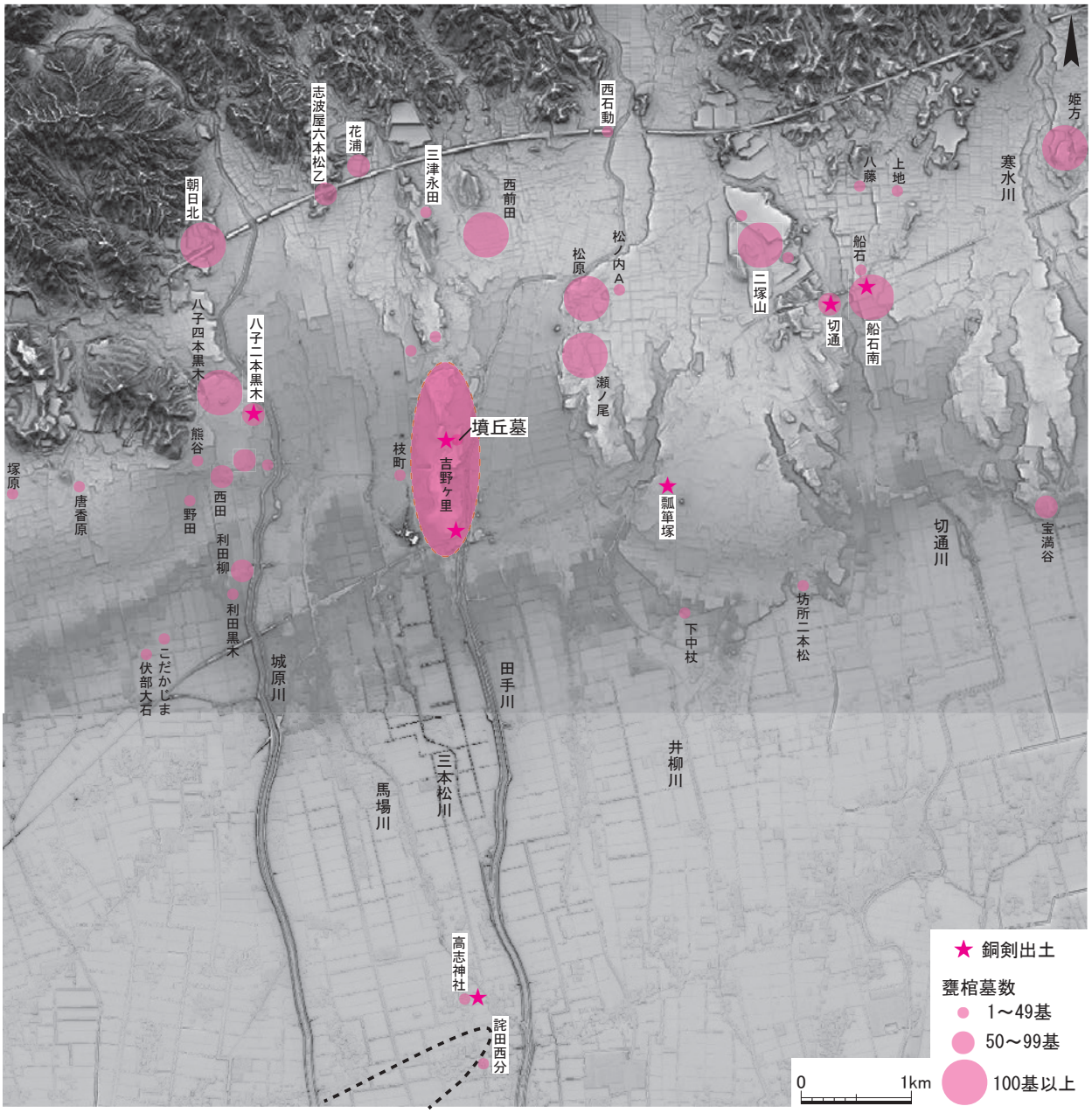


図 276　吉野ヶ里遺跡周辺における弥生時代中期の甕棺墓地の分布（1/60,000）

神埼地域の東側、井柳川と切通川に挟まれた目達原段丘～二塚山丘陵一帯においても中期初頭から集落と墓地が増加しているが、墓地遺跡が中心であり、拠点的な規模・内容の集落は確認されていない。段丘の広さや周辺の墓地の分布状況からみて、目達原段丘中央付近に大規模な集落が存在した可能性が高い。段丘南東端の坊所三本松遺跡では中期初頭～中期前半の竪穴建物と土坑からなる集落が形成され（佐賀県 1998）、隣接する坊所二本松遺跡では中期前半～中期後半の甕棺墓 35 基と祭祀遺構が検出されており（上峰町 1998）、段丘南端裾部の下中杖遺跡では中期初頭の小規模な墓地が展開している。

目達原段丘東側の二塚山丘陵では、一本谷遺跡で中期初頭を中心とする円形竪穴建物約 20 棟と貯蔵穴、土坑約 50 基からなるまとまった集落が展開している。焼失住居跡が 3 棟確認されており、このうち集落群の中央付近に位置する 1 棟（SB041）は径約 8.6m と特に規模が大きい（上峰村 1983）。切通遺跡では過去の採土工事に伴う不時発見とその後の調査で約 50 ～ 100 基の甕棺墓が出土したとされ、

詳しい時期は不明だが中期前半～中期後半が中心とみられる（金関・坪井・原口 1961, 佐賀県 1964）。二塚山遺跡では、前期末～中期初頭から後期前半にかけての甕棺墓 159 基や、中期～後期の土坑墓 89 基、石棺墓 6 基、祭祀遺構 8 基などからなるまとまった墓地が形成されており、墓地は後期後半まで継続する。中期末以降には漢鏡や鉄製武器が副葬される甕棺墓、土坑墓が数多く造営されることから、地域の拠点的な墓域であったと考えられるが（佐賀県 1979）、墓地に対応する集落域は明確になっていない。近接する五本谷遺跡では中期後半を中心とする甕棺墓 40 基と中期～後期の土坑墓 76 基、石棺墓 6 基からなる墓地が、松葉遺跡では前期末～中期初頭の甕棺墓 15 基程度と中期～後期の土坑墓、石棺墓からなる小規模な墓地が展開している（佐賀県 1979）。

切通川東岸の低位段丘上に位置する船石遺跡では、竪穴建物と土坑からなる集落が中期初頭に出現し、中期前半を中心とする集落が展開するとともに、周辺には同時期の甕棺墓地が多数営まれている。船石天神宮北区では中期前半の甕棺墓 19 基が検出され、上部に巨石を有する墳墓も存在する。南区では円形竪穴建物跡 3 棟と土坑が確認されており、このうち 3 号住居跡は径 8.9m と規模が突出している（上峰村 1983）。その後の調査で、集落と墓地の範囲が周囲にも広がることが判明しており（上峰町 1989,1990,1991,1995）、南部の 3・4 区では中期前半を中心とする円形竪穴建物約 20 棟と土坑群からなる集落が展開している。隣接する船石南遺跡では、昭和 60（1985）、62（1987）年度の調査で前期末～中期前半の甕棺墓 499 基、土坑墓 43 基、石棺墓 3 基からなる大規模な墓地が検出され、このうち中期前半の 1104 号甕棺墓からは細形銅矛の切先 [3] が出土しており特筆される（上峰町 2002）。墳墓の主体は中期初頭～中期前半とみられ、神埼地域のなかでも突出した規模の墓地が形成されている。船石遺跡北方の八藤遺跡では、6･7 区で中期初頭の円形竪穴建物と土坑からなる小規模な集落が展開し（上峰町 1998,1999）、1 区では中期前半の甕棺墓 28 基が営まれている（上峰町 1997）。このほか、上峰町とみやき町（旧中原町）の境界付近に位置する上地遺跡でも甕棺墓地が検出されている（松尾 1951）。

切通川東岸の寒水段丘上では、原古賀三本谷遺跡で溝跡や土坑から中期前半～中期後半の土器や甕棺片が出土しており、集落と墓地が展開していたとみられる（中原町 1991）。西寒水四本柳遺跡では円形竪穴建物と土坑からなるまとまった集落が中期前半から展開しており、後期初頭頃まで継続している。竪穴建物は中期前半～中期後半が主体で、松菊里型住居もみられるが、なかでも 2 区の花弁状住居跡（SH2012）が特筆される。SH2012 は径 4.8m の平面円形で、内部構造は中央土坑とその両脇に一対の主柱穴を持ち、壁面に沿って 8 本の柱穴跡が残り、周囲には幅 1.3m 程度の花弁部分が巡る。出土土器は小片が多いが、所属時期は中期前半（須玖 I 式古相）と判断されている。現在のところ西北九州地域で唯一の事例であり、系譜等が注目される（みやき町 2011）。遺構出土土器から集落の最盛期は中期前半とみられ、地域の拠点的な集落であったと考えられる。また、概要報告のみであるが、隣接する西寒水七本柳遺跡では断面 V 字形の約 20m の半円形に巡る溝が検出され、下層から中期前半の土器が出土したとされている（佐賀県 1995, 徳富 1995a）。

寒水段丘東側の町南遺跡では、前期後半代に形成された断面 V 字形の環壕が中期初頭には埋没している（みやき町 2012）。壕跡の内側には中期初頭～中期前半の円形竪穴建物 15 棟と土坑、貯蔵穴からなる集落が展開しており、特に、SB010（径 7.87m）、SB123（径 8.2m）の 2 棟は他の竪穴建物と比べて規模が大きい（佐賀県 1983）。なお、集落は中期前半までで一旦途切れており、後期前半以降に再び集落が展開するようになる。寒水段丘南端の宝満谷遺跡では、前期末に形成された集落が中期前半に

拡大し、竪穴建物 13 棟と土坑からなる集落が展開している。中期前半の竪穴建物跡は平面円形に加えて楕円形や長方形もみられ、遺構群の中央付近の SB016 円形竪穴建物は径 6.7m と他の建物に比べてやや規模が大きい（北茂安町 1980）。寒水川東岸の姫方原遺跡では中期初頭から集落が形成され、中期前半にかけて円形竪穴建物と土坑からなる集落が営まれている（中原町 1979,1980, 佐賀県 1976,1981）。段丘北方の姫方遺跡では、墳墓群の詳細な時期が確認できないが、中期を中心とする甕棺墓約 400 基や石棺墓、木棺墓、土坑墓で構成される大規模な墓地が展開している（佐賀県 1974）。段丘南端付近の大塚遺跡 2 区では中期前半の円形竪穴建物跡と貯蔵穴が 1 基ずつ検出されており、周辺に集落が展開していたとみられる（みやき町 2017）。

神埼地域西側の佐賀市東部地域では、平野北側の低位段丘上に集落と墓地が展開している。金立開拓遺跡では中期初頭～中期前半の甕棺墓地が造営されており（佐賀市 1974, 佐賀県 1984）、大門西遺跡では前期末～中期初頭の円形竪穴建物 4 棟と土坑、貯蔵穴 27 基からなる集落が展開し（佐賀県 1980）、大門遺跡では中期前半の甕棺墓 5 基が検出されている（佐賀市 1973）。六本黒木遺跡では中期前半の甕棺墓 17 基と箱式石棺墓 1 基が検出され、短いが 2 列に埋葬されている（佐賀県 1980）。

巨勢川東岸の平野部では、篠木野遺跡で中期前半～中期後半の小規模な甕棺墓地が展開しており（佐賀市 1993）、村徳永遺跡では前期からの集落が中期を通じて継続している。園田遺跡、上九郎遺跡、薬師丸五本柳遺跡では井戸や土坑から中期前半～中期後半の土器が出土しており（佐賀市 2003）、白石原遺跡では中期初頭を中心とする円形竪穴建物、溝、土坑や少数の甕棺墓、土坑墓などが確認されている（佐賀市 2012）。近接する立野遺跡（佐賀市 1989）でも中期前半～中期後半の集落が展開している。

巨勢川西岸付近では、大野原遺跡で前期末～中期前半の竪穴建物 5 棟と土坑からなる集落が展開している（佐賀市 1993）。東千布遺跡では中期初頭～中期後半の甕棺墓 42 基と土坑墓からなる墓地が展開し、SJ003 甕棺墓（城ノ越式）の棺内からは破損した磨製石剣切先が出土している（佐賀市 1985）。久富遺跡 1 区では平面楕円形の竪穴建物跡 1 棟と井戸、土坑から中期初頭～中期前半の土器が（佐賀市 1992）、千布二本黒木遺跡では掘立柱建物 2 棟と底面が幅広い溝状遺構、土坑から前期末～中期後半の土器が（佐賀市 1993）、友貞遺跡では土坑から中期前半～中期後半の土器が出土している（佐賀市 1994,1995）。

沖積低地部の集落と墓地

中期初頭には、平野南部の標高約 3m 前後の沖積低地部においても、微高地上を中心に集落が数多く営まれるようになる。復元されている有明海北岸の海岸線と遺跡分布とを比較すると、筑後川西岸付近は特に海岸線が平野奥まで入り込んでおり、その周りを取り巻くように集落が分布している。田手川下流域では、荒堅目遺跡、森の木遺跡、高志神社遺跡など田手川につながる小河川の合流地点付近に集落が形成されている。

前期から中期に継続する遺跡としては、田手川下流域の荒堅目遺跡、詫田西分遺跡や、城原川下流域の貴別当神社遺跡（千代田町 1991,1992）などがある。荒堅目遺跡では中期前半の廃棄土坑などの土坑群が検出され、中期の石蓋土坑墓からはほぼ全身の人骨が出土している（神埼町 1985, 佐賀県 1986）。なお､過去には河川工事中の不時発見で完形の磨製石剣とともに褐鉄鉱製の把頭飾が採集されている（佐賀県 1976, 徳永 1994）。また、概要報告のみであるが、詫田西分遺跡南方の詫田上地遺跡でも前期後半から中期にかけて貝塚を伴う集落が継続していたとみられる（佐賀県 1983）。詫田西分遺跡では前期

に形成された集落が中期以降に拡大しており、主に井戸、土坑、溝から中期前半代を中心とする土器や木器が多数出土し、中期後半以降にも集落が継続していることから、前期～中期における平野南部の沖積低地一帯における拠点的な集落であったと考えられる（千代田町 1983,1996,1999）。詫田西分遺跡は当時の推定海岸線の湾奥部に立地していることなどから、中期段階における有明海北岸地域の交易拠点的な臨海集落として機能していた可能性が考えられる。また、2 区で検出された中期前半の溝状遺構について環濠的役割を想定する意見もある（徳富 1995b）。なお、詫田西分遺跡では墓地（Ⅴ区）の正式報告がなされていないが、概報（佐賀県 1985）によれば中期初頭～中期前半の甕棺墓 42 基、前期～中期の土坑墓 71 基が密集する墓地が貝層中に形成されており、ほぼ全ての墳墓から人骨が良好な状態で出土している。また、出土人骨のうち 26 体について mtDNA 分析が行われており、土坑墓と甕棺墓の被葬者の遺伝的背景に差異が認められることが指摘されている（太田・斎藤・松下・植田 1995）。

沖積低地部で中期前半から新たに出現する集落として、田手川下流域西岸の高志神社遺跡で集落と墓地が展開しているほか、概要報告のみであるが荒堅目遺跡南方の森ノ木遺跡でも中期の集落が確認されている（佐賀県 1986）。西側の城原川下流域西岸では、姉遺跡、黒井遺跡（千代田町 1987）、黒井八本松遺跡（千代田町 1986）、上黒井遺跡（佐賀県 1986）などがある。姉遺跡では土坑から中期前半の土器とともに細形銅剣と細形銅矛の鋳型が出土しており（千代田町 1985,2000）、吉野ヶ里遺跡とともに神埼地域で中期前半段階に青銅器生産が行われていた証拠として特筆される。なお、詫田西分遺跡では鋳型転用とみられる石英長石斑岩製の砥石片が出土しており、黒変部の形状から細形銅剣鋳型の可能性が指摘されている（千代田町 1999）。また、姉遺跡、上黒井遺跡、貴別当神社遺跡では朝鮮系無文土器が出土している。さらに西側の巨勢川下流域では、瓦町遺跡で井戸、土坑から中期前半～中期後半の土器とともに木製品が出土しており（佐賀市 1992）、西岸の渕遺跡では井戸、土坑、貝層から中期初頭～中期前半の土器や朝鮮系無文土器が出土している（佐賀市 1995）。

神埼地域東側の沖積低地部では、切通川下流域の本分三本柳遺跡（三根町 1986）、寒水川西岸の田島一本松遺跡（みやき町 2006）で中期初頭～中期前半の井戸や溝が検出されている。中期前半には、北茂安丘陵南端裾の平林遺跡（北茂安町 1999）、筑後川西岸付近の天建寺南島遺跡（三根町 1989）、本分遺跡（佐賀県博 1981, 三根町 1987）、などで掘立柱建物、井戸、土坑からなる集落が形成されるが、墓地は確認されていない。このほか、概要報告のみであるが、寒水川下流域付近の西島二本杉遺跡（徳富 1994）、江口四本松遺跡（佐賀県 1988）などでも中期の集落が展開している。

沖積低地に展開する集落の特徴として、前期後半代の集落と同様に貝塚を伴うことが多く、詫田西分遺跡や本分遺跡では貝類だけでなくイノシシやシカなどの動物骨も多数出土している。なお、弥生時代の佐賀平野では河川を介して上流域と下流域の集落群が有機的な結合関係にあったことが早くから指摘されており（橋口 1971）、吉野ヶ里遺跡で前期後半代の SD0001 環壕埋土から大量に出土したスミノエガキを主体とする貝殻の存在は、田手川下流域の臨海部に位置する詫田西分遺跡などの集落と密接な関係にあったことを示している（徳富 1997）。また、沖積低地の集落では竪穴建物跡が検出されないことから、掘立柱建物（高床住居）に居住していた可能性がある。佐賀平野では、竪穴建物を伴わず掘立柱建物単独で構成される低地集落が中期前半に出現したと考えられているが（小松 2000）、沖積低地部ではその出現時期がさらに遡る可能性もある。このほか、沖積低地部では集落数に対して墓地数が少なく、墳墓が検出されているのは田手川流域の詫田西分遺跡、高志神社遺跡、荒堅目遺跡に限られる。

低地集落での墓地形成においては田手川上流域の吉野ヶ里遺跡などの集落が関与した可能性があり、河川を介した集落間の交流を考える上でも注目される。

中期初頭～中期前半の特徴的な墳墓

ここでは、神埼地域における弥生時代中期前半代の副葬品を伴う墳墓の内容や分布等についてみていく。中期初頭には、吉野ヶ里遺跡南東部の田手一本黒木地区Ⅰ区 SJ0100 甕棺墓（城ノ越式）から細形銅剣が出土している。同時期の神埼地域では他に青銅器等を伴う特徴的な墳墓が検出されていないことから、SJ0100 甕棺墓は神埼地域全体で最初に造営された首長墓の可能性がある。神埼地域の周辺では、佐賀平野中央部の嘉瀬川中流域西岸に位置する本村籠遺跡で 58 号甕棺墓（城ノ越式）から多鈕細文鏡、銅ヤリガンナ、碧玉製管玉が出土している（大和町 1992）。嘉瀬川東岸の増田遺跡では、6 区 SJ6242 甕棺墓（城ノ越式）の下甕棺底から多鈕細文鏡が割れた状態で出土しており（佐賀市 2000）、同一遺跡とみられる都留遺跡では 1 区 SP024 土坑墓（土器棺と木棺の併用墓とされる）から中期初頭の甕とともに細形銅剣の破片と磨製石剣が出土している（佐賀市 1994）。嘉瀬川西岸の山麓南部に位置する東山田一本杉遺跡では、SJ075 甕棺墓（城ノ越式）の棺内から細形銅剣の切先が出土しており、人骨は残存していないが体内に嵌入していた可能性がある（佐賀県 1995）。

中期前半には、平野南部の高志神社遺跡で SJ018 甕棺墓（汲田式古段階）から寛骨に銅剣切先が嵌入した人骨とともに完形の細形銅剣と鏃 4 点（サメ歯鏃 2 点、磨製石鏃 1 点、打製石鏃 1 点）が、SJ016 甕棺墓（汲田式新相）からは上部頸椎と頭蓋を欠損する熟年男性人骨が出土している（千代田町 2000）。目達原段丘東端の切通遺跡では、第 4 号甕棺墓（汲田式）から男性人骨とともに細形銅剣とゴホウラ貝輪が出土している（金関・坪井・原口 1961）。城原川西岸の八子二本黒木遺跡では、SJ1158 甕棺墓（汲田式）の棺内から朱とともに銅剣切先が出土している（神埼町 2006）。また、船石南遺跡で中期前半の 1104 号甕棺墓棺内から細形銅矛の切先が出土している（上峰町 2002）。

中期前半新相（汲田式新段階）になると、吉野ヶ里遺跡では北墳丘墓が築造され、中央には細形銅剣を副葬した SJ1006 甕棺墓が埋葬される。この段階で青銅器を副葬する墳墓が神埼地域では他に確認されていないことについて、「地域集落群が盟主となる集落を中心としてまとまりをみせていく過程を示す現象」と捉えられている（七田 2012）。中期後半から後期にかけて、集落群が「クニ」としてまとまると推測される範囲を考える上で示唆的であるが、地形や遺跡分布状況からみても集落群の範囲・境界は明確でなく、さらなる検討が必要と思われる。

このほか、不時発見資料であるが、目達原古墳群の瓢箪塚古墳下層[4]の甕棺墓から出土した細形銅剣（三木 1943, 松尾 1950, 橋口 1971）や、神埼町鶴の石祠（宝剣社）に祀られていた細形銅剣（吉野ヶ里遺跡で採集か）、戦後間もないころに吉野ヶ里丘陵（北墳丘墓付近とされる）で採集された細形銅剣などがあり、特に後者 2 本は同范の可能性も指摘されている（佐賀県 1976）。神埼地域の東側では、白壁丘陵南端に位置する東尾遺跡で樋に格子文様を持つ薄手の細形銅戈が甕棺墓から出土したと伝わり（木下 2005）、近接する北尾遺跡（一の幡遺跡）でも甕棺墓から出土したと伝わる完形の細形銅戈が存在する（北茂安町 1980,1986, 木下 2005）。これらは墳墓の詳細な時期が不明であるが、中期前半代に属する可能性がある。

神埼地域の周辺では、佐賀平野中央部の嘉瀬川東岸に位置する鍋島本村南遺跡で、SP002 土坑墓から刃部を欠損した細形銅剣が出土している（佐賀市 1991）。佐賀平野西部では、山麓南部の低位段丘上に

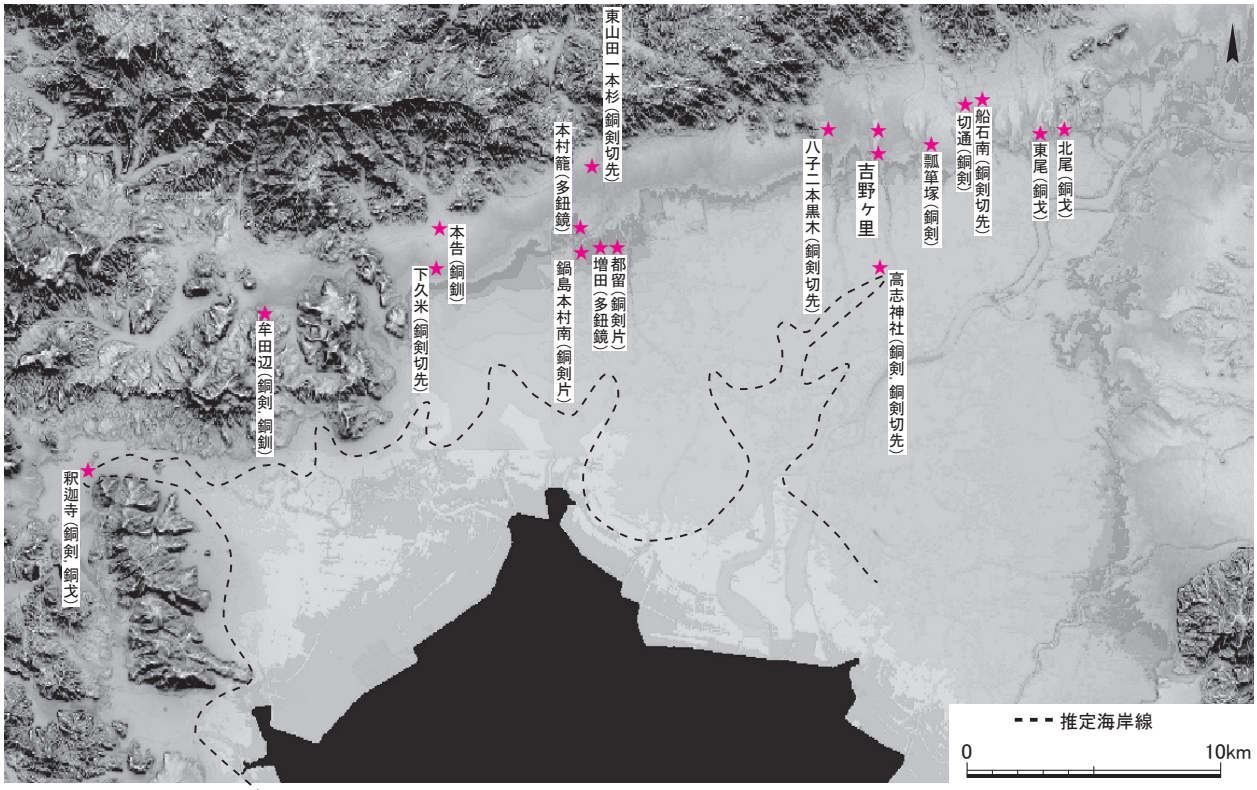


図 277　佐賀平野における青銅器出土墳墓の分布（弥生時代中期初頭～中期前半）（1/300,000）

位置する小城市下久米遺跡で中期前半とされる第 25 号甕棺墓[5]から細形銅剣の切先が出土している（佐賀県 1978）。小城市域西側の多久盆地に所在する牟田辺遺跡では、SJ071 甕棺墓（汲田式）から細形銅剣、銅釧、翡翠勾玉、碧玉製管玉が出土しており（多久市 2002）、武雄盆地に所在する釈迦寺遺跡では SJ279 甕棺墓（城ノ越式）から細形銅剣、銅ヤリガンナ、碧玉製管玉が、SJ246 甕棺墓（城ノ越式）から細形銅戈が出土している（武雄市 1990）。これらは佐賀平野の各小地域における最初の首長層の墳墓とみられ、一定の間隔で分布しているが、なかでも平野中央部の嘉瀬川流域と平野東部の神埼地域に分布か偏っており、特に武器形青銅器は切先出土例も含めて神埼地域に最も集中している。また、一人の墳墓に 1 点の青銅武器が副葬される点は平野全体で共通する（七田 2010）。

中期前半代の神埼地域では、青銅器を除くと貝輪が副葬される墳墓が多くみられる。吉野ヶ里遺跡では、志波屋四の坪地区 I 区 SJ0100 甕棺墓（汲田式古段階）の壮年女性人骨の右前腕部に装着された状態で薄手のゴホウラ縦切型 5 点が出土しているほか、同区 SJ0495 甕棺墓（汲田式）の性別不明の小児人骨（8 ～ 10 歳）の左前腕部に装着された状態でイモガイ横切型 9 点が出土している。このほかにも、中期前半の甕棺墓 3 基から貝輪小片が出土している（『214 集』）。また、正確な出土位置が不明だが、過去には甕棺墓から出土したとされるゴホウラ縦切型 2 点が存在する[6]（七田 1934b）。周辺では、花浦遺跡で中期前半の甕棺墓から 20 歳代とみられる女性人骨の左腕に装着された状態でイモガイ横切型 20 点が出土しており（神埼町 1988）、細形銅剣が副葬された切通遺跡第 4 号甕棺墓（汲田式）からは男性人骨とともにゴホウラ縦切型が出土している[7]（金関・坪井・原口 1961）。二塚山遺跡では 59 号甕棺墓（汲田式新段階の中型棺）から小児人骨（6 歳頃）の右前腕骨に装着された状態でイモガイ縦切型が 4 点出土している（佐賀県 1979）。姫方遺跡では、詳しい出土状況が不明であるが、3 号甕棺墓（汲田式古段階の中型棺）から小児用とみられる小型のイモガイ貝輪 2 点が出土している（佐賀県 1974）。

（２）弥生時代中期後半～中期末

丘陵上の集落と墓地

中期後半になると、吉野ヶ里遺跡では集落規模がやや縮小するが、引き続き遺跡南部の段丘上に中心的な集落域が営まれている。墓地は、遺跡中央部や遺跡北部を中心に甕棺墓約 890 基が検出されており、列埋葬が維持されているとともに、大規模・拠点的な墓地が継続している。神埼地域全体として集落数は減少傾向にあるが、甕棺墓地は引き続き活発に営まれている。

山麓部では、城原川と志波屋・吉野ヶ里段丘の間の的遺跡で中期後半を主体とする長方形基調の竪穴建物 10 棟と土坑からなる集落が展開している（佐賀県 1991）。近接する的五本黒木遺跡では中期末～後期前半の竪穴建物 10 棟と掘立柱建物 3 棟、溝、土坑からなる集落が展開しており、鐸形土製品が 2 点出土している（神埼町 1985,1993）。城原川西岸の切畑遺跡では中期末～後期前半の竪穴建物 22 棟などからなる集落が展開している（佐賀県 1993）。

日の隈山東麓裾部と城原川の間の八子六本黒木遺跡では、中期前半の集落と墓地が中期後半にも継続している（神埼町 2002,2003,2005,2009）。近接する八子四本黒木遺跡、八子三本黒木遺跡、八子二本黒木遺跡などでも中期前半からの墓地が継続しており、八子一本黒木遺跡では溝や土坑から中期後半～中期末の土器が出土している（神埼町 2006, 神埼市 2009）。日の隈山南麓の平野部では、唐香原遺跡で中期後半から甕棺墓、土坑墓約 70 基で構成される墓地が形成され、後期前半まで継続している（神埼町 2001,2003）。塚原遺跡では中期後半の甕棺墓や中期末～後期初頭の祭祀土坑が検出され（神埼町 1995）、西田遺跡では中期前半～中期後半の甕棺墓地と集落が展開している（神埼町 2000, 神埼市 2010）。利田柳遺跡では中期前半からの墓地が中期後半以降にも継続しており、墓地に伴う複数の祭祀遺構から丹塗土器がまとまって出土している（神埼町 1980,2001）。また、過去の調査で出土したジョッキ形木製容器や団扇柄などの木製品は特筆される [8]。

野田遺跡では中期後半の甕棺墓 6 基と祭祀土坑が（佐賀県 1985）、尾崎利田遺跡では中期末の竪穴建物跡 1 棟と土坑が検出されている（佐賀県 1980）。尾崎土生遺跡では中期後半から後期にかけての竪穴建物、掘立柱建物、井戸、土坑、溝で構成される集落が形成されており（佐賀県 1985, 神埼町 1997,1999）、特に 16 区で検出された溝跡（中期後半か）は集落に伴う環壕の可能性が指摘されている（神埼町 2003）。川寄若宮遺跡（未報告）では、遺跡南側の中期中頃とされる遺物包含層から鐸形土製品が２点出土している（天本 1994）。迎田遺跡では中期後半～後期初頭の竪穴建物約 10 棟や掘立柱建物、土坑、中期末の小児用甕棺墓などが検出されており（神埼町 1991）、西側の櫟木遺跡では過去の不時発見で中細形銅戈鋳型が採集されている（文化財保護委員会 1959, 木下 2005）。山麓部の浦田遺跡では中期後半の竪穴建物跡 1 棟と土坑群が検出されている（佐賀市 1994）。

さらに西側の佐賀市東部地域では、巨勢川東岸の村徳永遺跡で中期後半～中期末を中心とする竪穴建物、掘立柱建物、土坑からなる集落が形成され、後期以降にも継続する（佐賀市 1991,1992,1993）。周辺では、立野遺跡で中期後半を主体とする竪穴建物 11 棟と掘立柱建物群、土坑群が検出されており（佐賀市 1989）、石土井遺跡、上九郎遺跡、薬師丸五本柳遺跡では中期後半から後期初頭にかけて集落が盛行し（佐賀市 2002,2003,2004）、園田遺跡では中期前半の集落が中期後半以降にも継続し（佐賀市 2003,2005）、南宿遺跡では中期末から後期前半にかけて集落が展開し（佐賀市 1992）、下和泉一本椎遺跡では中期後半を主体とする竪穴建物、掘立柱建物、土坑からなる集落が展開している（佐賀市

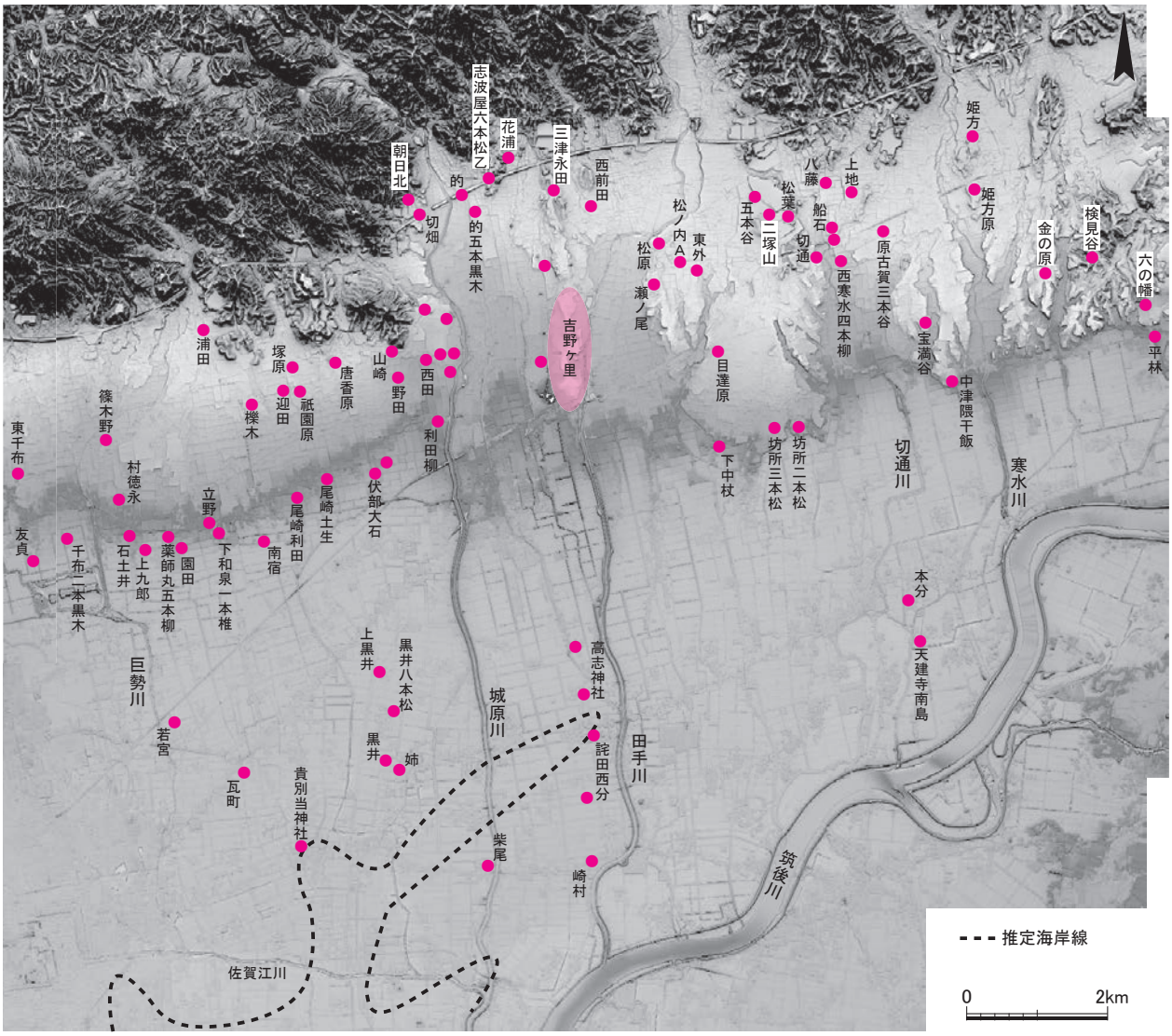


図 278　弥生時代中期後半～中期末の遺跡分布（1/100,000）

1996,1997）。篠木野遺跡では中期前半の小規模な甕棺墓地が中期後半にも継続する（佐賀市 1993）。

田手川上流域の山麓南部では、西前田 A 遺跡で中期初頭から形成された集落が中期後半にも継続している（東脊振村 1981）。田手川東岸の横田丘陵上では、松原遺跡、瀬ノ尾遺跡で中期後半以降も引き続き集落と墓地が営まれていたとみられる。東外遺跡では溝や土坑から中期後半～中期末の土器が出土しており、松ノ内 A 遺跡では中期後半から後期にかけて甕棺墓地が形成されている（東脊振村 1983）。目達原段丘南端部の下中杖遺跡では中期後半代の丹塗土器が出土しており、中期末～後期初頭の小規模な甕棺墓地が形成されている（三田川町 1980,1986）。

中期前半に大規模な墓地が形成される船石遺跡、船石南遺跡では、集落と墓地が中期後半にも継続している（上峰町 1989,1991,1992,2002,2003）。八藤遺跡では中期後半～中期末の集落が展開し（上峰町 1998,1999）、坊所三本松遺跡は中期後半がほぼ空白期であるが、中期末から後期にかけて集落が再び形成されている（佐賀県 1998）。同じ段丘南端西側の下中杖遺跡では、中期後半の墓地が後期初頭まで継続している（佐賀県 1980）。

神埼地域の東側では、寒水川東岸段丘上の姫方原遺跡で集落が中期後半以降も継続しており（中原

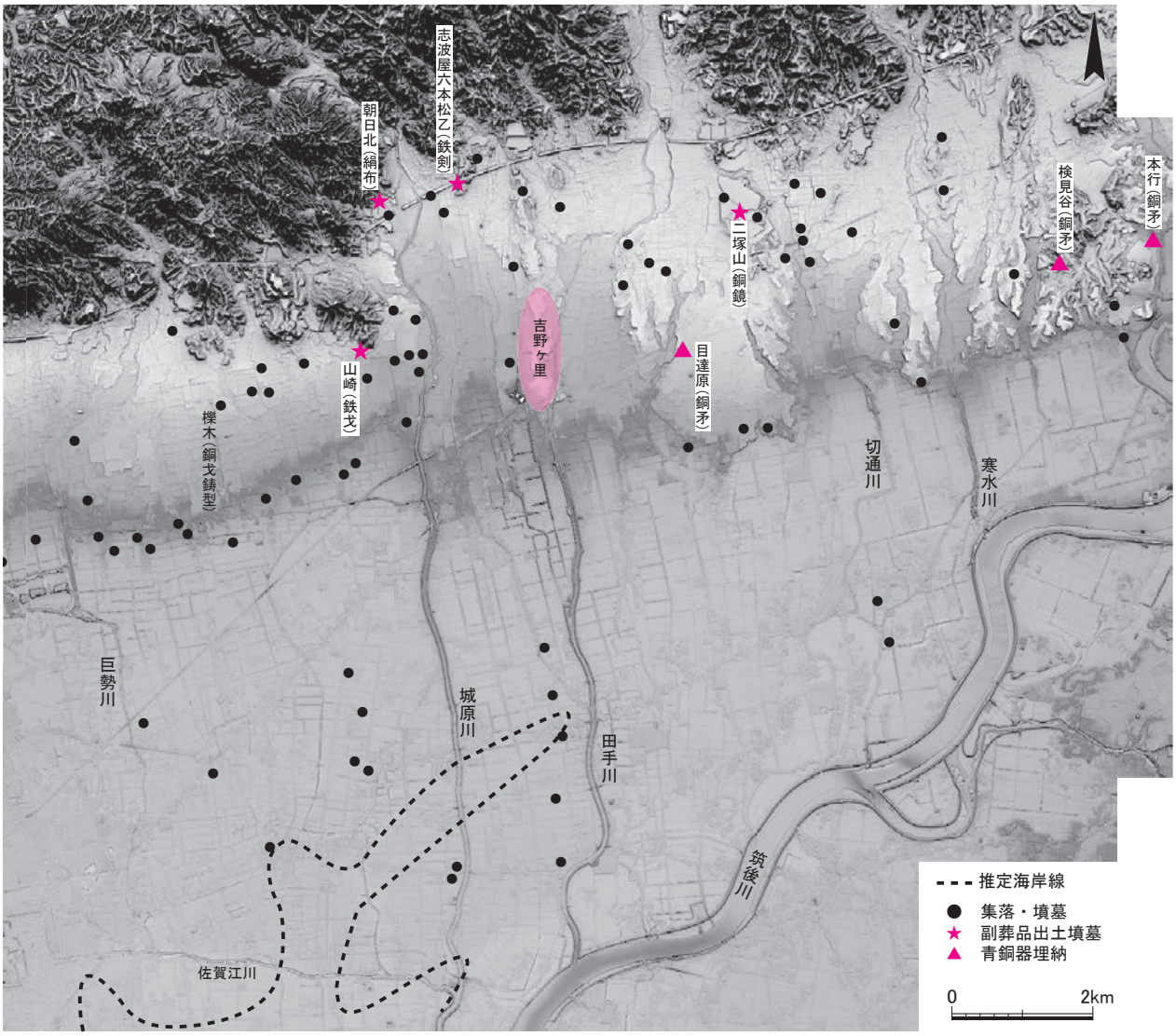


図 279　弥生時代中期後半代の特徴的な墳墓・埋納事例等の分布（1/100,000）

町 1979,1980, 佐賀県 1976,1981）、北側の姫方遺跡でも大規模な甕棺墓地が継続していたとみられる（佐賀県 1974）。原古賀三本谷遺跡では中期後半の竪穴建物跡 1 棟と土坑群が検出され、土坑から鐸形土製品が出土している（中原町 1990）。西寒水四本柳遺跡では中期後半以降にも集落が継続しており、5 区の溝跡からは注口土器が（みやき町 2011）、7 区の土坑からは銅ヤリガンナが出土している（みやき町 2013）。宝満谷遺跡では中期後半の甕棺墓 55 基と祭祀遺構からなる墓地が展開しているほか（北茂安町 1980）、寒水段丘上の金の原遺跡では中期末～後期初頭を主体とする甕棺墓 104 基や土坑墓からなるまとまった墓地が形成され、後期前半まで継続している（北茂安町 1997）。

沖積低地部の集落と墓地

平野南部の沖積低地では、巨勢川下流域東岸の瓦町遺跡で土坑から中期後半の土器とともに木製品が出土しており、なかでも黒漆と赤漆が施された高坏形木製品は注目される（佐賀市 1992）。周辺では若宮遺跡 2 区で中期後半の土器が少量出土している（佐賀市 2000）。これらの集落は中期末以降には継続しておらず、中期末～後期前半の巨勢川下流域付近では集落が認められなくなる。城原川下流域西岸では、黒井遺跡で溝跡から中期後半～後期初頭の土器とともに出土した長さ 3.86m の刻み梯子が

特筆される（千代田町 1987）。このほか、黒井八本松遺跡、姉遺跡、貴別当神社遺跡などで中期後半代にも集落が継続しており、柴尾遺跡では中期後半から新たに形成された集落が後期にも継続している（千代田町 1988）。東側の田手川下流域では、詫田西分遺跡で中期を通じて集落が継続しているほか、崎村遺跡では中期末から後期前半にかけて井戸や土坑からなる集落が新たに展開している（千代田町 1981）。神埼地域東側の低地部では、寒水川下流域の本分遺跡、天建寺南島遺跡で中期後半以降も集落が継続している。また、白壁丘陵南東端付近の平林遺跡では中期後半を主体とする掘立柱建物群や井戸、土坑からなる集落が展開しており、後期前半頃まで継続している（北茂安町 1999）。

平野南部の沖積低地部に展開する集落は、荒堅目遺跡、詫田西分遺跡、貴別当神社遺跡のように前期から形成される集落もあるが、盛行するのは中期初頭以降で、中期後半～中期末にも継続する集落が多い。田手川下流域の詫田西分遺跡では集落が中期を通じて継続しており、井戸や土坑から鳥形木製品や武器形木製品、農具、工具、容器などの木製品のほか、鐸形土製品、卜骨、丹塗土器などが出土しており（千代田町 1983）、黒髪式とみられる甕口縁部もみられる（千代田町 1996）。また、過去の採集品であるが、佐賀平野では稀少な大型の九州型石鏃の存在は特筆される（千代田町 1996）。寒水川下流域の本分遺跡は中期前半から中期後半を主体に後期にも継続する集落で、墓地は検出されていないが、井戸や土坑から丹塗りが施された壺、高坏、筒形器台などの祭祀土器や、環状石斧、鐸形土製品、黒髪Ⅰ式とみられる甕口縁部（佐賀県博 1981）、方形柄孔の大型平鍬[9]（三根町 1987）など特徴的な遺物が出土している。前述したように臨海部の低地集落では貝層を伴うことが多く、多種多様な貝類、動物骨や漁具等が出土していることから、漁村あるいは半農半漁的な集落などと主に生業面から遺跡の性格づけがなされてきた。しかし、朝鮮系無文土器、外来系土器に加えて祭祀に関連する遺物の出土は注目され、通常の集落とは異なる性格を有していた可能性がある。後期後半以降、筑後川河口西岸付近に新たに集落群（諸富遺跡群）が出現し、多様な外来系土器が出土する交易拠点的な港湾集落が展開するようになるが、それ以前の中期の段階には、詫田西分遺跡や本分遺跡などが交易拠点として機能していた可能性がある。特に、当時の海岸線や主要河川に面した沖積低地に位置し、長期間継続する詫田西分遺跡は、平野北部の段丘上に位置する吉野ヶ里遺跡や松原遺跡、瀬ノ尾遺跡などの大規模・拠点的な集落群と緊密な関係にあり、河川や海を介した交易に関して重要な役割を担っていたと考えられる。

中期後半～中期末の特徴的な墳墓

吉野ヶ里遺跡では中期前半新相（汲田式新段階）から北墳丘墓への埋葬が行われており、中期後半古相（須玖式古段階）から新相（須玖式新段階）にかけて全体で 14 基の甕棺墓が連続して埋葬され、8 基から細形銅剣 7 本、中細形銅剣 1 本、青銅製把頭飾 2 点、ガラス管玉 79 点などの副葬品が出土している。遺跡南端部の盛土遺構（南祭壇・墳丘墓？）では、これまで明確な墳墓は検出されていないものの、中期後半～中期末の丹塗土器などが多数出土している。墳墓のありかたからみて、中期後半段階には吉野ヶ里遺跡において首長層（有力集団）がより明確化したと考えられる。

神埼地域では中期後半（須玖式）段階の副葬品を伴う墳墓は少なく、特に武器形青銅器を副葬する墳墓は吉野ヶ里遺跡以外には認められない。副葬品等を伴う墳墓としては、朝日北遺跡で 77 号甕棺墓（須玖式）の熟年男性人骨に付着して絹布片が出土し（佐賀県 1992）、志波屋六本松乙遺跡で 65 号甕棺墓（須玖式）の下甕棺底から長さ 40.4㎝の鉄剣が出土し（佐賀県 1991）、二塚山遺跡で 71 号甕棺墓（須玖式）から壮年女性人骨の右側腕骨に装着された状態でゴホウラ縦切型が 8 点出土している（佐賀県

1979)。志波屋・吉野ヶ里段丘北方の三津永田遺跡では、石蓋甕棺墓内の成人骨の左前腕に装着された状態でゴホウラ縦切型貝輪 10 点[10)] が出土している（七田 1953, 金関・坪井 1961)。神埼地域の周辺では､佐賀平野西部の小城市本告遺跡で 104 号甕棺墓（須玖式）から円環形銅釧 3 点が出土している（三日月町 1981)。このほか、城原川西岸の日の隈山南麓裾部に位置する山崎遺跡（二子山崎遺跡）では、工事中の不時発見で鉄戈が採集されている。鉄戈は甕棺とともに出土したとされるが、棺内出土かどうかは明らかでない。また、周辺に「須玖Ⅱ式の甕棺片」や玉類が副葬された石蓋土坑墓が存在したとされるが、正確な出土地点は明らかになっていない（木下之治 1969, 橋口 1971, 木下巧 2005)。他の類例からみて本鉄戈の所属時期は中期末頃と考えられる。

中期末（立岩式）になると、舶載鏡を副葬された墳墓が神埼地域に出現する。吉野ヶ里遺跡では、北墳丘墓西側の吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区 SJ2775 石蓋甕棺墓から小形の連弧文鏡 1 面と両腕にイモガイ貝輪 36 個を装着した熟年女性人骨が出土しており、被葬者は司祭者的な身分の女性と推測される。二塚山遺跡では、15 号甕棺墓（立岩式）から連弧文清白鏡が出土している（佐賀県 1979)。現時点で確実に中期末といえるのはこの 2 例のみで、後期初頭以降には舶載鏡を伴う墳墓が増加する。

青銅器の埋納

神埼地域では弥生時代中期末頃とみられる青銅器の埋納事例が確認されている。目達原段丘西側の目達原遺跡では、戦後間もないころに中広形銅矛 4 本の埋納が不時発見され、このうち 2 本には刃部に綾杉状の研ぎ分け文様が施されている（七田 1976)。その後、神埼地域東側の北茂安丘陵南西部の谷あいに位置する検見谷遺跡で中広形銅矛 12 本の埋納坑が不時発見され、うち 10 本に目達原銅矛と同様の研ぎ分け文様が施されていることが判明している（七田 1984, 北茂安町 1986)。神埼地域の周辺では、北茂安丘陵東端の本行遺跡で中広形銅矛 1 点が集落内から埋納された状態で出土している（鳥栖市 1997)。このほか、佐賀平野西部西側の武雄市玉江遺跡では中広形銅矛が単独で不時発見されており、埋納の可能性がある（武雄市 1987)。

小結　弥生時代中期の集落と墓地の様相

神埼地域では中期初頭に集落数が急激に増加するが、前期から継続する集落の周辺に新たな集落が複数展開する場合が多く、いわゆる母村 - 子村の関係にあったと考えられる（徳富 1995b)。前期から中期にかけて継続する集落は、中期前半には小地域における拠点的な場所として機能するようになったと考えられる。また、集落の内部構造をみると、竪穴建物群のなかに特に規模が大きい建物が存在する事例が複数あり（切畑遺跡、一本谷遺跡、船石遺跡、町南遺跡、宝満谷遺跡など)、集落内部における何らかの機能差もしくは格差を示す可能性がある。なお､中期の環壕については不明な点が多く､吉野ヶ里遺跡では吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区の断面台形の壕（SD1801）が段丘南部の中心的な集落域を取り囲む環壕となる可能性があるが、佐賀平野では他に中期段階の明確な環壕集落は知られていない。なお、沖積低地の詫田西分遺跡や姉遺跡などで検出された溝跡は、集落を取り囲む環濠となる可能性もある。

中期後半になると神埼地域では集落規模が縮小しており、中心的な集落の存在も明確ではない。平野南部の沖積低地では引き続き集落が展開しているものの、中期前半代に比べて遺構・遺物が減少している。ただし、平野北側の段丘上などでは甕棺墓の造営が引き続き活発に行われていることから、集落数が大幅に減少したとは考えにくい。中期後半には物資保管形態が貯蔵穴から掘立柱建物（高床倉庫）へと移行したと考えられており、居住形態も竪穴建物に加えて掘立柱建物（高床住居）が積極的に利用

されるようになった可能性もある。

中期の墓地について、吉野ヶ里遺跡では墓地の立地や規模、内容に差異がみられることから、本格的な甕棺墓地が形成される中期初頭段階から墓地に格差が存在した可能性があり、その背景には墓地を造営する集団間が等質的な関係ではなかったと推測される。また、中期前半からは列埋葬墓地が出現するが、大規模な墓地であっても列埋葬が行われていない場合や、小規模な墓地でも列状に埋葬されている場合もある。中期前半には北墳丘墓が築造され、一般的な墓地との格差が明確化するとともに、列埋葬墓地や集塊状墓地も同時期に展開している。

神埼地域の弥生時代墓地は甕棺墓を主体に木棺墓、土坑墓、石棺墓で構成され、丹塗土器などが廃棄された祭祀遺構を伴うことが多い。本格的な墓地の形成期は中期初頭で、中期前半から中期後半にかけて最盛期を迎える。墓地の存続時期幅をみると、①甕棺型式 1 ～ 2 型式程度の比較的短期間しか営まれていない墓地と、②中期から後期にかけて長期間継続する墓地、がある。①の墓地は甕棺墓 10 ～ 50 基程度で構成される比較的小規模な場合が多いが、西前田 B 遺跡や船石南遺跡などのように短期間に 100 基以上の墳墓が集中的に営まれる場合もある。また、短期間・小規模であっても副葬品等を伴う墳墓が含まれる墓地（花浦遺跡、八子二本黒木遺跡、高志神社遺跡など）もあり、これらが一般成員の墓地であったかは明らかでない。一方、②の墓地は墳墓数が数百基に及ぶなど（吉野ヶ里遺跡、瀬ノ尾遺跡、二塚山遺跡、船石南遺跡、姫方遺跡）、集落規模を上回る規模であることも多い。現時点で墓地周辺の集落域が未確認の場合もあるが、中期の集落と墓地は必ずしも付近で対応して存在したわけではない。大規模墓地は分村しても母村の墓域に埋葬された結果を示すと考えられる（田中 1999）。

副葬品を伴う中期の墳墓としては、吉野ヶ里遺跡では中期初頭に細形銅剣を副葬された SJ0100 甕棺墓が遺跡南部にほぼ単独で埋葬されている。中期前半には北墳丘墓が築造され、細形銅剣を伴う甕棺墓 1 基（SJ1006：汲田式新段階）が最初に埋葬されている。また、遺跡南端部には別の盛土遺構（南祭壇･墳丘墓？）が築造されている。大規模な墓地の形成や、象徴的な 2 つの盛土遺構の構築などにより、中期前半段階には吉野ヶ里遺跡が神埼地域における墓地と祭祀の中心的な場所になったと考えられる。

３．弥生時代後期から終末期の集落と墳墓

（１）弥生時代後期初頭～後期前半

後期の環壕集落

後期前半の神埼地域では集落、墓地ともに減少しており、集落規模も縮小しているとみられる。後期になると環壕を伴う集落が再び形成されるようになり、吉野ヶ里遺跡では中期末から後期初頭にかけて集落中心部が遺跡南部から遺跡中央部へと移動し、後期前半には集落中心部を取り囲む外環壕が形成される。田手川東岸の松原遺跡では集落が中期から後期にかけて継続しており、後期前半には大規模な環壕が形成されたとみられる（東脊振村 1998 ほか）。神埼地域の東側では、町南遺跡で前期後半代の環壕と重複して後期前半に断面逆台形の環壕が再掘削されており（佐賀県 1983, みやき町 2012）、内壕か外壕かは明確でないが、地域の拠点的な集落が形成されたとみられる。神埼地域の周辺では、鳥栖市藤木遺跡で後期前半に平面楕円形、断面逆台形の環壕が形成されている（鳥栖市 2002）。環壕埋土からは石製鋳型が 4 点（銅釦 1、銅釧 1、銅鏃 2）出土しており、安永田遺跡や本行遺跡などとともに後期の鳥栖市域で青銅器生産が行われていたとみられる（鳥栖市 2015）。白壁丘陵東側の本行遺跡では、

中期後半に形成された環壕が後期後半まで継続しており、銅鐸、銅矛、銅剣の鋳型のほか小銅鐸、青銅製鋤先などの出土が特筆される（鳥栖市 1997）。

環壕を持たない（未確認の）集落として、城原川流域では、東岸山麓部の的五本黒木遺跡（神埼町 1985）、西岸山麓部の切畑遺跡（佐賀県 1993）で中期末から後期前半にかけて集落が営まれている。西岸では八子六本黒木遺跡で中期からの集落が後期にも継続しており（神埼市 2009）、日の隈山南麓の横山遺跡では後期初頭の甕棺墓 6 基や後期前半～終末期の土坑墓 5 基、祭祀遺構からなる小規模な墓地が営まれ、古墳時代前期初頭まで継続している（神埼町 1987）。平野部の祇園原遺跡では後期前半から集落が展開し（神埼町 1995）、尾崎土生遺跡では中期後半から形成された集落が後期以降にも継続している（佐賀県 1985, 神埼町 1997,1999）。城原川西岸付近の川寄吉原遺跡では、後期前半を主体とする掘立柱建物 19 棟や井戸 8 基などで構成される集落が展開しており、人物絵画が線刻された鐸形土製品、瀬戸内系土器、朱精製用の辰砂鍋、銅鏃などの出土が特筆される（高島 1980, 佐賀県 1981,1985）。

田手川流域の山麓南部では、西前田 A 遺跡、夕ヶ里遺跡で中期からの集落が後期前半代にも継続している。東岸の東外遺跡では中期後半に形成された集落が後期前半まで継続している（東脊振村 1983）。松ノ内 A 遺跡では中期後半に形成された甕棺墓と土坑墓からなる墓地が後期前半まで継続し（東脊振村 1983）、墓群中央付近の祭祀遺構（土坑）の最上層から小形仿製鏡が出土している（久保 1986, 東脊振村 1997）。横田丘陵上の瀬ノ尾遺跡では環壕は検出されていないが、隣接する松原遺跡とともに中期から後期にかけて拠点的な集落と墓地が継続していたとみられる（東脊振村 2001）。

平野南部の沖積低地では、田手川下流域の詫田西分遺跡で集落が後期前半まで継続している（千代田町 1996）。また、過去に採集された大型扁平の銅鏃は特筆され（松尾 1932b,1950）、後期前半～後期中頃の実用品とみられる（藤口 1986）。周辺では、崎村遺跡（神埼町 1981）で中期末から後期前半にかけて集落が展開している程度で、田手川下流域では中期に比べ遺跡数が減少している。一方、西側の城原川下流域では、西岸の姉遺跡、黒井遺跡などで中期の集落が後期初頭～後期前半にも継続しているほか、黒井八本松遺跡では後期前半から終末期にかけて新たに集落が展開している（神埼町 1986）。

寒水川下流域では、本分遺跡、天建寺南島遺跡で後期初頭頃まで集落が継続している。北側の白壁丘陵南端部付近では、平林遺跡で掘立柱建物を主体とする中期の集落が後期前半頃まで継続している（北茂安町 1999）。寒水段丘南端部の中津隈干飯遺跡では中期末に形成された集落が後期を通じて継続しており（北茂安町 1988）、段丘西側の西寒水四本柳遺跡では中期の集落が後期前半まで継続している（みやき町 2011,2013,2018）。佐賀市東部地域では、巨勢川流域の村徳永遺跡で中期からの集落が後期前半以降にも継続しており（佐賀市 1991,1992,1993）、石土井遺跡、上九郎遺跡、薬師丸五本柳遺跡、園田遺跡では中期の集落が後期前半頃まで継続している（佐賀市 2002,2003,2005）。南宿遺跡では中期末～後期前半の集落が展開し（佐賀市 1992）、琵琶原遺跡では後期前半に形成された集落が後期後半以降にも継続している（佐賀市 1981,1993,1996,1998）。

後期前半代の主な墓地と副葬品等を伴う墳墓

佐賀平野では後期初頭（桜馬場式）になると甕棺墓数が減少し、後期前半（三津式）までで基本的に甕棺墓の造営が終焉する。後期前半の甕棺墓数は少なく、吉野ヶ里遺跡全体でも 70 基程度である。神埼地域で中期から後期前半まで継続している主な墓地としては、八子四本黒木遺跡、唐香原遺跡、瀬ノ尾遺跡、二塚山遺跡、三津永田遺跡、石動四本松遺跡、姫方遺跡、金の原遺跡などがある。甕棺墓を主

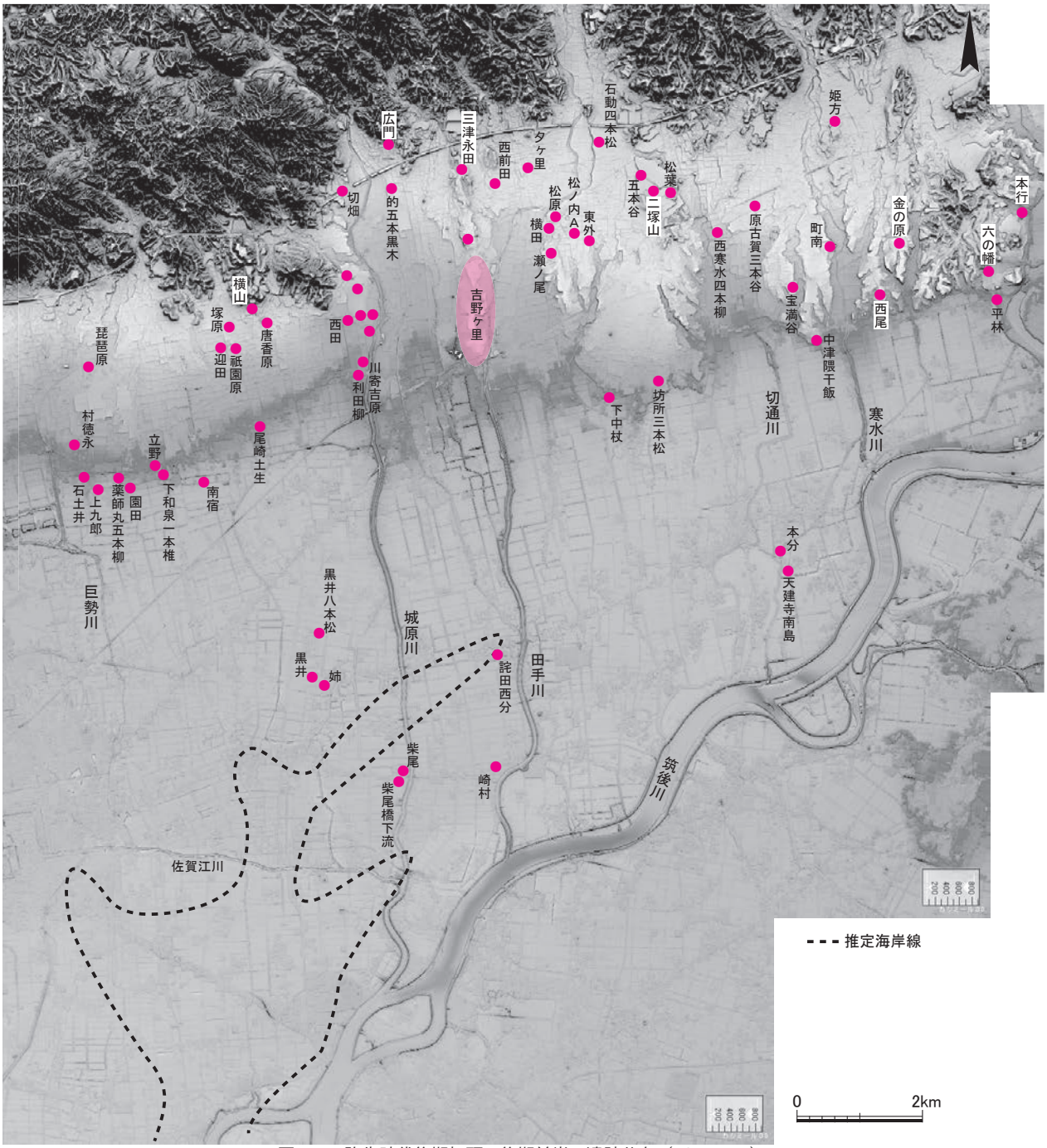


図 280　弥生時代後期初頭～後期前半の遺跡分布（1/100,000）

体とする墓地が多いが、土坑墓や石棺墓の割合が増加しており、後期後半～終末期まで継続すると考えられる。また、後期前半には中期のような列埋葬が見られなくなるが、田手川東岸山麓部の石動四本松遺跡では、後期初頭から石棺墓 31 基、土坑墓 14 基、甕棺墓 2 基で構成される墓地が展開しており、墓群は 3 列状を呈している。石棺墓、土坑墓は後期後半まで継続したとみられる（東脊振村 1995）。

副葬品を伴う墳墓は後期になると増加している。後期初頭には、二塚山遺跡 46 号甕棺墓の棺内から朝鮮半島産とみられる小形鏡（渦文鏡）と鉄矛が出土し（佐賀県 1979）、三津永田遺跡では 105 号甕棺墓の棺内から虺龍文鏡が、別の石蓋甕棺墓からは連弧文明光鏡が出土している（七田 1953, 金関・坪井 1961）。また、後期初頭とされる 32 号甕棺墓からは右大腿骨外側に鉄鏃が嵌入した成人男性人骨

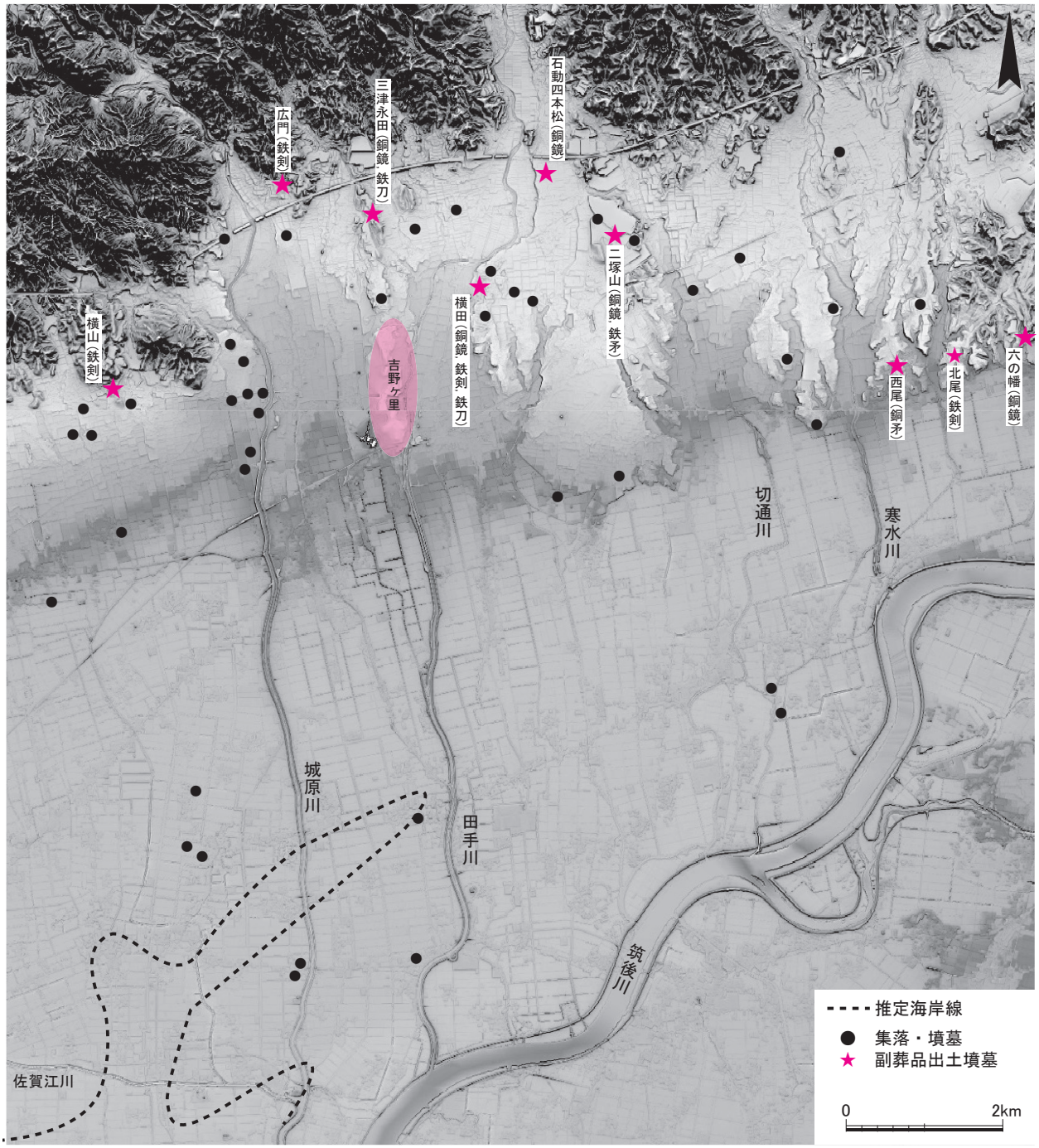


図 281　弥生時代 後期前半代の特徴的な墳墓（1/80,000）

が出土しており（橋口 1974）、弥生時代後期の数少ない殺傷人骨として注目される。このほか、所属時期が不明だが、銅鏃や鉄釧 6 点なども甕棺墓から出土したとされる（七田 1953, 金関・坪井 1961）。神埼地域の東側では、白壁丘陵南端の六の幡遺跡で中期末～後期前半の甕棺墓 43 基や土坑墓、石棺墓からなる墓地が展開しており、29 号甕棺墓（桜馬場式）の棺内からは連弧文昭明鏡が 2 つに割れた状態で出土している（北茂安町 1991, 徳富 1995a, 木下 2005）。このほか、城原川西岸の早稲隈山南麓の横山遺跡では、SJ01 甕棺墓（桜馬場式）の接口部粘土中から長さ 28.5cm の鉄剣が出土している（神埼町 1987）。吉野ヶ里遺跡では、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区 SJ1204 甕棺墓（桜馬場式）の棺外から残存長 16.4cm の鉄剣が出土している。

後期前半には、二塚山遺跡で 76 号甕棺墓（壮年女性人骨）の目張り粘土中に破砕された状態で連弧文昭明鏡が、三津永田遺跡では三津式の標式である 104 号甕棺墓の棺内から成人骨とともに流雲文縁細線式獣帯鏡と素環頭鉄刀が出土している。石動四本松遺跡では SJ032 甕棺墓の棺外から破砕された状態で連弧文昭明鏡が出土しており、棺内からは翡翠製勾玉 2 点と碧玉製管玉 5 点も出土している（東脊振村 1995）。また、不時発見資料として、田手川東岸の横田遺跡（松原遺跡の範囲に含まれる）で過去に甕棺墓または石棺墓から鉄剣、素環頭鉄刀、方格規矩鏡が出土したとされるが、墓の性格な位置や、3 点が共伴するかは明らかになっていない（木下 1967, 橋口 1971, 家田ほか 1994）。

このほか、不時発見資料であるが、城原川東岸山麓部の神埼市広門遺跡では過去に甕棺墓や石棺墓が発見され、石棺墓から鉄剣の破片が出土したとされる（橋口 1971）。神埼地域の東側では、白壁丘陵南部のみやき町西尾遺跡で広形銅矛が採集されており（古賀 1925, 北茂安町 1986）、白壁遺跡（北尾遺跡）では甕棺墓から鉄剣が（橋口 1971）、天神遺跡では甕棺墓から小形仿製鏡が出土したとされる（高倉 1972, 家田ほか 1994）。また、神埼地域の周辺では、佐賀平野中央部の佐賀市上高木遺跡で広形銅矛 2 本が（松尾 1936a）、嘉瀬川東岸の佐賀市尼寺一本松遺跡で中広形銅戈が（松尾 1936b）それぞれ出土しているが、墳墓の副葬品か埋納かは明らかでない。

神埼地域の周辺では、佐賀平野中央部の尼寺一本松遺跡で SJ7007 甕棺墓（後期前半新相）の棺外から雲雷文帯連弧文鏡が、SJ7026 甕棺墓（後期前半新相）の棺内から方格規矩鏡が、それぞれ破砕された状態で出土している（佐賀市 2013）。佐賀平野西部では、丁永遺跡 6 区で SJ06 甕棺墓（後期前半）の目張り粘土中から 4 片に割れた状態で異体字銘帯鏡が出土しており、近接する八ッ戸遺跡 5B 区では SJ09 甕棺墓（後期前半）の棺外から小形仿製鏡が出土している（小城市 2013）。地理的には平野西部西側の武雄地域、平野西部の小城地域、平野中央部の佐賀地域、平野東部の神埼地域、平野東端部の鳥栖地域、に分布のまとまりがあり、後期前半段階における各小地域単位の首長層の墳墓と考えられる。傾向として中期前半代の武器形青銅器の分布状況と大きくは変わっておらず、分布中心は引き続き神埼地域にある。また、銅鏡だけでなく鉄製武器を伴う墳墓が集中することも佐賀平野では神埼地域だけにみられる特徴である。

（2）弥生時代後期後半～終末期

環壕集落の盛衰

後期後半の吉野ヶ里遺跡では、外環壕の内側に新たに 2 重環壕区画（南内郭）と構えの壕が造営され、集落の中枢部が形成されるとともに、南内郭西方では高床倉庫群が営まれている。吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区では突出部を持つ溝の一部が掘削されており、溝が埋没する過程で中広形銅戈が埋納されている。終末期になると南内郭と構えの壕は掘り直されて拡張するほか、新たに 2 重環壕区画（北内郭）が形成され、内部に大型掘立柱建物が築造されている。遺跡南端部の南祭壇（墳丘墓？）では周囲に 2 条の環壕が掘削されている。環壕集落内部の諸施設が完成し内部構造が最も複雑化するが、古墳時代前期初頭までには壕が埋没したと考えられる。また、環壕集落の北端からさらに北に約 500m 離れた遺跡北部の丘陵裾部には福田型銅鐸が埋納されており、弥生時代終末期における共同体祭祀の終焉を示すとみられる。

田手川東岸の松原遺跡では、低丘陵頂部に一辺約 20 ～ 25m の四隅が張り出す 2 つの隅丸方形環壕区画が形成され、その周囲を同心円状に 4 条の環壕が取り囲む特異な構造を呈している（河野 1995,

東脊振村 1998,2000, 吉野ヶ里町 2015, 蒲原 2002)。削平のため環壕内部で検出されている竪穴建物などの施設は多くなく、環壕区画の性格が明確でないものの、集落の中枢部分と考えられる。特徴的な遺物として、9 区の溝（環壕）上層から終末期～古墳時代前期初頭の土器とともに完形の小形仿製鏡[11)]が出土している（佐賀県 1998)。隣接する瀬ノ尾遺跡では、後期後半～終末期の竪穴建物約 290 棟からなる大規模な集落が展開しているが、環壕は検出されていない。また、瀬ノ尾遺跡の一部とみられる松の森遺跡では終末期～古墳時代前期初頭の竪穴建物群が展開している（佐賀県 1983)。松原遺跡、瀬ノ尾遺跡は個別遺構の時期や集落の変遷など全貌が明らかになっていないが、吉野ヶ里遺跡と田手川を挟んで向かい合う位置に大規模拠点的な集落が展開し、古墳時代前期にも継続する点は注目される。なお、瀬ノ尾遺跡 SH102 竪穴建物跡からは方格規矩鏡の破片が出土している（東脊振村 2001)。山麓南部の夕ヶ里遺跡では、後期後半～終末期の竪穴建物約 170 棟や掘立柱建物群からなる大規模な集落が展開しており、古墳時代前期にも継続している。調査区の北部と南西部で検出された溝は集落を取り囲む環壕または条壕とみられ、北側山麓部の西一本杉古墳の墳墓群と対応する集落と考えられている（佐賀県 1983, 蒲原 1994,2002)。

神埼地域の東側では、寒水段丘東側の町南遺跡で後期前半に形成された断面逆台形の環壕が終末期には埋没したとみられる。環壕の周辺には後期後半～終末期の竪穴建物 53 棟、掘立柱建物 19 棟などからなる集落が展開しており、このうち終末期の SB103 竪穴建物跡からは位至三公鏡（双頭龍文鏡）の破片が出土している（佐賀県 1983)。原古賀三本谷遺跡では後期後半に 2 重環壕区画が 2 つ形成されており、うち一つは内壕にコの字形の突出部を有する。周囲には竪穴建物群とともに同時期の溝が複数展開していることから、2 重環壕区画のさらに外側を取り囲む環壕が存在したとみられ、松原遺跡や吉野ヶ里遺跡と構造的に類似した多重環壕集落が形成されている。特徴的な遺物として、2 重環壕外壕（SD001）からガラス勾玉の土製鋳型が、環壕区画内部の SK400 土坑から銅鏡片が、別の 2 重環壕外壕（SD107）からは瀬戸内系器台が出土している（中原町 1990)。

志波屋・吉野ヶ里段丘西側の志波屋一の坪遺跡では、後期後半～終末期の土器を伴う溝と竪穴建物からなる集落が形成され、古墳時代前期初頭にも継続している。溝は一部しか検出されていないが、集落を取り囲む環壕の可能性がある（神埼町 1996)。神埼地域の西側では、城原川西岸平野部の迎田遺跡で突出部を有する横断面逆台形の溝の一部が検出されており（神埼町 1991)、終末期の集落内部を取り囲む環壕（内壕）と考えられる。また、日の隈山東麓裾部の八子六本黒木遺跡では集落と墓地が後期後半～古墳時代前期初頭にも継続しており（神埼市 2009)、検出された溝は突出部とみられる部分があり、環壕（内壕）となる可能性がある。　神埼地域の周辺では、佐賀平野中央部の嘉瀬川流域で惣座遺跡、惣座 B 遺跡（＝惣座東環壕)、惣座南遺跡（大和町 1986, 佐賀県 1990)、岡裏遺跡（大和町 1994)、榎木遺跡（大和町 1994）など突出部を有する複数の環壕集落が近接して展開している。

環壕集落以外の集落と墓地

城原川西岸では、祇園原遺跡で後期前半からの集落が後期後半にも集落が展開しており（神埼町 1995)、尾崎利田遺跡では終末期の甕棺墓が 2 基検出されている（神埼町 1980)。横山遺跡では土坑墓 5 基と石棺墓 1 基が後期後半～終末期に属するとみられ、特に石棺墓からは朱や石製勾玉とともに長さ 45.2cm の鉄剣が出土している（神埼町 1987)。尾崎土生遺跡では後期後半～終末期の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝跡が検出されており、集落は古墳時代前期初頭まで継続している（神埼町 1997)。

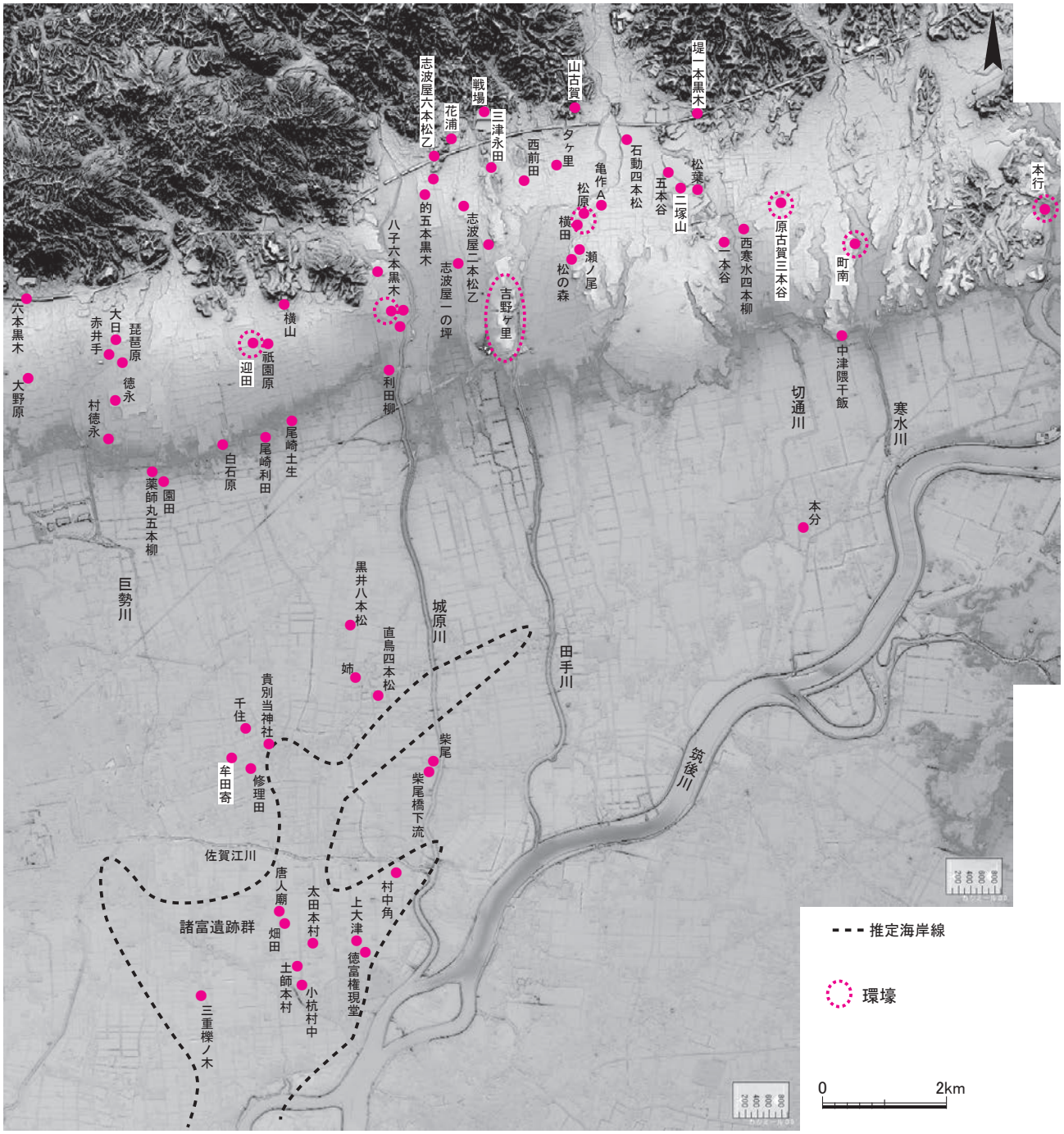


図 282　弥生時代後期後半～終末期の遺跡分布（1/100,000）

志波屋・吉野ヶ里段丘北側では、志波屋二本松（乙）遺跡（神埼町 1997）、志波屋五本松遺跡（佐賀県 1983）、志波屋六の坪（乙）遺跡などで終末期～古墳時代前期初頭の小規模な集落が展開している。山麓部の戦場古墳群では、6 区の古墳下層から後期後半の土器が出土しているほか、土坑状遺構からほぼ完形の青銅製鋤先が出土しており、南側の三津永田遺跡と関係する可能性が指摘されている（佐賀県 1999）。田手川上流域の山麓部では、西前田遺跡で中期の集落が後期以降にも継続しており、終末期まで小規模な集落が存続する（東脊振村 1981）。横田丘陵北側の亀作 A 遺跡では、後期後半～終末期を中心とする竪穴建物 22 棟、掘立柱建物 20 棟からなる集落が展開しており、一部は古墳時代前期初頭にも継続している。また、竪穴建物内の柱穴底面から小形仿製鏡が出土している（東脊振村 1989）。

神埼地域の東側では、切通川上流域の標高約 40m の低丘陵上に位置する堤一本黒木遺跡で、3 基の土坑から後期後半の土器とともに炭化物や焼土が検出されており（佐賀県 1987）、見張所的な場所だった可能性がある（徳富 1995b）。目達原段丘北東の一本谷遺跡では後期後半～終末期の小規模な集落が展開しており（上峰村 1983）、寒水段丘南端部の中津隈干飯遺跡では中期末に形成された小規模な集落が後期を通じて継続している（北茂安町 1988）。西寒水四本柳遺跡では中期の集落が後期初頭頃までは継続しているが、後期前半～後期後半がほぼ空白期とみられ、終末期から再び集落が展開し古墳時代前期にも継続している。7 区の断面逆台形の直線的な溝から終末期の土器とともに勾玉や鉄鏃が出土しているほか、8 区包含層からは手焙形土器が出土している（みやき町 2013）。

神埼地域の西側では、尾崎土生遺跡で集落が継続しており（神埼町 1997）、白石原遺跡では後期後半～終末期を中心とする竪穴建物や井戸からなる集落が展開している（佐賀市 2012）。平野北側の琵琶原遺跡では後期後半～終末期の竪穴建物 22 棟や掘立柱建物、井戸、土坑が検出されており（佐賀市 1981,1993,1994,1996,1998）、隣接するする赤井手遺跡の竪穴建物群（佐賀市 1998）とともにまとまった集落が形成されている。このほか、巨勢川流域では大日遺跡（佐賀市 1996）、大野原遺跡（佐賀市 1993）、徳永遺跡 1 区（佐賀市 1997）、村徳永遺跡（佐賀市 1990,1991,1992）などで後期後半～終末期の集落が展開しており、一部は古墳時代前期にも継続している。

沖積低地の集落の動向

後期後半になると、平野南部の沖積低地では寒水川下流域や田手川下流域よりも西側の城原川下流域以西に数多く集落が展開するようになる。黒井八本松遺跡では後期前半に形成された集落が継続しており、特に 4 条の細い溝が短い間隔で平行し、埋土から多量の土器が出土していることから、報告者は排水用の溝ではなく祭祀的な性格を持つとみているが（千代田町 1986）、環壕の可能性も指摘されている（七田 2012）。南側の姉遺跡（千代田町 2000）、直鳥四本松遺跡（千代田町 1989）では終末期の井戸や土坑が、千住遺跡では終末期の掘立柱建物や溝が検出されている（佐賀市 1994）。下流域西岸の柴尾遺跡ではⅠ区の井戸から免田式の長頸壺が出土しており（千代田町 1988）、同一遺跡とみられる柴尾橋下流遺跡では井戸や土坑から後期後半～終末期の土器が出土しているほか、SD004 溝底面から出土した雲雷文帯連弧文鏡の破片が特筆され（佐賀市 1982）、付近に拠点的な集落が存在した可能性がある（蒲原 1994）。

巨勢川下流域東岸の沖積低地に位置する牟田寄遺跡は、後期後半に出現し、終末期～古墳時代前期初頭を中心とする多数の掘立柱建物と溝、井戸、土坑で構成される大規模集落である（佐賀市 1990,1993,1994,1997,1998,1999）。地盤沈下を防ぐため柱穴底面に礎板が設けられている建物が多く、竪穴建物跡は検出されていない。複数の溝は集落を囲む環壕となる可能性も指摘されており、平野南部における拠点的な集落として機能していたとみられる。特徴的な遺物として、E 区土坑から青銅製鋤先の破片が（佐賀市 1993）、No.5 トレンチ包含層、15 区掘立柱建物柱穴からそれぞれ小形仿製鏡が出土している（佐賀市 1990,1998）。隣接する修理田遺跡では、2 区の土坑状遺構から終末期の土器とともに破鏡が出土している（佐賀市 1998）。千住遺跡、牟田寄遺跡ではシカ骨の卜骨なども出土している。

牟田寄遺跡の周辺では、後期後半以降、筑後川河口西岸付近の標高 3m 程度の低地部に新たに集落群（諸富遺跡群）が形成されるようになる。図示した推定海岸線（下山ほか 1994）では諸富遺跡群の範囲が海になっているが、後期後半頃までには諸富遺跡群一帯が陸地化したことに伴い集落群が形成され

たとみられる。諸富遺跡群は、徳富権現堂遺跡（諸富町 1984）、村中角遺跡（諸富町 1985）、唐人廟遺跡（諸富町 1987）、太田本村遺跡（諸富町 1988, 佐賀県 1994）、畑田遺跡（諸富町 1988）、土師本村遺跡（諸富町 1989）、三重櫟ノ木遺跡（諸富町 1990）、小杭村中遺跡（佐賀県 1989）などで構成され、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭に盛行する。部分的な調査が多いため集落の詳しい構造などは明らかになっていないが、掘立柱建物と井戸、土坑で構成される集落群とみられ、東海系、吉備系、讃岐系、山陰系、畿内系、肥後南部系など多様な外来系土器が出土していることや遺跡の立地などから港津的集落と考えられており（蒲原 1994,2002）、有明海沿岸地域における外来系土器製作技術の伝播・受容の核となる地域と評価されている（壇 2005）。外来系土器以外では、村中角遺跡出土の銅鏃 2 点や鹿角製刀子柄などが特筆される（諸富町 1985）。

後期後半～終末期の墓地と副葬品を伴う墳墓

神埼地域の弥生時代後期後半～終末期に造営される墳墓は土坑墓、石棺墓が主体となる。吉野ヶ里遺跡ではこの時期の墳墓が検出されておらず、墓地の実態が明確になっていない。神埼地域で確認されている墓地としては、横山遺跡、三津永田遺跡、石動四本松遺跡、瀬ノ尾遺跡、二塚山遺跡などがある。また、少数であるが弥生時代終末期（惣座式期）の甕棺墓が花浦遺跡（神埼町 1988）、八子六本黒木遺跡 11 区（神埼町 2005）、尾崎利田遺跡（佐賀県 1980）、山古賀遺跡（佐賀県 1990）、六本黒木遺跡（佐賀県 1980）、徳永遺跡 1 区（佐賀市 1997）、白石原遺跡（佐賀市 2012）、惣座遺跡（佐賀県 1990）などで検出されているが、副葬品を伴うものはなく、客体的な存在とみられる。なお、数は少ないが甕棺（土器棺）墓は古墳時代前期にも継続している。

副葬品を伴う後期後半代の墳墓として、二塚山遺跡 29 号土坑墓から熟年男性の頭蓋骨とともに細線式獣帯鏡が、26 号土坑墓から赤色顔料やガラス小玉 221 個以上とともに四葉座内行花文鏡の破片が、17 号土坑墓から小形仿製鏡が、19 号土坑墓から鉄剣が、36 号土坑墓と 52 号土坑墓からそれぞれ素環頭鉄刀が出土しており、近接する五本谷遺跡では 25 号土坑墓から小形仿製鏡が、75 号土坑墓から方格規矩鏡の破片が出土している（佐賀県 1979）。石動四本松遺跡では、SC004 石棺墓（後期後半か）から小形仿製鏡が出土している（東脊振村 1995）。城原川西岸平野部の白石原遺跡では、終末期の甕棺墓から破鏡が出土している（佐賀市 2012）。

このほか、神埼地域で過去に不時発見された銅鏡として、三津永田遺跡に隣接する三津西遺跡（三津永田北方遺跡）、目達原段丘東側の南角遺跡で四葉座内行花文鏡の破片が、志波屋三本松遺跡で虺龍文鏡の破片が出土している（佐賀県 1976, 家田ほか 1994）。上志波屋遺跡では、後期古墳の封土中より出土したとされる小型の方格規矩鏡や（七田 1934a）、箱式石棺墓から出土したとされる連弧文明光鏡（橋口 1971, 志佐 1976）がある。城原川西岸山麓部では、城原三本谷北遺跡で方格規矩鏡の破鏡が箱式石棺墓より出土したとされ、北外遺跡では内行花文鏡の破片が採集されている（佐賀県 1976, 家田ほか 1994）。目達原段丘北東部の（坊所）一本谷遺跡では箱式石棺墓から長宜子孫連弧文鏡が出土したとされるが、墓の正確な位置は明らかになっていない（志佐 1976, 家田ほか 1994）。近接する松葉遺跡では、箱式石棺墓からガラス小玉数百個とともに方格規矩四神鏡が出土したとされる（木下 1960, 家田ほか 1994）。このほか、不時発見の小形仿製鏡が横田丘陵南部の吉野ヶ里町鳥の隈遺跡、寒水段丘上のみやき町天神遺跡、姫方遺跡、白壁丘陵上の白壁白石遺跡（二の原遺跡）などで出土している（高倉 1972, 志佐 1976）。神埼地域の周辺では、鳥栖市藤木遺跡で環壕外側に位置する石蓋土坑墓（終末期か）

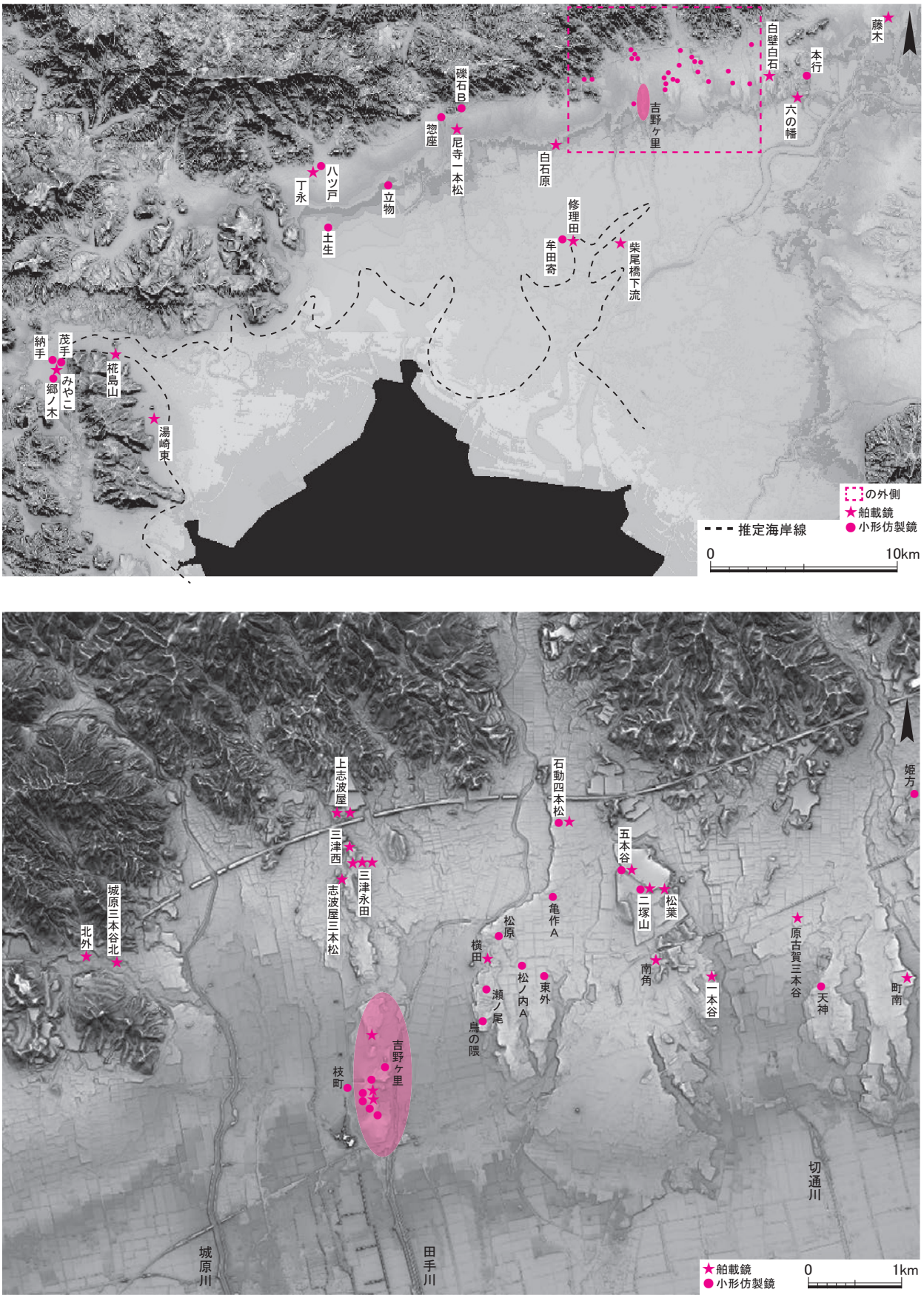


図 283　上：佐賀平野における弥生時代後期の青銅鏡出土遺跡分布（1/300,000）　下：吉野ヶ里遺跡周辺（1/60,000）

から破砕された四葉座内行花文鏡が出土している（鳥栖市 2002）。佐賀平野西部西側の武雄盆地周辺では、椛島山遺跡で連弧文昭明鏡や方格規矩鏡が（家田ほか 1994）、みやこ遺跡で内行花文鏡の破片が、茂手遺跡、納手遺跡、郷ノ木遺跡でそれぞれ小形仿製鏡が出土している（武雄市 1986）。採集資料が多いものの、弥生時代後期の神埼地域における青銅鏡の集中的な分布は北部九州全体でみても極めて特異であり、一墳墓に 1 枚だけが副葬される原則が遵守されている点も特徴的である（七田 2010）。

小結　弥生時代後期の集落と墓地の様相

神埼地域では後期前半代の集落数は少なく、環壕集落が形成されているのは町南遺跡、松原遺跡、吉野ヶ里遺跡に限られる。後期から新たに出現する集落は少なく、前期～中期から継続する集落が後期以降にも展開している場合が多い。平野南部の沖積低地部でも後期前半には集落数が減少している。また、後期前半には集落の減少に伴い墳墓数も減少しているが、舶載鏡や鉄製武器などを副葬する墳墓が集中的に造営されており、佐賀平野全体でも特に神埼地域に分布が偏っている。

後期後半になると神埼地域全体で集落数が増加している。平野北側の段丘上では町南遺跡、原古賀三本谷遺跡、松原遺跡、迎田遺跡など環壕集落が複数展開しており、小地域ごとの拠点化が進行したとみられる。また、夕ヶ里遺跡、瀬ノ尾遺跡などのように竪穴建物約 200 ～ 300 棟からなる大規模集落が複数形成されており、神埼地域全体として居住人口が大幅に増加したとみられる。平野南部の沖積低地部では筑後川河口付近の陸地化が進んだとみられ、牟田寄遺跡や諸富遺跡群などそれまで集落がほとんど展開していなかった場所に新たに集落群が形成されるようになる。これらの低地集落は竪穴建物を伴わず、掘立柱建物や井戸、溝などで構成されており、溝の一部は集落を取り囲む環壕となる可能性がある。低地集落群は弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけて盛行している。

後期後半代の墓地は石棺墓や土坑墓が主体となり、二塚山遺跡など一部で舶載鏡や鉄製武器を伴う墳墓の造営が続いているものの、神埼地域全体として集落に比べて墓地の数が極めて少ない。吉野ヶ里遺跡ではこの段階の墳墓が検出されておらず、墓地が別の場所に存在していた可能性も考えられる。

終末期には、吉野ヶ里遺跡の環壕内部に機能分化した 2 つの内郭が形成され、大型掘立柱建物が築造されるなど、内部構造が最も複雑化するとともに、北墳丘墓や南祭壇（墳丘墓？）での祭祀行為も継続していたとみられる。こうした状況からみて、終末期には吉野ヶ里遺跡が神埼地域における集落と祭祀の中核的な場所として機能していたと考えられる。

筑後川河口西岸付近に展開する諸富遺跡群の位置づけについては、多様な外来系土器が集中的に出土することに加え、平野北側に吉野ヶ里遺跡などの拠点的集落が位置することから、神埼地域の「クニ」の港津的集落と考えられている（蒲原 1994,2002, 七田 2017）。その背景として、吉野ヶ里遺跡でも吉備系、山陰系、西部瀬戸内系、畿内系、肥後系などの外来系土器が出土していることに加え、変容品を含む庄内型甕が主に田手川・城原川沿いに分布していることや、初期の前方後方墳（吉野ヶ里遺跡、鳥栖市赤坂古墳、筑紫野市隈西小田遺跡）が筑後川河口から遡った地域に分布することなどが指摘されている（蒲原 1994,2002）。しかし、諸富遺跡群の形成母体が吉野ヶ里遺跡を含む周辺の集落群であったかどうかは明らかでなく、近接する大規模拠点的集落である牟田寄遺跡や巨勢川流域の集落群との関係性なども考慮する必要がある。修理田遺跡、柴尾橋下流遺跡では舶載鏡が出土しており、単独で小規模な「クニ」が形成されていた可能性も否定できない。また、後期後半段階から突如として集落群が形成されることについては、何らかの外的要因が作用した可能性も考えられる。諸富遺跡群の位置づけを巡っ

ては、佐賀平野だけでなく筑後川流域圏の遺跡群の動向等をふまえ、広い視野からさらに検討を進める必要がある。また、佐賀平野における弥生時代後期の「クニ」の範囲、境界を巡っては、後の律令期の肥前国神埼郡の境界線を念頭に「クニ」の範囲が措定されているが（七田 2017 ほか）、その正否や形成過程についてはさらに詳しい検討が必要と思われる。

4．古墳時代前期初頭の集落と墳墓

古墳時代前期初頭の吉野ヶ里遺跡では、遺跡中央部の埋没した環壕、溝の上面に前方後方墳と方形周溝墓が築造され、墓域が形成される。古墳時代前期の集落は、弥生時代終末期に比べて規模が大幅に縮小しているものの、竪穴建物数棟からなる小規模な集落が継続しており、志波屋・吉野ヶ里段丘上の各所に分散して展開している。

吉野ヶ里遺跡西方約 200m の微高地上に立地する馬郡遺跡群[12)]では、弥生時代後期の遺構はほとんど確認されていないが、古墳時代前期初頭には遺跡南端部で弥生時代中期の甕棺墓群を切って掘削された直線的な溝が東西方向に約 150m 延びている（神埼町 2002,『172 集』）。溝は断面 U 字状で、上面を大きく削平されているが、埋土から伝統的第Ⅴ様式系土器群を中心とする夕ヶ里式古相期（蒲原 2017）の各器種が大量に出土している。溝の南側には古墳時代前期初頭の方形周溝墓 7 基が造営されているほか、溝の北側には古墳時代前期初頭～前期前半の竪穴建物が 8 棟分布しており、未調査区域を含めるとさらに多くの集落遺構が存在する可能性が高い（神埼町 1995）。なお、この直線的な溝は墓域と集落域とを区画するためと考えられるが、集落全体を取り囲む環壕となるのか、方形区画となるのかは明らかでない。また、馬郡遺跡群北方の志波屋一の坪遺跡では弥生時代終末期の集落が継続しており、古墳時代前期初頭～前期前半の竪穴建物約 20 棟からなる集落が展開している（神埼町 1995,1996）。

城原川東岸の標高 20m の自然堤防上に位置する右原祇園町遺跡では、南北 30m、東西 16m 以上の明確な（長）方形の環壕区画が検出されており、古墳時代前期初頭～前期前半の方形居館状遺構と考えられている。環壕区画内部から建物は検出されていないが、区画溝に沿って掘られた細い溝は柵列の可能性があり（蒲原 1995）、環壕区画の周囲には竪穴建物 3 ～ 4 棟や土坑からなる小規模な集落が展開している（神埼町 1996）。このほか、巨勢川流域から佐賀平野中央部にかけては古墳時代前期初頭から集落数が増加しているが、久富遺跡 1 区では出入口を有する円形環壕区画の一部が検出されており（佐賀市 1994）、拠点的な集落が形成されていた可能性がある。

平野南部では、田手川流域の荒堅目遺跡で掘立柱建物や井戸から前期初頭の土器が出土しており（神埼町 1985）、本堀朝日遺跡（神埼町 1991）、森の木遺跡（佐賀県 1983）などとともに上流域と下流域の遺跡群との中継的な集落と位置づけられる（蒲原 1994）。寒水川下流域では、本分遺跡で土坑から弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の土器が出土しており（三根町 1987）、田島一本松遺跡（みやき町 2006）でも古墳時代前期に再び集落が形成されたとみられるほか、筑後川西岸付近の天建寺土居内遺跡では竪穴建物 2 棟や井戸が検出されている（三根町 1985）。また、城原川下流域西岸の標高 3m 前後の沖積低地に立地する牟田寄遺跡と諸富遺跡群では、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけて拠点的な集落が継続している。なお、平野南部の沖積低地では、弥生時代後期と同様に墳墓が検出されておらず、集落に対応する墓地の実態は明らかでない。

田手川上流の山麓南部、標高約 60m 前後の丘陵末端部に位置する西一本杉遺跡では、弥生時代終末

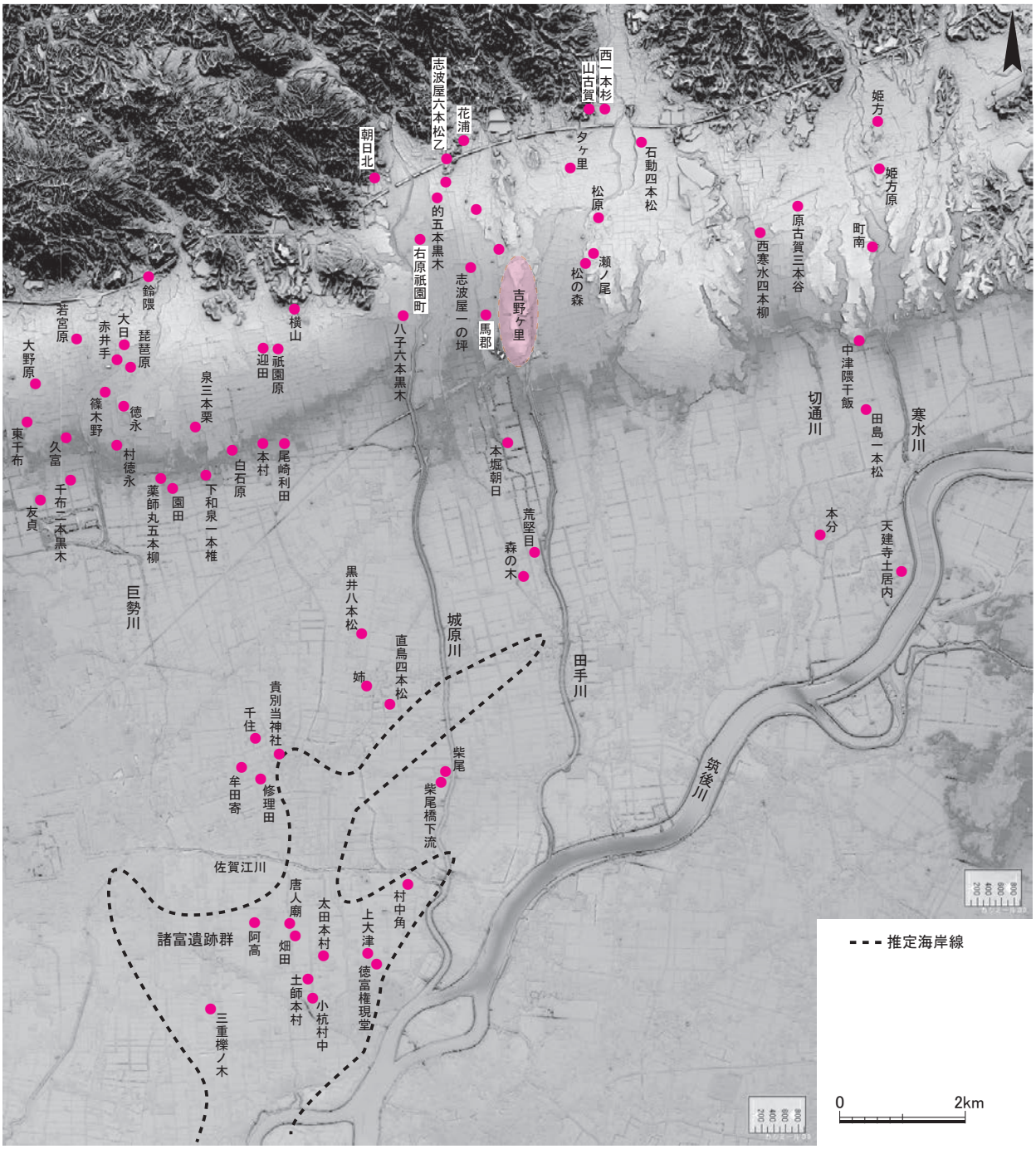


図 284　古墳時代前期初頭の遺跡分布（1/100,000）

期新相頃から古墳時代前期にかけて継続的に墳墓が造営されている。なかでも ST008 は長軸 20m、短軸 17m の楕円形の主丘部に長さ 5.5m、幅 8m の長方形台状部が付属する前方後円形の墳墓で、内部主体の箱式石棺墓からは折り曲げられた大型の鉄ヤリガンナが出土しているほか、主丘部と台状部の接続部分に掘られた弧状溝の底から惣座 2 式期の二重口縁壺が出土している（佐賀県 1983, 蒲原 1994）。隣接する山古賀遺跡 2 区では、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の箱式石棺墓 14 基、土坑墓 9 基、壺棺墓 1 基が尾根上に密集しており、石棺墓からは惣座 1 ～ 2 式期の土器や鉄剣、鉄ヤリガンナなどが出土している（佐賀県 1990）。これらは近接する夕ヶ里遺跡（佐賀県 1983）の大規模集落に対応する墳墓と考えられる（蒲原 1994）。

以上、神埼地域における弥生時代～古墳時代前期初頭の集落と墓地の動態について現時点での状況をみてきた。改めて、吉野ヶ里遺跡が地域のなかで弥生時代を通じて継続し、小さなムラから大きなクニへと徐々に展開していく過程を把握できる稀有な遺跡であることを確認できた。ただし、未整理の資料も多く残されており、特に土器の細かな検討や遺物の地点別の検討などは今後の課題としたい。また、神埼地域における弥生時代遺跡の調査例も増加しているが、既存資料の見直しや未報告資料の公表なども大きな課題である。今後も資料整理を継続的に進め、未解明の課題を明らかにしていくことで、吉野ヶ里遺跡を含む神埼地域の「地域史」の解明に寄与していく必要がある。

第 2 章第 3 節　註

1）地形名称は（徳富 1994,1995a,b,1997,2001）を参照した。地形図はカシミール 3 D を使用した。

2）昭和 53 年度の圃場整備に伴う県の調査。未報告。

3）報告書（上峰町 2002）では写真のみ掲載されており、細形銅矛切先とされている。

4）目達原古墳群のひとつである甕棺塚古墳下層の封土中とみられる高い位置から 10 数基の甕棺墓が不時発見されていることから（松尾 1950）、弥生時代墳丘墓が存在した可能性が指摘されている（徳富 1995b, 七田 2010）。

5）甕棺実測図が報告書未掲載のため型式不明。

6）現在は京都大学総合博物館蔵。

7）貝輪は 10 点出土したとされるが、現存するのは 3 点である。

8）未報告資料だが、写真は佐賀県教委 2008『吉野ヶ里遺跡と古代韓半島』に掲載。

9）小城市土生遺跡、生立ヶ里遺跡出土の平鍬と形態的に類似する。

10）甕棺墓の時期不明。個人蔵。佐賀県立博物館保管。

11）未報告資料。写真は（佐賀県 1998）、拓本は（細川 2009）に掲載されている。

12）調査区により馬郡遺跡、馬郡・竹原遺跡群、中園遺跡、枝町遺跡などと名称が異なるが、一連の集落とみて「馬郡遺跡群」とする。

第 2 章第 3 節　参考文献（調査報告書のみ。その他は第 1 章を参照。）

牛津町教育委員会 1995『生立ヶ里遺跡―出土木製品図録篇―』牛津町文化財調査報告書第 7 集
小城市教育委員会 2013『丁永遺跡・天神軒遺跡・八ツ戸遺跡』小城市文化財調査報告書第 22 集
上峰村教育委員会 1983『一本谷遺跡』上峰村文化財調査報告書
上峰村教育委員会 1983『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書
上峰町教育委員会 1988『船石遺跡Ⅱ　遺構図録編』上峰町文化財調査報告書第 6 集
上峰町教育委員会 1989『船石遺跡Ⅱ　本文編』上峰町文化財調査報告書第 7 集
上峰町教育委員会 1990『船石遺跡Ⅲ』上峰町文化財調査報告書第 8 集
上峰町教育委員会 1991『船石遺跡Ⅳ』上峰町文化財調査報告書第 9 集
上峰町教育委員会 1997『八藤遺跡Ⅰ』上峰町文化財調査報告書第 13 集
上峰町教育委員会 1998『八藤遺跡Ⅱ』上峰町文化財調査報告書第 14 集
上峰町教育委員会 1998『坊所二本松遺跡』上峰町文化財調査報告書第 15 集
上峰町教育委員会 1999『八藤遺跡Ⅲ』上峰町文化財調査報告書第 16 集
上峰町教育委員会 2002『船石南遺跡Ⅰ』上峰町文化財調査報告書第 21 集
上峰町教育委員会 2002『船石南遺跡Ⅱ』上峰町文化財調査報告書第 22 集
上峰町教育委員会 2003『船石南遺跡Ⅲ』上峰町文化財調査報告書第 23 集
上峰町教育委員会 2003『船石遺跡Ⅵ　船石南遺跡Ⅳ』上峰町文化財調査報告書第 24 集
神埼町教育委員会 1980『利田柳遺跡Ⅲ区』神埼町文化財調査報告書
神埼町教育委員会 1980『四本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第 6 集
神埼町教育委員会 1985『的五本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第 11 集
神埼町教育委員会 1985『荒堅目遺跡』神埼町文化財調査報告書第 12 集
神埼町教育委員会 1987『横山遺跡』神埼町文化財調査報告書第 15 集
神埼町教育委員会 1988『花浦遺跡』神埼町文化財調査報告書
神埼町教育委員会 1990『馬郡・竹原遺跡群』神埼町文化財調査報告書第 26 集
神埼町教育委員会 1991『井手遺跡・迎田遺跡』神埼町文化財調査報告書第 28 集

神埼町教育委員会 1991『本堀朝日遺跡Ⅲ区』神埼町文化財調査報告書第 29 集
神埼町教育委員会 1993『的五本黒木遺跡Ⅳ区』神埼町文化財調査報告書第 33 集
神埼町教育委員会 1995『塚原遺跡』神埼町文化財調査報告書第 44 集
神埼町教育委員会 1995『馬郡・竹原遺跡群』神埼町文化財調査報告書第 45 集
神埼町教育委員会 1995『塚原遺跡・小林遺跡他』神埼町文化財調査報告書第 46 集
神埼町教育委員会 1996『志波屋一ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ区 姉川十三本松遺跡Ⅱ区 岩田芦ノ元遺跡Ⅱ区』神埼町文化財調査報告書第 49 集
神埼町教育委員会 1996『熊谷遺跡』神埼町文化財調査報告書第 51 集
神埼町教育委員会 1996『右原祇園町遺跡』神埼町文化財調査報告書第 52 集
神埼町教育委員会 1997『尾崎土生遺跡Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区』神埼町文化財調査報告書第 58 集
神埼町教育委員会 1997『志波屋二本松（乙）遺跡』神埼町文化財調査報告書第 60 集
神埼町教育委員会 1999『尾崎土生遺跡』神埼町文化財調査報告書第 65 集
神埼町教育委員会 2000『西田遺跡』神埼町文化財調査報告書第 66 集
神埼町教育委員会 2002『馬郡遺跡』神埼町文化財調査報告書第 73 集
神埼町教育委員会 2003『尾崎土生遺跡 16 区』神埼町文化財調査報告書第 78 集
神埼町教育委員会 2004『八子一本黒木遺跡Ⅰ・Ⅱ区』神埼町文化財調査報告書第 82 集
神埼町教育委員会 2005『八子六本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第 84 集
神埼町教育委員会 2006『八子二本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第 86 集
神埼町教育委員会 2006『八子一本黒木遺跡Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区』神埼町文化財調査報告書第 88 集
神埼町教育委員会 2006『八子四本黒木遺跡Ⅲ』神埼町文化財調査報告書第 89 集
神埼市教育委員会 2008『八子六本黒木遺跡 12 区』神埼市文化財調査報告書第 3 集
神埼市教育委員会 2008『八子六本黒木遺跡 18 区』神埼市文化財調査報告書第 4 集
神埼市教育委員会 2009『八子六本黒木遺跡』神埼市文化財調査報告書第 8 集
神埼市教育委員会 2009『熊谷遺跡　八子六本黒木遺跡』神埼市文化財調査報告書第 9 集
神埼市教育委員会 2009『八子一本黒木遺跡　八子六本黒木遺跡』神埼市文化財調査報告書第 10 集
神埼市教育委員会 2010『西田遺跡』神埼市文化財調査報告書第 11 集
神埼市教育委員会 2013『熊谷遺跡 8・9・10 区　西田遺跡 4 区』神埼市文化財調査報告書第 13 集
神埼市教育委員会 2013『伏部大石遺跡』神埼市文化財調査報告書第 20 集
神埼市教育委員会 2014『志波屋二本松（乙）遺跡 3 区　伏部大石遺跡 3 区』神埼市文化財調査報告書第 22 集
北茂安町教育委員会 1980『宝満谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書
北茂安町教育委員会 1986『検見谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書第 2 集
北茂安町教育委員会 1988『中津隈干飯遺跡』北茂安町文化財調査報告書第 3 集
北茂安町教育委員会 1991『六の幡遺跡』
北茂安町教育委員会 1997『金の原遺跡』北茂安町文化財調査報告書第 7 集
北茂安町教育委員会 1999『平林遺跡』北茂安町文化財調査報告書第 8 集
佐賀県教育委員会 1974『姫方遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 30 集
佐賀県教育委員会 1976『姫方原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 33 集
佐賀県教育委員会 1976『寺浦廃寺跡（付　県下の新考古資料）』佐賀県文化財調査報告書第 34 集
佐賀県教育委員会 1977『四本黒木遺跡発掘調査報告書』
佐賀県教育委員会 1979『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第 46 集
佐賀県教育委員会 1980『大門西遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 51 集
佐賀県教育委員会 1980『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 54 集
佐賀県教育委員会 1980『尾崎利田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 55 集
佐賀県教育委員会 1981『姫方原遺跡―F 地区―』
佐賀県教育委員会 1981『香田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 57 集
佐賀県教育委員会 1981『川寄吉原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 61 集
佐賀県教育委員会 1983『西原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 66 集
佐賀県教育委員会 1983『町南遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 68 集
佐賀県教育委員会 1983『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書 1』佐賀県文化財調査報告書第 69 集
佐賀県教育委員会 1983『松の森遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 70 集
佐賀県教育委員会 1985『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書 1』佐賀県文化財調査報告書第 80 集
佐賀県教育委員会 1986『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書 4』佐賀県文化財調査報告書第 83 集

佐賀県教育委員会 1989『礫石遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 91 集
佐賀県教育委員会 1989『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書 2』佐賀県文化財調査報告書第 93 集
佐賀県教育委員会 1989『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書 7』佐賀県文化財調査報告書第 94 集
佐賀県教育委員会 1990『惣座遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 96 集
佐賀県教育委員会 1990『西石動遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 97 集
佐賀県教育委員会 1991『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書 9』佐賀県文化財調査報告書第 101 集
佐賀県教育委員会 1991『志波屋六本松乙遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 103 集
佐賀県教育委員会 1992『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書 10』佐賀県文化財調査報告書第 108 集
佐賀県教育委員会 1992『朝日北遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 110 集
佐賀県教育委員会 1993『切畑遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 116 集
佐賀県教育委員会 1993『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書 11』佐賀県文化財調査報告書第 117 集
佐賀県教育委員会 1994『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書 4』佐賀県文化財調査報告書第 123 集
佐賀県教育委員会 1995『東山田一本杉遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 125 集
佐賀県教育委員会 1998『筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書 5』佐賀県文化財調査報告書第 136 集
佐賀県教育委員会 1999『戦場古墳群』佐賀市文化財調査報告書第 140 集
佐賀県教育委員会 2001『柚比遺跡群 1』佐賀県文化財調査報告書第 148 集
佐賀県教育委員会 2002『柚比遺跡群 2』佐賀県文化財調査報告書第 150 集
佐賀県教育委員会 2003『柚比遺跡群 3』佐賀県文化財調査報告書第 155 集
佐賀県教育委員会 2004『柚比遺跡群 4　分析編』佐賀県文化財調査報告書第 158 集
佐賀県教育委員会 2007『幸津遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 169 集
佐賀県教育委員会 2013「日吉城跡」『佐賀県の中近世城館　第 2 集各説編 1（三養基・神埼・佐賀地区）』佐賀県文化財調査報告書第 201 集
佐賀県教育庁文化財課 1998「松原遺跡（9 区）」『佐賀県文化財年報 3（1996 年度）』
佐賀県立博物館 1981『本分貝塚―佐賀県三養基郡三根町西島所在―』佐賀県立博物館調査研究書第 7 集
佐賀市教育委員会 1973『大門遺跡―第 2 次調査―』佐賀市文化財調査報告書第 9 集
佐賀市教育委員会 1974『金立開拓遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 10 集
佐賀市教育委員会 1981『琵琶原遺跡』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 13 集
佐賀市教育委員会 1982『柴尾橋下流遺跡』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 14 集
佐賀市教育委員会 1985『東千布遺跡（東千布遺跡・久富遺跡）』佐賀市文化財調査報告書第 15 集
佐賀市教育委員会 1987『泉三本栗遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 18 集
佐賀市教育委員会 1987『黒土原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 19 集
佐賀市教育委員会 1989『立野遺跡　村徳永遺跡（C 地区）』佐賀市文化財調査報告書第 24 集
佐賀市教育委員会 1990『牟田寄遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 31 集
佐賀市教育委員会 1990『村徳永遺跡―E・F・G・H 地区の調査』佐賀市文化財調査報告書第 32 集
佐賀市教育委員会 1991『村徳永遺跡―J 地区の調査―』佐賀市文化財調査報告書第 34 集
佐賀市教育委員会 1991『鍋島本村南遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 35 集
佐賀市教育委員会 1992『村徳永遺跡（K 地区）・篠木野遺跡（1 区）』佐賀市文化財調査報告書第 37 集
佐賀市教育委員会 1992『原ノ町遺跡・東高田遺跡・櫟木遺跡・北宿遺跡・南宿遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 38 集
佐賀市教育委員会 1992『久富遺跡―1 区の調査―』佐賀市文化財調査報告書第 39 集
佐賀市教育委員会 1992『阿高遺跡・寺裏遺跡・梅屋敷遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 40 集
佐賀市教育委員会 1992『瓦町遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 41 集
佐賀市教育委員会 1992『村徳永遺跡―L 地区の調査―』佐賀市文化財調査報告書第 42 集
佐賀市教育委員会 1993『増田遺跡群Ⅰ』佐賀市文化財調査報告書第 43 集
佐賀市教育委員会 1993『篠木野遺跡・琵琶原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 45 集
佐賀市教育委員会 1993『千布二本黒木遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 47 集
佐賀市教育委員会 1993『大野原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 48 集
佐賀市教育委員会 1993『牟田寄遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 49 集
佐賀市教育委員会 1994『増田遺跡群Ⅱ』佐賀市文化財調査報告書第 50 集
佐賀市教育委員会 1994『千住遺跡・牟田寄遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 51 集
佐賀市教育委員会 1994『友貞遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 53 集
佐賀市教育委員会 1994『御手水遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 55 集
佐賀市教育委員会 1995『友貞遺跡Ⅱ―7 区の調査―』佐賀市文化財調査報告書第 60 集

佐賀市教育委員会 1995『渕遺跡―1・2 区の調査―』佐賀市文化財調査報告書第 63 集
佐賀市教育委員会 1995『御手水遺跡Ⅱ』佐賀市文化財調査報告書第 64 集
佐賀市教育委員会 1996『琵琶原遺跡 4 区・草場遺跡 1 区』佐賀市文化財調査報告書第 65 集
佐賀市教育委員会 1996『藤附遺跡 1 区・大塚遺跡 1 区・大日遺跡 2 区』佐賀市文化財調査報告書第 66 集
佐賀市教育委員会 1996『下和泉一本椎遺跡Ⅰ』佐賀市文化財調査報告書第 73 集
佐賀市教育委員会 1997『東千布遺跡Ⅲ』佐賀市文化財調査報告書第 78 集
佐賀市教育委員会 1997『西千布遺跡・友貞遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 80 集
佐賀市教育委員会 1997『下和泉一本椎遺跡Ⅱ』佐賀市文化財調査報告書第 81 集
佐賀市教育委員会 1997『牟田寄遺跡Ⅴ』佐賀市文化財調査報告書第 84 集
佐賀市教育委員会 1997『徳永遺跡 1 区』佐賀市文化財調査報告書第 86 集
佐賀市教育委員会 1998『久富遺跡・友貞遺跡・東千布遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 88 集
佐賀市教育委員会 1998『牟田寄遺跡Ⅵ』佐賀市文化財調査報告書第 89 集
佐賀市教育委員会 1998『修理田遺跡Ⅱ』佐賀市文化財調査報告書第 90 集
佐賀市教育委員会 1998『若宮原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 91 集
佐賀市教育委員会 1998『坪の上遺跡Ⅰ』佐賀市文化財調査報告書第 93 集
佐賀市教育委員会 1998『琵琶原遺跡Ⅱ』佐賀市文化財調査報告書第 95 集
佐賀市教育委員会 1998『赤井手遺跡 1 区・先立山遺跡 1 区』佐賀市文化財調査報告書第 97 集
佐賀市教育委員会 2000『若宮遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 108 集
佐賀市教育委員会 2000『増田遺跡群Ⅳ』佐賀市文化財調査報告書第 111 集
佐賀市教育委員会 2000『古村遺跡 4 区』佐賀市文化財調査報告書第 117 集
佐賀市教育委員会 2002『増田遺跡群Ⅵ』佐賀市文化財調査報告書第 130 集
佐賀市教育委員会 2002『平尾二本杉遺跡Ⅰ』佐賀市文化財調査報告書第 131 集
佐賀市教育委員会 2002『平尾二本杉遺跡Ⅱ』佐賀市文化財調査報告書第 132 集
佐賀市教育委員会 2002『石土井遺跡　上九郎遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 133 集
佐賀市教育委員会 2003『石土井遺跡 上九郎遺跡 薬師丸五本柳遺跡 園田遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 141 集
佐賀市教育委員会 2004『上九郎遺跡・薬師丸五本柳遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 148 集
佐賀市教育委員会 2005『薬師丸五本柳遺跡・園田遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 156 集
佐賀市教育委員会 2012『白石原遺跡』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 70 集
佐賀市教育委員会 2015『五龍神社遺跡』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 90 集
佐賀市教育委員会 2017『南宿遺跡　野々中遺跡　下和泉一本椎遺跡』佐賀市文化財調査報告書第 106 集
多久市教育委員会 2002『牟田辺遺跡　第 4 次』多久市文化財調査報告書第 29 集
武雄市教育委員会 1986『みやこ遺跡』武雄市文化財調査報告書第 15 集
武雄市教育委員会 1986『茂手遺跡』武雄市文化財調査報告書第 15 集
武雄市教育委員会 1987『玉江遺跡』武雄市文化財調査報告書第 16 集
武雄市教育委員会 1990『釈迦寺遺跡』武雄市文化財調査報告書第 24 集
千代田町教育委員会 1981『崎村遺跡　崎村三本黒木遺跡』千代田町文化財調査報告書第 1 集
千代田町教育委員会 1983『詫田西分遺跡　高志神社遺跡』千代田町文化財調査報告書第 2 集
千代田町教育委員会 1985『姉遺跡Ⅰ』千代田町文化財調査報告書第 3 集
千代田町教育委員会 1986『黒井八本松遺跡』千代田町文化財調査報告書第 5 集
千代田町教育委員会 1987『黒井遺跡』千代田町文化財調査報告書第 6 集
千代田町教育委員会 1988『柴尾遺跡Ⅰ・川崎遺跡』千代田町文化財調査報告書第 7 集
千代田町教育委員会 1988『柴尾遺跡Ⅱ』千代田町文化財調査報告書第 8 集
千代田町教育委員会 1989『藤ノ木西分遺跡Ⅰ・直鳥四本松遺跡』千代田町文化財調査報告書第 9 集
千代田町教育委員会 1991『貴別当神社遺跡Ⅰ』千代田町文化財調査報告書第 13 集
千代田町教育委員会 1991『貴別当神社遺跡Ⅱ』千代田町文化財調査報告書第 14 集
千代田町教育委員会 1992『貴別当神社遺跡Ⅲ』千代田町文化財調査報告書第 15 集
千代田町教育委員会 1992『貴別当神社遺跡Ⅳ』千代田町文化財調査報告書第 16 集
千代田町教育委員会 1996『詫田西分遺跡　Ⅱ区の調査』千代田町文化財調査報告書第 20 集
千代田町教育委員会 1999『詫田西分遺跡　Ⅲ区の調査』千代田町文化財調査報告書第 23 集
千代田町教育委員会 1999『詫田西分遺跡　Ⅳ区の調査』千代田町文化財調査報告書第 24 集
千代田町教育委員会 1999『詫田西分遺跡　Ⅵ区の調査』千代田町文化財調査報告書第 25 集

千代田町教育委員会 2000『高志神社遺跡』千代田町文化財調査報告書第 27 集
千代田町教育委員会 2000『姉遺跡（Ⅷ区の調査）』千代田町文化財調査報告書第 28 集
鳥栖市教育委員会 1997『本行遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第 51 集
鳥栖市教育委員会 2002『藤木遺跡・今泉遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第 68 集
鳥栖市教育委員会 2015『藤木遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第 84 集
中原町教育委員会 1979『姫方原遺跡―B・C 地点発掘調査報告書―』中原町文化財調査報告書第 3 集
中原町教育委員会 1980『姫方原遺跡―E 地区―』中原町文化財調査報告書第 4 集
中原町教育委員会 1990『原古賀遺跡群Ⅰ』中原町文化財調査報告書第 9 集
東脊振村教育委員会 1981『西前田遺跡』東脊振村文化財調査報告書第 5 集
東脊振村教育委員会 1982『西前田 B 遺跡』東脊振村文化財調査報告書第 6 集
東脊振村教育委員会 1983『東外遺跡』東脊振村文化財調査報告書第 7 集
東脊振村教育委員会 1985『大曲遺跡群Ⅱ』東脊振村文化財調査報告書第 9 集
東脊振村教育委員会 1989『亀作 A 遺跡』東脊振村文化財調査報告書第 15 集
東脊振村教育委員会 1995『石動四本松遺跡』東脊振村文化財調査報告書第 19 集
東脊振村教育委員会 1997『松原遺跡 7 区』東脊振村文化財調査報告書第 20 集
東脊振村教育委員会 1997『平成 6・7 年度東脊振村内文化財調査報告書』東脊振村文化財調査報告書第 21 集
東脊振村教育委員会 1998『松原遺跡 10 区』東脊振村文化財調査報告書第 22 集
東脊振村教育委員会 2000『松原遺跡 8 区』東脊振村文化財調査報告書第 23 集
東脊振村教育委員会 2001『瀬ノ尾遺跡』東脊振村文化財調査報告書第 24 集
東脊振村教育委員会 2003『松原遺跡 4・5・6 区』東脊振村文化財調査報告書第 25 集
三日月町教育委員会 1998『土生遺跡Ⅰ』三日月町文化財調査報告書第 8 集
三日月町教育委員会 2005『赤司　戊　土生　深川南　赤司東』三日月町文化財調査報告書第 16 集
三田川町教育委員会 1986『下中杖遺跡』三田川町文化財調査報告書
三田川町教育委員会 1990『田手二本黒木遺跡』三田川町文化財調査報告書第 3 集
三田川町教育委員会 1998『下中杖遺跡』三田川町文化財調査報告書第 4 集
三田川町教育委員会 2000『吉野ヶ里遺跡』三田川町文化財調査報告書第 5 集
三根町教育委員会 1985『天建寺土井内遺跡』三根町文化財調査報告書第 2 集
三根町教育委員会 1987『本分遺跡』三根町文化財調査報告書第 4 集
三根町教育委員会 1989『天建寺南島遺跡』三根町文化財調査報告書第 6 集
みやき町教育委員会 2006『田島一本松遺跡 2 区』みやき町文化財調査報告書第 1 集
みやき町教育委員会 2011『西寒水四本柳遺跡 2-5 区・6 区』みやき町文化財調査報告書第 5・6 集
みやき町教育委員会 2012『町南遺跡 7 － 11 区』みやき町文化財調査報告書第 7 集
みやき町教育委員会 2013『西寒水四本柳遺跡 7・8 区』みやき町文化財調査報告書第 10 集
みやき町教育委員会 2014『町南遺跡 12 区』みやき町文化財調査報告書第 12 集
みやき町教育委員会 2017『大塚遺跡 2 区』みやき町文化財調査報告書第 15 集
みやき町教育委員会 2018『西寒水四本柳遺跡 9 区』みやき町文化財調査報告書第 18 集
みやき町教育委員会 2018『西寒水四本柳遺跡 11 区』みやき町文化財調査報告書第 19 集
諸富町教育委員会 1984『徳富権現堂遺跡』諸富町文化財調査報告書第 1 集
諸富町教育委員会 1985『村中角遺跡』諸富町文化財調査報告書第 2 集
諸富町教育委員会 1987『唐人廟遺跡』諸富町文化財調査報告書第 3 集
諸富町教育委員会 1988『太田本村遺跡』諸富町文化財調査報告書第 4 集
諸富町教育委員会 1988『畑田遺跡』諸富町文化財調査報告書第 6 集
諸富町教育委員会 1989『土師本村遺跡』諸富町文化財調査報告書第 7 集
諸富町教育委員会 1990『三重櫟ノ木遺跡』諸富町文化財調査報告書第 8 集
大和町教育委員会 1986『惣座遺跡』大和町文化財調査報告書第 3 集
大和町教育委員会 1992『平成 2 年度　大和町内遺跡確認調査』大和町文化財調査報告書第 16 集
大和町教育委員会 1994『岡裏遺跡』大和町文化財調査報告書第 24 集
大和町教育委員会 1994『榎木遺跡』大和町文化財調査報告書第 27 集
吉野ヶ里町教育委員会 2006『石動四本松遺跡第 5 地区』吉野ヶ里町文化財調査報告書第 2 集
吉野ヶ里町教育委員会 2010『松原遺跡 14 区』吉野ヶ里町文化財調査報告書第 7 集
吉野ヶ里町教育委員会 2015『松原遺跡 11 区』吉野ヶ里町文化財調査報告書第 9 集

第４節　付論　集落構造からみた吉野ヶ里集落の対外交流

七田忠昭（佐賀県立佐賀城本丸歴史館）

（１）はじめに

長年にわたる吉野ヶ里遺跡の発掘調査や確認調査、その後の整理・分析などにより、また、それに前後する農業基盤整備事業や住宅団地建設、高速自動車道建設などに伴う発掘調査により、佐賀県東部、とりわけ吉野ヶ里遺跡周辺の弥生時代の様相が明らかになってきた。それらの成果を参考にしながら、標記のことについて述べてみたい。

日本では縄文時代晩期から弥生時代にかけて、中国や朝鮮半島の先進文化が伝播し、生産のみならず住居や集落、墓地の形態も様変わりした。水稲や畑作等の農業や、金属や絹・大麻布等の手工業生産の導入･発展は、富や権力を生みだし、集落間のネットワークは地域毎の紛争や戦争を経ながら強化され、日本に原始的な国家群を生成させた。

中でも、集落景観は、従来の縄文時代のそれに比べ大きな変化を遂げる。縄文時代晩期後半に、中国文化の影響下に朝鮮半島で成立した本格的な農耕文化である松菊里文化が九州北部地方に伝播し、次第に東方へと拡散した。半島系の竪穴建物や掘立柱建物が建ち並び、防御・防衛のために周囲に環壕を設けた集落である環壕集落も出現した。

環壕は、日本での出現以来、朝鮮半島無文土器時代のそれと同様、自然地形に沿って平面円形や不整形に掘削されていたが、次第に平面方形基調へと変化していき、古墳時代のいわゆる豪族居館へと伝統を引き継ぐこととなる。吉野ヶ里遺跡では、弥生時代後期になると、丘陵全体を取り囲む大規模な環壕（外環壕）が掘削され、各所にくい違い構造の出入口や外側に突出した出入口、また門施設がついた出入口などが出現する。後期中頃・後半から終末期にかけては、外環壕で囲まれた集落の高所二か所に、さらに環壕によって囲まれた平面形隅丸長方形やＡ字形（円と方の合体形）の区画が設けられ、それらの環壕の各所に外側に張り出す突出部が設けられ、その内側にそれぞれ望楼が設けられる。

このように、吉野ヶ里遺跡では、環壕突出部の内側に望楼（物見櫓）を、また、出入口は鍵形のくい違いの門などを設け、環壕の内部には大型の記念物的な建物を設けるなど、国内ではほとんど例を見ない集落構造を確認することができる。これら特殊な構造は従来の弥生集落には見られないものであり、まさに、同時代の中国城郭の景観を取り入れたとしか考えられない（七田 1996）。佐賀県東部から筑後川流域にかけての地域の 10 数ヶ所の環壕集落跡では、望楼跡は付属しないものの、吉野ヶ里遺跡のように環壕の一部を外側へ突出させた構造がみられる。

また、一帯では、このような特殊な集落構造が出現する少し前の中期後半期の吉野ヶ里町と上峰町にまたがる二塚山遺跡の連弧文「潔精白」銘鏡を初現として、後期後半までの間、吉野ヶ里町三津永田遺跡や、同松葉遺跡、同横田遺跡、上峰町坊所一本谷遺跡など、少なくとも 14 か所の段丘上に分散して営まれた墓地の甕棺墓や土坑墓、箱式石棺墓などに漢鏡が副葬され続ける。漢鏡は大型鏡（径 16cm 前後～ 20cm 以上）と小型鏡（径 10cm 前後以下）に分けられ（大型鏡から径 16cm 前後の中型鏡を区別する考えもある）、大型鏡は中国の権威を帯びた文物とされるが、これらの墓地から出土したものの中に中型鏡が多く含まれている。これら漢鏡と共伴または単独に出土する鉄製素環頭大刀などと合わせ、朝貢外交の下賜品と考えられる。

吉野ヶ里遺跡の集落構造変化や中国漢魏時代の城郭の発掘成果、中国王朝からの下賜品と考えられる漢鏡や鉄製武器の分布や出土状況、漢書・後漢書・三国志魏書など中国正史の記録などを対比して、弥生時代後期から終末期の吉野ヶ里集落及び周辺集落の集落景観が中国化する様相や要因などについて考えてみたい。

（2）吉野ヶ里集落の特異な構造

吉野ヶ里遺跡では、弥生時代前期前半から終末期にかけての各時期の集落跡が発掘された。特に後期前半以降に掘削された大規模環壕（外環壕）の内部に、後期中頃以降に環壕によって囲郭された内郭の環壕各所に突出部を作り出し、その内側に望楼が設けられていたことが注目される。突出部が備わった環壕をもつ集落跡が、佐賀平野を中心に一部筑後川流域に分布することは知られていた（蒲原 1995）。1986 年から 89 年にかけての吉野ヶ里遺跡の発掘調査で、南内郭を形成する環壕の 6 ヶ所で望楼と目される高床建物跡が伴う突出部が確認され、1992 から 93 年にかけての北内郭跡の調査でも同様な環壕突出部と望楼跡が 4 ヶ所、さらに鍵形のくい違い出入口跡が確認された。

環壕に突出部が伴う弥生時代集落跡は、現在までに吉野ヶ里遺跡を含む佐賀平野の 11 遺跡と、福岡県筑後平野の 2 遺跡、大分県日田盆地の 1 遺跡の計 13 遺跡あり、計 20 の環壕跡で突出部が確認されている。つまり、佐賀平野を中心に、筑後川流域のみにこれらの遺跡が分布しているのである。この中で、突出部の内側に望楼跡が伴うのは吉野ヶ里遺跡のみであり、9 箇所すべての突出部にこの建物が付属する。佐賀平野を中心として筑後平野・筑後川流域の一部に分布する突出部を持つ環壕集落の間にも階層性を認めることができ、その後も全国で環壕集落の発見は増加しているものの、この分布状況に変化はない。柵で囲まれた中期の集落跡である福岡県小郡市一ノ口遺跡では、柵が平面半円形に突出した内側で 4 本柱の望楼と目される掘立柱建物跡が（小郡市 1994）、長崎県壱岐市の環壕集落原ノ辻遺跡では、中期の環壕跡に突出部らしい部分があることが判明（古澤 2018）するなど、中期段階において上のような特殊な構造が出現している。吉野ヶ里遺跡からの中期前半代の鉄製の蝶番や青銅製素環頭付き刀子、鋳造鉄斧片などの出土と合わせ、燕など前漢代以前の中国文化流入も視野において考えなければならない。

弥生時代中期における漢文化の流入について、

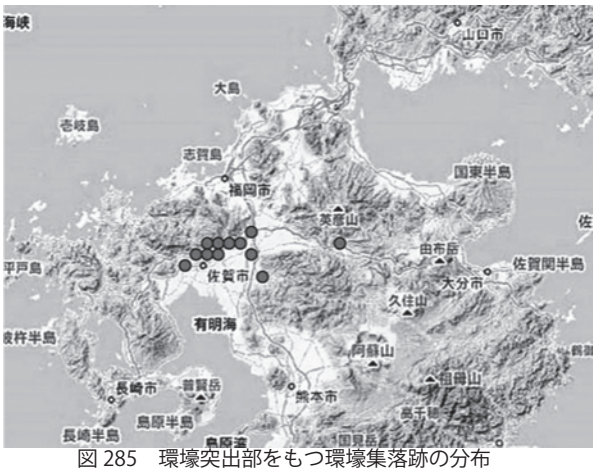


図 285　環壕突出部をもつ環壕集落跡の分布

表 4　環壕突出部をもつ環壕集落跡一覧表

	遺跡名	所在地	時期	突出部形態
1	丁永遺跡	佐賀県小城市	終末期	半円形
2	惣座遺跡	佐賀県佐賀市	終末期	方形
3	榎木遺跡	佐賀県佐賀市	終末期	半円形
4	岡裏遺跡	佐賀県佐賀市	終末期	半円形
5	迎田遺跡	佐賀県神埼市	終末期	方形
6	八子六本黒木遺跡	佐賀県神埼市	終末期	半円形
7	吉野ヶ里遺跡南内郭（古）	佐賀県神埼市 吉野ヶ里町	後期中 ～後半	半円形
8	吉野ヶ里遺跡南内郭（新）	佐賀県神埼市 吉野ヶ里町	終末期	半円形
9	吉野ヶ里遺跡北内郭 （古）内壕跡？	佐賀県神埼市 吉野ヶ里町	後期中 ～後半	方形
10	吉野ヶ里遺跡北内郭 （新）内壕跡	佐賀県神埼市 吉野ヶ里町	終末期	半円・方形
11	吉野ヶ里遺跡北内郭 （古）中壕跡？	佐賀県神埼市 吉野ヶ里町	後期中 ～後半	方形
12	吉野ヶ里遺跡北内郭 （新）中壕跡	佐賀県神埼市 吉野ヶ里町	終末期	方形
13	松原遺跡	佐賀県吉野ヶ里町	終末期	半円形
14	町南遺跡	佐賀県みやき町	終末期	方形
15	原古賀三本谷遺跡	佐賀県みやき町	終末期	半円形
16	千塔山遺跡	佐賀県基山町	終末期	半円形
17	道蔵遺跡	福岡県久留米市	終末期	半円形
18	中里遺跡	福岡県八女市	終末期	半円形
19	小迫辻原遺跡　1 号環壕跡	大分県日田市	終末期	方形？
20	小迫辻原遺跡　2 号環壕跡	大分県日田市	終末期	半円・方形

中期後半の福岡県糸島市三雲南小路遺跡出土の有柄銅剣が漢代の尺度を使用して作られているらしいことや、同じく中期後半期に九州北部地方で出現する瓢箪形土器や丹塗りの長頸袋状口縁壺が漢代の明器蒜頭壺と形態が類似すること、同じく祭祀土器のひとつである筒形器台の形態が中国の神仙や昇仙思想の影響を受けたものらしいことなど、興味深い指摘（常松 2018）がなされている。銅鏡などの文物のみならず、中国漢時代の世界観や度量衡・暦などの一部が、中期以降の交流や外交によって既に流入していた可能性を示すものとして注目する必要がある。

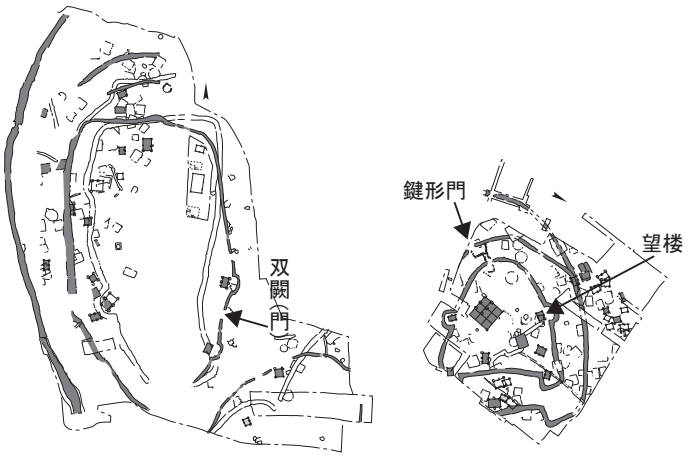
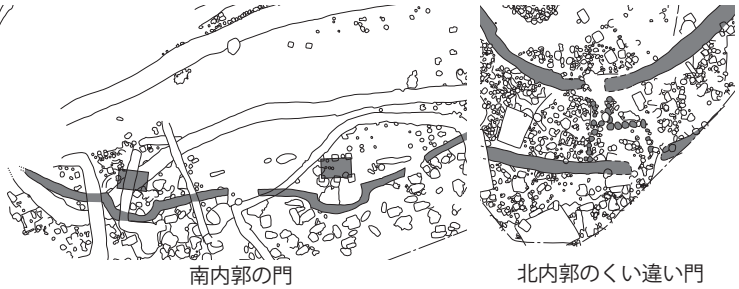
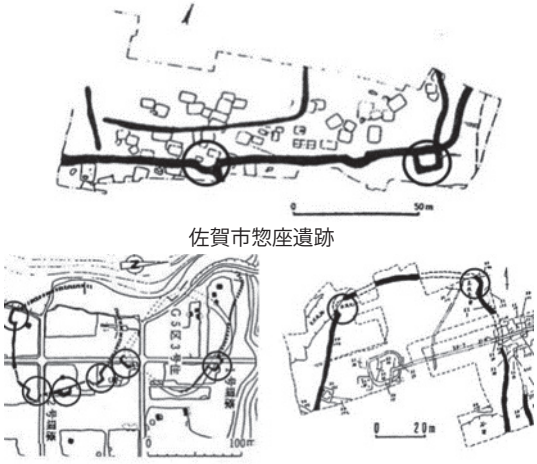


図 286　吉野ヶ里遺跡　南内郭と北内郭（1/4,000）


南内郭の門　　北内郭のくい違い門
図 287　吉野ヶ里遺跡の特異な形の門跡

南北内郭の平面形については、南内郭が古段階では長方形基調ではあるがいびつな形であったものが新段階には隅丸長方形へと変化、また北内郭では古段階のものは環壕跡の一部しか確認されていないので不明であるが、新段階には円形と方形を合体させたような先端が丸いＡ字形へと変化している。新段階の南北それぞれの出入口についても、興味深い構造が確認できる。北内郭跡では、平面Ａ字形のＡの先端付近に門（出入口）が設けられているが、門の部分では内外の壕の陸橋部分を左右にずらす後世の城郭のくい違い出入口と同様なつくりで、その間を木塀で囲む閉鎖的な構造となっており、この構造は国内では唯一のものである。なお、北内郭の南西―北東方に二分する中軸線の南西方向が冬至の日の入り方向を、北東方向が夏至の日の出方向を正確に向いていたことも判明している。


佐賀市惣座遺跡

日田市小迫辻原遺跡　　佐賀市榎木遺跡
図 288　突出部をもつ環壕集落跡

南内郭では、内郭東側の南寄りの位置に２ヶ所の陸橋の出入口が確認されているが、南のものは幅が広く真っすぐ（環壕に対して直角）に入るつくりであるのに対し、北のものは幅が狭く斜めに入るつくりであった。後者は通用口のような出入口と考えられるが、この南内郭の南に位置する構えの壕と呼んでいる壕跡にも幅が広い陸橋と幅が狭い陸橋が設けられ、南内郭の出入口と対応している。南内郭跡の幅が広い陸橋部の両側では環壕が外（東）側へ突出しており、その部分には望楼跡が確認された。この門の前に立てば、入口の両側で土塁と柵（城柵）が手前に突出した先に２棟の望楼が聳え立ち、中国古代城郭の双闕に似る。

これらの施設は、後期中頃から終末期に属する 40ha 規模の環壕集落の内郭（北内郭・南内郭）を構

成する環壕に伴うと考えられるものであるが、外郭ラインを構成する外環壕跡で確認された 7 ～ 8 箇所の出入口(門)跡の中には、その部分を大きく外側に突出させているものや、出入口両側の環壕先端付近を内外にずらしくい違いにしたもの、門扉を取り付けたらしいものがある。外環壕は後期前半代（1 世紀前半）以降に掘削されたと推定されることから、この時期、既に特異な形態の出入口施設が出現していたことになる。

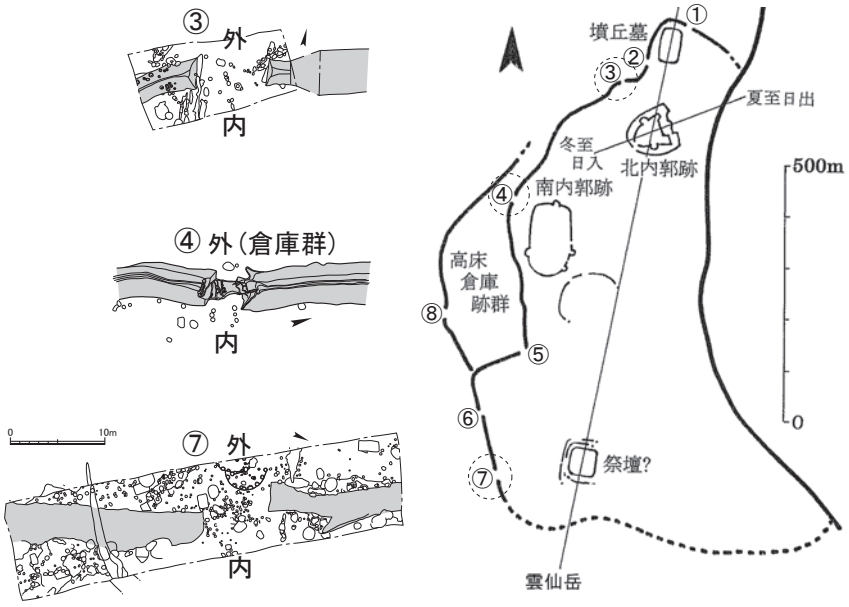


図 289　右：吉野ヶ里遺跡の弥生時代終末期の概略
左：外環壕跡の特殊な形態の門の平面図（1/800）

表 5　吉野ヶ里遺跡の各環壕の掘削時期と埋没時期

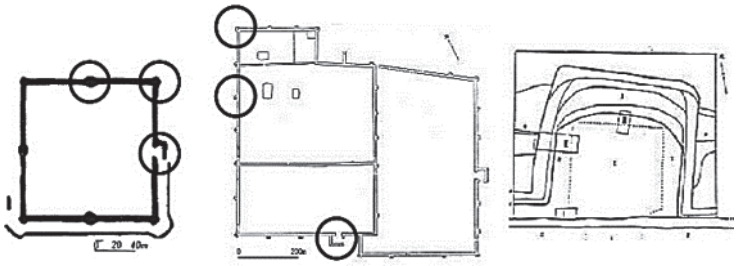
環壕	掘削時期		埋没時期	
外郭の環壕（外環壕）	後期前半	（100 年前後）	終末期	（250 年頃）
内郭　南内郭（古）	後期中頃～後半	（150 年前後）	終末期初	（200 年—）
南内郭（新）	終末期初	（200 年—）	終末期	（250 年頃）
北内郭内壕（古）	後期中頃～後半	（150 年前後）	終末期初	（200 年—）
北内郭内壕（新）	終末期初	（200 年—）	終末期	（250 年頃）
北内郭中壕（古）	後期中頃～後半	（150 年前後）	終末期初	（200 年—）
北内郭中壕（新）	終末期初	（200 年—）	終末期	（250 年頃）

吉野ヶ里遺跡での、環壕集落内での各種施設の配置についてはまだ調査不足ではあるが、丘陵の南、前期後半の環壕が存在していたあたりが中期集落の中心部と考えられる。周囲には断片的に環壕も確認されておりこの丘陵南部全体を囲んでいた可能性がある。丘陵高所の集落中心部には大型の竪穴住居跡が小規模ではあるが掘立柱建物を伴って多く存在しており、東の傾斜部分には小型の竪穴住居跡群が存在する。背後である西の緩斜面には倉群（穴倉から高床倉庫へ変化）が住居群とは区別されて存在している。住居群の分布から考えると、西の丘陵頂部あたりに首長層の居住区が、東方や東斜面一帯に一般の集落構成員の居住区があったと考えられる。つまり、西上位—東下位となっていたと考えられる。中期前半には、歴代首長を埋葬したと考えられる墳丘墓が北方に位置し、その南約 800m の位置には祭壇と目される盛土遺構が築造されていた。

後期中頃以降には、大規模な外環壕で囲まれた内部の高所 2 ヶ所に北内郭と南内郭の環壕区画が設けられ、南部の中期の集落があった区域には竪穴住居群が営まれる。集落全体として、北上位—南下位になっていたとみてよい。地形的な制約などにより偶然にこのような施設配置になったかもしれないが、中期の西上位—東下位の構成から、後期中頃以降から終末期にかけての北上位—南下位の構成への変化は、礼制の変化により中国前漢から後漢・魏への都城の施設配置の変化に対応している可能性も考えなければならない。また、中期前半のうちに築造された墳丘墓や南の祭壇と目される盛土遺構は、弥生時代終末期まで祭祀の対象となっており、終末期に北内郭の中に建設された大型建物は墳丘墓と祭壇を結ぶ南北線上に位置する。この南北線の南 60km には火山で有名な雲仙岳がそびえている。

南内郭西方の高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡は、後期後半から終末期にかけてのもの多数（100 基前後）が、少数の竪穴建物跡とともに確認された。後期中頃以降の南内郭や北内郭の造営に伴い、南内郭西方の緩やかな斜面に高床倉庫群が営まれていたと見ることができる。ただし、前者では外環壕

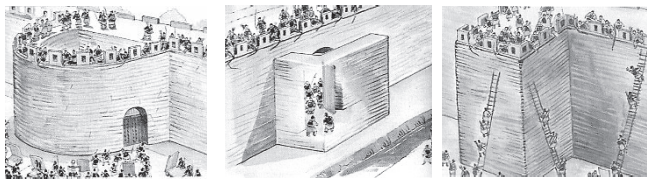
とさらに西方の壕との間の３haという広大な範囲内に大型のものを含む多数の高床倉庫群を設けた。南内郭西方の倉庫群は、外環壕とさらに西方の壕との間の広大な区域に存在し、大規模なものを多数含む倉庫が企画的に配置されていたものと考えられる。この時期の中で３～４回の建て替えが考えられ、同時に20数棟の高床倉庫と数棟の竪穴建物が建ち並んでいたものと推定される。建物跡は約３haの空間の中に、外環壕と並行する溝跡との間の南北に細長い区域と、その北方、中央部、南部の４区域に分かれて分布する。特に外環壕と並行する溝跡との間の建物群は大型のものが多く、中央の建物群の中に重複して存在する２間×２間と２間×３間の２棟の総柱建物が重複して存在する。ある機能をもつ高層建物が立て替えられたことを示している。一帯は後世の削平が著しく遺物の出土数が少ないが、その位置や建物群の規模・構造や配置関係などから、倭人伝に記される「国国有市」の市の実態を示しているのかもしれない（七田 2000）。以上のような遺構のつくりや配置は、後述する古代中国の城郭構造をつよく意識したものと考えられる。



潮核旗烏力吉高勒城障　　三道営古城　　漢魏洛陽城第1号馬面跡

図290　中国漢魏時代城壁の防御施設

（○部分は馬面、角楼、甕城・護城墻）



甕城　　護城墻　　角楼・馬面

図291　中国漢魏時代城壁の防御施設（推定図）

（来村多加史他 1994 より）

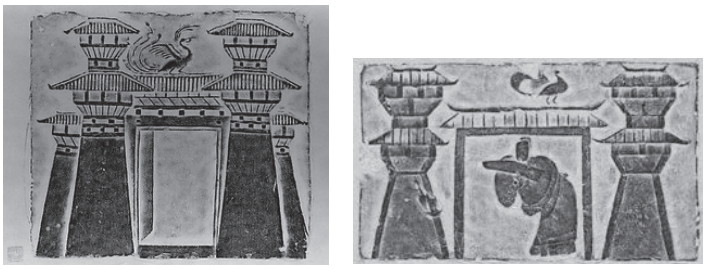


図292　漢代の双闕

（左：四川省成都市鳳闕画像磚　右：双闕迎謁画像磚）

（３）古代中国の城郭構造

中国の環壕集落としては、新石器時代中期前半の仰韶文化期に属する半坡遺跡（中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館 1963）が著名である。姜寨遺跡ではほぼ平面円形に巡る環壕によって囲まれた内部には、中央広場を取り囲む形で住居跡やその周辺に穴倉群が存在する。注目すべきは環壕のくい違い出入り口や、環壕が外に向かってコ字形に突出する部分など、きわめて防御を意識した構造をもつことである（西安半坡遺跡博物館 1988）。新石器時代後期の龍山文化中期には河南省の平糧台遺跡（河南省文物研究所・周口地区文化局 1983）や王城崗遺跡（河南省文物研究所・中国歴史博物館考古部 1983）などで直線的な城壁を巡らす平面方形の城郭が発掘されている。平糧台では門遺構が確認され、内部から基壇上の住居跡やその他の住居跡が発掘されている。王城崗では城壁の隅が外へ膨らんでおり、防御施設である後世の角楼を想起させる。春秋戦国時代の斉国の都城臨淄古城や燕国の下都などは、壕と城壁を巡らす都城跡で、城壁などの防御施設に囲まれた内部には政治中枢が置かれ、人々が集住し、銅器や鉄器などの手工業生産工房、交易のための市が存在した（河北省文物工作隊 1965）。臨淄古城の

門は壕や城壁を平面半円形に外へ突出させており、後世の防御施設である甕城の原型と考えられている（群力 1972）。漢・三国時代の城郭構造は、戦国時代にできた基本構造を踏襲しながら改良された。前漢時代の内蒙古三道営古城（李興盛 1992）の城壁の等間隔の各所や、隅には突出部が配置され、出入口はＬ字形の鍵形構造をとっている。同じ漢代と考えられる内蒙古の潮格旗烏力吉高勒城障や青庫倫城障（蓋山林・陸思賢 1979）でも方形の城壁には、Ｌ字形の出入口を除く三方の城壁中間や隅に突出部を設けている。また、甘粛省居延の甲渠侯官や隧跡（甘粛居延考古隊 1978）などでも平面Ｌ字形附属の城壁からなる鍵形の出入口施設が確認されている。壮大な規模の漢や三国時代都城の城壁は、様々な大規模防御施設からなっている。『墨子』の守城関係の諸論などに記されたように、中国古代城郭の城壁には、各所に平面半円形や方形の突出部（馬面）、コーナー部には方形の突出部（角楼）が、門は平面Ｌ字形の付属城壁（護城墻）や半円形の附属城壁 (甕城) が設けられていた（田中淡 1989）。漢魏の都城洛陽城の城壁でも数箇所で馬面の遺構が発掘されている（中国社会科学院考古研究所 1986）。

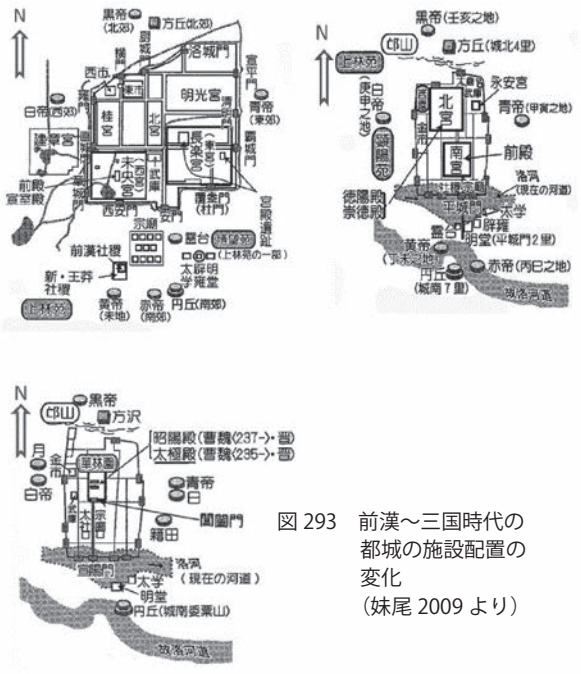
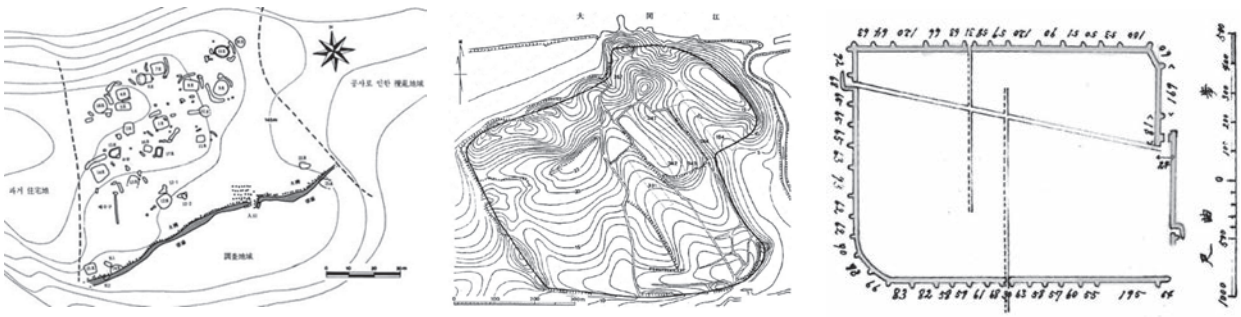


図 293　前漢～三国時代の都城の施設配置の変化
（妹尾 2009 より）

このように、日本の弥生時代に当たる中国古代の城壁には一定の間隔を持って馬面、城壁の角には角楼と呼ばれる突出部が設けられていた。これらは、正面からだけではなく左右に展開する敵に対しても攻撃が仕掛けられる守城施設である。また、守城の要である門には、馬面・角楼と同じく前方左右からの敵に対する守城施設であるとともに一枚目の門扉が破られても二枚目に達するまでに攻撃が仕掛けられる平面が半円形や方形、Ｌ字形の付属の城壁である甕城や護城墻が設けられ、また直線的に入る門の両側には二つの望楼がセットになった双闕が設けられていた。漢の楽浪郡治、魏の帯方郡治と目される平壌周辺の土城跡は、中国本土の城郭構造を基礎にして営まれただろうことが推定されるが、このうち楽浪郡治跡は戦前の調査で建物跡や磚舗装道路などが発掘された平壌市楽浪土城跡に、また、帯方郡治



梁山平山里遺跡（沈 1998 より）　楽浪土城（郡治跡）　高句麗通溝城跡
（日満文化協会 1938 より）

図 294　朝鮮半島周辺の環壕集落と城郭

は黄海北道青山里土城跡一帯にその位置が推定されている（谷 1995）。楽浪土城跡の周囲に存在していた土塁には屈曲部その他に高まった部分が存在しており、おそらく中国式城郭の城壁にみられる馬面や角楼などの防御施設が遺存したものと考えられる。朝鮮半島南部でも慶尚南道梁山市の梁山平山里遺跡（沈奉謹 1998）でくい違い形の門跡とその内側に物見櫓と目される掘立柱建物跡が発掘され、原三国時代に中国の城郭施設の一部が模倣された可能性を示している。高句麗の都城である吉林省集安市の通溝城跡では、平面方形の城壁の各辺中央に近い部分と角に馬面や角楼などの突出部が存在し、門は甕城や護城墻のような構造となっている（日満文化協会 1938）。倭とともに東夷諸国のひとつである高句麗の都城は、まさに中国の城郭を完全に模倣して営まれたことが理解できる。

古代中国の都城や城郭に付随する市については、発掘遺構・画像石などに描かれた絵画などから推定することができる。中国では古くから経済が活発化し、都市の周辺あるいは内部に常設の市が設けられ、日用品を含めた様々なものが売られるようになった。広範囲かつ明確に発掘されたのは、紀元前７世紀～４世紀にかけての秦の都城である雍の市跡である。城内北東部に位置し、南北 160 m、東西 180 mの垣で囲まれた約３haもの範囲を占める。四方の垣の中央ではそれぞれ大規模な市門跡が確認されている。前漢の都長安城内の北西隅には西市と東市の二ヶ所の小規模な市が、場外の郭には広さ約６ha 弱の大規模な９ヶ所の市が設けられていた。市に存在した高層の旗亭（市楼）は楼の上層に置かれた太鼓や鐘または旗によって市の開始・終了を知らせ、市の役人が「商賈、貨財、買売、貿易の事を察」していた（『三輔黄図』巻二）。『史記』に「太倉・西市を立つ」、『漢書』に「長安の西市を起こし、敖倉を修む」などとあり、市と大型倉との深い関係を知ることができる。後漢・魏の洛陽城では、城外西の郭に広さ４里の洛陽大市が、東の郭に広さ１里の洛陽小市が設けられ、魏・晋時代には南の郭に南市が設けられた。後漢時代の四川省彭県義和公社出土の画像磚には、市の風景が描かれている。磚の左右隅にそれぞれ北市門、南市門の文字があり、周囲の簡単なつくりの建物の屋内や、中央から手前の広場では商品売買の様子が描かれている。また、同じ後漢時代の四川省成都市郊外出土画像磚に描かれた市はより大規模なもので、磚の周囲に囲いと市門が存在する。囲いの内部を四等分する大きな十字路があり、これにより四分割された空間には整然と建物が並び、十字路の中央には二階に太鼓を置いた高層建築の市楼が描かれている。吉野ヶ里遺跡の南内郭西方で発掘された高床倉庫跡群は、環壕によって囲郭され高層建物を配置しており、上記の古記録や画像石などから推定される中国古代の市の景観との共通点を認めることができる。また、漢・三国時代の都城の構造について、皇帝が座する宮殿の位置が、前漢代には西にあったものが後漢以降は北に変化することを令制の変化によるものとされている（楊寛 1987）。つまり、「座西朝東」から「座北朝南」へと変化したのである。しかし、北に墓所邙山や方丘などを、南に明堂や円丘などの祭祀施設を配置することは、前漢・後漢・魏時代をつうじてほとんど変化しない。

（４）吉野ヶ里遺跡周辺の首長墓から出土する中国製の銅鏡と鉄刀

中国との交流を示す文物として、漢鏡と鉄製武器（素環頭大刀）が注目される。弥生時代中期後半になると、それまでの朝鮮半島系譜の青銅製武器から銅鏡や鉄製武器へと副葬品の内容が中国製文物に変化するが、その要因が、前漢武帝による 108 年の朝鮮半島への楽浪郡など４郡の設置であることを、『漢書』が記す地理志の倭国王たちからの朝貢記録が示している。前漢鏡を副葬した中期の春日市須玖岡本

遺跡や、糸島市三雲南小路遺跡、飯塚市立岩遺跡などからは多数の前漢鏡が、後期の糸島市井原鑓溝遺跡や唐津市桜馬場遺跡、糸島市の三雲南小路遺跡や平原遺跡などからは多数の後漢鏡が豪華な品々とともに出土し、いわゆる「王墓」とも呼ばれるようになった。

一方、有明海北岸では、佐賀県吉野ヶ里町三津永田遺跡や、吉野ヶ里町と三養基郡上峰町にまたがる二塚山遺跡、福岡県朝倉郡筑前町東小田峯遺跡など、佐賀平野東部の神埼地方と朝倉平野では、他の副葬品とともに漢式鏡 1 枚のみを副葬した墳墓が存在する。漢式鏡を多数副葬する墳墓が存在しないことは吉野ヶ里遺跡一帯を含む有明海北岸地方の特徴ともなっている。

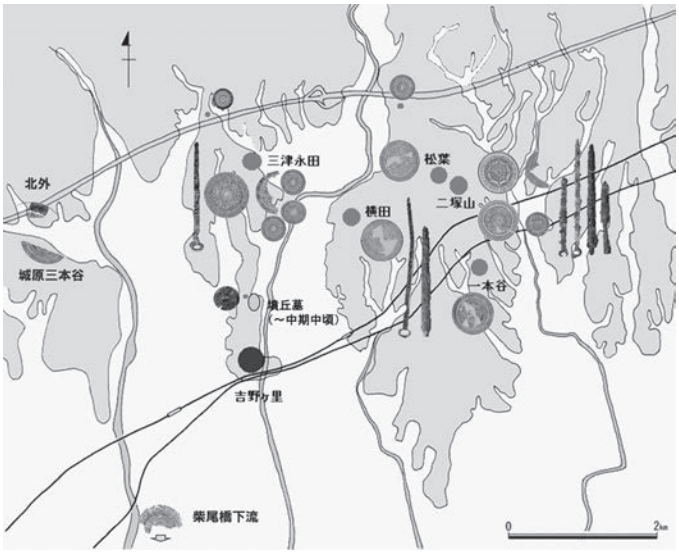


図 295　吉野ヶ里遺跡周辺での漢鏡・鉄刀等の副葬

墳丘墓への埋葬が終了した以後、吉野ヶ里集落の中あるいは近隣に小型の漢鏡をもつ墳墓はあるものの、首長墓とも呼べる特定の墳墓が見当たらない。しかし、周辺に目を転じると、まさに墳丘墓への埋葬が終了した直後から、各地の墓地で中型の漢鏡や中国製素環頭鉄刀等を副葬する墳墓が次々と順を追って出現する。この事実は中心集落の首長のあり方や、地域集落のあり方を示唆する重要な現象と考えられる。神埼地方での中国文物の副葬例で最も古いのは、吉野ヶ里遺跡（吉野ヶ里地区Ⅱ区）の中期前半の甕棺墓に副葬された鉄製蝶番である。吉野ヶ里遺跡では中期初頭から前半に廃棄された青銅器鋳造関連遺構から中国製鋳造鉄斧側片利用の鉄鑿とともに青銅製素環頭付鉄刀子も出土しており、中期の早い段階から中国製品が流入していたことがわかる。

漢鏡副葬の初現は、吉野ヶ里町と上峰町にまたがる二塚山遺跡と、吉野ヶ里遺跡（吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区）の中期後半の甕棺墓に副葬された漢鏡 3 期の連弧文「絜清白」銘鏡と連弧文「久不相見」銘鏡である。その後、後期後半までの間、少なくとも 14 か所の段丘上に分散して営まれた墓地の甕棺墓や土坑墓、箱式石棺墓などに漢鏡が副葬され続ける。この地方の銅鏡副葬の特徴として、中期中頃までの銅剣の場合と同様、1 棺 1 点の漢鏡が基本となっており、二塚山遺跡や三津永田遺跡、横田遺跡などで出土した素環頭鉄刀の例などからも鉄製武器も同様に複数副葬する例はない。また、後期以降は完形の鏡を意識的に打ち割って棺外に埋め込む例が多いことも、この地方の特徴となっている。

表 6　九州北部各地の威信財を副葬した墳墓

時期	唐津	糸島	福岡	佐賀	遠賀川上流
中期後半（前）	中原	三雲南小路K	須玖岡本D地点K 上月隈	吉野ヶ里墳丘墓	立岩 鎌田原
中期後半（後）	(+)	(+)		二塚山K-15	立岩K-10 立岩K-35
後期（前～中）	桜馬場K	井原鑓溝 井原鑓溝M-17 飯氏K-7	須玖岡本B 宮の下	三津永田K-104 三津永田D-? 二塚山D-29 二塚山D-36 二塚山D-52	五般神社S 穂光S 伊香刀S 宝珠S 宮原S
後期（後）	中原	平原1号墓 東二塚 三雲寺口	日佐原D	松葉S 横田S 一本谷D 城原三本谷S 北外	谷頭S 津生S 原田S-1

福岡・糸島地方では漢鏡を 30～40 面副葬する墳墓が散在すｒるが、佐賀地方では漢鏡 1 面を副葬する墳墓が継続的に存在。
（K は甕棺墓、M は木棺墓、S は石棺墓、D は土坑墓）
（常松 2010　長崎県教育委員会主催「東アジアシンポジウム」 資料に加筆）

表 7　吉野ヶ里遺跡周辺の威信財をもつ弥生時代墳墓

番号	遺跡名	所在地	墳墓番号	墳墓形式	時期	威信財の種類	備考
1	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	SJ0100	甕棺墓	中期初頭	細形銅剣〔Ⅰ式〕1	田手一本黒木地区Ⅰ区墓地
2	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	SJ0298	甕棺墓	中期前半	鉄製蝶番	吉野ヶ里地区Ⅱ区墓地
3	切通遺跡	上峰町	4号甕棺墓	甕棺墓	中期前半	細形銅剣〔Ⅰ式ｂ類〕1	
4	高志神社	神埼市	SJ018甕棺墓	甕棺墓	中期前半	細形銅剣〔Ⅰ式〕1	絹布片
5	甕棺塚下層	吉野ヶ里町		甕棺墓	中期前半？	細形銅剣〔Ⅰ式ｂ類〕1	前方後円墳の下層で、小墳丘墓の可能性
6	吉野ヶ里	吉野ヶ里町		甕棺墓？		細形銅剣〔Ⅰ式〕1	田手二本黒木地区Ⅱ区墓地出土の可能性
7	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	墳丘墓 SJ1002	甕棺墓	中期中頃	細形銅剣(有柄式)〔Ⅰ式〕1	ガラス管玉79、絹布片
8	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	墳丘墓 SJ1005	甕棺墓	中期中頃	細形銅剣〔Ⅱ式〕1	墳丘墓で２番目に新しい甕棺墓
9	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	墳丘墓 SJ1006	甕棺墓	中期前半	細形銅剣〔Ⅱ式〕1	墳丘墓最古の甕棺墓
10	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	墳丘墓 SJ1007	甕棺墓	中期中頃	細形銅剣〔Ⅱ式〕1・把頭飾1	
11	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	墳丘墓 SJ1009	甕棺墓	中期中頃	細形銅剣〔Ⅰ式〕1	
12	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	墳丘墓 SJ1054	甕棺墓	中期中頃	細形銅剣〔Ⅰ式〕1	
13	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	墳丘墓 SJ1056	甕棺墓	中期中頃	細形銅剣〔Ⅰ式〕1	
14	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	墳丘墓 SJ1057	甕棺墓	中期中頃	中細形銅剣〔ｂ類〕1・把頭飾1	
15	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	墳丘墓？	甕棺墓？		細形銅剣〔Ⅰ式〕1	墳丘墓そばで表面採集
16	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	SJ2775	甕棺墓	中期後半	小型漢鏡〔３期〕(連弧文「久不相見」鏡)1	吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区、貝輪30、絹布片
17	二塚山	上峰町	15号甕棺墓	甕棺墓	中期後半	中型漢鏡〔３期〕(連弧文「絜清白」鏡)1	
18	二塚山	上峰町	46号甕棺墓	甕棺墓	後期初頭	小型雑鏡(渦文鏡)1	鉄矛1
19	二塚山	上峰町	76号甕棺墓	甕棺墓	後期前半	小型漢鏡〔４期〕(連弧文「昭明」鏡)1	
20	二塚山	上峰町	17号土坑墓	土坑墓	後期	小型仿製鏡1	ガラス勾玉1・ガラス管玉小玉2
21	二塚山	上峰町	19号土坑墓	土坑墓	後期	鉄剣1	
22	二塚山	上峰町	26号土坑墓	土坑墓	後期	中型漢鏡〔５期〕(長宜子孫系連弧文鏡)1	ガラス管玉221＋
23	二塚山	上峰町	29号土坑墓	土坑墓	後期	中型漢鏡〔４期〕(細線式獣帯鏡)	
24	二塚山	上峰町	36号土坑墓	土坑墓	後期	素環頭鉄刀1	
25	二塚山	上峰町	52号土坑墓	土坑墓	後期	素環頭鉄刀1	
26	五本谷	上峰町	25号土坑墓	土坑墓	後期	小型仿製鏡1	
27	五本谷	上峰町	75号土坑墓	土坑墓	後期	中型漢鏡〔４期〕片(方格規矩鏡)	
28	坊所一本谷	上峰町		箱式石棺墓	後期	中型漢鏡〔５期〕(長宜子孫系連弧文鏡)1	
29	松原(横田)	吉野ヶ里町		箱式石棺墓？	後期	中型漢鏡〔５期〕(方格規矩鏡)1	素環頭鉄刀1・鉄剣1
30	松葉	吉野ヶ里町		箱式石棺墓	後期	中型漢鏡〔５期〕(方格規矩鏡)1	ガラス小玉多数
31	石動四本松	吉野ヶ里町	SJ032	甕棺墓	後期前半	小型漢鏡〔４期〕(連弧文「昭明」鏡)1	硬玉製勾玉2・碧玉製管玉5
32	南角	吉野ヶ里町		土坑墓	後期	中型漢鏡〔４期〕片(長宜子孫系連弧文鏡)1	
33	三津永田	吉野ヶ里町	104号	甕棺墓	後期前半	中型漢鏡〔５期〕(細線式獣帯鏡)1	素環頭鉄刀1
34	三津永田	吉野ヶ里町	105号	甕棺墓	後期初頭	小型漢鏡〔４期〕(鳳龍文鏡)1	
35	三津永田	吉野ヶ里町		甕棺墓	後期	小型漢鏡〔４期〕(連弧文「昭明」鏡)1	
36	三津永田北方	吉野ヶ里町		？(墳墓)		中型漢鏡〔５期〕(長宜子孫系連弧文鏡)1	三津永田遺跡の範囲
37	志波屋三本松	神埼市		？(墳墓)		小型漢鏡〔４期〕片(鳳龍文鏡)1	三津永田遺跡の範囲
38	上志波屋	神埼市		？(墳墓)		小型漢鏡〔４期〕(方格規矩鏡)1	
39	上志波屋	神埼市		箱式石棺墓	後期後半以降	小型漢鏡〔４期〕(連弧文「昭明」鏡)1	鉄鏃1
40	城原三本谷	神埼市		箱式石棺墓	後期後半以降	小型漢鏡〔６期〕片(方格規矩鏡)1	
41	北外	神埼市		？(墳墓)		大型漢鏡〔５期〕片(連弧文鏡、復元径20cm)1	

(参考) 墳墓以外の遺構から出土した漢鏡

番号	遺跡名	所在地	遺構番号	遺構	遺構の時期	威信財の種類	備考
1	吉野ヶ里遺跡	吉野ヶ里町	SD0925	環壕跡	後期～終末期	大型漢鏡〔５期？〕片(縁のみ、復元径22cm＋)1	
2	吉野ヶ里遺跡	吉野ヶ里町	SD0829	環壕跡		漢鏡片(鈕のみ)1	
3	吉野ヶ里遺跡	神埼市	SH0544	竪穴住居跡		中型漢鏡片(縁のみ)1	
4	瀬ノ尾遺跡	吉野ヶ里町	SH102	竪穴住居跡		中型漢鏡〔４期〕片(方格規矩鏡)1	
5	柴尾橋下流	佐賀市	SD004	溝跡		中型漢鏡〔５期〕片(連弧文鏡)1	

細川金也 2009 などから作成（鏡の時期…3 期～ 6 期については、岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』による。（1 期：前 2 世紀前半　2 期：前 2 世紀後半　3 期：　前 1 世紀前葉から中葉　4 期：前 1 世紀後葉から後 1 世紀前葉　5 期：1 世紀中葉から後葉　6 期：2 世紀前半代の製作とする）

このうち中型鏡は二塚山遺跡や、三津永田遺跡、松原（横田）遺跡、松葉遺跡、坊所一本谷遺跡の 5 遺跡で計 9 点が出土し、小型鏡は二塚山遺跡や、三津永田遺跡を含む 7 遺跡で計 9 点が出土している。中でも二塚山遺跡では漢鏡 3 期から漢鏡 5 期にかけての中型・小型の銅鏡を、三津永田遺跡では漢鏡 4 期と 5 期の中型・小型の銅鏡を出土している。人骨と共に出土した二塚山遺跡や吉野ヶ里遺跡例などから、中型鏡は男性の、小型鏡は女性の副葬品であった可能性が高いと考えられる。ちなみに、漢鏡を大きさ（面径）によって 20cm 以上の大型鏡、16cm 前後の中型鏡、10cm 以下の小型鏡に区分すれば、大型鏡や中型鏡は、中国では王侯クラスから郡県の中級官人クラスまでが所有していた鏡であったという（岡村 1999）。

これらの墓地は吉野ヶ里遺跡の北方から東方の東西 4.5km、南北 3.5km の範囲（佐賀市柴尾橋下流遺跡を含めると南北 8 km）の中に存在しており、特に中型鏡は二塚山遺跡と三津永田遺跡を中心に、横田、松葉、坊所一本谷の各墓地に順を追って副葬されたとみられる。中でも二塚山遺跡と三津永田遺跡は、いずれも前期末から後期後半まで継続する特異な墓地であり、神埼地方の中でも有力な継続型集落が営んだ墓地と考えられる。ちなみに、吉野ヶ里遺跡の環壕跡や神埼市北外遺跡の箱式石棺墓からは 20cm 以上の大型後漢鏡の破片も出土している。なお、吉野ヶ里遺跡周辺（神埼地方）から出土した漢鏡や小形仿製鏡については、福岡県小郡市地区から佐賀平野全域にわたる地域を含めて、細川金也によって詳細にまとめられている（細川 2009）。

この首長墓が分散して存在していることについて、「弥生時代中期から後期にかけて、吉野ヶ里から二塚山、そして三津永田へと青銅器を副葬する首長墓が移動していたようであり、集落を単位とする族長も、平野単位の社会を統率する上位の地域首長も、安定した世襲的な権力を掌握するにはいたっていなかった」とする評価もある（岡村 1999）。しかし、吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、弥生時代前期初頭から後期終末期にかけての集落の発展的変遷を明らかにし、中期前半の大規模な墳丘墓や、後期後半から終末期にかけての大規模かつ整然と整備された拠点集落の姿は、「平野単位の社会を統率する上位の地域首長」の存在を大いに示唆するものであった。

後期になって集落の規模を拡大させ、終末期までに内部に様々な記念物的な施設を建設するなどして都市的な様相をみせた吉野ヶ里集落の近隣で、首長層を葬ったと考えられる墳墓が確認されていない現状から、これら周辺に分布する中国の権威を帯びた威信財を副葬した墳墓の被葬者を、吉野ヶ里のクニの歴代の首長とみることも必要だと考えられる。吉野ヶ里集落は地域の母なる集落ではあったが、地域社会全体の力で発展した集落であり、中期以降緊密になったネットワークは、地域社会の統合の過程でさらに緊密になったことは疑いえない。このような社会状況の下で、中期前半代以降と同じく、地域社会全体の中の有力集落からクニの首長が共立されたものと考えられる。しかし、中期中頃とは違い、首長の役割を終えた後、また、死亡したのち自身の出身地である集落の墓地に家族とともに葬られるというように首長の埋葬場所が大きく変化したと考えることもできる（七田 2010）。

また、1 棺に 1 面の鏡しか副葬されないことについては、中国後漢の都洛陽の官人たちを埋葬した洛陽焼溝漢墓では、一人を埋葬した墳墓 40 例のうち、銅鏡 1 面を副葬したものが 36 例、２面が３例、３面が 1 例（中国社会科学院考古研究所編 1959）となっており、銅鏡 1 面を副葬するのが通例であった。つまり、１面の鏡を副葬する墳墓が継続して営まれる佐賀地方は、多数の鏡を副葬する墳墓が突発的に現れる福岡・糸島地方とは、異質な社会であり中国的であったということができるかもしれない。

漢鏡や鉄刀のほかにも中国との交流を物語る遺物が出土している。田一本松地区 SD0040 溝跡付近から出土した貸泉や、吉野ヶ里丘陵地区地区Ⅶ区 316 区 SX2487 不明遺構と吉野ヶ里地区Ⅰ区 SD0002 下層（後期中頃前後）からそれぞれ出土した棹秤石権、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区 SH1291 住居跡出土の石硯、田手一本黒木地区Ⅰ区 220 区 SD0026・SD0027 溝跡切合部分出土の研石などである。貸泉と研石の所属時代・時期は不明だが、一帯に中世の遺構が少なく弥生時代を中心とした遺構が多く存在することなどから、弥生時代に属する可能性が高い。石硯は北内郭跡の後期の竪穴住居跡から出土しており、吉野ヶ里集落の中枢部で使用されていたことを示唆している。

石硯や研石と考えられるもの、あるいは可能性のあるものは、古墳時代のものも含めれば現在までに約 200 点前後に至っており（久住 2020）、もはや弥生時代における文字使用を肯定せざるを得ない状況となった。弥生時代の中期後半以降、中国漢帝国の強力な力の下に国内において中国銭貨と文字の使用が初めて実現し、これらは国際あるいは国内地域間の交易や外交の場において使用されていた可能性（武末 2019）も高くなったといえる。先の漢鏡や鉄刀を含め、これら文物の伝播・流入過程において、商取引や外交といった行為の概念も次第に伝わってきたものと推定される。

（５）おわりに　中国正史が記す日中外交との関連

中国の正史である『漢書』地理志や『後漢書』東夷伝、『三国志』魏書東夷伝に記すの外交記録は表

表 8　弥生時代日中外交と貢納・下賜品

倭国の王	中国王朝	朝貢年	貢納品	下賜品
諸国の王	前漢(楽浪郡)	前1世紀	？	銅鏡など？
倭奴国王	後漢	57年	？	「漢倭奴国王」金印紫綬
倭国王帥升(倭面土国王帥升)	後漢	107年	生口百六十人	？
倭国王卑弥呼	魏	239年	生口十人(男四･女六)、斑布	「親魏倭王」金印紫綬、降地交龍綿、絳地縐粟罽、蒨絳、紺青、紺地句文錦、細班華罽、白絹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹各五十斤 使い2名に「率善中郎将」銀印青綬、「率善校尉」銀印青綬
倭国王卑弥呼	魏	243年	生口、倭錦、絳青縑、緜衣、帛布、丹、木拊短弓、矢	使い8名に「率善中郎将」銀印青綬
倭国王壱与	魏	247年？	生口三十人、白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雑綿二十匹	？

4 のとおりである。前 108 年に朝鮮半島に楽浪郡など 4 郡が設置されたのち、『漢書』が「…故に孔子、道の行われざるを悼み、もし海に浮かばば、九夷に居らんと欲す。ゆえ有るかな。夫れ楽浪海中、倭人有り。分かれて百余国を為す。歳時を以て来たり献見すと云う」と記すように、倭諸国の王たちが朝貢外交を開始したことと、中国に朝貢し皇帝への礼を尽くしていることが理解できる。

『後漢書』には、「建武中元二年 (57 年)、倭奴国，貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜ふに印綬を以てす。安帝の永初元年 (107 年)、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願ふ」とある。57 年の遣使での貢納品は記されないが、福岡市志賀島から出土した金印によって「漢委（倭）奴国王」に叙せられたことが分かる。古く明治時代の末に「倭奴」を「やまと」と読むことが提唱されたこともあった（稲葉 1911）が、近年、再び同調する考えも増えてきた。倭国全体の王は、倭奴国王（名は不明）から、のちに述べる倭面土国王帥升、そして倭国王卑弥呼ということになる。107 年に 160 人の生口を貢納した「倭国王帥升」は、後漢書を引用した『翰苑』には「倭面上国王帥升」（上は土の誤記と考えられる）とあり、唐類函・変塞部倭国の条所引の『通典』には「倭面土地王帥升」、北宋版『通典』には「倭面土王帥升」とされる。この倭面土についても、明治時代の末に「やまと」と読むべきとの考えが出されている（内藤 1911）。こと面土については「上峰町米多（めた）」「吉野ヶ里町目達原（めたばる）」などの地名として吉野ヶ里遺跡周辺に残り、古墳時代には、応神天皇曾孫都紀女加王を初代とする「筑紫米多国造」の本拠地となった土地である。倭面土王は、当時、国内最大級の環壕集落である吉野ヶ里集落を拠点としていた可能性がある。『三国志』にも、「景初三年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む。…汝献ずる所の男生口四人・女生口六人…正始四年、倭王、また使を遣わし、生口を献ずる」とあり、引き続き中国皇帝が倭王に求めたのが生口であったことが分かる。卑弥呼の次の倭王壱与についても同様に生口を貢納している。また、倭人伝には、倭王卑弥呼が立つ以前には男王たちが存在していたことが記されている。

これらの外交で貢納された生口については、従来、奴隷とか技術者といった解釈がなされてきたが、近年、徳を守り続けている人々ではないか、とも考えられている（岡村 1999）。このことは、先に示した『漢書』の記事で理解できる。「夫れ楽浪海中、倭人有り…」の前の文には『論語』にも登場する孔子の思いが述べられており、後漢末といわれる論語の成立より以前、107 年の外交の少し前に成立したとされる『漢書』の中の徳をもった倭人の記事が、後漢皇帝安帝に徳を守る倭人を求めさせたのであろう。中国皇帝は臣民に徳を授けるために徳を積む必要があったからである。この求めに即座に応じたのが倭面土国王帥升であったと考えられる。

吉野ヶ里遺跡を中心とする佐賀平野では、福岡や糸島などの玄界灘沿岸地域と同じく、57 年の外交以降の墳墓から後漢鏡が出土（もちろん前時代の前漢鏡も出土）しはじめ、107 年の外交以降はその数

を増す。しかし、注目すべきは、吉野ヶ里遺跡では、集落の大型化が進み、107 年の外交の直後（後期中頃）以降に環壕突出部や望楼を、やや遅れてくい違い出入口などを設け、集落景観の中国化に努力した跡がうかがえることである。福岡や糸島地方など九州北部の他の地域や、近畿地方など本州では見られない現象である。

このように、中国正史が伝える日中外交によりもたらされたものが、強大な中国帝国の傘下での安定や、中国官職の叙位、金印紫綬・銀印青綬であり、下賜された権威を帯びた鏡や刀であり、中国城郭の在来技術での模倣であった。吉野ヶ里遺跡一帯での中期後半から終末期にかけての墳墓からの漢鏡の途切れない連続的な出土は、連続的な男王の存在をも示唆しており、吉野ヶ里遺跡の集落施設の中国化やそれらの配置、暦導入の可能性などを合わせると、吉野ヶ里集落の集団が日中外交に大きく関わっていたらしいこと、また、外交の過程で得た経験や見聞を生かし集落の景観を中国のそれに近づけようと努力したらしいことを感じさせてくれる。

第 2 章第 4 節　引用・参考文献

稲葉岩山 1911「漢委奴国王印考」『考古学雑誌』第 1 巻第 12 号

岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』歴史文化ライブラリー 66　吉川弘文館

岡村秀典 1999「漢帝国の世界戦略と武器輸出」『戦いの進化と国家の生成　人類にとって戦いとは 1』東洋書林

小郡市教育委員会 1994『一ノ口遺跡 I 地点』小郡市文化財調査報告書第 86 集

蒲原宏行 1995「九州 2- 佐賀県 -」『ムラと地域社会の変貌―弥生から古墳へ』第 37 回埋蔵文化財研究会発表資料

来村多加史他 1994『戦略戦術兵器事典①　中国古代編』学習研究社

久住猛雄 2020「近畿地方以東における「板石硯」の伝播と展開」『荒尾南遺跡を読み解く～集落・墓・生業～』第 34 回考古学研究会東海例会発表資料集

七田忠昭 1996「日本の弥生時代集落構造にみる大陸的要素―環壕集落と中国古代城郭との関連について」『東アジアの鉄器文化』韓国国立文化財研究所

七田忠昭 2000「弥生時代の市―吉野ヶ里遺跡の発掘から推理する」『歴史九州』123 号　九州歴史大学講座事務局編　海援社

七田忠昭 2010「拠点集落の首長とその墳墓 弥生時代中期から後期の地域集落群の動向の一例」『日韓集落研究の新たな視角を求めてⅡ』日韓集落研究会

妹尾達彦 2009「コメント 2」『都城制研究（2）』奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集 Vol.23

武末純一 2019「５弥生時代に文字は使われたか」『18 歳からの歴史学入門』福岡大学人文学部歴史学科編 彩流社

田中淡 1989「「墨子」城守諸篇の築城工程」『中国古代科学史論』京都大学人文科学研究所

谷豊信 1995「楽浪郡・帯方郡の土城」『歴史九州』63 号　九州歴史大学講座事務局編　海援社

常松幹雄 2018「奴国（玄海灘沿岸）と東アジア」安田喜憲・七田忠昭編『東シナ海と弥生文化』環太平洋文明叢書 6　雄山閣

内藤虎次郎 1911「倭面土国」『芸文』2-6

日満文化協会 1938『通溝　巻上』池内宏・梅原末治編

古澤義久 2018「環濠集落としての原の辻遺跡」『環濠集落　その源流を探って―環濠集落にみる東アジア交流―』平成 30 年度東アジア国際シンポジウム　長崎県埋蔵文化財センター

細川金也 2009「有明海北岸出土の弥生時代青銅器の研究―弥生時代青銅鏡の分布と地域性―」『財団法人鍋島報效会研究助成研究報告書』第 4 号

楊寛 1987『中国都城の起源と発展』学生社

（ハングル）

沈奉謹 1998『梁山平山里遺跡』東亜大学校博物館

（中文）

中国社会科学院考古研究所編 1959『洛陽焼溝漢墓』科学出版社

中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館 1963『西安半坡原始氏族社会集落遺址』文物出版社

西安半坡遺跡博物館 1988『姜寨―新石器時代遺址発掘報告』文物出版社

河南省文物研究所・周口地区文化局 1983「河南淮陽平糧台龍山文化城址試掘簡報」『文物』19-3

河南省文物研究所・中国歴史博物館考古部 1983「登封王城崗遺址的発掘」『文物』1983-3

河北省文物工作隊 1965「河北易県燕下都城勘察和試掘」『考古学報』1965-1

群力 1972「臨淄斉国故城勘探紀要」『文物』1972-5

蓋山林・陸思賢 1979「内蒙古境内戦国秦漢長城遺迹」『中国考古学会第 1 年次会論文集』

甘粛居延考古隊 1978「居延漢代遺址的発掘和新出土的簡冊文物」『文物』1978-1

中国社会科学院考古研究所漢魏故城工作隊 1986「漢魏洛陽城北垣一号馬面的発掘」『考古』1986 年第 8 期　文物出版社

第３章　弥生人骨

第１節　吉野ヶ里遺跡出土の弥生時代人骨
第２節　吉野ヶ里遺跡出土弥生人骨の歯冠形態
第３節　吉野ヶ里遺跡出土人骨の炭素・窒素同位体比

第１節　吉野ヶ里遺跡出土の弥生時代人骨

分部 哲秋、佐伯 和信、弦本 敏行（長崎大学 大学院医歯薬学総合研究科 ）

（１）はじめに

吉野ヶ里遺跡は、筑紫平野の中央部、行政的には佐賀県の東部、神埼町（現：神埼市）、三田川町・東脊振村（現：吉野ヶ里町）にまたがって所在し、東の鳥栖段丘群と同様に脊振山系より帯状に南に向かって延びた志波屋・吉野ヶ里段丘に立地している。本遺跡は、工業団地計画に伴い佐賀県教育委員会により昭和 61（1986）年度から発掘調査が開始され、途中平成 7（1995）年度から歴史公園整備工事着手を経て、平成 24（2012）年度の同公園整備工事の終了まで継続的に行われ、延長約 2.5 キロメートルもある環濠、北内郭、高床式倉庫群、住居群の他、銅鐸、細形銅剣、貝製貝輪、ガラス管玉、細形銅剣鋳型、前漢鏡、鉄製品等が発見された。吉野ヶ里遺跡と周辺の遺跡群含むこの地域は、遺跡の規模や出土遺物の豊富さから先進文化をいち早く取入れ、発展させた地域と位置付けられている。また、同遺跡からは弥生時代の甕棺墓 3,045 基をはじめとして石棺墓および木棺墓・土坑墓が発掘され、甕棺墓出土人骨を主として総数 447 体の人骨が検出された。

形質人類学は、当時の社会を担った人々がどのような形質（形態）を備え、どのような由来で形成された集団で、どのような生活状態の下で生活していたのかなどを骨の形態的特徴や骨の残された痕跡から明らかにしようとする研究分野である。福岡平野から筑紫平野にかけてのいわゆる北部九州地域の遺跡から発掘される弥生人骨の形質について言及すれば、これまで多くの報告が示すように低広顔且つ低身長の縄文時代人骨の特徴とは大きく異なる形質を備えており、これらの弥生人は東アジア地域との関係が強く、縄文時代の終わりから弥生時代にかけて渡来した人々あるいはその子孫（渡来系弥生人）と考えられている。これらの弥生人の形質は、東方に向けて拡散し、古墳時代の終わり頃には現在の日本人形質の原形ができ上がったものと推測され、弥生人渡来説は現在において定説化されている。

鳥栖地域において出土し、先に報告している安永田遺跡出土弥生人骨は、福岡平野の弥生人骨よりもさらに高顔傾向が顕著で、渡来人的形質をより強く認めた。また、吉野ヶ里遺跡の発掘調査が継続されている途中で資料数はやや少ないのであるが、先行的に吉野ヶ里弥生人骨の頭蓋計測値からの分析を行った。この結果も安永田弥生人骨と同様の結果を示していた。渡来人がいち早く福岡平野に定住したにしても鳥栖地域を廻って吉野ヶ里に移住したかどうかは不明である。筑紫平野では比較的海浜部に近い地域から弥生時代早期から前期にかけての遺跡や人骨が発見されている。中国の縄文時代後・晩期から弥生時代前・中期相当期の人骨についても資料が追加され、中国の古人骨資料とこの前期弥生人骨および吉野ヶ里弥生人骨との間により近い関係が見出せれば有明海経由の渡来も考慮されるようになるであろう。

弥生時代における「戦い」が問題になり、その 1 例として吉野ヶ里遺跡の甕棺墓より出土した『上部頸椎から頭部を欠く弥生人骨』が話題となった。その様な類例が他に存在しないかを調べるために、要するに頭部以外の骨が全身的に残存しているが頭蓋骨片が 1 片も無い例を見出そうとした。そのため相当の労力と時間を要した。したがって、本稿第 1 節は、弥生人骨についての遺存体数と遺存状態の内容を優先して記載し、次いで、第 2 節を「人骨の歯冠形態」、第 3 節を「人骨の炭素・窒素同位体分析」について報告することにした。

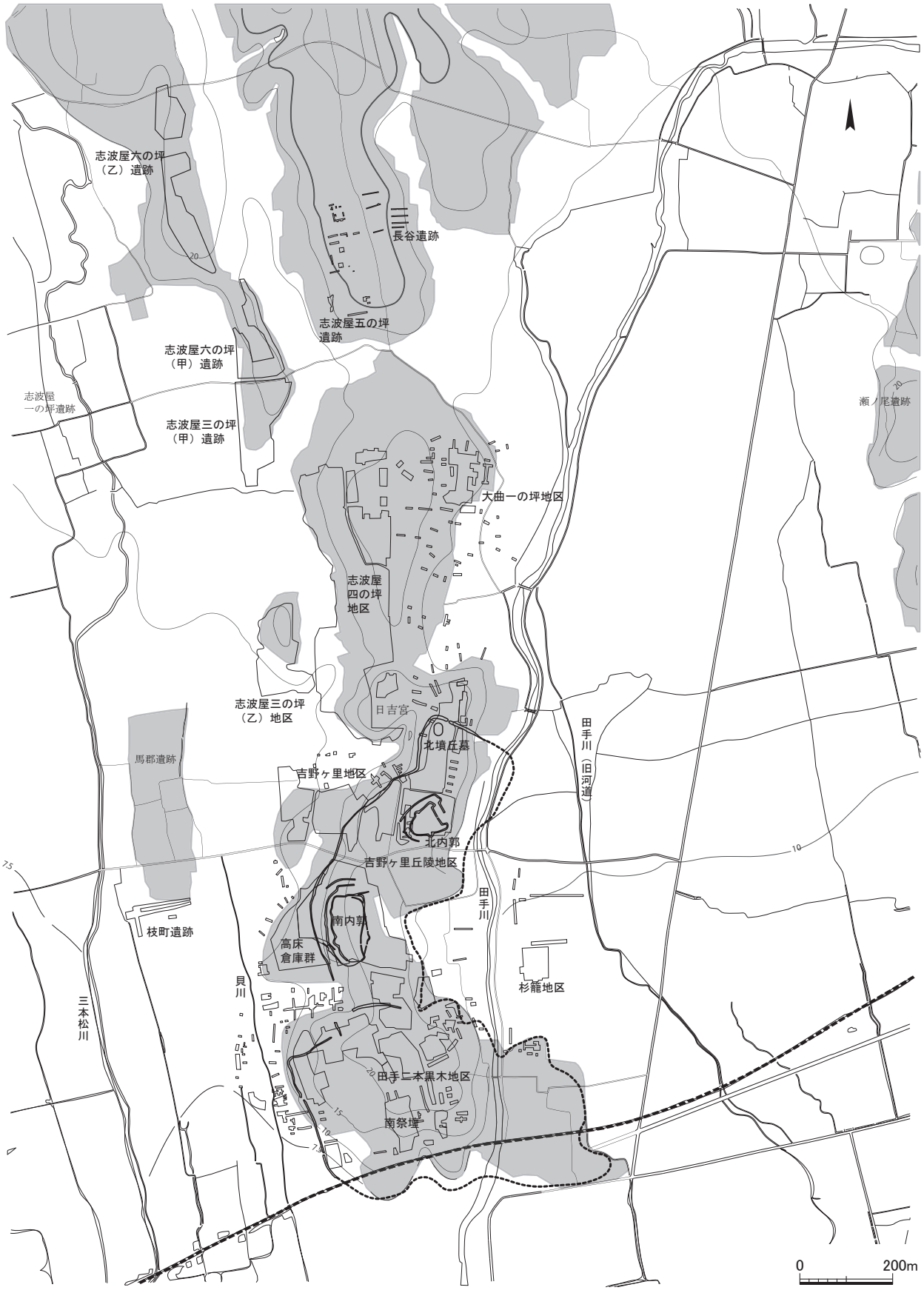


図 1　吉野ヶ里遺跡　調査区の位置（1/12,000）

（２）資料及び方法

吉野ヶ里遺跡は調査区が 30 地区設定されているが、人骨の出土した埋葬遺構は図 1 に示す調査区のうち遺跡の南限に設定されている JR 長崎本線側から北に向かい田手二本黒木、吉野ヶ里、吉野ヶ里丘陵、志波屋四の坪、志波屋三の坪、志波屋五の坪地区である。各地区より出土した人骨については表 1．吉野ヶ里遺跡人骨出土墳墓・遺構一覧に示すように埋葬遺構の種類、所属時期、人骨の遺存状態、推定性別および年齢を記載した。また、表末には、昭和 54（1979）年に神埼町教育委員会が志波屋四の坪地区に存在した工場敷地内の発掘調査（四の坪遺跡）を実施した際に出土した保存状態の良好な人骨 6 体を加えた。

性別については骨盤を構成する寛骨および頭蓋の形態的特徴を主とし、それらが欠損しているものは四肢長幹骨の形態および大きさより同定した。年齢に関しては成人骨では寛骨の恥骨結合面、椎骨椎体の骨棘の形成程度、頭蓋の縫合の閉鎖の度合いと歯の咬耗の程度から推定し、未成人骨では藤田による現代日本人の歯の萌出時期、金田による現代日本人の永久歯における歯根完成時期、分部による骨癒合年齢を参考に行っている。また、成人の年齢区分は現代人に比定して、壮年：20 歳～ 30 歳代、熟年：40 歳～ 50 歳代、老年：60 歳～としている。未成人骨の年齢区分は佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨の報告に準じた。（　）内の年齢は、現代日本人の歯の萌出時期等による平均的な年齢を示し、乳児 (1 歳未満)、幼児 (1 歳～ 6 歳まで)、小児Ⅰ期 (6 歳～ 12 歳まで)、小児Ⅱ期 (12 歳～ 15 歳まで)、成年 (青年) 期 (15 歳～ 20 歳まで) とした。

表 2 に調査地区、遺構、時期別に分類した人骨数を示したが、志波屋四の坪地区の出土数は甕棺墓 290 体、石棺墓 7 体、土抗墓 4 体で総数 301 体が出土し、吉野ケ里丘陵地区では甕棺墓 120 体、土抗墓 11 体で総数 131 体が出土し、両調査区で出土数の大半を占めている。また、出土総数 447 体のうち甕棺墓からの出土数は 422 体で 94.4％を占める。

表 3 に遺構、時期別に分類した人骨数を示す。考古学的所見に基づく所属時期別の甕棺墓出土人骨数は、前期末～中期初頭に属す 2 体を含む中期の人骨数は 324 体で全体の 76.8％、中期末～後期初頭に属す人骨は 30 体で全体の 7.1％、後期に属す人骨は 64 体で全体の 15.2％、その他弥生時代の詳細な時期が不明な人骨が 4 体あり、0.9％占めている。骨格形質を述べる上で中心となるのは中期の弥生人骨であるが、中期末～後期初頭から後期の人骨も比較的多く、今後は中期から後期への骨格形質の変化についても研究対象になってくるであろう。

第 3 章第 1 節　引用・参考文献

佐賀県教育委員会 1992『吉野ヶ里―神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』佐賀県文化財調査報告書第 113 集

佐賀県教育委員会 2016『吉野ヶ里遺跡―弥生時代の墓地―(遺跡南部・中央部 1)』佐賀県文化財調査報告書第 214 集

佐賀県教育委員会 2016『吉野ヶ里遺跡―弥生時代の墓地―(遺跡北部 1)』佐賀県文化財調査報告書第 214 集

分部哲秋，佐伯和信，岡本圭史，渡邊智英，長島聖司 2001「佐賀県鳥栖市安永田遺跡出土の弥生時代人骨の形態的特徴」『安永田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第 67 集　鳥栖市教育委員会

分部哲秋 1981「佐賀県四の坪遺跡出土の弥生時代人骨について」『解剖学雑誌』56 巻：441 － 442.

分部哲秋 1998「吉野ヶ里人のふるさと」『虹を見た』，内藤大典編集　海援社：132-133.

Wakebe T. 2014　Part II Chapter 2 Nonmetric Cranial Trait Variations in Human Skeletal Remains of the Spring and Autumn Period and Warring States Period, Excavated from Henan Province, China. Ancient People of the Central Plains in China. Anthropological Study on the Origin of the Yayoi People (Nakahashi T.　Wenquan F. eds ; Kyushu University Press, Fukuoka) pp.107-121.

Wakebe T. 2014　Part III Chapter 3 Nonmetric Cranial Traits. Ancient People of the Central Plains in China. Anthropological Study on the Origin of the Yayoi People (Nakahashi T. Wenquan F. eds ; Kyushu University Press, Fukuoka) pp.189-195.

藤田恒太郎 1965『歯の話』岩波書店

金田義夫 1957「日本人の永久歯における歯根完成時期の研究」『歯科月報』30 巻：165-172.

Wakebe T. 1992　Age of epiphyseal fusion in Japanese of modern times　1.Upper limb skeleton, J. Anthrop. Soc. Nippon. 100：231.

分部哲秋 1992「近代日本人の骨端癒合年齢 2. 下肢骨」『解剖学雑誌』67 巻：508.

分部哲秋 1981「佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨」『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書第 1 集：1-11.

表 1　吉野ヶ里遺跡人骨出土墳墓・遺構一覧

（SJ…甕棺墓　SC…石棺墓　SP…木棺墓・土坑墓　P…小穴　SD…溝）

通し番号	地区記号	地区名称	調査区	遺構番号	時期	人骨								特記事項
						遺存状態						性別	年齢	
						脳頭蓋	顔面骨	下顎骨	歯	上肢骨	下肢骨			
1	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0003	中期末	▲	×	×	△	×	▲	不明	不明	
2	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0004	中期末	△	△	△	▲	○	△	女性	熟年	
3	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0008	中期後半	△	×	×	×	○	△	女性	不明	
4	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0011	中期後半	◎	○	△	○	◎	◎	男性	壮年	
5	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0022	中期後半	△	×	▲	○	△	○	男性	不明	
6	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0023	後期前半	▲	×	×	×	×	▲	不明	不明	
7	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0033	中期末	×	×	×	×	▲	▲	女性	不明	
8	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0034	後期前半	▲	×	×	△	×	×	不明	不明	
9	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0040	後期前半	▲	×	×	○	×	▲	不明	小児Ⅱ～成年	
10	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0041	中期末～後期初頭	▲	×	×	○	▲	▲	男性	壮年	
11	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0042	中期末～後期初頭	▲	×	△	×	▲	▲	不明	不明	
12	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0043	後期前半	×	×	×	×	×	▲	不明	幼児	
13	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0044	中期前半	◎		◎		◎	◎	女性	熟～老年	
14	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0045	中期末	○	△	○	○	▲	○	不明	小児Ⅰ	
15	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0046	中期後半	▲	×	×	×	×	×	不明	不明	
16	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0050	中期前半	△	▲	△	×	×	○	男性	熟年	
17	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0052	中期前半	○	△	○	○	◎	○	女性	熟年	
18	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0058	中期後半	△	×	×	△	×	○	女性	熟年	
19	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0062	中期前半	△	△	○	○	×	○	男性	熟年	
20	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0072	中期前半	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
21	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0075	中期前半	×	×	×	×	×	△	女性	不明	
22	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0077	後期前半	×	×	×	○	×	▲	不明	不明	
23	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0078	後期前半	△	×	×	○	△	▲	男性	壮～熟年	
24	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0079	中期前半	○	×	△	△	○	○	男性	熟年	
25	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0081	中期前半	△	×	×	○	×	△	男性	熟年	
26	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0086	中期後半	▲	×	×	×	×	△	不明	不明	
27	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0089	中期後半	○	△	△	○	×	○	男性	壮年	
28	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0090	中期前半	◎	△	○	○	○	○	男性	熟年	
29	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0093	中期前半	×	×	×	×	×	○	女性	不明	
30	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0094	中期前半	△	△	×	○	▲	○	男性	熟年	
31	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0096	後期前半	×	×	×	△	▲	▲	不明	不明	
32	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0097	中期前半	△	▲	×	○	×	○	女性	壮年	
33	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0100	中期前半	○	○	○	○	○	○	女性	壮年	貝輪 6
34	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0103	中期後半	×	×	×	△	×	×	不明	不明	
35	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0104	後期初頭	×	×	×	○	▲		不明	壮年	
36	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0106	中期前半	△	▲	△	○	△	△	女性	不明	
37	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0107	中期前半	△	×	○	○	△	○	男性	熟年	

通し番号	地区記号	地区名称	調査区	遺構番号	時期	人骨						性別	年齢	特記事項
						遺存状態								
						脳頭蓋	顔面骨	下顎骨	歯	上肢骨	下肢骨			
38	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0108	後期初頭	▲	×	▲	×	▲	▲	不明	不明	
39	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0110	中期前半	×	×	×	×	×	△	不明	不明	
40	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0117	後期前半	×	×	×	△	▲	▲	不明	不明	
41	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0118	中期前半	▲	△	○	○	○	○	男性	壮年	
42	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0135	中期後半	△	▲	△	○	△	◎	女性	壮年	
43	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0137	中期前半	×	×	△	×	△	◎	男性	成人	
44	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0145	中期後半	×	×	×	×	△	△	男性	不明	
45	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0150	後期前半	▲	×	×	×	△	△	男性	成人	
46	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0151	後期初頭	▲	▲	×	×	▲	▲	男性	不明	
47	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0154	中期末～後期初頭	▲	×	×	◎	▲	▲	不明	小児Ⅱ	鉄刀子 小児Ⅱ期前半
48	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0157	後期初頭	▲	×	×	×	×	△	不明	小児？	
49	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0159	中期末～後期初頭	×	×	×	○	△	△	不明	不明	
50	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0160	中期末～後期初頭	×	×	△	○	×	△	不明	小児Ⅰ	小児Ⅰ期前半
51	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0161	中期末	◎	○	○	◎	○	◎	男性	熟年	
52	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0162	中期末～後期初頭	×	×	×	×	▲		不明	不明	
53	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0164	中期末～後期初頭	△	○	○	◎	○	△	男性	壮年	
54	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0167	後期前半	×	×	×	△	×	×	不明	不明	
55	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0169	中期末～後期初頭	×	×	×	▲	▲		不明	不明	
56	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0170	中期末～後期初頭	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
57	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0171	中期前半	▲	×	×	×	×	×	不明	幼児	
58	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0174	中期後半	△	×	×	×	▲	△	不明	不明	
59	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0176	後期初頭	×	×	×	×	▲		不明	不明	
60	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0181	中期前半	○	○	○	◎	○	◎	男性	壮年	
61	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0193	中期末	○	×	△	△	△	○	男性	熟年	
62	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0194	中期末	△	×	△	△	○	×	女性	熟年	
63	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0201	中期末	△	△	○	○	△	○	男性	熟年	
64	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0202	中期後半	△	×	△	○	△	○	男性	熟年	
65	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0203	中期後半	△	×	×	○	▲		不明	幼児	
66	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0207	中期後半	△	△	○	△	△	○	女性	老年	
67	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0208	中期末	△	△	○	○	△	○	男性	熟年	
68	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0220	中期後半	△	△	×	△	○	○	男性	不明	人骨赤色顔料付着、 下襲黒塗り
69	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0228	中期後半	×	×	×	×	×	○	男性	不明	石剣切先、左大腿骨 に銅剣切先
70	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0237	後期初頭	×	×	×	○	△	△	不明	壮年	
71	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0245	中期前半	▲	×	×	×	×	▲	不明	不明	
72	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0246	中期末	◎	◎	○	○	○	◎	男性	熟～老年	
73	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0248	中期後半	○	×	×	×	×	×	女性	熟～老年	
74	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0253	中期後半	○	△	○	○	○	○	男性	熟年	
75	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0254	中期後半	×	×	×	×	×	△	女性	不明	
76	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0255	中期末～後期初頭	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
77	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0258	後期初頭	△	○	×	△	△	△	男性	熟年	
78	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0259	後期初頭	×	×	×	×	▲		不明	不明	
79	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0260	後期初頭	△	×	△	○	△	▲	不明	不明	
80	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0263	中期後半	○	△	△	×	△	○	女性	熟年	
81	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0267	後期前半	▲	×	×	▲	×	△	不明	不明	
82	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0272	中期前半	△	△	○	△	△	○	女性	熟年	
83	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0275	後期初頭	△	×	×	△	△	△	女性	熟～老年	
84	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SC0276	後期	△	×	×	△	×	△	男性？	不明	石棺墓
85	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0277	中期後半		◎		◎		◎	◎	男性	熟年
86	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0281	中期前半	○	×	△	▲	×	○	女性	熟年	
87	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0282	中期後半	△	×	×	×	×	▲	不明	不明	
88	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0284	中期末	×	×	×	×	▲		不明	不明	
89	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0286	中期末	△	×	△	×	×	△	不明	不明	
90	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0289	中期末～後期初頭	▲	×	×	○	×	×	不明	幼児	貝輪１、幼児中期
91	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0290	中期後半	△	△	○	○	◎	◎	男性	熟年	顔面 朱
92	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0291	中期後半	▲	×	×	×	×	▲	不明	不明	
93	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0292	中期後半	△	△	△	○	△	△	女性	熟年	
94	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0293	中期後半	△	△	○	○	○	○	女性	熟年	
95	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0294	中期後半	◎	◎	○	○	○	◎	女性	壮年	
96	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0295	中期後半	▲	×	×	○	×	×	不明	不明	
97	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0296	中期後半	○	○	○	◎	◎	◎	男性	壮年	
98	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0297	中期前半	△	×	×	○	△	△	不明	小児Ⅱ	貝輪小片（3 点以上）
99	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0299	中期前半	◎	◎	○	◎	○	◎	男性	壮年	
100	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0300	後期初頭	△	×	×	×	▲		不明	不明	
101	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0307	中期後半	×	×	×	△	×	×	不明	不明	
102	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0308	中期前半	◎	△	◎	○	◎	◎	男性	成人	

通し番号	地区記号	地区名称	調査区	遺構番号	時期	人骨						性別	年齢	特記事項
						遺存状態								
						脳頭蓋	顔面骨	下顎骨	歯	上肢骨	下肢骨			
103	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0310	中期後半	×	×	△	×	○	○	男性	熟～老年	
104	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0313	中期後半	△	△	○	○	△	○	女性	壮年	
105	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0315	中期後半	△	×	×	×	○	○	女性	熟～老年	
106	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0317	中期末～後期初頭	○	×	△	△	△	○	男性	熟年	
107	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0319	中期末～後期初頭	×	△	△	×	▲	○	女性	成人	
108	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0321	中期末～後期初頭	○	△	◎	○	○	◎	不明	幼児	
109	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0323	中期後半	△	△	×	×	▲	○	女性	壮年？	
110	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0325	後期前半	×	×	△	○	○	○	不明	小児Ⅰ	小児Ⅰ期初期
111	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0326	後期	▲	×	△	×	△	△	男性	成人	
112	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0327	後期初頭	▲	×	△	△	○	△	女性	老年	
113	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0328	中期前半	△	×	×	○	▲	×	不明	幼児	
114	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0329	中期後半	×	×	×	×	◎	◎	男性	壮年	上部頸椎から頭蓋骨の無い人骨
115	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0330	中期後半	◎	△	○	△	△	◎	女性	壮年	
116	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SC0337	中期後半	△	×	△	×	△	△	男性	成人	石棺墓
117	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SP0338	中期後半以降	△	△	△	×	×	○	男性	熟～老年	土坑墓
118	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0339	中期後半	△	×	×	×	▲	▲	不明	不明	
119	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0340	中期後半	△	×	×	△	×	△	不明	不明	
120	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0345	中期前半	△	△	○	○	×	○	不明	幼児	幼児期後半
121	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SP0347	弥生	○	×	×	▲	×	×	男性	熟年	土坑墓
122	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0354	中期後半	◎	◎	◎	◎	○	○	女性	壮年	
123	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0364	後期初頭	△	×	×	▲	△	▲	男性	成人	
124	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0365	後期前半	○	▲	×	○	○	◎	不明	幼児	
125	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0366	後期初頭	×	×	×	×	▲		不明	不明	
126	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0367	中期末～後期初頭	△	×	×	○	○	○	男性	壮～熟年	毛髪遺存
127	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0370	中期末	▲	△	△	○	○	△	男性	壮～熟年	
128	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0373	中期前半	△	△	○	○	△	△	女性	熟年	
129	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0375	中期後半	▲	×	△	△	△	○	男性	壮～熟年	
130	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0376	中期前半	▲	×	△	×	×	△	女性	熟～老年	
131	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0377	中期後半	△	×	△	×	○	△	女性	成人	
132	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0379	中期末	▲	×	×	△	○	○	男性	壮～熟年	
133	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SP0380	弥生	×	×	×	×	▲		不明	不明	土坑墓
134	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0382	後期初頭	▲	×	×	×	△	△	男性	不明	
135	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0383	中期後半	▲	×	×	×	▲	△	不明	不明	
136	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0384	後期初頭	▲	×	×	○	△	△	不明	不明	
137	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0387	後期前半	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
138	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0389	中期後半	△	×	×	×	×	×	不明	不明	
139	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0391	中期前半	△	×	△	△	▲	▲	不明	不明	
140	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0393	中期後半	△	▲	×	△	▲	○	女性？	熟年	
141	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0394	後期前半	▲	×	×	×	×	△	男性	成人	
142	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0396	中期末	▲	×	▲	○	△	△	不明	幼児	
143	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0397	中期末～後期初頭	△	×	△	△	○	△	女性	熟年	
144	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0398	中期末	△	×	△	○	▲		不明	幼児	
145	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0399	中期末～後期初頭	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
146	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0401	中期後半	▲	×	△	△	△	△	男性	壮年	
147	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0402	中期末～後期初頭	▲	×	△	△	▲	▲	不明	不明	
148	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0409	中期後半	○	△	○	○	○	○	男性	熟年	
149	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0410	中期後半	×	×	×	×	▲		不明	不明	
150	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0411	中期後半	▲	×	×	○	▲		不明	不明	
151	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0414	中期後半	○	△	○	○	○	○	女性	熟年	
152	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0415	中期後半	△	×	×	△	△	×	不明	不明	
153	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0421	中期末	△	×	△	×	△	○	男性	熟年	
154	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0428	中期後半	×	×	×	×	×	△	不明	不明	
155	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0434	中期後半	△	×	△	○	×	○	女性	壮～熟年	
156	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0436	中期後半	△	×	△	△	○	○	女性	熟年	頭骨、病変
157	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0437	中期末	◎	○	○	○	○	○	男性	熟年	
158	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0438	中期前半	△	×	△	○	△	△	不明	幼児	幼児中期
159	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0444	中期後半	△	×	×	×	○	△	女性	成人	
160	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0451	中期後半	×	×	×	×	×	△	不明	不明	
161	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0452	中期後半	△	×	○	○	◎	◎	男性	壮～熟年	
162	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0456	中期前半	×	×	×	×	×	△	女性	成人	
163	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0466	中期後半	◎	△	×	▲	△	○	女性	熟～老年	
164	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0473	中期後半	▲	×	▲	△	▲	▲	不明	幼児	
165	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0475	中期後半	▲	×	△	▲	×	×	不明	幼児	
166	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0476	中期後半	×	×	×	×	×	△	不明	不明	
167	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0477	中期末	○	△	△	△	○	△	男性	熟年	
168	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0480	中期末	×	×	×	▲	△	△	不明	不明	
169	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0492	中期後半	×	×	×	×	▲		不明	不明	

通し番号	地区記号	地区名称	調査区	遺構番号	時期	人骨								特記事項
						遺存状態						性別	年齢	
						脳頭蓋	顔面骨	下顎骨	歯	上肢骨	下肢骨			
170	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0493	中期	▲	×	×	○	×	×	不明	幼児	
171	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0494	中期前半	◎		◎		△	△	女性	熟～老年	
172	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0495	中期前半	○	△	◎	○	○	○	不明	小児Ⅰ	小児Ⅰ期中期、貝輪9
173	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0497	後期初頭	○	×	○	△	△	△	女性	熟年	
174	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0514	中期末	△	×	△	▲	▲	▲	女性	熟年	
175	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0516	中期末	△	△	×	×	△	○	男性	熟年	絹片
176	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0519	中期後半	△	△	○	○	△	○	男性	熟年	
177	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0520	中期前半	◎	◎	○	◎	◎	◎	男性	熟年	
178	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0817	中期末	▲	×	×	▲	△	○	女性	熟年	
179	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0818	後期前半	△	▲	▲	○	△	○	男性	熟年	
180	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0822	中期前半	△	△	×	○	○	○	女性	壮年	
181	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0823	中期前半	△	△	×	△	×	△	不明	幼児	
182	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0835	後期前半	△	△	◎	○	○	○	女性	壮年	
183	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0839	後期	○	△	○	△	△	◎	男性	熟～老年	
184	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0845	中期末～後期初頭	△	△	△	○	○	○	女性	壮年	
185	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SC0854	弥生	▲	▲	×	○	×	△	女性	壮年	石棺墓
186	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SC0856	弥生	△	×	×	×	×	×	不明	成人	石棺墓
187	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SC0857	中期後半	×	×	×	×	×	×	不明	不明	石棺墓
188	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SP0858		△	×	×	△	×	×	不明	不明	土坑墓
189	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0875	中期後半	×	×	△	○	△	△	女性	壮年	
190	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0878	中期末	◎	○	○	○	○	◎	男性	壮年	
191	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0885	中期後半	▲	×	×	○	▲	○	女性	壮年	
192	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0886	中期前半	×	×	△	○	×	△	男性	熟年	
193	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0888	後期初頭	▲	×	×	○	△	○	不明	小児Ⅰ	小児Ⅰ期中期
194	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0924	後期初頭	△	×	▲	×	×	▲	不明	不明	
195	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0932	中期末	▲	×	×	▲	▲	△	不明	不明	
196	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0939	中期末	▲	×	△	○	▲	△	不明	不明	
197	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0940	中期末	◎	◎	◎	◎	○	○	男性	壮年	
198	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0941	中期前半	×	×	×	×	×	△	女性	不明	
199	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0942	後期初頭	▲	×	×	×	△	○	女性	不明	
200	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0949	中期末～後期初頭	◎	△	○	○	○	○	女性	壮年	
201	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SC0994	弥生	△	×	×	△	×	×	不明	幼児	石棺墓
202	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ0995	中期後半	◎		◎		◎	◎	男性	壮～熟年	
203	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1205	中期後半	×	×	×	×	×	△	不明	不明	
204	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1211	中期前半	△	×	×	△	×	×	不明	不明	
205	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1234	中期前半	×	×	×	×	▲		不明	不明	
206	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1243	中期前半	◎	○	○	○	△	○	男性	熟年	
207	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1251	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	
208	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1255	中期前半	○	△	△	○	○	○	女性	熟年	
209	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1259	中期前半	○	△	○	○	×	○	男性	熟年	
210	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1264	中期前半	△	×	×	○	×	×	不明	幼児	
211	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1271	中期後半	○	△	×	×	×	○	女性	熟年	
212	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1274	中期前半	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
213	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1276	中期前半	△	△	×	○	×	○	女性	壮年	
214	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1277	中期前半	△	△	×	×	×	×	女性	熟～老年	
215	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1289	中期前半	△	×	×	△	×	○	女性	熟年	
216	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1292	中期末	△	×	×	○	×	△	不明	小児	
217	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1294	中期後半	△	×	×	×	△	○	女性	不明	
218	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1296	中期前半	▲	×	×	▲	▲	▲	不明	不明	
219	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1298	中期前半	▲	×	×	○	×	×	不明	小児Ⅰ	小児Ⅰ期初期
220	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1303	中期後半	○	×	×	▲	△	◎	男性	熟年	
221	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1304	中期後半	△	×	△	×	△	△	女性？	不明	
222	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1308	中期後半	◎		◎	○	◎	○	男性	熟年	
223	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1309	中期後半	×	×	×	×	▲		不明	不明	
224	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1312	中期後半	○	○	○	○	○	○	男性	熟年	
225	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1313	中期後半	△	×	○	○	○	○	男性	熟年	
226	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1316	中期末	▲	×	×	△	×	▲	不明	不明	
227	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1318	中期前半	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
228	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1339	中期後半	○	○	○	○	◎	◎	女性	熟年	
229	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SC1344	後期	○	○	▲	○	○	△	男性	壮年	石棺墓、朱
230	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1354	中期後半	◎	○	○	○	○	○	男性	熟年	朱
231	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1355	中期後半	△	◎	◎	◎	◎	◎	女性	熟年	
232	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1356	中期末～後期初頭	△	×	×	×	▲		不明	不明	
233	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1357	中期後半	○	○	◎	◎	◎	◎	男性	壮年	
234	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1359	中期後半	◎		◎		○	◎	男性	壮年	骨折
235	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1362	中期後半	△	×	×	△	▲	▲	不明	不明	
236	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1370	中期後半	△	△	○	○	▲	○	不明	幼児	

通し番号	地区記号	地区名称	調査区	遺構番号	時期	人骨								特記事項
						遺存状態						性別	年齢	
						脳頭蓋	顔面骨	下顎骨	歯	上肢骨	下肢骨			
237	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1374	中期末	▲	×	△	▲	▲	△	不明	不明	
238	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1378	中期末～後期初頭	▲	×	×	○	△	×	不明	幼児	貝輪小片
239	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1383	後期前半	×	△	△	○	△	△	女性	壮年	
240	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1385	中期後半	○	○	○	◎	○	◎	男性	熟年	
241	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1387	後期初頭	▲	×	×	×	△	○	男性	成人	
242	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1388	中期後半	▲	×	×	○	×	×	不明	幼児	
243	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1399	中期前半	◎		◎		◎	◎	女性	壮年	
244	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1401	中期後半	×	×	×	×	×	○	男性	成人	
245	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1404	中期後半	△	×	×	×	×	△	男性	不明	
246	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1413	中期前半	△	×	○	○	△	○	女性	熟年	
247	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1421	中期前半	○	◎	○	○	○	○	男性	熟年	
248	SYT	志波屋四の坪地区	工業団地	SJ1425	中期後半	×	×	×	×	×	△	不明	不明	
249	SSO	志波屋三の坪 (乙)	工業団地	SJ0058	中期初頭	×	×	×	×	×	△	女性	不明	
250	SSO	志波屋三の坪 (乙)	工業団地	SJ0064	中期初頭	○	×	×	×	×	▲	女性	不明	
251	SST	志波屋三の坪 (甲)	工業団地	P0031	時期不明	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	小穴
252	SST	志波屋三の坪 (甲)	工業団地	SD0263	時期不明	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	溝
253	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0061	中期末	▲	×	×	▲	▲	▲	不明	不明	
254	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0064	中期末～後期初頭	▲	×	×	×	△	▲	不明	不明	
255	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0074	中期後半	△	×	×	○	▲	△	女性	壮年	
256	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0080	中期末	△	△	×	○	△	△	女性	熟年	
257	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0093	中期前半	×	×	×	○	×	▲	不明	不明	
258	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0104	中期後半	△	×	×	▲	▲	×	不明	不明	
259	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0107	中期後半	△	△	△	○	○	○	男性？	壮～熟年	
260	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0110	中期後半	△	×	×	△	▲	△	不明	不明	
261	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0125	中期後半	×	×	×	△	▲		不明	不明	
262	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0127	中期後半	×	×	×	×	×	×	不明	不明	
263	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0132	中期末～後期初頭	▲	×	×	△	▲	△	不明	不明	
264	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0134	後期初頭	×	×	×	▲	×	▲	不明	不明	
265	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0135	後期初頭	▲	×	▲	×	▲	▲	不明	不明	貝輪１・絹布、麻布片・朱
266	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0138	後期初頭	×	×	×	×	△	▲	不明	不明	
267	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0140	中期末	▲	×	×	○	×	×	不明	小児Ⅰ	小児Ⅰ期初期
268	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0141	中期末	▲	×	×	○	▲		不明	不明	
269	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0142	中期末	▲	×	×	○	×	×	不明	幼児	
270	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0143	後期初頭	△	▲	△	○	×	×	不明	幼児	
271	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0148	中期前半	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
272	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0154	後期初頭	×	×	×	×	○	○	男性	壮年	毛髪と頭蓋骨は実測後大雨で遺失
273	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SP0172	後期	▲	×	△	○	▲	△	不明	不明	土坑墓
274	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0180	中期前半	×	×	×	▲	▲		不明	不明	
275	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0182	中期末	△	△	△	○	○	○	男性？	熟年	
276	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SP0191	中期後半以降	×	×	×	▲	▲		不明	不明	土坑墓
277	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0193	後期前半	△	△	△	○	○	○	男性	熟年	
278	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0221	中期末	△	×	×	○	△	△	女性	熟年	
279	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0226	中期末	×	×	×	△	×	▲	不明	不明	
280	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0229	後期前半	×	×	×	△	×	○	不明	小児	
281	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0231	中期末	×	×	×	○	△	○	女性	壮年	
282	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0233	後期初頭	▲	×	×	○	×	○	不明	小児	
283	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0235	中期末～後期初頭？	△	×	×	△	△	○	男性	熟年	
284	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0236	中期末	△	△	△	○	△	○	男性	熟年	
285	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0237	後期初頭	△	×	×	△	○	○	女性	熟年	
286	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0247	中期末	▲	×	×	△	×	▲	不明	不明	赤色顔料
287	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0249	中期末	▲	×	×	○	×	▲	不明	不明	
288	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0252	中期末	▲	×	×	▲	▲	▲	不明	不明	
289	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SP0254	後期	▲	×	×	×	×	×	不明	不明	土坑墓
290	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0256	中期末	×	×	×	○	▲	×	不明	小児	
291	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0257	後期初頭	×	×	×	○	▲		不明	不明	
292	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0261	後期初頭	×	×	×	×	▲	▲	不明	不明	
293	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0264	中期末	×	×	×	×	○	▲	女性	不明	
294	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SP0266	後期	△	×	×	×	×	×	不明	不明	土坑墓
295	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0268	後期初頭	×	×	×	×	▲		不明	不明	
296	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0272	中期末	△	×	×	○	△	△	女性？	不明	
297	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0280	中期末～後期初頭？	△	△	×	△	△	△	男性	壮年	
298	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0283	中期末～後期初頭	▲	×	×	△	▲	△	不明	不明	
299	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0295	中期末	▲	×	×	▲	▲	▲	不明	不明	
300	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0307	中期末	○	×	△	○	△	△	女性	熟年	板状鉄斧 1
301	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0309	中期末	△	×	×	×	○	△	男性	不明	

通し番号	地区記号	地区名称	調査区	遺構番号	時期	人骨								特記事項
						遺存状態						性別	年齢	
						脳頭蓋	顔面骨	下顎骨	歯	上肢骨	下肢骨			
302	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0312	中期末	▲	▲	△	○	△	△	男性	壮年	人骨中から鏃10点、下腹胴部穿孔
303	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0314	中期末	▲	×	×	○	▲		不明	不明	貝輪１
304	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SP0319	中期後半～末	×	×	×	×	▲		不明	不明	土坑墓
305	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0330	中期末	×	×	▲	○	▲	△	不明	不明	
306	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0336	後期初頭	◎	△	◎	◎	◎	◎	男性	熟年	
307	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0348	中期末	△	×	×	△	△	△	女性	熟年	
308	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0353	中期末	×	×	△	×	×	×	不明	不明	
309	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0355	中期末	△	△	×	△	×	△	不明	不明	
310	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0356	中期末	△	×	×	×	▲	△	不明	不明	人骨に赤色顔料付着
311	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0363	中期後半	▲	×	×	×	▲		不明	不明	
312	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0367	中期末	▲	×	×	○	▲	▲	不明	不明	
313	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0370	中期末	×	×	×	×	×	△	不明	不明	
314	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0372	中期末～後期初頭？	×	×	△	○	△	△	男性	熟年	
315	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0373	中期後半	△	×	×	△	△	△	男性	熟年	
316	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SP0374	後期前半以降	×	△	×	○	△	○	不明	小児	土坑墓
317	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SP0381		×	×	×	○	▲		不明	不明	土坑墓
318	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0384	中期後半	▲	×	×	△	▲	▲	不明	不明	貝輪８・絹片・赤色顔料
319	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0386	中期末	▲	×	×	×	×	▲	不明	不明	
320	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0387	後期初頭	▲	×	×	×	▲		不明	不明	
321	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0389	後期初頭	△	△	×	△	○	○	男性	熟～老年	
322	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SP0412	中期末～後期前半？	×	×	×	×	▲	×	不明	不明	土坑墓
323	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0417	中期後半	▲	×	×	▲	▲		不明	不明	
324	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0425	中期後半	△	×	×	×	×	×	不明	不明	
325	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SJ0427	中期末～後期初頭	▲	×	×	×	×	△	不明	不明	
326	YGK-Ⅱ	吉野ヶ里丘陵Ⅱ区	工業団地	SP0448	後期前半？	▲	×	×	×	△	○	男性	不明	土坑墓
327	YGK-Ⅲ	吉野ヶ里丘陵Ⅲ区	工業団地	SJ0665	中期後半	△	×	○	○	△	○	男性	壮年	鉄鏃１・石鏃１
328	YGK-Ⅲ	吉野ヶ里丘陵Ⅲ区	工業団地	SJ0722	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	
329	YGK-Ⅲ	吉野ヶ里丘陵Ⅲ区	工業団地	SJ0793	中期初頭	×	×	×	×	▲	▲	不明	不明	
330	YGK-Ⅲ	吉野ヶ里丘陵Ⅲ区	工業団地	SJ0794	中期初頭	×	×	×	×	×	○	男性	不明	
331	YGK-Ⅲ	吉野ヶ里丘陵Ⅲ区	工業団地	SJ0807	中期初頭	×	×	×	×	×	×	不明	不明	
332	YGK-Ⅲ	吉野ヶ里丘陵Ⅲ区	工業団地	SJ0809	中期前半	×	×	×	○	×	▲	不明	成年	未成人
333	YGK-Ⅲ	吉野ヶ里丘陵Ⅲ区	工業団地	SJ0831	中期後半	×	×	×	×	○	○	女性	壮年	
334	YGK-Ⅲ	吉野ヶ里丘陵Ⅲ区	工業団地	SJ0832	中期末	×	×	×	○	×	×	不明	不明	
335	YGK-Ⅲ	吉野ヶ里丘陵Ⅲ区	工業団地	SJ0894	中期前半	×	×	×	△	×	▲	不明	不明	
336	YGK-Ⅲ	吉野ヶ里丘陵Ⅲ区	工業団地	SJ0906	中期前半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	
337	YGK-Ⅳ	吉野ヶ里丘陵Ⅳ区	工業団地	SJ0513	中期後半	×	×	×	×	×	○	男性	不明	
338	YGK-Ⅳ	吉野ヶ里丘陵Ⅳ区	工業団地	SJ0519	中期後半	▲	×	×	×	△	△	男性	不明	
339	YGK-Ⅳ	吉野ヶ里丘陵Ⅳ区	工業団地	SJ0520	中期後半	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
340	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	ST1001 北墳丘墓	SJ1002	中期後半	▲	×	×	—	▲	▲	不明	不明	有柄銅剣・ガラス管玉・朱・大臼歯歯冠部の上半（細片）
341	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区		SJ1006	中期前半	×	×	×	▲	×	×	不明	不明	細形銅剣・朱
342	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区		SJ1007	中期後半	▲	×	×	×	▲	▲	不明	不明	細形銅剣・把頭飾
343	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区		SJ1050	中期後半	×	×	×	×	▲	▲	不明	不明	
344	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区		SJ1051	中期後半	▲	×	×	×	▲		不明	不明	
345	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区		SJ1052	中期後半	×	×	×	×	▲		不明	不明	
346	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区		SJ1056	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	小細片少量・細形銅剣
347	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区		SJ1057	中期後半	△	×	△	△	×	×	不明	不明	中細形銅剣・把頭飾
348	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	工業団地	SJ1019	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	
349	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	182 区	SJ1418	中期後半	△	×	×	×	△	△	女性	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
350	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	182 区	SJ1425	中期前半	△	×	▲	△	△	△	男性	不明	朱多い
351	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	182 区	SJ1447	中期前半	▲	×	×	○	▲		不明	小児Ⅰ	小児Ⅰ期初期
352	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	182 区	SJ1509	中期前半	△	×	×	○	▲		不明	幼児	
353	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	182 区	SJ1511	中期初頭	×	×	×	×	▲	△	不明	不明	
354	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	182 区	SJ1521	中期初頭	△	×	△	○	×	×	不明	幼児	
355	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	182 区	SJ1546	中期初頭	▲	×	×	○	▲	△	女性	熟年	
356	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	182 区	SJ1551	中期前半	▲	×	×	△	▲	▲	不明	熟年	
357	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	184 区	SJ1716	中期末～後期初頭	△	×	×	▲	▲	▲	不明	不明	打製石鏃１
358	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	184 区	SJ1768	中期後半	×	×	△	△	×	△	女性	熟年	縫い目のある絹布片
359	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	184 区	SJ1777	中期初頭	▲	×	△	○	▲	▲	不明	壮～熟年	絹布片

通し番号	地区記号	地区名称	調査区	遺構番号	時期	人骨						性別	年齢	特記事項
						遺存状態								
						脳頭蓋	顔面骨	下顎骨	歯	上肢骨	下肢骨			
360	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	206区	SJ2062	中期末？	－	－	－	－	－	－	不明	不明	吉野ヶ里事務所で骨細片保管
361	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	206区	SP2063	弥生	×	×	×	×	▲		不明	不明	土坑墓
362	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	210区	SJ2072	中期後半	△	×	×	×	×	△	男性	不明	
363	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区	210区	SJ2073	中期末	◎	×	◎	○	▲	▲	女性	壮年	
364	YGK-Ⅴ	吉野ヶ里丘陵Ⅴ区		番号不明		△	△	△	▲	△	▲	男性	不明	
365	YGK-Ⅵ	吉野ヶ里丘陵Ⅵ区	178区	SJ1204	後期前半	▲	×	×	○	▲	△	男性	成年	棺外から鉄剣1
366	YGK-Ⅵ	吉野ヶ里丘陵Ⅵ区	178区	SJ1222	後期前半	▲	×	×	○	△	▲	不明	不明	
367	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SP2544	弥生	△	×	×	×	×	△	男性	成人	
368	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2545	後期前半	△	×	△	△	△	△	女性	熟年	布片
369	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2560	後期前半	△	×	×	×	×	○	男性	成人	
370	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2647	中期後半	▲	×	×	×	△	◎	男性	不明	
371	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2658	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
372	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2681	中期後半？	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
373	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2708	中期後半？	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
374	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2709	中期後半？	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
375	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2719	中期前半	－	－	－	▲	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
376	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2721	後期前半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	朱、横武収蔵庫で骨細片保
377	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2744	後期前半	▲	▲	△	△	○	○	女性	熟年	
378	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2759	後期前半	△	×	△	○	○	△	女性	壮年	人骨に布片付着
379	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2760	中期後半～末	○	○	◎	○	○	○	女性	熟年	碧玉製管玉2
380	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2774	中期末	△	△	◎	○	○	△	女性	壮年	
381	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2775	中期末	△	△	△	△	○	△	女性	熟年	前漢鏡・貝輪36・朱
382	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2811	弥生	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
383	YGK-Ⅸ	吉野ヶ里丘陵Ⅸ区	350区	SJ2870	弥生	×	×	×	×	▲	△	男性	不明	
384	YNG-Ⅰ	吉野ヶ里Ⅰ区	工業団地	SJ0032	中期初頭	△	×	×	×	▲	▲	不明	不明	
385	YNG-Ⅰ	吉野ヶ里Ⅰ区	工業団地	SJ0074	前期末～中期初頭	△	×	×	▲	▲	△	不明	不明	
386	YNG-Ⅰ	吉野ヶ里Ⅰ区	工業団地	SC0121	弥生	▲	×	×	×	×	△	不明	不明	
387	YNG-Ⅰ	吉野ヶ里Ⅰ区	工業団地	SJ0153	中期後半	▲	×	▲	△	×	×	不明	不明	
388	YNG-Ⅲ	吉野ヶ里Ⅲ区	工業団地	SJ0561	中期前半	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
389	YNG-Ⅴ	吉野ヶ里Ⅴ区	工業団地	SJ0836	中期末～後期前半	×	×	×	×	×	▲	不明	不明	
390	YNG-Ⅴ	吉野ヶ里Ⅴ区	工業団地	SJ0840	中期後半	×	×	×	×	▲	▲	不明	不明	
391	YNG-Ⅴ	吉野ヶ里Ⅴ区	工業団地	SJ1053	中期前半～後半	×	×	×	×	×	△	女性	不明	
392	SGT-Ⅱ	志波屋五の坪Ⅱ区	397区	SJ0037	中期末	△	×	△	▲	○	○	男性	熟年	
393	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1502	中期前半	△	△	○	○	△	△	女性	壮～熟年	
394	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1503	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
395	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1507	中期前半	×	×	×	×	×	○	女性	成人	
396	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1508	中期前半	×	×	×	×	▲	○	男性	成人	
397	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1511	中期後半	△	×	△	▲	×	△	男性	熟年	
398	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1515	中期前半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
399	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1521	中期前半	▲	▲	△	○	△	▲	男性	壮～熟年	
400	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1522	中期前半	△	△	○	○	×	○	女性	熟年	
401	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1523	中期後半	△	×	△	△	▲	○	女性	壮年	
402	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1534	中期前半	○	△	○	○	○	○	男性	熟年	
403	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1538	中期後半	×	×	×	×	×	○	男性	成人	
404	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1539	中期後半	○	△	△	△	△	△	男性	熟年	
405	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1546	中期前半	△	△	×	△	▲	○	不明	幼児	
406	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1549	中期前半	×	×	×	×	×	△？	不明	不明	
407	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	372区	SJ1557	中期前半	△	△	△	○	△	○	不明	小児	小児Ⅰ期初期
408	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	369区	SJ1559	中期前半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
409	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	372区	SJ1562	中期後半	◎	◎	◎	○	◎	◎	男性	熟年	不明鉄鎌1
410	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	372区	SJ1585	中期後半	△	△	×	▲	▲	○	女性	熟年	
411	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	372区	SJ1586	中期	△	△	△	○	△	×	女性	壮～熟年	
412	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	368区	SJ1621	中期前半	△	×	◎	○	○	○	男性	壮～熟年	

通し番号	地区記号	地区名称	調査区	遺構番号	時期	人骨								特記事項
						遺存状態						性別	年齢	
						脳頭蓋	顔面骨	下顎骨	歯	上肢骨	下肢骨			
413	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1665	中期前半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
414	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1671	中期前半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
415	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1678	中期前半	△	×	×	○	×	○	女性	壮年	
416	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1679	中期前半	○	×	▲	○	○	○	女性	熟年	
417	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1689	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
418	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1705	中期前半	○	△	×	△	×	×	女性	熟年	
419	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1723	中期後半	△	×	×	△	×	×	不明	幼児	幼児期中期・貝輪８
420	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1729	中期前半	×	×	×	×	×	○	女性？	成人	
421	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1745	中期前半	○	△	◎	△	○	○	男性	熟年	
422	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1746	中期前半	△	△	○	○	◎	◎	男性	熟年	
423	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	377区	SJ1756	中期前半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
424	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	380区	SJ1765	中期前半	▲	×	×	▲	△	△	不明	不明	
425	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	380区	SJ1810	中期	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
426	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	382区	SJ1815	中期初頭	－	－	－	－	－	－	不明	不明	甕棺に指紋残存、横武収蔵庫で骨細片保管
427	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	382区	SJ1827	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
428	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	382区	SJ1845	前期末～中期初頭	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
429	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	382区	SJ1886	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
430	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	368区	SJ1904	中期前半	△	×	▲	▲	○	△	女性	成人	
431	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	381区	SJ1932	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
432	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	382区	SJ1939	前期末～中期初頭	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
433	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	382区	SJ1974	中期前半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
434	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	391区	SJ2083	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
435	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	391区	SJ2104	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
436	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	391区	SJ2119	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
437	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	391区	SJ2132	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
438	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	391区	SJ2133	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
439	SYT-Ⅱ	志波屋四の坪Ⅱ区	395区	SJ2212	中期後半	－	－	－	－	－	－	不明	不明	横武収蔵庫で骨細片保管
440	TDN-Ⅱ	田手二本黒木Ⅱ区	工業団地	SJ0141	中期前半	×	×	×	△	△	△	不明	不明	
441	TDN-Ⅲ	田手二本黒木Ⅲ区	346区	SJ0838	弥生	▲	×	×	×	△	△	男性	不明	
442		四の坪遺跡	1979年	K-1	中期	○	○	×	○	×	×	不明	小児Ⅰ	小児Ⅰ期初期
443		四の坪遺跡	1979年	K-4	中期	△	×	○	○	○	○	男性	熟年	
444		四の坪遺跡	1979年	K-5	中期	◎	◎	◎	◎	◎	◎	男性	壮年	
445		四の坪遺跡	1979年	K-6	中期	▲	×	△	△	△	△	不明	不明	
446		四の坪遺跡	1979年	K-16	中期	○	○	×	○	×	×	不明	幼児	
447		四の坪遺跡	1979年	K-18	中期	◎	◎	◎	◎	◎	◎	男性	熟年	

人骨の遺存状態

◎：非常に保存良好、○：保存良好（計測可能）、△：骨部位の特定が可能、▲：骨部位の特定が不可能（一部残存）、

－：骨部位全く不明（細片）、×：残存していない

表 2　吉野ヶ里遺跡　地区・遺構・時期別弥生時代人骨数

地区名			未成人					成人（性別）				合計	総数
	埋葬遺構	時期	幼児	小児Ⅰ期	小児Ⅱ期	成年	合計	男性	女性	不明	合計		
志波屋四の坪	甕棺墓	中期	17	6	1	0	24	72	66	65	203	227	290
		中期末～後期初頭	3	1	1	0	5	4	4	9	17	22	
		後期	3	2	1	0	6	11	6	18	35	41	
		弥生・時期不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	石棺墓	中期	0	0	0	0	0	1	0	1	2	2	7
		中期末～後期初頭	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		後期	0	0	0	0	0	2	0	0	2	2	
		弥生・時期不明	1	0	0	0	1	0	1	1	2	3	
	土坑墓	中期	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	4
		中期末～後期初頭	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		後期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		弥生・時期不明	0	0	0	0	0	1	0	2	3	3	
志波屋三の坪（乙）	甕棺墓	中期	0	0	0	0	0	0	2	0	2	2	2
志波屋三の坪（甲）	小穴・溝	弥生・時期不明	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	2
志波屋五の坪	甕棺墓	中期	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1
吉野ヶ里丘陵	甕棺墓	中期	4	2	0	1	7	13	16	51	80	87	120
		中期末～後期初頭	0	0	0	0	0	3	0	5	8	8	
		後期	2	1	0	1	4	5	4	9	18	22	
		弥生・時期不明	0	0	0	0	0	2	0	1	3	3	
	土坑墓	中期	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	11
		中期末～後期初頭	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		後期	0	1	0	0	1	1	0	4	5	6	
		弥生・時期不明	0	0	0	0	0	1	0	2	3	3	
吉野ヶ里	甕棺墓	中期	0	0	0	0	0	0	1	5	6	6	7
		中期末～後期初頭	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		後期	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	
		弥生・時期不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	石棺墓	弥生・時期不明	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
田手二本黒木	甕棺墓	中期	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2
		弥生・時期不明	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	
人骨総数			30	13	3	2	48	119	100	180	399	447	447

表 3　吉野ヶ里遺跡　遺構・時期別弥生時代人骨数

		未成人					成人（性別）				総数
埋葬遺構	時期	幼児	小児Ⅰ期	小児Ⅱ期	成年	合計	男性	女性	不明	合計	
甕棺墓	中期合計	21	8	1	1	31	86	85	122	293	324
	中期末～後期初頭合計	3	1	1	0	5	7	4	14	25	30
	後期合計	5	3	1	1	10	16	10	28	54	64
	弥生・時期不明合計	0	0	0	0	0	3	0	1	4	4
甕棺墓出土人骨数		29	12	3	2	46	112	99	165	376	422
石棺墓	中期合計	0	0	0	0	0	1	0	1	2	2
	中期末～後期初頭合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	後期合計	0	0	0	0	0	2	0	0	2	2
	弥生・時期不明合計	1	0	0	0	1	0	1	2	3	4
石棺墓出土人骨数		1	0	0	0	1	3	1	3	7	8
土坑墓	中期合計	0	0	0	0	0	1	0	2	3	3
	中期末～後期初頭合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	後期合計	0	1	0	0	1	1	0	4	5	6
	弥生・時期不明合計	0	0	0	0	0	2	0	4	6	6
土坑墓出土人骨数		0	1	0	0	1	4	0	10	14	15
小穴・溝	弥生・時期不明	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2

第２節　吉野ヶ里遺跡出土弥生時代人骨の歯冠形態

佐伯和信、弦本敏行、分部哲秋（長崎大学 大学院医歯薬学総合研究科）

佐賀平野や福岡平野の弥生時代の遺跡から出土する弥生時代人骨、いわゆる北部九州の弥生人骨の歯冠が縄文人骨よりはるかに大きいことはBraceら（1982）の報告以来、明白な事実として知られるようになってきた。吉野ヶ里遺跡は佐賀平野に位置しているのでこの遺跡から出土した弥生人骨は北部九州の弥生人の一集団と位置付けられる。したがって歯冠形態も他の北部九州地域の弥生人と同様に大きな歯を持っていることが予想される。ここでは、吉野ヶ里弥生人骨の歯冠形態の形態学的および人類学的特徴について、他の弥生人集団や縄文人等と比較する中で分析および検証していきたい。

（１）資料および方法

調査に用いた資料は、歯が残存している人骨のうち、成人で性別の推定が可能だった人骨である。表4に歯冠を計測した人骨の内訳を示すが、出土時期と遺構によって、中期甕棺人骨、中期末～後期初頭甕棺人骨、後期甕棺人骨、および石棺人骨に区分した。計測方法は、藤田（1949）の方法に従って頬舌径と近遠心径をMitutoyo製のデジタルノギスで計測を行った。個々の計測値は文末の附表１～４に示している。比較および分析には、表4のうち中期甕棺人骨の集計値で吉野ヶ里弥生人骨を代表させ、第三大臼歯を除く右側の上下14歯種28項目で分析を行った。また、単純な比較分析は男性、女性ともに行ったが、多変量解析による検討は男性のみ行った。比較資料には、近隣の鳥栖市安永田弥生人（佐伯他2001）、福岡平野から主に出土した北部九州弥生人、縄文人および関東地方の現代人（以上Matsumura1995）、山口県の土井ヶ浜弥生人（讃井1960）、縄文人の系統を引き継ぐ西北九州弥生人（Oyamada, 1995）を用いた。統計的方法はほとんど、エクセル統計（BellCurve for Excel）を用い、Penroseの形態距離については、自作のBasicプログラムによって計算した。

表４　吉野ヶ里遺跡弥生人骨歯冠形態調査資料

	男性	女性	計
中期甕棺人骨	56	47	103
中期末～後期初頭甕棺人骨	7	3	10
後期甕棺人骨	7	9	16
石棺人骨	0	1	1
合計	70	0	130

（２）分析結果

単変量解析

14歯種28項目の平均値の比較表を表５（男性）および表６（女性）に示している。まず男性の比較表をみると、吉野ヶ里弥生人の歯冠サイズの値は頬舌径では、安永田、北部九州および土井ヶ浜弥生人とほとんどの歯種で近似しており、両集団との間には有意差を認める歯は存在しない。一方、西北九州弥生人と比較すると、下顎の第２大臼歯を除いてすべて吉野ヶ里弥生人の歯が大きく、14歯種のうち６歯種で有意差を認めている。縄文人との比較では、吉野ヶ里弥生人はすべての歯で大きく、14歯種中10歯種で有意差を認めている。近遠心径も頬舌径と同様の傾向がみられ、吉野ヶ里弥生人のサイズは安永田、北部九州および土井ヶ浜弥生人とほとんどの歯種で近似し、有意差を示す歯は上顎第二大臼歯のみである。西北九州弥生人、縄文人と比較すると、すべての歯種で大きく、西北九州弥生人とは14歯種中11歯種で、縄文人とは14種中実に13種で有意差を認め差が顕著である。現代人と比較すると頬舌径、近遠心径ともに大きいサイズを示しているが、有意差を認める歯種は、西北九州弥生人や

表 5　歯冠計測値の比較（男性 , 右側 ,mm）

			吉野ヶ里弥生人			安永田弥生人[1]			北部九州弥生人[2]			土井ヶ浜弥生人[3]			西北九州弥生人[4]			縄　文　人[2]			現　代　人[2]		
			N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
頬舌径	上顎	I1	15	7.56	0.43	6	7.58	0.19	68	7.56	0.44	4	7.60	0.26	18	7.37	0.30	125	7.29 **	0.34	25	7.28 *	0.39
		I2	15	6.92	0.41	7	6.94	0.43	60	6.87	0.56	7	6.84	0.40	16	6.71	0.30	118	6.69 *	0.42	26	6.60	0.55
		C	20	8.59	0.53	10	8.67	0.49	72	8.68	0.60	2	8.40		13	8.26	0.41	71	7.96 **	0.49	30	8.52	0.58
		P1	19	9.80	0.60	12	9.73	0.44	77	9.74	0.53	12	9.65	0.60	20	9.43 *	0.52	153	9.27 **	0.49	31	9.53	0.47
		P2	15	9.76	0.74	12	9.61	0.59	72	9.52	0.53	15	9.84	0.52	20	9.13 **	0.61	184	9.00 **	0.58	31	9.32 *	0.49
		M1	15	11.84	0.48	11	12.07	0.53	76	12.06	0.65	14	12.11	0.52	19	11.82	0.66	189	11.78	0.51	31	11.80	0.46
		M2	18	11.72	0.69	13	11.86	0.77	61	11.84	0.62	18	11.39	0.63	14	11.49	0.80	175	11.45	0.62	31	11.82	0.58
	下顎	I1	20	6.03	0.34	8	5.99	0.15	59	6.02	0.38	2	5.95		11	5.88	0.19	79	5.93	0.36	26	5.82 *	0.35
		I2	22	6.57	0.40	10	6.50	0.33	79	6.47	0.40	5	6.25	0.20	18	6.22 **	0.22	108	6.20 **	0.37	28	6.30 *	0.44
		C	33	7.99	0.58	11	7.95	0.37	86	8.13	0.58	8	7.84	0.17	25	7.63 **	0.38	115	7.44 **	0.51	30	8.07	0.42
		P1	32	8.14	0.49	11	8.04	0.32	83	8.35	0.57	25	8.08	0.50	28	7.64 **	0.49	173	7.79 **	0.48	31	8.21	0.49
		P2	32	8.58	0.44	13	8.64	0.40	86	8.76	0.55	23	8.47	0.53	23	8.24 **	0.42	193	8.33 **	0.48	31	8.49	0.43
		M1	26	11.40	0.60	11	11.31	0.57	79	11.33	0.50	11	11.18	0.32	15	11.39	0.51	218	11.23	0.43	31	11.00 **	0.50
		M2	29	10.73	0.59	11	10.64	0.53	70	10.73	0.61	19	10.57	0.65	17	10.74	0.46	207	10.47 *	0.51	31	10.45 *	0.49
近遠心径	上顎	I1	15	9.03	0.45	6	8.87	0.72	57	8.81	0.51	4	8.88	0.24	18	8.21 **	0.36	108	8.51 **	0.40	25	8.59 **	0.52
		I2	14	7.30	0.64	7	7.54	0.46	50	7.44	0.56	7	7.21	0.45	16	6.93	0.39	106	7.10	0.47	26	7.03	0.68
		C	18	8.19	0.45	10	8.04	0.26	65	8.17	0.43	2	8.35	0.78	13	7.59 **	0.24	68	7.55 **	0.42	30	7.94	0.41
		P1	16	7.58	0.40	12	7.48	0.40	77	7.59	0.41	12	7.70	0.22	20	6.89 **	0.39	153	6.90 **	0.38	31	7.30 *	0.33
		P2	16	7.21	0.44	12	7.23	0.50	67	7.10	0.38	15	7.13	0.32	18	6.57 **	0.46	183	6.46 **	0.40	31	6.92 *	0.37
		M1	15	10.96	0.60	11	10.86	0.50	68	10.68	0.53	14	11.01	0.46	18	10.55 *	0.51	190	10.28 **	0.47	31	10.59 *	0.47
		M2	18	10.44	0.78	13	9.80 **	0.51	60	9.86 **	0.60	16	10.00	0.73	15	9.63 **	0.60	172	9.12 **	0.60	31	9.62 **	0.55
	下顎	I1	18	5.55	0.48	8	5.39	0.30	54	5.44	0.37	2	5.90		11	5.03 *	0.40	61	5.27 *	0.36	26	5.47	0.25
		I2	20	6.20	0.52	10	6.14	0.17	71	6.19	0.38	5	6.16	0.49	18	5.39 **	0.50	91	5.72 **	0.37	28	6.13	0.43
		C	29	7.14	0.44	11	7.09	0.29	85	7.24	0.43	8	6.99	0.26	25	6.65 **	0.33	112	6.73 **	0.45	30	7.06	0.40
		P1	30	7.42	0.43	11	7.37	0.29	79	7.38	0.45	25	7.26	0.45	27	6.72 **	0.32	172	6.91 **	0.37	31	7.26	0.38
		P2	31	7.51	0.36	13	7.43	0.44	84	7.49	0.48	21	7.60	0.58	24	6.95 **	0.44	190	6.94 **	0.45	31	7.34	0.34
		M1	24	11.92	0.57	11	11.93	0.59	66	11.82	0.57	11	11.70	0.26	14	11.72	0.49	210	11.61 **	0.45	31	11.68	0.51
		M2	28	11.28	0.71	11	11.25	0.80	67	11.35	0.70	19	11.21	0.86	17	11.18	0.62	201	10.80 **	0.63	31	11.08	0.56

※, ※※：吉野ヶ里弥生人との間にそれぞれ P<0.05、P<0.01 で有意差があることを示す。

1）佐伯、他 (2001)　2）Matsumura(1995)　3）讃井 (1960)　4）Oyamada(1995)

縄文人よりもかなり少なく、歯のサイズの差は顕著というほどでもない。

これら歯の大きさの傾向を視覚的にみるために、現代人を基線とする偏差折線を描写し比較した（図 2）。なお、折線図をシンプルにして傾向を端的にみるために比較資料は、吉野ヶ里弥生人の他、北部九州弥生人、西北九州弥生人、縄文人のみとした。この図から、頬舌径、近遠心径ともに西北九州弥生人と縄文人は基線よりもほぼ下方（－側）で折線が推移しているのに対して、吉野ヶ里弥生人は北部九州弥生人とともに基線の上方（＋側）で推移している。これは西北九州弥生人および縄文人が現代人よりも小さい歯がほとんどであること、また吉野ヶ里弥生人および北部九州弥生人が現代人よりも大きい歯を備えていることを示している。つまり、吉野ヶ里弥生人は西北九州弥生人や縄文人のみならず現代人よりも歯が大きい。また、偏差折線の振れ方をみても、近遠心径の上顎 M1、M2 がやや離れて振れているものの、全体としてみると北部九州弥生人と振れ方も類似しており、歯のサイズの全体的なプロポーションも北部九州弥生人と似ていると判断される。

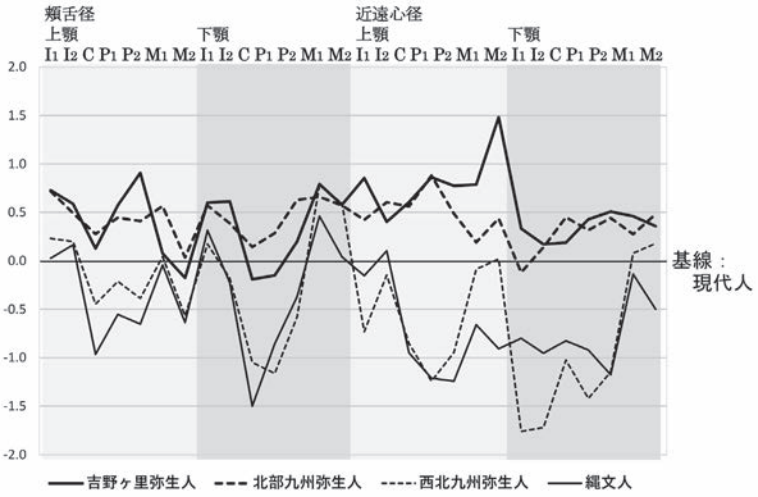


図 2　現代人を基準とする偏差折線（男性）

女性の歯冠サイズを平均値で比較すると（表 3）、吉野ヶ里弥生人は多くの歯（28 歯種中 22 歯種）

表６　歯冠計測値の比較（女性 , 右側 ,mm）

			吉野ヶ里弥生人			安永田弥生人[1]			北部九州弥生人[2]			土井ヶ浜弥生人[3]			西北九州弥生人[4]			縄　文　人[2]			現　代　人[2]		
			N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
頬舌径	上顎	I1	11	7.53	0.39	3	7.01 *	0.18	53	7.25 *	0.33	9	7.14 *	0.26	13	6.92 **	0.49	93	7.00 **	0.34	20	7.09 **	0.36
		I2	10	6.90	0.48	3	6.37	0.30	47	6.60 *	0.35	6	6.62	0.59	15	6.48	0.56	95	6.38 **	0.38	26	6.30 **	0.31
		C	13	8.35	0.58	2	8.03	0.07	48	8.10	0.49	6	8.10	0.37	6	7.85	0.49	58	7.71 **	0.51	25	7.98 *	0.30
		P1	10	9.57	0.51	2	9.21	0.16	61	9.45	0.46	15	9.24	0.45	17	8.99 *	0.56	124	8.96 **	0.55	28	9.30	0.49
		P2	10	9.47	0.60	2	9.29	0.06	61	9.19	0.57	18	8.97	0.26	23	8.76 **	0.61	165	8.75 **	0.52	26	9.03	0.58
		M1	11	11.67	0.58	3	11.58	0.40	67	11.53	0.55	18	11.32	0.62	21	11.10 **	0.54	176	11.37 *	0.48	28	11.47	0.63
		M2	15	11.40	0.76	3	11.38	0.33	51	11.32	0.50	18	11.24	0.37	20	10.91 *	0.60	151	10.97 **	0.58	27	11.49	0.76
	下顎	I1	13	5.86	0.34	4	5.64	0.39	57	5.74	0.31	0			9	5.74	0.38	59	5.68	0.34	22	5.67	0.43
		I2	17	6.38	0.39	3	6.27	0.53	71	6.23	0.32	10	6.11	0.20	15	5.90 **	0.34	78	6.10 *	0.43	24	6.12	0.37
		C	18	7.62	0.48	4	7.27	0.30	70	7.44	0.40	14	7.45	0.24	23	6.96 **	0.42	88	7.11 **	0.40	26	7.50	0.37
		P1	16	7.96	0.72	5	7.69	0.40	79	8.07	0.43	20	7.84	0.46	27	7.46 *	0.52	167	7.50 **	0.51	27	7.81	0.46
		P2	16	8.39	0.57	2	8.42	0.14	76	8.38	0.46	25	8.33	0.42	25	8.20	0.40	190	8.02 **	0.52	27	8.38	0.40
		M1	14	11.17	0.56	2	11.28	0.17	68	10.96	0.41	9	10.66	0.41	19	10.81	0.34	210	10.83 *	0.48	28	10.70 **	0.47
		M2	15	10.39	0.52	2	10.07	0.07	43	10.23	0.42	17	10.18	0.44	15	10.21	0.56	197	10.06 *	0.51	28	10.36	0.56
近遠心径	上顎	I1	12	8.67	0.57	3	8.56	0.20	51	8.49	0.39	11	8.18 *	0.41	12	8.00 *	0.63	74	8.28 **	0.42	20	8.32	0.49
		I2	10	7.55	0.83	3	7.03	0.24	47	7.17	0.49	8	6.70 *	0.57	16	6.78 **	0.57	78	6.84 **	0.51	26	6.74 **	0.44
		C	14	7.88	0.57	2	7.96	0.12	46	7.87	0.37	6	7.65	0.28	6	7.40	0.42	54	7.33 **	0.52	25	7.63	0.36
		P1	9	7.39	0.48	2	7.37	0.56	61	7.30	0.37	15	7.26	0.41	17	6.86 **	0.39	127	6.65 **	0.48	28	7.21	0.42
		P2	10	7.03	0.35	2	7.26	0.16	57	6.93	0.42	17	6.88	0.33	23	6.50 **	0.48	164	6.30 **	0.44	26	6.89	0.58
		M1	9	10.76	0.55	3	10.42	0.04	62	10.28 **	0.40	18	10.58	0.39	20	10.21 *	0.50	174	9.90 **	0.49	28	10.3 *	0.56
		M2	15	9.93	0.46	3	9.41	0.40	50	9.54 **	0.49	17	9.53 *	0.57	20	9.42	0.56	150	8.81 **	0.54	27	9.58 *	0.44
	下顎	I1	13	5.43	0.31	4	5.21	0.42	52	5.34	0.32	0			9	5.13	0.37	49	5.23	0.41	22	5.37	0.36
		I2	17	6.10	0.50	3	6.06	0.32	62	6.03	0.34	10	6.00	0.32	15	5.50 **	0.38	62	5.70 **	0.36	24	5.91	0.32
		C	16	6.97	0.37	4	6.83	0.20	62	6.74	0.26	14	6.62 **	0.20	23	6.35 **	0.32	85	6.50 **	0.37	26	6.64 **	0.33
		P1	15	7.36	0.41	5	7.01	0.24	76	7.17	0.3	19	7.12	0.44	26	6.69 **	0.41	165	6.61 **	0.47	28	6.98 **	0.43
		P2	15	7.36	0.42	2	7.20	0.06	71	7.22	0.39	24	7.27	0.41	24	6.94 **	0.47	187	6.68 **	0.52	28	7.21	0.50
		M1	13	11.80	0.45	2	11.39	0.51	56	11.36 **	0.41	9	11.27 **	0.32	18	11.19 **	0.51	209	11.15 **	0.49	28	11.41 *	0.48
		M2	14	11.02	0.54	2	10.73	0.01	43	10.74	0.48	15	10.81	0.54	15	10.85	0.59	200	10.44 **	0.58	28	11.02	0.61

*, **：吉野ヶ里弥生人との間にそれぞれ P<0.05、P<0.01 で有意差があることを示す。

1）佐伯、他 (2001)　2）Matsumura(1995)　3）讃井 (1960)　4）Oyamada(1995)

で最も大きな値を示している。特に西北九州弥生人および縄文人と比べるとすべての歯で大きく、前者とは 28 歯種中 18 歯種で、後者とは実に 26 歯種で有意差を認めている。大きな歯を持つとされる安永田弥生人、北部九州弥生人、土井ヶ浜弥生人と比較しても吉野ヶ里弥生人の歯のサイズは大きな傾向を認め、安永田弥生人とは 1 歯種で、北部九州弥生人とは 5 歯種で、土井が浜弥生人とは 6 歯種で有意に大きな値を示している。

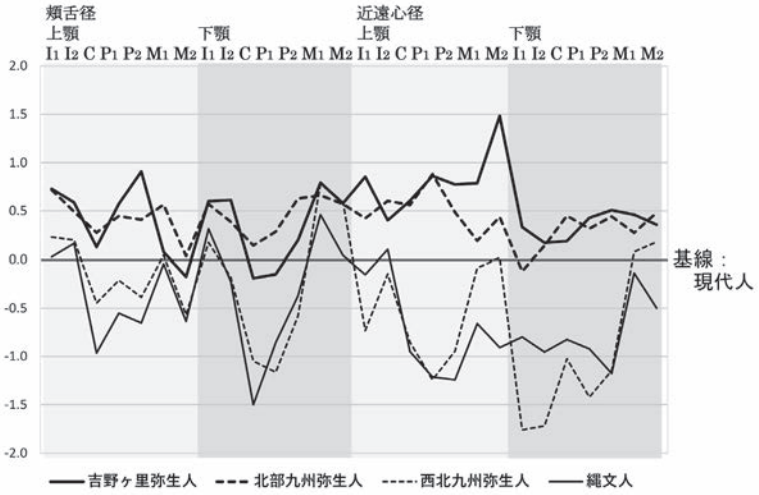


図３　現代人を基準とする偏差折線（女性）

偏差折線を描写すると（図 3)、その傾向は明確で、基線よりも上方（＋側）で推移する北部九州弥生人のさらに上方を推移しており、吉野ヶ里弥生人のサイズの大きいことがうかがえる。

多変量解析

次に、男性について 28 項目の平均値から主成分分析を行った結果が、図 4 である。主成分 1 は右に行くほど歯が全体的に大きいことを意味し、主成分 2 は上に行くほど切歯が小さく、犬歯が大きいことを意味していると判断される。このグラフから吉野ヶ里弥生人は安永田弥生人、北部九州弥生人、土井ヶ浜弥生人と近い位置にあり、縄文人、西北九州州弥生人、現代人からは離れた位置にあることがわかる。

また、図5には28項目の平均値から吉野ヶ里弥生人とのPenroseの形態距離を求めたものである。吉野ヶ里弥生人は近隣の安永田弥生人、北部九州弥生人とかなり近く、西北九州弥生人および縄文人とは大き

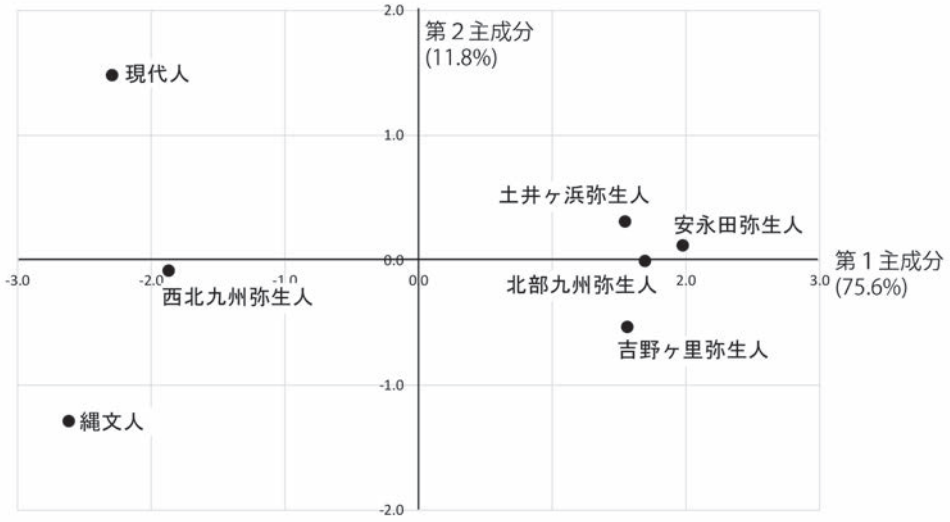


図４　歯冠計測値 28 項目に基づく主成分分析（男性）

な距離を示した。現代人とも比較的近く、土井ヶ浜弥生人は現代人よりもやや大きな距離を示した。

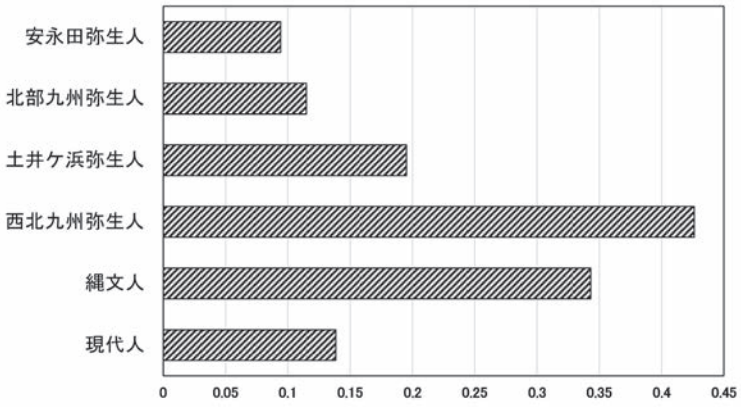


図５　吉野ヶ里弥生人からの Pebrose 形態距離

（３）考察およびまとめ

九州地域の弥生人の歯冠サイズの研究は、古くからなされている。Brace ら（1982）は、縄文人および北部九州地域の弥生人の歯冠サイズを計測し、縄文人の歯が弥生人よりも小さいことを明らかにし、二つの集団が連続していないことを推察した。また、縄文時代から現代にいたる日本人の歯の形態を詳細に分析した Matsumura（1995）は、縄文人骨と北部九州の弥生人骨は歯の大きさが異なっていることのみならず、全体的な歯のプロポーションにおいても差があることを示し、さらに北部九州の弥生人と古墳時代以降現代までの日本人の歯の形態が類似していることを明らかにした。これらのことから Matsumura は北部九州弥生人が大陸からの渡来者の遺伝的影響を受けていること、現代日本人は北部九州弥生人の形質を引き継いでいることを推察している。また、Oyamada（1995）は、縄文の系統を継承している西北九州弥生人と佐賀平野から出土した北部九州地域の弥生人を調査し、西北九州弥生人が人骨の形態と同様に歯の形態も縄文人の形態を引き継いでいることを示している。

今回分析した吉野ヶ里弥生人は佐賀平野から出土し、地域的には北部九州地域に属していることから、形質的特徴は Matsumura（1995）が報告した北部九州弥生人や近隣の安永田弥生人と類似してい

ることが予想された。分析結果はほぼ予想通りで、吉野ヶ里弥生人は一部の歯で極端に大きいサイズを示してはいるものの、歯冠サイズ全体としてみれば、北部九州弥生人、安永田弥生人と同程度に大きく、偏差折線や Penrose 形態距離も北部九州弥生人に近似しており、縄文人や西北九州弥生人とはいずれも異なっていた。このことは、吉野ヶ里弥生人が渡来系と考えられている北部九州地域の弥生人の一集団であることを、歯の形態分析からも示されたものといえる。一方、同じ渡来系の弥生人と考えられている土井ヶ浜弥生人と比較してみると、大きさでは類似するが形態距離はやや離れることが示された。土井ヶ浜弥生人は海浜部、北部九州地域の弥生人は平野部で生活し、生活形態や依拠する生業が異なっていたものと推測され、これによって歯の形態的差が生じたと考えることもできるが、同じ渡来系でも土井ヶ浜弥生人と北部九州地域の弥生人は系譜が異なる可能性があることも念頭に置いておく必要もあろう。女性については、多変量解析まで行わなかったが、全体としての傾向は男性と同様で、大きなサイズの歯を備えており、北部九州地域の弥生人の特徴を持った集団とみなしてよいと思われる。ただ、平均値がかなり大きい値もあるので、今後精査も必要と考えている。

今回の分析は成人の歯冠サイズのみの分析となってしまったが、歯の形態研究の中で遺伝的影響がより強く受けていると考えられている形態の一つに非計測的形質（形態小変異）というものがある。また、乳歯の形態も遺伝的影響が強いといわれている。今後はこれらの形態も分析し、複数の形態から総合的に系統関係を導き出すことが重要と考えている。さらに、北部九州地域の弥生人も遺跡によってはかなりの量の人骨が出土しており、遺跡ごとの分析も可能になりつつある。歯については、今のところ北部九州地域の弥生人を遺跡ごとに詳細に分析した報告はないが、今後は遺跡ごとに分析し、遺跡ごとの特徴も検討していく必要がある。

以上、歯冠形態から吉野ヶ里弥生人の形態的特徴を分析したが、吉野ヶ里弥生人はこれまで報告されている北部九州弥生人の形態に類似する結果となった。予想された結果ではあったが、きちんと検証できたことは意義あることと思われる。今後は、非計測的形質の調査や北部九州弥生人の遺跡間の分析を行い、吉野ヶ里弥生人の北部九州地域での位置付けを検討したい。

第 3 章第 2 節　引用・参考文献

Brace, C.L. and M. Nagai (1982) Japanese tooth size: past and present, Am. J. Phys. Anthropol., 59:399-411

藤田恒太郎 (1949)，歯の計測基準について．人類学雑誌，61：27-32.

Matsumura, H. (1995) A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology. National Science Museum Monographs 9.

小山田常一 (1992)，西北九州弥生人と北部九州弥生人の歯冠サイズについて．人類学雑誌，100：83-100.

佐伯、分部、岡本、渡邊、長島 (2001), 佐賀県鳥栖市安永田遺跡出土弥生時代人骨の歯冠形態および頭蓋形態小変異.「安永田遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第 67 集．鳥栖市教育委員会発行，438-456.

讃井善治 (1960)，山口県土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人歯牙の人類学的研究．人類学的研究，7：861-885.

附表１　吉野ヶ里弥生人骨歯冠計測値（男性　頬舌径　㎜）

	地区		SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT
	人骨番号		SJ0011	SJ0022	SJ0041	SJ0062	SJ0078	SJ0079	SJ0081	SJ0089	SJ0090	SJ0094	SJ0107	SJ0118	SJ0161	SJ0164	SJ0181	SJ0201	SJ0202	SJ0208
	時期		中期	中期	中期末～後期初頭	中期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期末～後期初頭	中期	中期	中期	中期
	性別		男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
上顎	右側	I1			8.26			7.81		6.87	7.75				7.43	6.78	8.11			7.36
		I2								6.33	7				6.88		7.14			7.27
		C		8.6	8.85					7.7	8.85				8.89		8.92			8.25
		P1								9.17	9.64			8.68	9.76		10.77			9.88
		P2	8.16	10.06	9.77						9.3			8.83			9.8			
		M1	10.72		11.71									11.62			12.73			
		M2	10.62		11.39					10.93				11.14	11.36	10.46	12.47			
		M3					11.45										11.13			
	左側	I1	6.73		8.23					6.71	7.65					6.59	8.06			7.67
		I2														6.54	7.33			6.97
		C	6.85											7.86	8.76	7.88	9.06			8.21
		P1												9.08		9.24	10.7			9.71
		P2														9.04	9.55			9.93
		M1															12.33			
		M2					12.14			10.78						10.75	12.45			11.4
		M3														9.44	11.42			11.23
下顎	右側	I1					5.99							5.84	5.95	5.3	6.55	5.51		6.17
		I2					6.35							7.07	6.28	5.58	7	6.06		6.82
		C			7.63			7.84		7.04	8.19		7.77	7.68	7.68	7.41	8.58	7.38		7.75
		P1	6.87		8.44	7.74	7.45			7.56	8.59			7.65	8.29	7.2	8.7			
		P2	7.64		8.75						8.69	8.74	8.56	7.81	8.68	7.7	8.6		8.85	8.7
		M1			11.24						11.54			10.85	10.74		11.97		12.03	10.54
		M2		11.26					11.26		10.55			10.1	10.85	9.89	11.23	11.18	10.78	
		M3		10.63					11.1		10.64	9.59					10.67	10.33		
	左側	I1									6.01				5.96	5.26	6.39			6.12
		I2			6.61							6.91		6.35	6.56	5.8	6.93	6.04		6.62
		C			8.03					6.87	8.39			8.3	7.91	7.32	8.56	7.25		7.71
		P1			8.22			7.82		7.93	8.21		8.44	7.51	8.08	7.42	8.58	7.87		8.07
		P2								8.43		8.75	8.09	8	8.62	7.62	8.44	8.30		8.7
		M1							11.15	10.14	11.41	11.1		10.74	10.83	10.72	12.1			
		M2			11.11	10.51				10.31		10.56	11.4	10.18	10.45	9.83	11.42			10.02
		M3					10.06		11.02		10.5					9				10.3

	地区		SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT
	人骨番号		SJ0220	SJ0246	SJ0253	SJ0290	SJ0296	SJ0299	SJ0308	SJ0317	SJ0367	SJ0370	SJ0375	SJ0401	SJ0409	SJ0437	SJ0452	SJ0519	SJ0520	SJ0818	SJ0839
	時期		中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期末～後期初頭	中期末～後期初頭	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	後期	後期
	性別		男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
上顎	右側	I1					7.76	7.67								6.61		7.37	7.48		
		I2														6.3		7.04	7.06		
		C				8.48	7.92	8.92								8.11			8.5	9.17	
		P1		9.18	9.34	10.13	10.06	10.72								9.27		9.47		10.13	
		P2				10.23	9.06	10.72										10.35	9.79		
		M1				12.04	12.35	12.18								11.29			11.52		
		M2					11.87	12.25							11.47	10.95			12.47		
		M3						12.39				11.15		11.44							10.88
	左側	I1					7.58	7.89								7.04		7.43			
		I2					6.82	6.22											7.23		
		C			8.87		8.17	8.63										8.5			
		P1			9.45		10.01	10.64										10.01			9.6
		P2			9.62		9.08	10.67								9.27			10.25		
		M1				12.3	12.34	12.31								11.37			11.55		
		M2				12.13	11.33	12.5				11.88	11.92		11.75						
		M3	11.66		10.58	9.79		12.11	11.2		10.72	10.94			11.73					10.38	
下顎	右側	I1			5.84		5.92	6.15										6.01	5.92		
		I2			6.6		6.7	6.46							6.24			6.64		6.61	
		C		8.15	7.81	7.75	7.74	8.13	7.58									8.42	7.81		
		P1			7.84	8.28	8.34	8.90	7.76						7.56	7.85			8.28	8.28	
		P2				9.02	8.55	9.02	8.3						8.11		8.35				
		M1		12.12	11.44	11.21	11.57	11.47	11.59						10.9		10.73				
		M2			10.33	10.29	10.54	11.83	10.38		10.46	10.05			10.17		10.2		11.03		
		M3				9.47	10.22							9.4					10.27	11.33	
	左側	I1		6.67	5.72		5.93	6.23	6.05									6.18	5.66		
		I2		6.7	6.45		6.77	6.54			6.35				6.28			6.72	6.38	6.37	
		C			7.73	7.87	7.77	7.92	7.77						7.83		7.94	8.29	8.01		
		P1			7.76	8.39	8.34	8.43	8.11		7.63	7.86		7.87		7.33	7.53	8.81	8.74		
		P2			8.38	8.58	8.16	9.29							8.78	8.19	8.18	8.25	8.86		
		M1		11.88		11.24	11.68								10.73	10.81	10.96	11.34	12	11.95	
		M2				10.18	10.36	11.11	11.18	11.01		10.78		10.65	9.95		10.33	10.61	11.33		
		M3				9.66				10.69	10.43	10.56							11.27		

附表１　吉野ヶ里弥生人骨歯冠計測値（男性　頬舌径　㎜）

	地区		SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ
	人骨番号		SJ0878	SJ0886	SJ0940	SJ1243	SJ1259	SJ1312	SJ1313	SC1344	SJ1354	SJ1357	SJ1385	SJ1421	SJ0107	SJ0182	SJ0193	SJ0235	SJ0236	SJ0280
	時期		中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	後期	中期末～後期初頭	中期	中期末～後期初頭
	性別		男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
上顎	右側	I1			8.07							7.9					7.33			
		I2			6.68	6.43						7.85								
		C			8.35	8.27						9.79	7.92	8.43						
		P1			9.65	9.33							9.8			10.95				
		P2			9.28									9.91		10.8				
		M1			11.58	11.7						12.28								
		M2		12.17	11.31						13.15	12.09								
		M3		11.87																
	左側	I1			7.71	6.38				7.35		8.17					7.39			
		I2			6.97					7.27	6.9	7.69	6.96	6.24						
		C			8.19		8.43			9.58		9.44	8.11	8.61			8.65			
		P1			9.42	9.32	9.09			10.29		10.16	9.79				9.68			
		P2		11.12	9.43	8.32	8.93			9.85	10.09	9.16								
		M1		11.96	11.24	11.79				12.12		12.22								
		M2		11.76	11.2	11.54	12.15				13.15	12.1				13.79				
		M3			9.15												11.85			
下顎	右側	I1			5.77	5.5			5.76		6.42	6.3	5.91							
		I2		6.48	6.64	6.11		5.75	6.28		7.03	7.13	6.65							
		C	7.42		7.57	7.63		7.59	7.85		9.16	9.08	7.39			9.34				
		P1	8	8.48	7.88	7.54		7.95	7.39		8.82	8.42	8.2			9.15				
		P2	7.8	8.98	8.37				7.8		9.14	9.29	8.1			9.22				
		M1	10.92		11.03				11.12		11.39	11.39	10.7		12.07					
		M2			10.48			10.89	10.31			11.2			10.67	12.41		10.07	9.56	
		M3		10.74	9.9				10.11			9.87			10.99	11.4				
	左側	I1			5.88	5.52		5.37	5.73		6.16	6.33	6.05							
		I2		6.58	6.49	6.18		5.77	6.15		7.06	7.09	7.38			7.15	6.41			
		C			7.91	7.65		7.51	7.59		9.48	9.15				9.15	8.05			
		P1	7.48		7.96		7.52					8.57				9.01	6.75			
		P2	8.33		8.12	8.13	7.71					9	8.1			9.62	8.6		8.74	
		M1	11.43		10.97		11.15					11.56	10.4							
		M2			10.53		10.91						10.11							10.16
		M3		9.1	10.04		9.69					10.99								

	地区		YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅲ	YGK Ⅵ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	1979 年	1979 年	1979 年
	人骨番号		SJ0312	SJ0372	SJ0373	SJ0389	SJ0665	SJ1204	SJ1521	SJ1534	SJ1539	SJ1562	SJ1621	SJ1745	K-4	K-5	K-18
	時期		中期	中期末～後期初頭	中期	後期	中期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期
	性別		男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
上顎	右側	I1														8.01	7.26
		I2	6.73							6.75						7.21	7.18
		C	8.73							9.09						9.56	8.59
		P1						10.42		10.26						10.12	
		P2		8.34				10.53		10.51						9.67	
		M1	11.94					11.99		12.04					11.9	11.64	
		M2	12.31				12.11	13.23								11.11	11.13
		M3						11.06					10.97				
	左側	I1	7.4	7.11								7.73					7.27
		I2		5.78				6.65									
		C								8.51							8.35
		P1						10.74		10.54						10.3	
		P2								10.17					9.52	9.77	
		M1	11.84							12.39						11.89	11.75
		M2	12.21	11.26			12.48			13.27			11.69			11.24	
		M3		11.44	10.08					9.05							
下顎	右側	I1		5.59					6.18	6.68					5.66	6.56	
		I2							6.26	6.99					6.1	7.23	
		C	8.53	6.91		8.07	8.54		7.96	7.63			8.01		7.39	9.26	8.2
		P1	8.09	7.25			8.45	8.71	8.31	8.56			8.65		8.09	8.17	
		P2			8.78		8.93	9.22	8.31	8.62	8.23		8.86		8.65	8.46	9.24
		M1		10.6	10.94	11.97		11.92	11.67	11.51		13.3				11.55	
		M2		9.66				11.44	11.44		10.93		10.59		10.49	10.25	
		M3						10.71			11.03					9.34	
	左側	I1							6.05	6.45			5.88			6.54	
		I2		6.1					6.67	6.89			6.58			7.25	
		C		7.41					8.26	8.27			8.36			9.08	8.22
		P1							8.32	8.51					7.65	8.23	
		P2	8.42	7.2				9.34	8.73	8.61	8.37	8.81	9.3			8.8	9.07
		M1	11.48	10.93			10.92		11.59	11.53	11.45		11.66			10.95	
		M2					11.06	11.44		11.12			11.28	11.74		10.56	
		M3					10.09		10.71								

附表２　吉野ヶ里弥生人骨歯冠計測値（男性　近遠心径　㎜）

	地区	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT
	人骨番号	SJ0011	SJ0022	SJ0041	SJ0062	SJ0078	SJ0079	SJ0081	SJ0089	SJ0090	SJ0094	SJ0107	SJ0118	SJ0161	SJ0164	SJ0181	SJ0201	SJ0202	SJ0208
	時期	中期	中期	中期末～後期初頭	中期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期末～後期初頭	中期	中期	中期	中期
	性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
上顎	右側 I1			8.76			9.68		8.21	8.98				8.69	7.96	8.83			8.71
	右側 I2								6.91	7.53						6.61			7.34
	右側 C		7.52	8.3					7.44	8.63						8.35			8.04
	右側 P1									7.66			6.74	7.28		7.85			7.64
	右側 P2	6.43	7.6	7.09						7.39			6.67			7.03			
	右側 M1	9.69		10.36									11.22			11.34			
	右側 M2	9.1		10.23					10.23				9.86	10.83	9.6	10.05			
	右側 M3					8.51										9.01			
	左側 I1	8.07		9.19					8.16	8.75					7.93	8.79			8.75
	左側 I2														6.89	6.93			7.22
	左側 C	6.79											7.81		7.86	8.02			7.8
	左側 P1												6.68		7.35	7.81			7.56
	左側 P2														6.81	6.81			6.93
	左側 M1															11.16			
	左側 M2					9.87			9.34							10.06			10.22
	左側 M3														8.59	11.5			9.28
下顎	右側 I1					5.59							5.8		5.12	5.38	4.93		
	右側 I2					6.02							6.41		5.8	5.95	5.95		6.4
	右側 C			7.63					6.46	7.52		6.69	7.29	6.79	6.97	6.91			7.16
	右側 P1	6.53		7.81	6.39	7.04			6.89	7.42			7.22	7.24	7.08	7.09			
	右側 P2	6.86		8.04						7.56	7.68		7.17	7.41	7.47	7.22		7.5	7.57
	右側 M1			12.17						12.15			12.22	10.92		11.95			11.45
	右側 M2		12.19					11.89		10.68			11.14	11.55	10.56	11.84	10.93	12.16	
	右側 M3		10.69					12.1		11.24	11.34					11.49	10.48		
	左側 I1									5.02			5.96		5.17	5.33			
	左側 I2			6.35							6.61		6.39	6.34	5.66	5.87			6.3
	左側 C			7.59					6.48	7.52			7.13	7.09	6.75	6.72	6.7		7.06
	左側 P1			7.52			8.25		6.83	7.33		7.32	6.97	7.35	7.31	6.97	6.9		7.37
	左側 P2								6.94		7.56	7.15	7.31	7.99	7.37	7.51	6.81		7.53
	左側 M1							11.94	11.41	12	11.31		12.16	11.01	11.46	12.08			
	左側 M2			11.85	11.07				10.97		11.62	11.16	11.43	11.58	10.53	11.9			10.95
	左側 M3					8.6		12.19		11.31					9.35				11.15

	地区	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT
	人骨番号	SJ0220	SJ0246	SJ0253	SJ0290	SJ0296	SJ0299	SJ0308	SJ0317	SJ0367	SJ0370	SJ0375	SJ0401	SJ0409	SJ0437	SJ0452	SJ0519	SJ0520
	時期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期末～後期初頭	中期末～後期初頭	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期
	性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
上顎	右側 I1					8.92	8.91										8.98	9.6
	右側 I2														6.63		7.52	8.19
	右側 C				8.59	8.46	8.44								7.68			8.2
	右側 P1		7.25	7.13	7.98	8.08	8.05											
	右側 P2				7.48	7.33	7.58								6.21		7.25	7.43
	右側 M1				10.74	11.24	10.95								10.45			10.91
	右側 M2					10.04	10.85							9.98	9.87			9.56
	右側 M3						9.59				8.43		9.14					
	左側 I1					8.89	9.09								6.18		8.87	
	左側 I2					7.89	7.91											7.96
	左側 C			8.12		8	8.57											
	左側 P1					7.89	8.11										7.66	
	左側 P2			7.02		6.82	7.7								6.37			7.91
	左側 M1				11.25	11.45	11.02								10.32			11.18
	左側 M2				10.02	9.77	9.73				9.57	10.15		10.26	10.21			
	左側 M3	9.54		7.59	8		9.61	10.04		9.36	7.7			9.92				
下顎	右側 I1			5.42	5.8	5.52	5.76										4.65	5.87
	右側 I2			5.72		6.48	6.83							5.59			5.68	
	右側 C			6.86	7.06	7.32	7.75											7.48
	右側 P1			7.28		7.83	8.05	7.98						7.74	7.11			7.73
	右側 P2				7.59	7.57	8.09	7.96						8.02		7.45		
	右側 M1		11.97	11.9	12.14	12.44	11.88	12.41						11.38		11.06		
	右側 M2			11.12	11.31	11.11		10.74		11.07	10.97			11.2		11.2		11.53
	右側 M3				9.66	10.95							10.04					10.58
	左側 I1		5.41	5.27		5.59	5.83										4.96	5.95
	左側 I2		5.69	5.81		6.47	6.89			5.83				5.93			5.96	6.38
	左側 C			6.9	7.22	7.39	7.69	6.85						7.07		7.27	7.31	7.54
	左側 P1			7.08	7.8	7.69	8.1	7.66		7.14	7.74		7.45		7.51	7.31	7.65	8.09
	左側 P2			7.2	7.28	7.38	8.26							7.77	7.18	7.33	7.7	7.59
	左側 M1		11.75		12.36	12.34								11.54		11.76	12.15	12.02
	左側 M2				11.02	11.63	11.8	11.79	12.06		11.6			10.85		11.11	11.21	11.3
	左側 M3				10.33				11.59	10.83	10.19							11.39

附表２　吉野ヶ里弥生人骨歯冠計測値（男性　近遠心径　㎜）

	地区	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ
	人骨番号	SJ0818	SJ0839	SJ0878	SJ0886	SJ0940	SJ1243	SJ1259	SJ1312	SJ1313	SC1344	SJ1354	SJ1357	SJ1385	SJ1421	SJ0107	SJ0182	SJ0193	SJ0235
	時期	後期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	後期	中期末～後期初頭
	性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
上顎 右側	I1					9.49	8.33						9.49					9.29	
	I2					7.19	6.25						8.06						
	C	8.24				8.43	7.42						8.79	7.63					
	P1	7.77				7.73	7.34							7.14			7.98		
	P2					6.94											7.77		
	M1					11.89	10.29						10.64						
	M2				10.87	11.71						9.85	10.29						
	M3		9.16		8.35														
上顎 左側	I1					9.31	8.52				9.03	9.66	9.78					8.6	
	I2					7.2					7.22	8.34	8.37	7.08	6.45				
	C					8.21		7.77			8.68		8.31	7.8	8			8.28	
	P1		6.98			7.67	7.11	7.11			7.7		7.32	7.25				7.71	
	P2				7.46	7.13	6.21	6.84			7.16		6.77						
	M1				11.71	10.72	10.45				10.66		10.61						
	M2				10.82	10.34	9.92	10.2				10.51	10.53				11.18		
	M3	8.57				7.23												8.68	
下顎 右側	I1					5.8	4.85			5.11			6	5.28					
	I2	6.42			6.37	6.35	5.68		5.55	5.18		6.53	7.03	6.25					
	C			6.54	7.15	7.21	6.2		6.38	6.78		7.69	7.81				7.93		
	P1	7.93		7.45	7.14	7.39	7.34		7.61	7.08		7.15	7.61				8.1		
	P2			7.22	7.57	7.8				6.53		7.6	7.47	6.73			7.67		
	M1			11.47		11.79				11.16			11.89	11.3		12.48			
	M2					10.81			9.31	10.53			12.12			11.69	12.92		
	M3	9.7			10.36	9.7				11.07			11.17			11.88	10.4		
下顎 左側	I1				5.19	5.67	5		5.15				6	5.73					
	I2	6.08			6.34	6.28	5.82		5.46			6.91	6.96	6.25			5.96	6.5	
	C					6.97	6.66			6.33		7.63	7.79				7.94	6.91	
	P1			7.13		7.24		7.1					7.76				7.85	6.81	
	P2			7.25		7.12	7.22	6.83			7.67		7.86	6.71			8.11	6.83	
	M1	12.68		11.07		11.97		11.75					12.48	11.38					
	M2					11.32		11.92						10.36					
	M3				10.07	9.93		10.36					11.33						

	地区	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅲ	YGK Ⅵ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	1979 年	1979 年	1979 年
	人骨番号	SJ0236	SJ0280	SJ0312	SJ0372	SJ0373	SJ0389	SJ0665	SJ1204	SJ1521	SJ1534	SJ1539	SJ1562	SJ1621	SJ1745	K-4	K-5	K-18
	時期	中期	中期末～後期初頭	中期	中期末～後期初頭	中期	後期	中期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期
	性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性	男性
上顎 右側	I1																9.53	9.15
	I2			7.94							6.56						7.43	8.09
	C			8.27							8.33						8.64	8.53
	P1								8.4		7.53						7.97	
	P2				6.81				7.79		7.34						7.54	7.31
	M1			11.09					11.82		11.9					10.53	11.52	
	M2			10.1				11.61	10.6								11.15	11.89
	M3								10.1					10.02				
上顎 左側	I1			8.47	9.46								8.78				9.42	9.56
	I2				6.78				8.14									
	C								9.14		8.6							8.55
	P1								8.58		7.53						8.17	
	P2										7.12					7.14	7.67	
	M1			11.07							11.49						11.4	11.65
	M2			10.32	9.12			10.84			10.81			10.52			10.22	
	M3				9.28	8.19					7.53							
下顎 右側	I1									6.39	5.41			5.69			6.3	
	I2									6.83	6.4						6.89	
	C			7.42	6.81		7.13	7.56		7.33	7.19			7.03		6.79	7.44	7.18
	P1			7.27	7.17			7.13	8.12	7.82	7.84			8.06		7.47	7.73	
	P2					7.34		7.8	8.36	7.95	7.52	7.61		7.7		7.9	7.65	7.19
	M1				11.21	11.98	12.41		12.89	12.1	12.16		13.6				12.16	
	M2	10.56			10.96				12.08	12.05		11.64		11.14		10.7	10.81	
	M3								11.51			10.75					9.77	
下顎 左側	I1									6.08	5.74			4.96			6.23	
	I2				6.57					6.99	6.41			6.01			6.75	
	C				7.01					7.43	7.36			7.37			7.44	7.36
	P1									7.61	7.60					7.84	7.45	
	P2	7.09		7.28	7.21				8.18	7.7	7.47	7.23		7.82			7.92	7.38
	M1			12.03	11.25			12.29		12	12.2	11.82		12.38			12.18	
	M2		11.39					11.94	12.29		11.91			12.05	12.09		11.57	
	M3							10.75		11.19								

附表３　吉野ヶ里弥生人骨歯冠計測値（女性　頬舌径　㎜）

	地区		SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT
	人骨番号		SJ 0052	SJ 0058	SJ 0097	SJ 0100	SJ 0106	SJ 0135	SJ 0194	SJ 0207	SJ 0272	SJ 0275	SJ 0292	SJ 0293	SJ 0294	SJ 0313	SJ 0327	SJ 0330	SJ 0354	SJ 0373	SJ 0393	SJ 0397	SJ 0414	SJ 0434
	時期		中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	後期	中期	中期	中期	中期	後期	中期	中期	中期	中期	中期末～後期初頭	中期	中期
	性別		女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性
上顎	右側	I1		7.24										7.21	7.53				7.41		8.22		7.85	
		I2		6.32	7.08									6.44	6.84				6.35		7.84		7.24	
		C				8.23	8.11							8.01	8.24				8.18				9.64	
		P1						9.56						9.72	9.9				9.12					
		P2			9.86			9.1							10.19		10.72		9.03					
		M1			11.38			11.7						11.62	12.42				10.92					
		M2				11.39	10.93	11.01			11.78				12.76			10.72						
		M3	10.13											11.45										
	左側	I1		7.05										7.39	7.59				7.33		8.36		7.92	
		I2	6.41	6.33	6.9	6.45								6.06	6.76				6.39				7.44	
		C	8.09	8.42		7.85								8.31	8.09				7.84	8.75			9.57	
		P1			9.72	9.31								9.68	9.93	10.08			9					
		P2		9.3	9.28				9.49					9.45	10.21	10.39			9.07					
		M1			11.38	10.3			11.61					11.67	12.54	12.25			11.05					
		M2			11.26			11.77	11.82				10.2		12.31	12.45								
		M3		11.53									10.9	11.97										
下顎	右側	I1				6.16		6.03	5.43										5.97				6.68	
		I2	5.78			6.45		6.46	5.93			6.42							6.24				7.07	
		C	7.5			7.82			7.36					7.54		8.86			7.38				8.3	
		P1	8.38			7.67								8.11		9.25			7.45	7.85			8.87	
		P2	8.33			8.41		8.33		9.27				8.72		8.71			8.03				9.22	
		M1	10.27		10.98	10.57		11.32	11.28							12.25			10.62				11.7	
		M2	10.43			9.99	9.99	10.82							10.46				10.17				10.56	
		M3	10.31				10.67								10.4									
	左側	I1	5.46		5.65	6.09													6.07				6.82	
		I2	5.7		6.37	6.58		6.33						6.19		7.02			6.37				7.11	7.1
		C	7.37			7.56								8.3					7.38	7.17				8.84
		P1	7.83			8.14									8.15				7.7					9.21
		P2	8.47		8.15			8.14						8.63	8.68	8.65			7.89	8.09				
		M1			10.87			11.61	11.06				10.68	10.68	11.22				10.81				11.6	
		M2	10.53		10.49	9.55		10.98											10.47			10.09		
		M3						11.21						10.06										

	地区		SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ
	人骨番号		SJ 0436	SJ 0497	SJ 0822	SJ 0835	SJ 0845	SC 0854	SJ 0875	SJ 0885	SJ 0949	SJ 1255	SJ 1276	SJ 1339	SJ 1355	SJ 1383	SJ 1413	SJ 0074	SJ 0080	SJ0221	SJ0231	SJ0237	SJ0272	
	時期		中期	後期	中期	後期	中期末～後期初頭		中期	中期	中期末～後期初頭	中期	中期	中期	中期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	後期	中期	
	性別		女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	
上顎	右側	I1										7.09									7.61			
		I2										6.67												
		C										7.67	7.65								8.63			
		P1							8.74		9.92				10.03						9.09			
		P2					9.43	10.02					9.03		10.26	9.96					8.52		9.18	
		M1					10.67						12.28				12.31				11.15		11.09	
		M2	11.44					11.81	10.1				12.04		12.04	11.81								
		M3				9.82		11.34	9.64			11.14												
	左側	I1													7.36						7.1			
		I2								6.93					6.55									
		C			7.84				7.91						8.69						8.69			
		P1							8.68							9.6					8.96			
		P2			9.47	9.1									9.72	10.1	9.7	9.58			8.58			
		M1			11.68	10.59		11.84								11.91	12.47							
		M2			12.4			11.87					12.52		12.27	11.96								
		M3			11.25				9.08															
下顎	右側	I1				5.52	5.73								5.9				5.75	6.08				
		I2			6.32	5.81				6.74	6.82				6.39				5.73		6.26	6.08	6.76	
		C				7.38	6.81						6.88	7.16	8.24						7.58		7.62	
		P1				7.77	7.98								8.69								7.46	
		P2			8.68	7.8	7.91	8.29		8.81	8.81												7.25	
		M1		11.89		10.38		10.97			11.41	10.79					12.05					11.07		
		M2				9.78		10.36	9.65			9.88		10.4	10.49	10.87								
		M3			9.1	9.66			8.73	10.45		9.79												
	左側	I1				5.76	5.85								5.75				5.46			5.65		
		I2	6.37		6.45	6.13	6.2				6.97				6.46				6			6.04		
		C			7.11	7.69					8.15		7.20						7.77	8.19	7.42		7.96	
		P1	7.84		8.17	7.96	7.43		7.55												7.71			
		P2		8.04		7.76	8.18				9.17			8.05		8.47			7.14				7.6	
		M1		11.93	11.5	10.68		11.1	10.89				11.75		11.33		11.87				10.61			
		M2			11.07	9.72			9.28	10.55								11.22			10.64			
		M3				9.9		9.53	8.69	10.48								9.98					8.87	

附表３　吉野ヶ里弥生人骨歯冠計測値（女性　頬舌径　㎜）

	地区		YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅴ	YGK Ⅴ	YGK Ⅴ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ
	人骨番号		SJ 0307	SJ 0348	SJ 1546	SJ 1768	SJ 2073	SJ 2545	SJ 2744	SJ 2759	SJ 2760	SJ 2774	SJ 2775	SJ 1502	SJ 1523	SJ 1586	SJ 1678	SJ 1679	SJ 1705
	時期		中期	中期	中期	中期	中期	後期	後期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期
	性別		女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性
上顎	右側	I1							6.89	6.82		7.03		7.56			8.06		
		I2							6.37		7.13						7.13		
		C							8.09	8.66	9.11	7.75		8.6			8.71		
		P1							9.24	9.67		9.19		10.13			10.25		
		P2		10.1					9.26	9.75							9.47		
		M1							11.2	12.18		11.11		12.35					
		M2			12.28					11.48		10.48		12.22	10.74	11.12			
		M3														10.01	11.19		
	左側	I1										7.16					8.26		
		I2										6.98		6.38			6.87		
		C			8.85						9.02	7.53					8.8		
		P1										8.95	9.9	9.96			9.93		
		P2			10.22							8.86		9.97			9.99		
		M1										10.86		12.31			11.85		
		M2	12.01									10.62		12.13			11.9		10.66
		M3														10.62	10.45		
下顎	右側	I1					5.53					5.89	5.5				5.51	5.74	
		I2					5.88	6.43			6.28		6.58				6.54	6.98	
		C				7.36	7.39	7.8		7.29		7.03	7.71				7.58	7.93	
		P1		7.3		6.84	7.04			7.85	9.06	7.53					7.94	7.91	
		P2		8.62		7.64	7.89			8.59		7.62						8.63	
		M1	11.07				10.91		11.01	11.31				11.24			11.29		
		M2					10.07			10.14				11.84		10.33	10.76		
		M3					9.67									9.13	10.46		
	左側	I1															5.95		
		I2	6.74								6.71	6.63		7.29			6.66		
		C	8.99	7.35							8.20	7.36		8.08			7.53		
		P1	8.42	8.77			7.23					7.13		7.88			7.92	8.07	
		P2					7.81					7.45		8.61			8.76	8.82	
		M1				9.93	10.97							11.09					
		M2					9.77					9.66		11.29			10.6		
		M3				8.68	9.74									9.73		10.2	

附表４　吉野ヶ里弥生人骨歯冠計測値（女性　近遠心径　㎜）

	地区		SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT
	人骨番号		SJ 0052	SJ 0058	SJ 0097	SJ 0100	SJ 0106	SJ 0135	SJ 0194	SJ 0207	SJ 0272	SJ 0275	SJ 0292	SJ 0293	SJ 0294	SJ 0313	SJ 0327	SJ 0330	SJ 0354	SJ 0373	SJ 0393	SJ 0397	SJ 0414	SJ 0434	SJ 0436	SJ 0497	
	時期		中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	後期	中期	中期	中期	中期	後期	中期	中期	中期	中期	中期末～後期初頭	中期	中期	中期	後期	
	性別		女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	
上顎	右側	I1		9.29										8.16	8.09				8.05		9.35		9.32				
		I2	7.16		7.65									6.8	6.43				6.74		8.82		8.09				
		C				7.89	7.99							7.04	7.77				7.04				8.67				
		P1						7.94						7.47	7.3				6.73								
		P2			7.09			6.41							7.3		8.32		6.55								
		M1			10.81									10.37					10.58								
		M2				10.56	9.18	9.68			10.42				9.78			9.5							10.16		
		M3	8.92																								
	左側	I1		9.56										7.91	7.84				8.2				9.18				
		I2	7.25	7.44	7.57	6.71								6.62	6.27				6.82				7.71				
		C	7.83	7.97		7.95								7.08	7.74				7.47				8.84				
		P1			7.85	7.5								7.42	7.25	8.17			6.63								
		P2		7.42	7.02				7.18					7.51	7.35	7.17			6.41								
		M1			10.43	11.34			10.61					10.49	10.56	10.82			10.84								
		M2			9.5			10.67	10.17				8.7		10.19	10.52												
		M3		9.63									8.87	9.61													
下顎	右側	I1				5.49		5.55	5.34										4.97				5.24				
		I2	5.68			6.01		6.23	5.92			5.92							5.18				6.91				
		C	6.58			7.08			6.83					6.55		7.39			6.2				7.31				
		P1	6.82			7.28								7.37		8.24			6.51	7.14			7.73				
		P2	7.51			7.57		7.02		8.07				7.59		7.83			6.58				7.55				
		M1	11.55		11.45	12.25		11.8	11.34							12.72			11.29				12.24				12.11
		M2	10.93			10.74	11.24	11.31							10.96				10.35				10.69				
		M3	10.95				11.25								10.92												
	左側	I1	4.73		5.63	5.66													5.19				5.37				
		I2	4.92		6.13	6.23		6.15						5.84					5.72				6.85	6.57			
		C	6.37			7.19								7.09					6.35	6.84				7.63			
		P1				7.73									7.04				6.57					8.1			
		P2	7.55		7.8			6.94						7.39	7.56	7.59			6.56	6.96							7.44
		M1			11.59			11.83	11.85					11.5	11.55				11.33				12.28				12.03
		M2	11.01		11.7	10.94		10.95											10.17			10.35					
		M3						10.39						10.49													

附表４　吉野ヶ里弥生人骨歯冠計測値（女性　近遠心径　㎜）

	地区		SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	SYT	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ	YGK Ⅱ
	人骨番号		SJ 0822	SJ 0835	SJ 0845	SC 0854	SJ 0875	SJ 0885	SJ 0949	SJ 1255	SJ 1276	SJ 1339	SJ 1355	SJ 1383	SJ 1413	SJ 0074	SJ 0080	SJ 0221	SJ 0231	SJ 0237	SJ 0272	SJ 0307	SJ 0348
	時期		中期	後期	中期末～後期初頭		中期	中期	中期末～後期初頭	中期	中期	中期	中期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	後期	中期	中期	中期
	性別		女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性
上顎	右側	I1								8.27	8.19								8.50				
		I2								7.06													
		C								7.11	7.92		8.66						7.77				
		P1					6.87												7.28				
		P2			6.85	7.05					7.09		7.04						6.87		7.57		7.29
		M1			10.47						11.67				11.47				10.07		11.02		
		M2				10.14	9.36				10.13		10.55	10.96									
		M3		7.92		8.14	8.56			9.28													
	左側	I1									8.08		9.1	9.91					8.61				
		I2											6.62										
		C	7.52				7.8						8.73						7.35				
		P1					6.78							8.15					7.16				
		P2	6.9	6.56									6.95	7.72	7.31	7.16			6.49				
		M1	10.71	9.81		10.74								11.91									
		M2	9.41			10.17					10.23		10.36	10.5								10.17	
		M3	8.69				8																
下顎	右側	I1		4.63	5.82								5.68				4.83	5.82					
		I2	5.79	5.08				6.09					6.16				5.34		6.12		6.34		
		C		6.92	6.29						7.08		6.92						6.86		7.08		
		P1		6.94	6.98								7.33								7.52		7.14
		P2	7.46	7.04	6.65	7.32		7.28	7.76												7.04		7.48
		M1		10.34		11.33			11.87	11.22					11.87					11.16			
		M2		10.1		11.32	10.29			10.61		10.86		11.88									
		M3	9.94	10.04			9.59	11.34		10.27													
	左側	I1		4.69	5.4								5.63				4.68						
		I2	5.96	5.57	5.96				6.02				6.47						6.43		6.35	6.45	
		C	6.58	6.77					6.82		6.66						6.69	7.53	6.73		7.05	7.40	7.24
		P1	7.02	7.1	7.09		7.02												7.13			7.34	7.7
		P2		6.98	6.97				8.31			7.34		7.61			6.71				7.2	7.24	
		M1	11.91	10.76		11.31	11.61				12.27				12.26				11.19				
		M2	11.35	10.09			9.98	11.51								11.4			11.4				
		M3		10.21		10.05	9.13	11.62								10.69					9.59		

	地区		YGK Ⅴ	YGK Ⅴ	YGK Ⅴ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	YGK Ⅸ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ	SYT Ⅱ
	人骨番号		SJ1546	SJ1768	SJ2073	SJ2545	SJ2744	SJ2759	SJ2760	SJ2774	SJ2775	SJ1502	SJ1523	SJ1586	SJ1678	SJ1679	SJ1705	
	時期		中期	中期	中期	後期	後期	後期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	中期	
	性別		女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	女性	
上顎	右側	I1					7.88	7.88		8.26		9.30			9.27			
		I2					5.92		8.45						8.34			
		C					7.79	7.66	8.55	7.41		8.03			8.44			
		P1					7.33	7.48		6.99		8			7.89			
		P2						6.8							7.13			
		M1					10.86	11.12		10.18		10.7						
		M2	10.13					9.98		9.27		10.28	9.76	10.14				
		M3												8.45	9.02			
	左側	I1								8.27					9.37			
		I2								7.35		7.69			8.36			
		C	7.8							7.42					8.42			
		P1								7.03	7.44	7.77			7.84			
		P2	7.46							6.59		7.26			7.25			
		M1								9.9		10.95			11.03			
		M2								8.99		10.44			10.26		9.29	
		M3												8.88	9.14			
下顎	右側	I1			5.75					5.18	5.67				5.67	5.42		
		I2			6.86	6.45			5.49		6.77				6.54	6.21		
		C			7.32	7.62		6.69		6.4	7.28				7.42	7.18		
		P1			7.5			7.8	7.81	7.16					7.46	7.33		
		P2			6.91			7.5		6.8						7.77		
		M1			11.6			11.89				12.23			11.88			
		M2			11.01			11.1				11.91		11.2	12.23			
		M3			10.43									10	11.27			
	左側	I1													5.54			
		I2								5.75		6.64			6.4			
		C								6.46		6.86			7.50			
		P1			6.96					6.77		7.12			7.63	7.6		
		P2			6.83					6.4		7.9			7.87	7.91		
		M1			11.66							12.3						
		M2			10.81					10.3		12.05			11.93			
		M3		9.09	10.84									10.47		11.11		

第３節　吉野ヶ里遺跡出土人骨の炭素・窒素同位体分析

米田穣（東京大学 総合研究博物館）、鵜野愛美（東京大学 大学院）、分部哲秋、佐伯和信、髙村敬子、
弦本敏行（長崎大学 大学院医歯薬学総合研究科）

吉野ヶ里遺跡から出土した人骨資料から残存するタンパク質（コラーゲン）を抽出し、その中に含まれる炭素と窒素の同位体比から、生前に摂取したタンパク質の由来を推定した。甕棺に埋葬された弥生時代人骨は、貝塚に埋葬された縄文時代人骨に比べて保存状態が悪いことが多く、これまでにコラーゲンの同位体分析の報告は少ない。本研究では、長崎大学医学部に収蔵されている吉野ヶ里遺跡志波屋四の坪地区から出土した弥生時代中期から後期の人骨 51 点を前処理し、9 点から保存状態のよいコラーゲンを回収することができた。その炭素・窒素同位体比を先行研究で報告した隈・西小田遺跡（福岡県筑紫野市）、深堀遺跡（長崎県長崎市）と比較して、弥生時代の食生活について検討した。

（１）資料と方法

吉野ヶ里遺跡から出土した人骨 51 点の四肢骨から、形態学的な研究に影響しない部位を選んで、0.2g から 0.5g の小片を、ダイヤモンドカッターを用いて切り出し、分析試料として用いた（表 7）。前処理としてアルカリ処置とゼラチン化を行い、骨に残存するコラーゲンを抽出した（Longin 1971; Yoneda et al. 2002）。最初に表面に付着した土壌などを、酸化アルミニウム粉末のサンドブラストおよび超音波洗浄（純水中 10 分間）で除去した。次に骨片をステンレス製乳鉢で数㎜片に粉砕し、半透膜であるセルロースチューブに封入して、1.2M の塩酸と 4℃で穏やかに 12 時間程度反応させることで、無機成分ハイドロキシアパタイトを除去する脱灰処理を行った。セルロースチューブをつけた塩酸を純水にかえて、さらに 24 時間中性化して、セルロースチューブ内の沈殿を遠心分離によって回収した。回収された有機分画を 0.1M の水酸化ナトリウム溶液で短時間洗浄するアルカリ処理で、土壌有機物のうちフミン酸とフルボ酸を除去した。純水で中性化した後に、10mL の純水中で 90℃ 12 時間加熱することで、コラーゲンを熱変性して水に可溶化した（ゼラチン化）。遠心分離によって不要成分を除去し、さらにガラス繊維フィルター（Whatman GF/F）で吸引ろ過した溶液を凍結乾燥し、ゼラチンとして回収した。

ゼラチン中の炭素および窒素の重量含有率と安定同位体比の測定は、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室において、Thermo Fisher Scientifics 社製の Flash2000 元素分析と ConFlo IV インターフェースを用いて、Delta V 安定同位体比質量分析装置で測定した。分析のために約 0.4mg のゼラチンを錫箔に包み取り、測定に供した。測定誤差は、同位体比が値付けされている二次標準物質（アラニン等）を試料と同時に測定することで標準偏差を計算した。国際標準物質（PDB 炭素と AIR 窒素）からの偏差の千分率である δ 値（$\delta^{13}C$ と $\delta^{15}N$）をパーミル（‰）単位で標記する。通常の測定では、$\delta^{13}C$ の測定誤差は 0.2‰、$\delta^{15}N$ の誤差は 0.2‰である。

（２）結果

表 7 に前処理によって回収されたゼラチンの含有率を示し、表 8 に元素分析計と安定同位体比質量分析計から得られた分析結果を示す。ゼラチン含有率が 1% 未満の場合はコラーゲンが変性している可能性が高いとされているが（van Klinken 1999）、51 点の平均値で 0.51% であり全体としてコラーゲン

の保存状態はかなり悪い。全 51 点のうち、安定同位体比質量分析計に必要な 0.4mg が得られたのは 38 点（全体の 74.5%）であり、残りの 13 点は分析に必要量の有機物が回収できなかった。抽出されたゼラチンがコラーゲンで構成されている場合、炭素濃度（重量）が 13% 以上、窒素濃度（重量）が 4.8% 以上、C/N 比（原子数）が 2.9 から 3.6 の範囲に入ることが期待される（DeNiro 1985, van Klinken 1999）。元素分析を実施した 38 点のうち、C/N 比がコラーゲンの正常値の範囲だった資料は 9 点であり（分析したゼラチンの 23.7%；全体の 17.6%）、残りの 29 点は C/N 比が 3.7 以上であり、安定同位体比が汚染の影響をうけている可能性があるので、これらのデータは食性の復元には用いない。ゼラチン含有率が 1% を超える資料は 7 点あったが、そのうち 5 点は C/N 比から保存状態の良いコラーゲンと判断された。ゼラチン含有率が 1% 以下の資料でも 4 点は C/N 比の基準からは保存状態のよいコラーゲンと判断されたので、あわせて 9 個体の同位体比に基づいて吉野ヶ里遺跡における弥生時代の食生活について検討することとした。

炭素・窒素含有率から保存状態がよいと判断された 9 点について、炭素・窒素同位体比を図 6 に示す。時期別にみると中期前半 4 点、中期後半 3 点、後期前半が 2 点ふくまれる。年齢はいずれも壮年から熟年の成人である。図 6 では日本列島の代表的な食資源からコラーゲンで期待される炭素・窒素同位体比（Yoneda et al. 2004）と比較した。炭素同位体比は比較的低く、海産物利用の明らかの証拠とされる -18‰よりも高い個体は中期後半の女性（SJ0354） 1 個体のみであった。一方、窒素同位体比は 9 〜 11‰と陸上生態系の草食動物よりもかなり高い値を示している。これらの特徴は、縄文時代にはほとんど見られないが、弥生時代に水田稲作農耕が導入されると現れる特徴であり（米田・山﨑 2017、米田ら 2019）、水田稲作農耕民に特有の食料資源、すなわち水稲や淡水魚に起因するものと考えられる。炭素同位体比が高い 1 個体についても窒素同位体比は比較的高いので、海産物を利用した可能性が高いが、C4 植物である雑穀（アワ、ヒエ、キビ）を加えた食料である可能性は排除できない。雑穀類を主食とした個体では、炭素同位体比は高く、窒素同位体比は比較的低い値が期待されるが、そのような個体はデータが得られた 9 個体には認められなかった。データ数が少ないので統計的な検定はできないが、時期差が異なる男性 3 個体は比較的よく似た同位体比を示しているのに対し、女性の同位体比は変動が大きい点は興味深い。

（3）考察

吉野ヶ里遺跡における食生活の特徴を、骨コラーゲンの炭素・窒素同位体比から議論するために、先行研究で報告した西日本の弥生時代遺跡と比較し（図 7）、さらに有明海に面した縄文時代早期の東名遺跡の貝塚から出土した人骨と比較する（図 8）。弥生時代人骨のうち、福岡県隈・西小田遺跡（米田・山﨑 2017）、山口県土井ヶ浜遺跡（米田 2014）、奈良県唐古・鍵遺跡（米田ら 2016）は形態学的には渡来系の北部九州タイプに属すると考えられ、長崎県深堀遺跡（米田 2004）、佐賀県大友遺跡（Mihara et al. 2004）は縄文系の西北九州タイプ、鹿児島県広田遺跡（米田 2007）は南九州タイプに属する。今回分析した吉野ヶ里遺跡の人骨は、山口県土井ヶ浜遺跡や鹿児島県広田遺跡の人骨と類似する結果であった。土井ヶ浜遺跡も広田遺跡も沿岸に立地する遺跡であり、海産物利用が想定される。一方、形態学的に同じタイプの北部九州タイプに分類される、隈・西小田遺跡と比較すると炭素同位体比が高く、遺跡からも遺存体が出土している海生魚介類をより多く摂取していたと考えらえる。佐賀平野でも筑後

平野により近い、やや内陸に位置する隈・西小田遺跡との立地の違いから、海産物へのアクセスがより容易だったのかもしれない。あるいは、拠点的集落としての吉野ヶ里遺跡の性質が多様な資源利用を可能にしたのかもしれない。今後、さらに筑紫平野の弥生時代遺跡で比較することで、吉野ヶ里遺跡の食生活について特徴を明らかにできると期待される。

一方、縄文時代早期の佐賀平野に暮らした佐賀市東名遺跡の人骨コラーゲンで得られた炭素・窒素同位体比は、C3 植物と海産魚類を結ぶ直線上に位置しており、２つの生態系から得たタンパク質を複合していたと解釈した（米田 2009）。これは、同様の直線的な分布の傾向が縄文時代の貝塚遺跡で多く認められることに依拠している。同様の傾向は西北九州タイプの弥生時代人集団（深堀遺跡と大友遺跡）でも認められ、これら２集団は東名遺跡の縄文時代早期人よりも多くの海産物を利用していたと考えられた。いずれの時代でも、２種類の同位体比が異なる生態系（C3 植物生態系と海洋生態系）を利用すると、その利用割合の個人差によって直線的な分布をする特徴があるが、吉野ヶ里遺跡では炭素・窒素同位体比の間に相関関係は認められないことから、３つ以上の同位体比ことなる資源を利用したことが想定される。しかし、有明海の海産物を陸産物と組み合わせ利用したと考えられる東名貝塚の人骨における炭素・窒素同位体比と、吉野ヶ里遺跡や土井ヶ浜遺跡のような漁撈活動を伴うと考えられる弥生時代人の同位体比はかなりよく似ている。吉野ヶ里遺跡から出土した魚骨や動物骨、炭化種実などの食料資源の同位体比と直接比較することで、解釈をより絞り込む必要がある。また、少数の個体数しか分析できない遺跡の場合、分布が直線的であるかどうか、判断が難しいと考えられるので、陸上資源における栽培稲と天然の動植物を明確に区分する方法を開発する必要がある。

炭素同位体比が最も低い隈・西小田遺跡の人骨が純粋な稲作農耕民の同位体比の特徴を示していると考えるならば、吉野ヶ里遺跡では海産物の摂取が認められるという点で、縄文時代から培われた漁撈を含む生業の影響を受けている可能性のかもしれない。魏志倭人伝の記述にもみられる海洋資源の利用については、いつ、どのように水田稲作を中心とした生業と複合したのか、農耕文化複合という視点から検討することが、水田稲作を中心としながら狩猟採集や漁撈を内包した弥生時代の生業を理解する上で重要だろう。本研究で示された吉野ヶ里遺跡における海産資源利用の可能性は、北部九州ですでに海産物利用を含む複合が発生した可能性を示している点で重要である。一方で、個人差に着目すると、唐古・鍵遺跡の３個体のうち２個体は隈・西小田遺跡で視られた稲作農耕中心と想定された食生活だったのに対し、１個体は海産物をより多く摂取した縄文時代的な食生活という個人差が示された。吉野ヶ里遺跡でも中期後半の壮年女性（SJ0354）で高い炭素同位体比が示され、他の個体とは異なる食性が示された。今後、同遺跡から出土した動物骨や炭化種実で炭素・窒素同位体比を行い、それとの比較によって吉野ヶ里遺跡の弥生時代当時の食生活をより具体的に推定できると期待される。

謝辞

貴重な資料を分析する許可を賜った佐賀県教育委員会に感謝する。

第 3 章第 3 節　引用・参考文献

DeNiro, M.J. (1985). Postmortem preservation and alteration of invivo bone-collagen isotope ratios in relation to paleodietary reconstruction. Nature 317, 806-809.

Longin, R. (1971). New method of collagen extraction for radiocarbon dating. Nature, 230, 241-242.

Mihara, S., K. Miyamoto, T. Nakamura, H. Koike「14C age determination for human bones during the Yayoi period – the calibration ambiguity around 2400 BP and the marine reservoir effect」『Nuclear Instruments and Methods in Physics Research』B223-224, pp. 700-704.

van Klinken, G.J. (1999). Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements. Journal of Archaeological Science 26, 687-695.

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002). Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44, 549-557

Yoneda, M., Y. Shibata, M. Morita, R. Suzuki, T. Sukegawa, N. Shigehara, and T. Akazawa (2004). Isotopic evidence of inland-water fishing by a Jomon population excavated from the Boji site, Nagano, Japan. Journal of Archaeological Science 31(1), 97-107.

米田穣「深堀遺跡出土人骨の同位体食性分析と放射性炭素測定」『深堀遺跡』2004, 長崎市教育委員会 , pp. 36-41.

米田穣「広田遺跡から出土した人骨の同位体分析」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書 (15) 廣田遺跡 －平成 16 年度～平成 18 年度 町内遺跡等発掘調査事業－』2007, 南種子町教育委員会 , pp. 192-198.

米田穣「人骨の炭素・窒素同位体比分析」『佐賀市埋蔵文化財調査報告書第 40 集 東名遺跡群 II』6, 佐賀市教育委員会 , 2009, pp. 123-126.

米田穣「土井ヶ浜遺跡から出土した弥生時代人骨の炭素・窒素同位体比」『土井ヶ浜遺跡』下関市教育委員会・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム , 2014, pp. 207-214.

米田穣・安部みき子・丸山真史・藤田三郎「唐古・鍵遺跡の散乱人骨における形態学的所見と炭素・窒素同位体分析」『田原本町文化財調査年報』24, 2016, pp. 133-142.

米田穣・山﨑孔平「同位体分析からさぐる弥生時代の食生態」『季刊考古学 138』2017, 43-46.

米田穣・菊地有希子・那須浩郎・山﨑孔平「同位体分析による弥生時代の水稲利用の評価にむけて：同位体生態学的な背景と実験水田における基礎研究」『農耕文化複合形成の考古学（下）―農耕のもたらしたもの―』2019, 雄山閣 , pp. 209-23

表７　分析に供した人骨資料と回収されたゼラチンの量

#	個体 No.	部位	性別	年齢	時代	備考	試料重量 (g)	ゼラチン重量 (mg)	含有率 (%)
1	SJ0004	下肢	女	熟年	中期末		0.57	0.2	0.03
2	SJ0081	大腿骨片	男	熟年	中期前半	パラフィン付着	0.62	5.1	0.82
3	SJ0137	四肢骨	男	成人	中期前半		0.56	0.5	0.09
4	SJ0150	四肢骨片	男	成人	後期前半		0.51	0.0	0.00
5	SJ0164	寛骨臼	男	壮年	中期末～後期初頭		0.87	0.0	0.00
6	SJ0207	四肢骨	女	老年	中期後半		0.60	0.0	0.00
7	SJ0220	四肢骨	男	不明	中期後半		0.83	0.0	0.00
8	SJ0323	右脛骨	女	壮年	中期後半	パラフィン付着	0.24	0.7	0.31
9	SJ0414	腓骨	女	熟年	中期後半		0.61	2.7	0.45
10	SJ0421	左大腿骨	男	熟年	中期末		0.85	0.0	0.00
11	SJ0436	橈骨	女	熟年	中期後半		0.83	5.8	0.69
12	SJ0818	中節骨	男	熟年	後期前半		0.50	6.2	1.25
13	SJ0822	大腿骨	女	壮年	中期前半	パラフィン付着	0.90	1.3	0.15
14	SJ0839	四肢骨	男	熟年～老年	後期		0.56	4.3	0.76
15	SJ0885	大腿骨	女	壮年	中期後半		0.74	0.4	0.05
16	SJ1276	四肢骨	女	壮年	中期前半		0.28	1.1	0.40
17	SJ1355	肋骨	女	熟年	中期後半		0.66	1.2	0.18
18	SJ1383	四肢骨片	女	壮年	後期前半		0.69	0.3	0.04
19	SJ0208	四肢骨	男	熟年	中期末		0.51	1.5	0.29
20	SJ0253	上腕骨片	男	熟年	中期後半		0.52	15.4	2.99
21	SJ0181	尺骨	男	壮年	中期前半		0.49	0.3	0.07
22	SJ0089	四肢骨片	男	壮年	中期後半		0.51	3.7	0.73
23	SJ0044	肋骨片	女	熟年～老年	中期前半		0.47	9.2	1.94
24	SJ0052	四肢骨片	女	熟年	中期前半		0.52	2.2	0.42
25	SJ0079	橈骨	男	熟年	中期前半	パラフィン付着	0.57	1.1	0.19
26	SJ0090	上肢骨片	男	熟年	中期前半		0.44	0.5	0.11
27	SJ0097	下肢骨片	女	壮年	中期前半		0.47	14.2	2.99
28	SJ0193	四肢骨片	男	熟年	中期末		0.59	0.5	0.08
29	SJ0201	上腕骨	男	熟年	中期末		0.47	1.6	0.34
30	SJ0263	下肢骨片	女	熟年	中期後半	パラフィン付着	0.52	5.3	1.02
31	SJ0272	上肢骨片	女	熟年	中期前半		0.51	0.2	0.03
32	SJ0275	左脛骨	女	熟年～老年	後期初頭		0.57	0.4	0.08
33	SJ0292	大腿骨	女	熟年	中期後半		0.66	4.3	0.65
34	SJ0293	右脛骨	女	熟年	中期後半		0.64	0.4	0.06
35	SJ0294	中足骨	女	壮年	中期後半	パラフィン付着	0.55	0.5	0.09
36	SJ0315	上肢骨片	女	熟年～老年	中期後半		0.65	0.6	0.09
37	SJ0317	脛骨片	男	熟年	中期末～後期初頭	風化し保存状態悪	0.87	2.3	0.26
38	SJ0354	四肢骨片	女	壮年	中期後半		0.68	10.5	1.54
39	SJ0497	四肢骨片	女	熟年	後期初頭		0.63	1.5	0.23
40	SJ0327	四肢骨片	女	老年	後期初頭		0.47	0.3	0.06
41	SJ0514	四肢骨片	女	熟年	中期末	パラフィン付着	0.70	0.1	0.02
42	SJ0519	四肢骨片	男	熟年	中期後半		0.86	2.0	0.23
43	SJ0835	肋骨片	女	壮年	後期前半		0.96	7.3	0.77
44	SJ0379	下肢骨片	男	壮年～熟年	中期末		0.70	0.3	0.04

#	個体 No.	部位	性別	年齢	時代	備考	試料重量 (g)	ゼラチン重量 (mg)	含有率 (%)
45	SJ0382	四肢骨片	男	不明	後期初頭		0.61	0.3	0.05
46	SJ0397	左大腿骨	女	熟年	中期末～後期初頭		0.62	0.8	0.13
47	SJ0452	肩甲骨	男	壮年～熟年	中期後半		0.74	30.5	4.15
48	SJ0466	上肢骨片	女	熟年～老年	中期後半		0.87	0.9	0.10
49	SJ0494	下肢骨片	女	熟年～老年	中期前半		0.43	0.9	0.20
50	SJ0878	上肢骨片	男	壮年	中期末		0.74	1.4	0.19
51	SJ0949	上肢骨片	女	壮年	中期末～後期初頭	パラフィン付着	0.66	3.8	0.57

表 8　吉野ヶ里遺跡出土人骨のゼラチンにおける炭素・窒素同位体比

（斜体は C/N 比（原子数）が異常値を示しているため、食性の検討に用いない。）

#	個体 No.	%C	%N	C/N	$\delta^{13}C$ (‰)	$\delta^{15}N$ (‰)
2	SJ0081	37.5	12.1	3.6	−19.1	10.8
8	SJ0323	*30.2*	*9.2*	*3.8*	*−20.1*	*11.6*
9	SJ0414	33.0	10.7	3.6	−20.0	10.1
11	SJ0436	*13.4*	*4.3*	*3.7*	*−19.7*	*10.6*
12	SJ0818	40.3	13.7	3.4	−18.8	10.2
13	SJ0822	*29.0*	*8.2*	*4.1*	*−19.4*	*10.1*
14	SJ0839	*18.0*	*4.8*	*4.4*	*−20.3*	*11.6*
15	SJ0885	*29.5*	*7.9*	*4.3*	*−19.8*	*11.7*
16	SJ1276	33.6	11.3	3.5	−19.7	10.2
17	SJ1355	*32.6*	*9.4*	*4.0*	*−19.6*	*10.6*
19	SJ0208	*33.3*	*10.5*	*3.7*	*−19.7*	*11.0*
20	SJ0253	*5.1*	*0.5*	*12.1*	*−21.5*	*9.0*
22	SJ0089	*36.1*	*10.8*	*3.9*	*−20.2*	*10.9*
23	SJ0044	42.2	14.7	3.4	−19.4	10.0
24	SJ0052	*32.9*	*9.2*	*4.2*	*−19.8*	*11.3*
25	SJ0079	*27.1*	*6.5*	*4.9*	*−19.8*	*11.7*
26	SJ0090	*31.2*	*8.4*	*4.3*	*−20.1*	*11.3*
27	SJ0097	44.3	14.3	3.6	−19.6	9.1
28	SJ0193	*20.5*	*3.1*	*7.8*	*−21.4*	*15.0*
29	SJ0201	*26.5*	*6.6*	*4.7*	*−20.3*	*11.2*
30	SJ0263	*7.7*	*1.9*	*4.8*	*−20.7*	*10.2*
32	SJ0275	*31.4*	*6.0*	*6.1*	*−21.7*	*14.7*
33	SJ0292	*31.0*	*8.0*	*4.5*	*−19.9*	*12.2*
35	SJ0294	*26.0*	*7.2*	*4.2*	*−20.4*	*13.3*
36	SJ0315	*16.4*	*4.3*	*4.5*	*−20.5*	*13.3*
37	SJ0317	*10.4*	*1.4*	*8.9*	*−20.6*	*12.7*
38	SJ0354	41.0	14.0	3.4	−17.5	9.6
39	SJ0497	*4.5*	*0.8*	*6.5*	*−20.5*	*10.0*
42	SJ0519	*30.9*	*6.1*	*6.0*	*−20.6*	*14.9*
43	SJ0835	27.5	8.8	3.6	−18.9	11.2
46	SJ0397	*7.1*	*1.2*	*6.8*	*−21.7*	*13.4*
47	SJ0452	42.5	15.1	3.3	−19.1	10.3
48	SJ0466	*22.9*	*7.2*	*3.7*	*−20.5*	*11.3*
49	SJ0494	*6.1*	*1.4*	*5.1*	*−21.5*	*12.1*
50	SJ0878	*34.9*	*10.4*	*3.9*	*−19.8*	*10.3*
51	SJ0949	*35.1*	*8.2*	*5.0*	*−20.5*	*13.3*

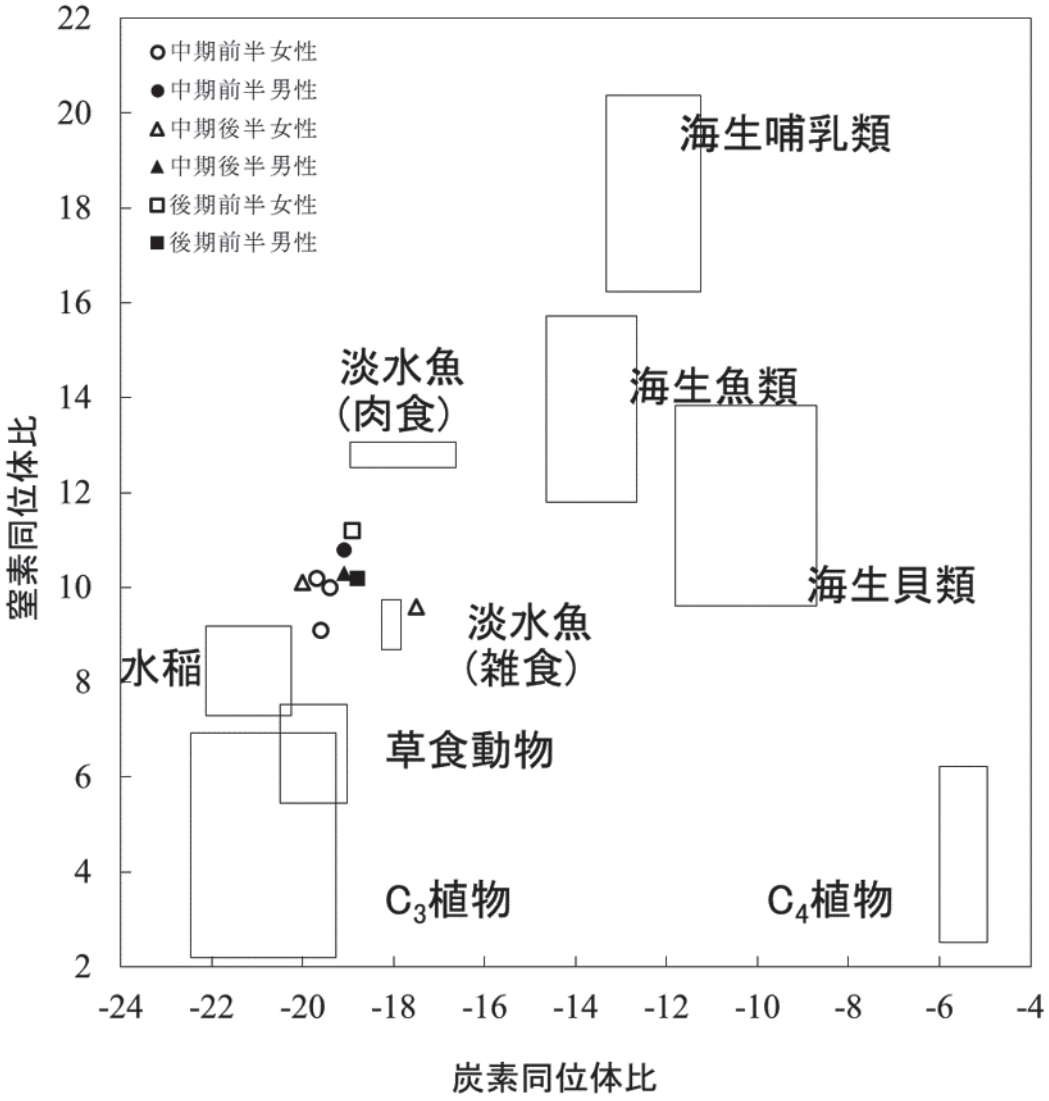


図６　吉野ヶ里遺跡から出土した弥生時代人骨のコラーゲンにおける炭素・窒素同位体比

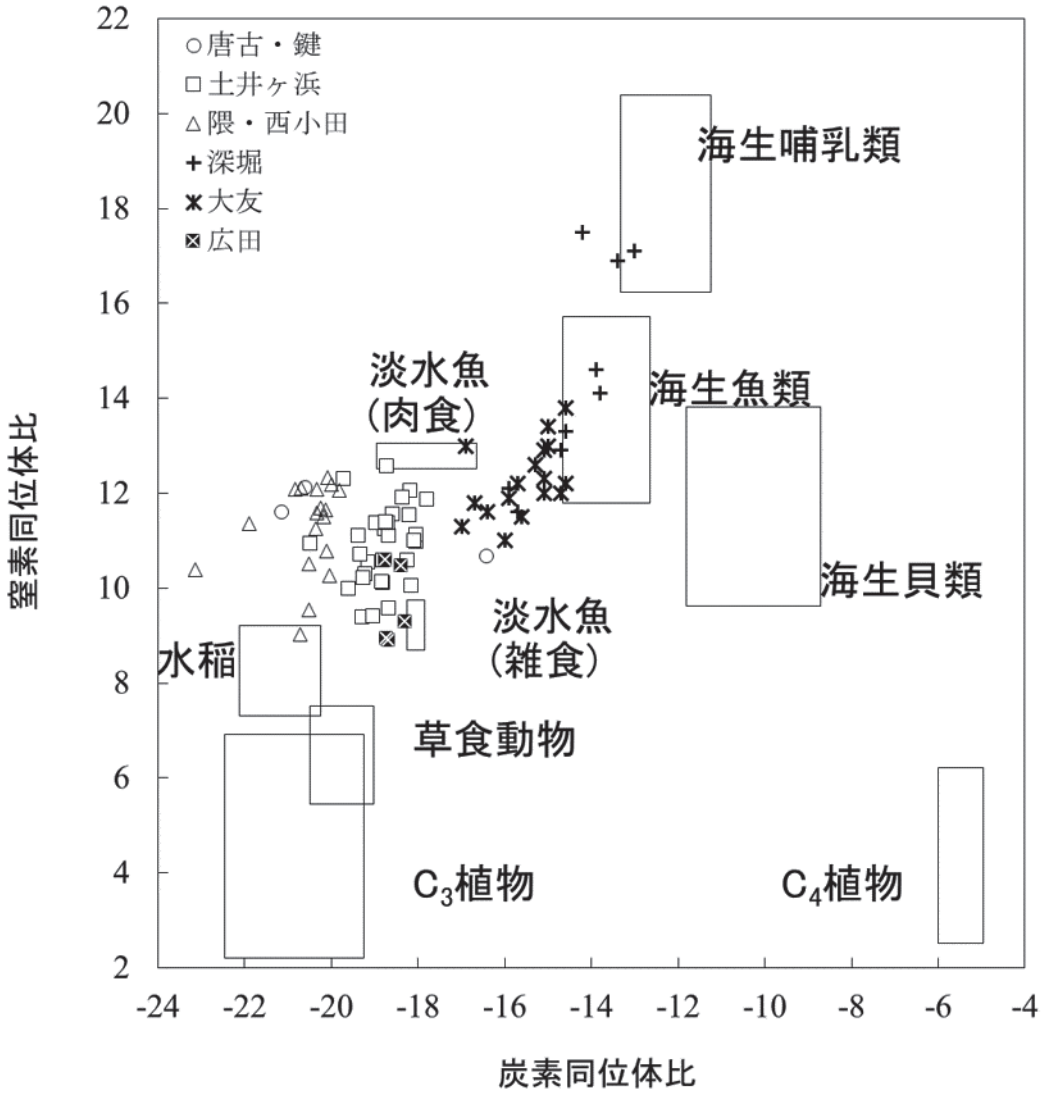


図７　西日本の弥生時代集団の骨コラーゲンにおける炭素・窒素同位体比

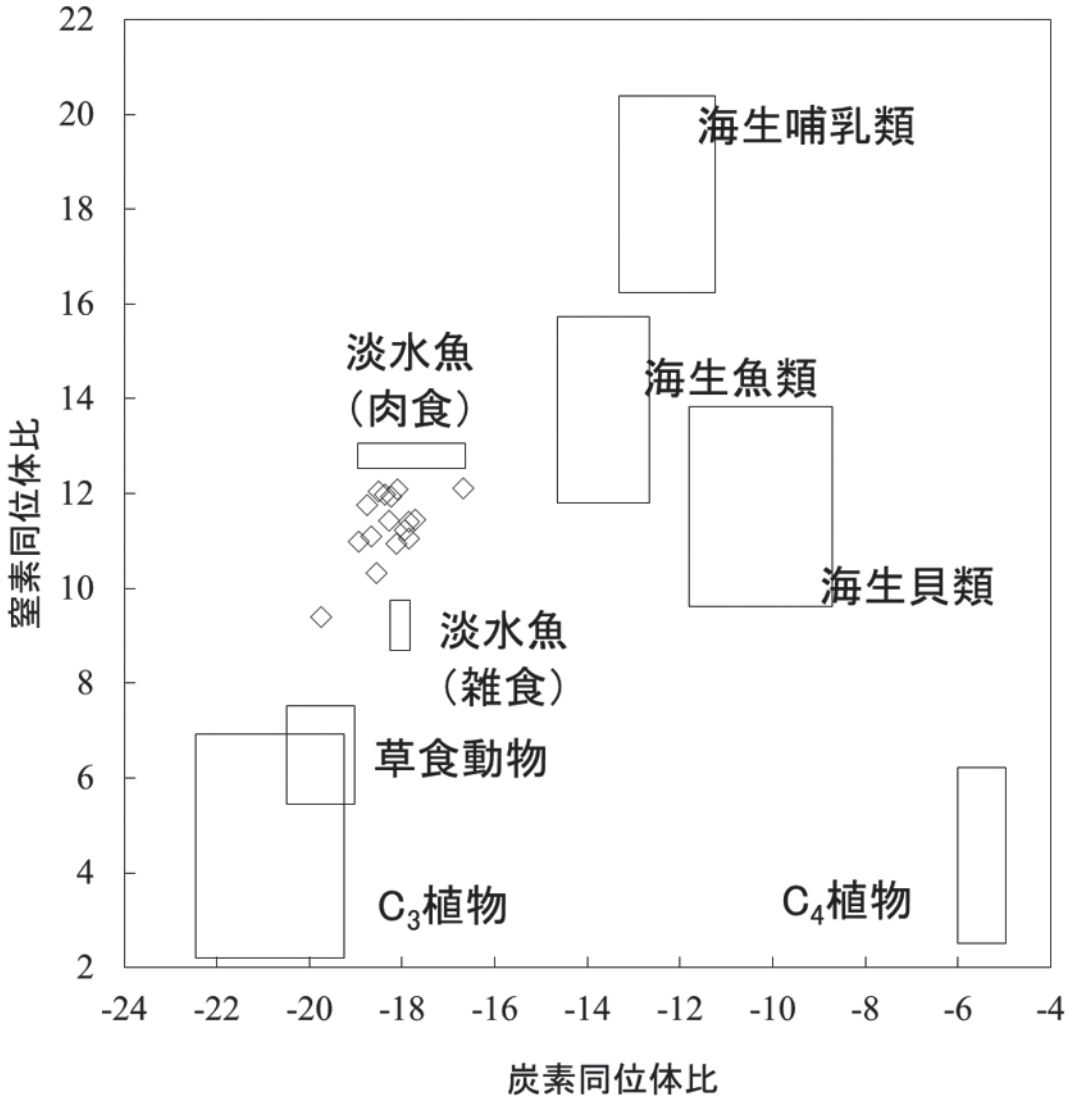
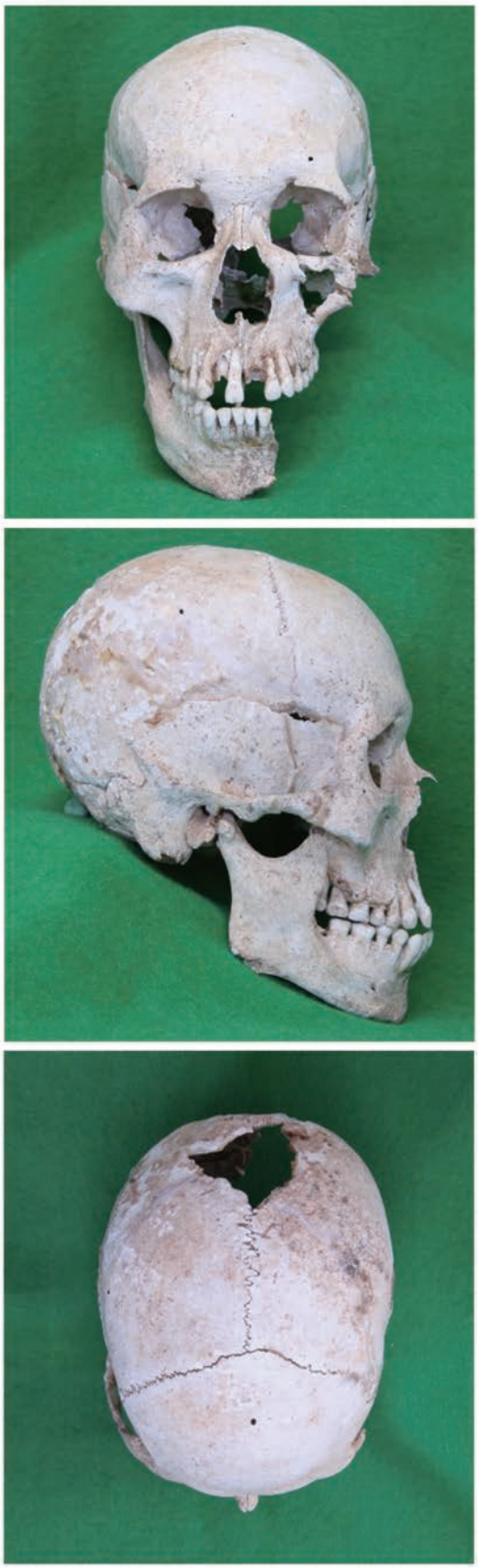


図８　東名遺跡から出土した縄文時代早期の人骨コラーゲンにおける炭素・窒素同位体比

SYT SJ0181（男性・壮年）



SYT SJ0299（男性・壮年）

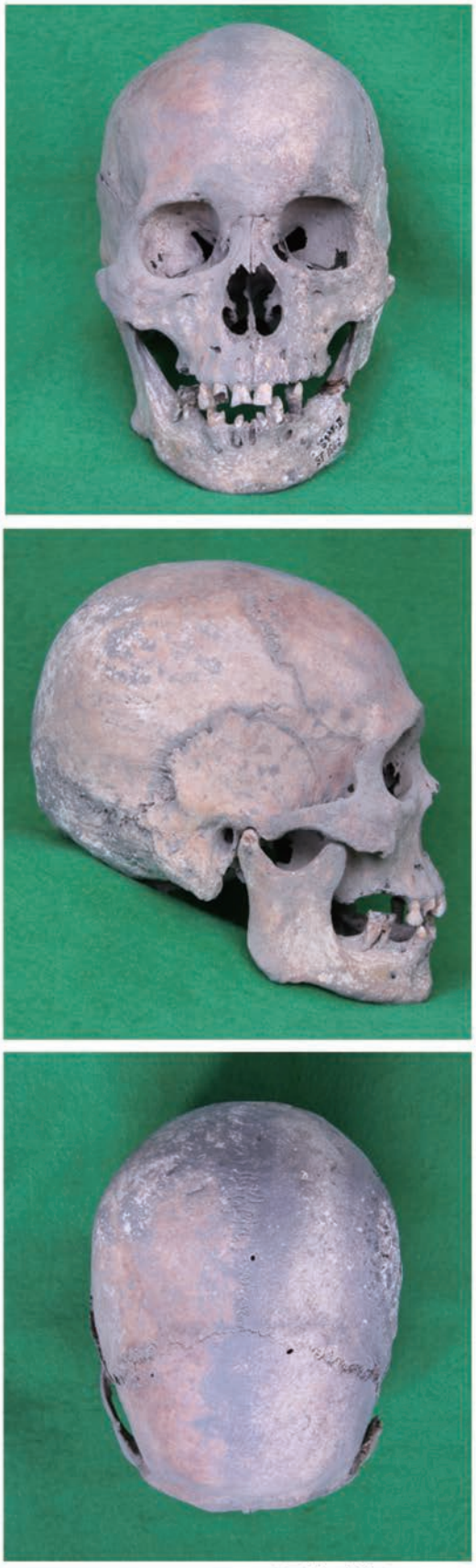
Photo2

SYT SJ0520（男性・熟年）　　SYT SJ0940（男性・壮年）

SYT SJ1354（男性・熟年）

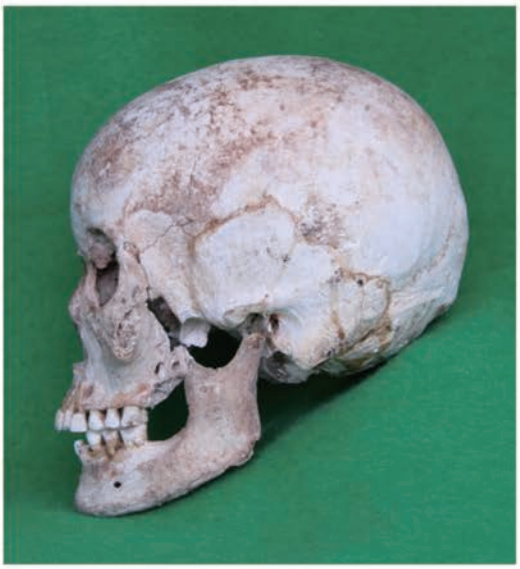
SYT SJ1385（男性・熟年）

Photo4



SYT-Ⅱ SJ1562(男性・熟年)

四の坪 K-5(男性・壮年)



四の坪 K-18（男性・熟年）　SYT　SJ0294（女性・壮年）

報告書抄録

ふりがな	よしのがりいせき
書　　名	吉野ヶ里遺跡
副書名	弥生時代総括編 1
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 227 集
編著者名	渡部芳久（編）　分部哲秋・佐伯和信・米田穣・七田忠昭
編集機関	佐賀県文化課文化財保護室
所 在 地	〒 840-8570　佐賀県佐賀市城内 1 丁目 1 番 59 号　　TEL：0952-25-7233
発行年月日	2020（令和 2）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘原因
		市町村	遺跡番号				
よしのがりいせき 吉野ヶ里遺跡	さがけん 佐賀県 かんざきしおおあざしわや 神埼市大字志波屋・ つるたみちがり 鶴・田道ヶ里 よしのがりちょうおおあざたで　おおまがり 吉野ヶ里町大字田手・大　曲	412104 413275	0215 0081	33° 19′ 37″ 日本測地系 （33° 19′ 25″）	130° 23′ 10″ 日本測地系 （130° 23′ 18″）	1986 ～ 2012	工業団地計画 遺跡の内容の把握、歴史公園整備に係る資料を得るため

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉野ヶ里遺跡	集落 墓地	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	竪穴建物・貯蔵穴 環壕・溝 甕棺墓 土坑墓・木棺墓 石棺墓 祭祀土坑	弥生土器、青銅器、鉄器、木器、石器、 骨角器、繊維製品	弥生時代の集落と墳墓 前方後方墳・方形周溝墓

要　約	本書は、これまで実施された吉野ヶ里遺跡の発掘調査のうち、弥生時代に関する調査成果についてまとめた報告書である。吉野ヶ里遺跡は、地元の教育委員会の協力を得て、佐賀県教育委員会が主体となり、継続して調査が行われてきた。平成 4 年に神埼工業団地計画に伴う調査の概要報告書が刊行されているが、それ以降の調査成果を含めて総括した報告書は刊行できていなかった。本書では、平成 25 年度以降に刊行した各テーマ別の総括報告書をふまえ、現段階での調査成果をまとめている。

佐賀県文化財調査報告書第 227 集

吉野ヶ里遺跡

—弥生時代総括編 1 —

令和 2 年（2020）年 3 月 31 日

発行　　佐賀県文化課文化財保護室

〒 840-8570　　佐賀県佐賀市城内 1 丁目 1 番 59 号

印刷　　株式会社　佐賀印刷社

〒 849-0921　　佐賀市高木瀬西 6 丁目 11 番 7 号